

奈良市埋蔵文化財調査年報

平成 20 (2008) 年度



奈良市教育委員会

2011

奈良市埋蔵文化財調査年報

平成 20 (2008) 年度



奈良市教育委員会

2011



1：平城京跡（左京五条四坊十坪）の調査
第608次 A発掘区
S X 804 出土奈良三彩火舎【本文9頁】



2：平城京跡（左京五条四坊十坪）の調査
第608次 D発掘区
S X 810 出土奈良三彩火舎【本文9頁】



3：平城京跡（左京五条四坊十坪）の調査
第608次 D発掘区
S B 249 出土遺物【本文8頁】



4：平城京跡（左京五条四坊十坪）の調査
第608次 D発掘区
S X 810 出土土器【本文9頁】



5：平城京跡（左京五条四坊十坪）の調査
第608次 D発掘区
S E 504 出土埋納土器【本文8頁】



6：平城京跡（左京五条四坊十坪）の調査
第579次
S X 802 出土埋納土器【本文9頁】



7：帯解黄金塚古墳第2次調査 B発掘区全景（北西から）【本文114頁】



8：帯解黄金塚古墳第2次調査 B発掘区石敷（北西から）【本文114頁】

例 言

1. 本書は、平成 20 年度に奈良市教育委員会が実施した埋蔵文化財に関する各事業の概要と埋蔵文化財調査センター紀要を収録したものである。ただし、平成 20 年度に実施した調査のうち、平城京跡第 608-2 次調査については平成 22 年度以降の報告の予定であるため、本書には収録しない。平成 19 年度に実施した平城京跡第 579 次調査については、平城京左京五条四坊十坪に係わる部分を本書に収録した。東紀寺第 11 次調査については平成 21 年度に実施したが、東紀寺第 10 次調査と同敷地内の調査であることから、併せて本書で報告する。
2. 平成 20 年度の埋蔵文化財調査に関する各事業は下記の体制で実施した。

奈良市教育委員会事務局 教育総務部

文化財課

課 長 西岡康夫

課長補佐 西崎卓哉

埋蔵文化財調査センター

所 長 森下恵介

所長補佐 岡田恭明

主 任 森下浩行 鍾方正樹

技術職員 安井宣也 秋山成人 松浦五輪美 武田和哉 原田憲二郎 池田裕英

久保清子 宮崎正裕 中島和彦 山前智敬 原田香織 大窪淳司

池田高貴子

嘱託職員 大原 瞳 大木 要

庶 務 主任 藤井雄二 事務職員 酒井真弓

3. 発掘調査、出土遺物整理、保存活用等の各事業に関しては、奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所、独立行政法人奈良文化財研究所、奈良市文化財保護審議委員会などの関係諸機関よりご指導とご協力を賜った。ここに記して謝意を表する。
4. 各発掘調査の次数は、奈良市教育委員会が実施した調査に付した遺跡ごとの通算次数となっている。遺跡の略記号は下記のとおりである。

H J 平城京跡 DA 大安寺旧境内 HK 東紀寺遺跡 ID 池田遺跡

SD 西大寺旧境内 K G Z 帯解黄金塚古墳 NARA 52 奈良山第 52 号窯

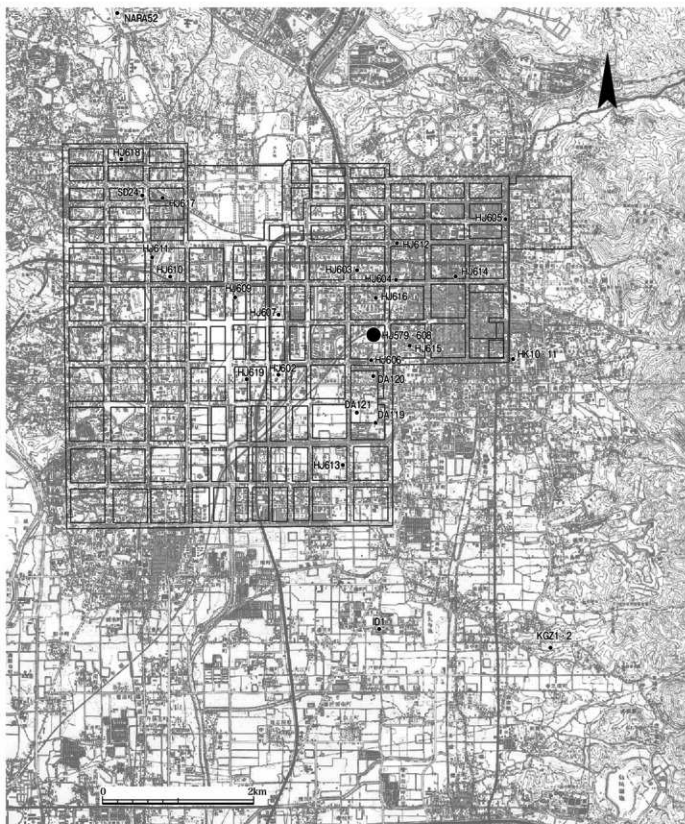
NR 奈良町遺跡

5. 古墳時代以前の遺跡については、仮に大字名を付して遺跡名としたものがある。

6. 本書で使用した遺構番号は、一部を除いて調査ごとに付した仮番号である。遺構等の番号の前には、その種類に応じて以下の番号を付した。
- SA (柱列・塼)、SB (掘立柱建物)、SD (溝・濠・溝状遺構・暗渠)、SE (井戸)、SF (道路)、SK (土坑)、SX (その他)
- また、遺構の大きさの数値は、すべて遺構検出面での計測値である。
7. 本文中で示した過去の調査の実施機関は、調査回数の前に下記の略記号を使用し表記した。
- 国 — 独立行政法人奈良文化財研究所 (旧奈良国立文化財研究所含む)
 県 — 奈良県教育委員会 および 奈良県立橿原考古学研究所
 市 — 奈良市教育委員会
8. 本書で使用した遺物名称・形式・型式は、一部を除き下記の刊行物に準拠した。
- 奈良時代 軒瓦：『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』奈良市教育委員会 1996
 土器：『平城宮発掘調査報告書X I』奈良国立文化財研究所 1982
 古墳時代 須恵器：田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981
 埴輪：川西宏幸『埴輪埴輪総論』『古墳時代政治史序説』塙書房 1988
 小浜 茂『埴輪埴輪の観察視点と編年方法－畿内埴輪埴輪編年の提示に向けて－』
 『埴輪論叢』第4号 埴輪検討会 2003
 弥生時代 土器：奈良県立橿原考古学研究所『奈良県の弥生土器集成』2003
9. 発掘区位置図については、奈良市発行の「大和都市計画図」(1/2,500)を、また調査地位位置図については、国土地理院発行の地形図(1/25,000)を利用した。
10. 本文中において示した位置の表示値は、平面直角座標系第IV系(世界測地系)の数値である。なお、座標値の表・図中の標記については単位(m)を省略した。
11. この報告に関する調査記録・出土遺物は、埋蔵文化財調査センターで保管している。
12. 第1・3章の執筆は、当該調査と遺物整理を担当した埋蔵文化財調査センター・文化財課職員が分担し、文責は各調査報告の文末に記した。第2章は分析機関の報告を再編集して構成した。第4章は埋蔵文化財調査センター職員が執筆した記要を掲載した。
13. 本書の編集は平成22年度に行い、埋蔵文化財調査センター所長 森下恵介、副主任 三好美穂・鎌方正樹の助言を得て、久保邦江が担当した。

目次

巻首図版	1～III
例言・目次	i～v
第1章 平成20年度埋蔵文化財調査概要報告	1
1. JR奈良駅南特定土地地区画整理事業に係る発掘調査	2
平城京跡(左京五条四坊十坪・坊間東小路)の調査 第579・608次A～E	3
2. 近鉄西大寺駅南地区土地地区画整理事業に係る発掘調査	30
西大寺旧境内の調査 第24次	31
3. 平城京跡(左京六条二坊一・二坪)の調査 第602次	34
4. 平城京跡(左京三条四坊三坪)の調査 第603次	36
5. 平城京跡(左京三条五坊四坪)の調査 第604次	38
6. 平城京跡(左京二条七坊十五坪)・奈良町遺跡の調査 第605次	40
7. 平城京跡(左京五条四坊十二坪・東四坊坊間路)の調査 第606次	54
8. 平城京跡(左京四条二坊五坪・四条条間南小路)の調査 第607次	57
9. 平城京跡(左京四条一坊二坪)の調査 第609次	61
10. 平城京跡(右京三条二坊五坪)の調査 第610次	66
11. 平城京跡(右京三条二坊十五坪)・菅原東遺跡の調査 第611次	69
12. 芝辻遺跡・平城京跡(左京二条大路)の調査 第612次調査	71
13. 平城京跡(左京八条三坊十四坪)の調査 第613次調査	74
14. 平城京跡(左京三条六坊十二坪)・奈良町遺跡の調査 第614次	77
15. 平城京跡(左京五条五坊十一坪・東五坊坊間路)の調査 第615次	78
16. 平城京跡(左京四条四坊十坪)の調査 第616次	80
17. 平城京跡(右京一条二坊十二坪)の調査 第617次	82
18. 平城京跡(右京北辺三坊六坪)の調査 第618次	84
19. 平城京跡(左京六条一坊七坪・東一坊坊間路)の調査 第619次	85
20. 史跡大安寺旧境内の調査	87
(1) 花園地区の調査 第119次	88
(2) 賤院地区の調査 第120次	89
(3) 塔院地区の調査 第121次	91
21. 東紀寺遺跡の調査 第10・11次	94
22. 池田遺跡・中ツ道推定地の調査 第1次	97
23. 奈良山第52号窯の調査 第1次	99
24. 帯解黄金塚古墳の調査 第1・2次	103
25. 平成20年度実施試掘調査一覧	117
26. 平成20年度実施施工事立会一覧	117
第2章 自然科学分析報告	127
1. 平城京跡第579次調査における自然科学分析	129
2. 平城京跡第608次調査における自然科学分析	136
3. 帯解黄金塚古墳の石材の石種	137
第3章 平成20年度保存活用事業報告	143
第4章 紀要	153
「大安寺式」軒瓦の成立	154



平成 20 年度 発掘調査位置図 (通年度調査で本書報告分を含む 1/50,000)

平成 20 (2008) 年度 奈良市教育委員会実施 埋蔵文化財発掘調査一覧

No	調査次数	遺跡名	調査地	調査期間	調査面積	担当者	事業者	事業名	事業区分	届出(申請)番号
1	HJ002 次	平城京跡(左京六条二坊一・二坪)	八条町 363 番 1 他	H20.4.3 ~ H20.4.18	100.5 m ²	原田遼	豊田通商株式会社	店舗新築	原因者	H19.3301
2	HJ003 次	平城京跡(左京三条四坊三坪)	大宮町三丁目 205-13	H20.4.7 ~ H20.4.30	119m ²	大原	個人	共同住宅新築	原因者	H19.3337
3	HJ004 次	平城京跡(左京三条五坊四坪)	大宮町一丁目 52-15 他	H20.4.7 ~ H20.5.19	470m ²	池田裕	グローバンス・アルイイ株式会社	ホテル新築	原因者	H19.3258
4	HJ005 次	平城京跡(左京二条七条十五坪・奈良町道跡)	今小路町 1-1 他	H20.5.8 ~ H20.6.26	144m ²	中島・大原	株式会社 日本エスコ	共同住宅新築	原因者	H19.3441
5	HJ006 次	平城京跡(左京五条四坊十二坪・東四坊間路)	大安寺六丁目 841 番 1 他	H20.5.21 ~ H20.6.17	216m ²	久保清	個人	共同住宅新築	原因者	H19.3469
6	HJ007 次	平城京跡(左京四条二坊五坪・四条米岡南小路)	尼辻町乙 454-2 他	H20.6.2 ~ H20.6.26	264m ²	池田裕	株式会社 共栄商會	社宅付配送センター新築	原因者	H19.3468
7	HJ008 次	平城京跡(左京五条四坊九・十・十五坪)	大森町 94・95 番地 他	H20.6.16 ~ H21.2.13	6,000 m ²	宮崎・原田遼・池田裕・久保清・山前・大原・大木	奈良市長	J R 奈良駅南特定地区画整理連続立体交差関連公共施設整備事業	公共	H12.3145
8	HJ008-2 次	平城京跡(左京五条四坊二坪)	大森町 652-1 他	H20.9.29 ~ H20.11.21	340m ²	久保清	奈良市長	J R 奈良駅南特定地区画整理連続立体交差関連公共施設整備事業	公共	H12.3145
9	HJ009 次	平城京跡(左京四条一坊二坪)	西大路三丁目 966-1 他	H20.7.7 ~ H20.8.4	200m ²	原田香	個人	賃貸住宅新築	原因者	H20.3058
10	HJ010 次	平城京跡(右京三条二坊五坪)	尼辻北町 327-1 他	H20.7.31 ~ H20.8.21	238m ²	大窪	個人	共同住宅新築	原因者	H20.3080
11	HJ011 次	平城京跡(右京三条二坊十五坪)・菅原東道跡	西大寺国見町二丁目 10-13	H20.8.6 ~ H20.8.20	62m ²	中島	個人	個人住宅新築	緊急	H20.3128
12	HJ012 次	芝辻道跡・平城京跡(左京二条大路)	芝辻町一丁目内	H20.8.20 ~ H20.9.8	68m ²	武田・松浦	奈良市長	市道二条線緑道事業	公共	H19.3067
13	HJ013 次	平城京跡(左京八条三坊十四坪)	東九条町 491 他	H20.8.20 ~ H20.9.18	310m ²	原田香	株式会社 福岡屋住宅流通	道路工事・宅地造成	原因者	H20.3106
14	HJ014 次	平城京跡(左京三条六坊十二坪)・奈良町道跡	小西町 29-1・2・3 他	H20.9.8 ~ H20.9.12	30m ²	池田裕	株式会社 藤本忠商店	店舗新築	原因者	H20.3119
15	HJ015 次	平城京跡(左京五条五坊十一坪・東五坊間路)	西木辻町 76-5 他	H20.10.6 ~ H20.10.31	173m ²	秋山	小山株式会社	倉庫新築	原因者	H20.3204
16	HJ016 次	平城京跡(左京四条四坊十坪)	三条宮前町 6-12 他	H21.1.7 ~ H21.2.4	143m ²	中島	個人	個人住宅新築	緊急	H20.3350
17	HJ017 次	平城京跡(右京一条二坊十二坪)	西大寺国見町 2137-86、-88 他	H21.2.9 ~ H21.3.12	135m ²	秋山	近鉄不動産株式会社	共同住宅新築	原因者	H20.3282
18	HJ018 次	平城京跡(右京北辺三坊六坪)	西大寺北町一丁目 358 番 4 他	H21.2.2 ~ H21.2.5	40m ²	武田	株式会社 吉川商事	宅地造成	原因者	H20.3385
19	HJ019 次	平城京跡(左京六条一坊七坪・東一坊間路)	柏木町 157-1 他	H21.3.9 ~ H21.3.19	185m ²	武田	個人	宅地造成	原因者	H20.3400
20	DA119 次	史跡大安寺旧境内	東九条町 1376-2 他	H20.6.2 ~ H20.6.6	4m ²	安井	個人	農業用倉庫新築	緊急	H19.1121
21	DA120 次	史跡大安寺旧境内	大安寺四丁目 1103-2 他	H20.12.10 ~ H20.12.19	24m ²	原田香	個人	住宅の除却及び新築	緊急	H20.1048
22	DA121 次	史跡大安寺旧境内	東九条町 1348-1 他	H21.2.23 ~ H21.3.19	103m ²	松浦	奈良市教育委員会 教育長	史跡大安寺旧境内保存整備事業	公共	H20.1086
23	SD004 次	西大寺旧境内	西大寺南町 2438-1 他	H20.9.8 ~ H20.11.11	400m ²	松浦・武田	奈良市長	西大寺駅南地区土地区画整理事業	公共	S63.3056
24	HK010 次	東紀寺道跡	東紀寺町一丁目 50-1 他	H20.7.1 ~ H20.8.26	360m ²	池田裕	奈良市長	奈良市立病院建替事業	原因者	H20.3046
25	ID001 次	池田道跡	池田町 201-1 他	H20.6.30 ~ H20.7.15	108m ²	鎌方・武田	株式会社 ベーバル	倉庫新築	原因者	H20.3036
26	NARA52 次	奈良山第 52 号窟	秋篠町 1546-1 の部 他	H20.5.26 ~ H20.6.20	150m ²	山前	三和住宅株式会社	宅地造成	原因者	H19.3467
27	KGZ002 次	帯解黄金塚古墳	田中町 574-1・3 他	H21.1.14 ~ H21.3.18	120m ²	安井・大窪	奈良市教育委員会 教育長	重要遺跡範囲確認調査	緊急	H20.1086

第 1 章 平成 20 年度埋蔵文化財調査概要報告

1. J R奈良駅南特定土地地区画整理事業に係る発掘調査

奈良市教育委員会では、平成13年度からJ R奈良駅南特定土地地区画整理事業地内（総面積14.6万㎡）の発掘調査を実施しており、平成19年度までの調査面積は、20,695㎡である。平成20年度事業では、連続立体交差関連公共施設整備事業で、6,340㎡の調査を行った。

平成20年度の発掘調査は、平城京の条坊復原では左京五条四坊九・十・十五坪、左京五条四坊二坪および東四坊坊間東小路、五条条間路、五条条間北小路で実施した。

事業と調査の概要は下記の通りである。

このうち、今回は左京五条四坊十坪を中心としたH J第608次調査と、同坪内で平成19年度に実施したH J

第579次調査（調査面積：2,700㎡）の成果を合せて報告する。なお、H J第608次のうちA～E発掘区については今回報告し、F・G発掘区とH J第608-2次調査については次年度以降に報告する予定である。

報告に用いる遺構番号は、当事業に係る調査で設定しているもので、古墳時代以前の遺構には2桁を、奈良時代以降の遺構には3桁以上の番号を用いた。いずれの遺構番号も奈良時代の条坊遺構範囲を通して、それ以外の範囲については坪ごとの通して設定した。したがって同一調査地内でも、坪の違いで同じ遺構番号が見つかる場合もある。

平成20年度 J R奈良駅南特定土地地区画整理事業 発掘調査一覧表

事業区分	調査回数	発掘区	遺 跡 名	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
連続立体交差関連 公共施設整備事業	HJ608	A	平城京左京五条四坊十・十五坪、 東四坊坊間東小路	大森町94・ 95番地 他	H20.6.16～ H21.2.13	658㎡	宮崎・原田直・ 久保清・池田裕・ 山前・大原・ 大木
	HJ608	B	平城京左京五条四坊十・十五坪、 東四坊坊間東小路			200㎡	
	HJ608	C	平城京左京五条四坊十坪			892㎡	
	HJ608	D	平城京左京五条四坊十坪			2,642㎡	
	HJ608	E	平城京左京五条四坊十坪、 五条条間路			300㎡	
	HJ608	F	平城京左京五条四坊九・十坪、 五条条間北小路			808㎡	
	HJ608	G	平城京左京五条四坊九坪			500㎡	
	HJ608-2		平城京左京五条四坊二坪	大森西町 652-1他	H20.9.29～ 11.21	340㎡	久保清



J R奈良駅南特定土地地区画整理事業地内 発掘調査位置図 (1/5,000) ■部分は平成20年度調査

平城京跡（左京五条四坊十坪・坊間東小路）の調査 第579・608次A～E

I はじめに

H J 第579次調査地は、平城京条坊復原によると、左京五条四坊十坪の中央部北寄りに位置する。H J 第608次調査は、左京五条四坊十・十五坪間の東四坊坊間東小路想定位置にA発掘区、その南側の五条条間路との交差点部分にB発掘区、H J 第579次調査発掘区の北側にC発掘区、南側にD発掘区、十坪の南辺部の五条条間路が想定される位置にE発掘区を設定した。

H J 第579次調査発掘区の西側で平成13年度に実施したH J 第459次-2～4次調査では、五条条間北小路とその南北側溝、および東四坊坊間路とその東側溝の条坊遺構と、十坪内では奈良時代の溝、掘立柱建物、土坑などを検出している。また、五条条間北小路の北側溝から播磨産の瓦が出土したことから、九坪には播磨国に関わる施設の存在を想定した。

平成19年度に調査地北東の左京五条四坊十五・十六坪・五条条間北小路推定地で実施したH J 第557・568次調査では、奈良時代の遺構面下に縄文時代晩期の石器や土器を包含する河川を確認。さらに、平成19年度に調査地東側の十五坪で実施したH J 第565・575次調査で、弥生時代の溝や竪穴建物などを検出した。

今回、奈良時代の条坊遺構、宅地内の様相および下層遺構の確認を主な目的として調査を実施した。

また、調査地付近では、中つ道が東四坊大路から西に2つ目の坪の東寄り南北に縦断すると指摘もあるため¹⁾、関連する遺構の確認も調査目的のひとつとした。

II 基本層序

現地表面は東から西へ緩やかに傾斜するが、調査地が広大で、基本層序は発掘区ごとに若干異なるため、代表的な層序を記す。十坪の北半に設けたH J 第579次調査発掘区の層序は黒灰色砂質土（耕土）以下、灰褐色砂質土・淡灰色砂質土と続き、発掘区南端では現地表下約0.2

mで黄色礫土の地山に至る。地山面は南から北に傾斜し、発掘区北端では黄褐色粘土の地山上に厚さ0.2～0.3mの縄文時代晩期～弥生時代前期の遺物を包含する黄灰色粘土が堆積する。弥生時代中期以降の遺構は黄色礫土（地山）および黄灰色粘土上面（標高約62.4m）で検出した。発掘区北西部では黄灰色粘土直下の黄褐色粘土（地山）上面（標高約62.2m）で弥生時代前期以前の遺構を検出した。

H J 第608次調査C発掘区は、H J 第579次調査地と同様な堆積状態であるが、弥生時代中期以降の遺構面（黄灰色粘土）直下の地山は、暗茶褐色粘土あるいは黄褐色灰色粘質土である。

H J 第608次調査A・B・D・E発掘区では、縄文時代晩期～弥生時代前期の遺物包含層は堆積せず、現地表下0.4～0.5mで黄灰色砂質土あるいは黄色礫土などの地山に至る。A発掘区の地山直上の一部に整地層が堆積しており、奈良時代の遺構を検出した。地山面は南東から北西に緩やかに下り、その標高は62.4～63.4mである。

III 検出遺構

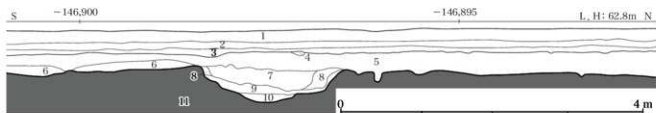
主な遺構には縄文時代晩期の土坑、弥生時代の土器棺墓、方形周溝墓、掘立柱列、柱穴、溝、土坑、古墳時代の土坑、奈良時代の条坊遺構、掘立柱建物・塀・門、井戸、土坑、溝がある。以下、時代ごとに遺構の概要を述べ、各遺構の詳細は一覧表にまとめた。

縄文時代

H J 第579次調査発掘区とH J 第608次調査C発掘区の下層遺構面で、河川1条（河川25）、土坑11基（SK 02～09・20～22）を検出した。

H J 第608次調査C発掘区で検出した河川25は、南から北へ蛇行する。縄文時代晩期の土器片が出土した。

H J 第579次調査発掘区の北西部で検出したSK 02～09は、断面形状から底部が平坦で逆台形と半円形のも



- | | | | |
|--------------|----------------------------|----------|----------------|
| 1 黒灰色砂質土（耕土） | 5 黄灰色粘土（縄文晩期～弥生時代前期遺物包含層） | 9 灰褐色砂質土 | 7～10: SK 03 埋土 |
| 2 灰褐色砂質土 | 6 黄灰色砂質土（縄文晩期～弥生時代前期遺物包含層） | 10 灰色細砂 | |
| 3 淡灰色砂質土 | 7 灰褐色粘土 | 11 黄褐色粘土 | |
| 4 淡灰色砂質土 | 8 灰色土（11を多く含む） | | |

H J 第579次調査 SK 03（下層遺構）付近西壁土層図（1/50）

のに大別でき、坑内埋土はレンズ状に堆積する。SK 06～08から縄文時代晩期の土器が、SK 04・07の坑内底に堆積した砂層から堅果類が少量出土した。SK 02～09は湧水あるいは河川の水を利用して堅果類を貯蔵する低湿地型の貯蔵穴と考えられる。SK 20・21はHJ第608次調査C発掘区で検出した。前者は断面形が半円形、後者は断面形が逆台形を呈する。SK 20・21から堅果類は出土しなかったが、土坑の断面形状や埋土の堆積状態がSK 02～09に似ることや河川25にも近接することから、低湿地型の貯蔵穴と考えた。なお、当時の植生や環境を明らかにするため、SK 07埋土の花粉分析とSK 04・07出土種実の同定を行ったところ、花粉分析ではコナラ属・アカガシ亜属が多く、出土固堅果片はコナラ属のものであるという結果を得た(130・133頁参照)。

弥生時代

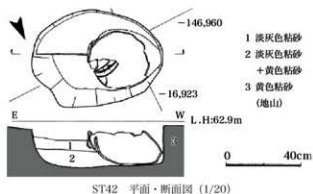
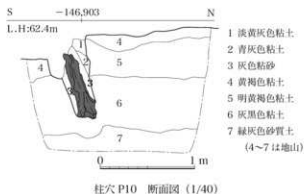
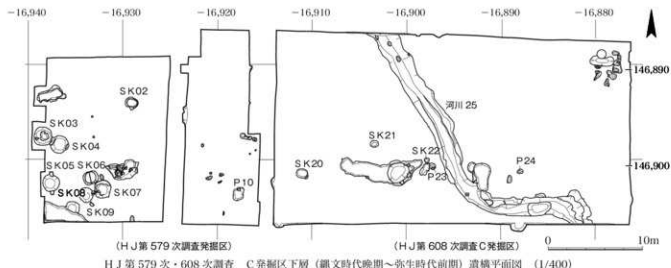
土器棺墓1基(ST 42)、方形周溝墓1基(SX 19)、土坑37基(SK 01～08・13～18・26・30～33・35～41・43～50)、溝7条(SD 01～03・06・11・12・34)、掘立柱列2条(SA 01・51)、柱穴3個(P 10・23・24)を検出した。

HJ第608次調査D発掘区で検出したST 42は土器

棺墓である。墓坑西側に寄せて口縁部を東に向けた壺を横位に置き、高杯で蓋をする。壺内に内容物は確認できなかった。壺・高杯ともに大和第四様式のものである。

HJ第579次調査発掘区南東部検出のSX 19は方形周溝墓と考えられ、平面「コ」字状に周溝の一部が残る。北東-南西方向の周溝は長さ約14m(深さ約0.2m)である。周溝は北端で北西に曲がり(長さ約7m・深さ約0.6m)、南端で北西に曲がって(長さ約5m・深さ約0.4m)途切れる。周溝内から弥生時代中期以降の弥生土器が出土した。削平のため埋葬施設は検出できなかった。重複関係からSX 19→SK 14、SX 19→SD 12→SK 16の新旧関係が認められる。

縄文時代晩期の遺構と同じ面で検出したP 10は、径・深さともに約0.4mの掘形内に、径約0.2mの柱根が遺存していた。やや斜めに傾く柱か圓形の底面よりも約0.5m深く打ち込まれ、柱穴の下に堆積する軟質の緑灰色砂質土上面には深さ約0.1mの沈下が認められる。柱掘形からの出土遺物はない。柱根の樹種同定を行った結果、アカガシ・イチイガシなどのコナラ属アカガシ亜属と判明した。また、柱根の放射性炭素年代測定結果によれば、補正¹⁴C年代が2160±40 B P(2σの暦年代でBC



360～90年)という測定値(129頁参照)を得ており、弥生時代前期頃の遺構と推測できる。

古墳時代

H J 第608次調査C発掘区内に土坑3基(S K 27～29)があり、古墳時代前期後半の土器が出土した。

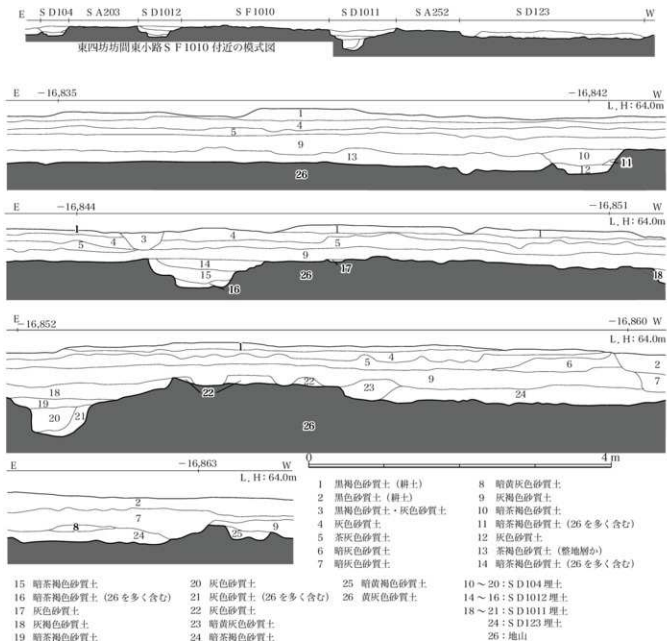
奈良時代

十坪・十五坪の条坊遺構(道路とその側溝)、掘立柱建物、柱列、門、井戸、埋納遺構、土坑、溝がある。以下、条坊遺構、十坪、十五坪ごとにまとめて記す。

条坊遺構 H J 第608次調査A・B発掘区の東四坊坊間東小路が想定される位置で、発掘区を縦断する南北溝2条(S D 1011・1012)を検出した。S D 1011は幅1.5～4.6m、深さ0.2～0.7mで、S D 1012は幅1.0

～3.5m、深さ約0.4mである。両者は左京五条四坊九坪・十六坪間で検出した同小路の東西側溝(H J 第541次調査)と検出位置に矛盾が無いことから、S D 1011は東四坊坊間東小路の西側溝、S D 1012は東側溝と判断できる。東四坊坊間東小路(S F 1010)の路面幅は2.1～6.1m、東西側溝心々間距離は約7.0mである。溝底は、S D 1011・1012ともに南から北へ低くなる。S F 1010路面心の国土座標値はX=-146,940.00、Y=-16,849.05である。S D 1011溝心の国土座標値はX=-146,940.00、Y=-16,852.55で、S D 1012溝心の国土座標値はX=-146,940.00、Y=-16,845.55である。

H J 第608次調査E発掘区南端で、幅約2.4m、深さ0.35mの東西溝S D 2008を検出した。溝底の標高は東



H J 第608次調査 A発掘区東四坊坊間東小路 S F 1010 南壁土層図 (1/50)

端が約62.9 m、西端が62.55 mで、東から西への下り勾配である。検出位置からみて、S D 2008 は五条条間路の北側溝で、S D 2008 南側の平坦面が五条条間路S F 2007の路面に相当する。部分的ながら、路面の北端約1.4 m分を検出した。S D 2008 溝心の国土座標値は $X = -146,993.35$ 、 $Y = -16,904.00$ である。また、S D 2008 の北肩で、十坪内を東西に二分する柱列の約11.0 m東側で、橋脚(S X 808)と思われる柱穴を2個検出した。

十坪 溝27条(S D 111～117・119～138)、掘立柱建物40棟(S B 207～219・221・222・225～229・231～235・238・239・241～249・251・254・260・263)、掘立柱列16条(S A 220・223・224・230・236・237・240・250・252・253・255～259・261)、井戸5基(S E 501～505)、土坑14基(S K 603～609、S X 805・806・809・811・812・816・817)、埋納遺構8基(S X 802・804・807・808・810・813～815)、埋納遺構1基(S X 803)を検出した。

(東面・南面築地関連) H J 第608次調査A・B発掘区で南北溝S D 123を検出した。S D 123は、東四坊坊間東小路西側溝S D 1011と平行する十坪東端の溝で、幅は2.8～7.0 m。S D 123とS D 1011の間には幅1.3～3.0 mの空地があり、南北に並ぶ小穴の柱列を2条検出した。これらは築地の堰板止めである可能性が高く、S D 123とS D 1011の間に東面築地(S A 252)を想定し、南北溝S D 123は築地雨落ち溝になると判断した。

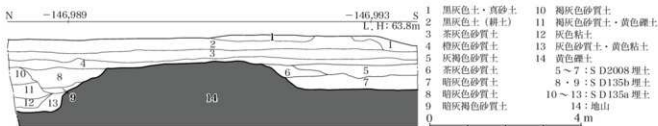
H J 第608次調査E発掘区で検出した東西溝S D 135は、五条条間路北側溝S D 2008と平行する十坪南端の溝である。S D 135には改修の痕跡が確認でき、改修前の溝をS D 135 a、改修後の溝をS D 135 bとする。S D 135 aは国土座標値 $Y = -16,898$ 付近で途切れて、以西には続かない。S D 2008とS D 135間の空地(幅2.3～2.5 m)においても、東西方向に並ぶ小穴の柱列2条とS D 135 bとS D 2008を繋ぐ南北溝2条(S D 134・136)を検出した。これらは築地堰板止めの小穴や暗渠の溝となる可能性が高く、S D 2008とS D 135の間に南面築地塀(S A 262)を想定し、S D 135は築地

雨落ち溝になると考える。

(溝) S D 121はS D 123の底で検出した南北溝である。S D 123掘削以前の様相と遺構の性格を明らかにする目的から、S D 121溝内埋土の花粉分析を行った。結果、S D 121は花粉密度が低くかつ常時滞水しない溝で、付近にはやや乾燥した集落や畑地が広がっていたことが判明した²⁾。S D 119はH J 第608次調査C発掘区の拡張部分で南岸を検出。長さ13.0 m以上、幅1.0 m以上の東西溝で、深さ約0.3 mまで確認した。検出位置からみて十坪北端の溝と考えられる。

S D 111はH J 第608次調査C発掘区から同D発掘区までを縦断する南北溝で、坪内(東四坊坊間東小路西側溝S D 1011の西端)から1/3ライン付近に掘られる。南北溝S D 112はS D 111の約12 m東に掘られ、坪内の東からほぼ1/4ライン付近に位置する。重複関係からS D 111は井戸S E 504より古い。南北溝S D 120はS D 111と平行する。両者間に幅約1.5 mの空地があり、通路の可能性が考えられる。東西溝S D 113とL字溝S D 115の東西溝部分は重複する。S D 113の南約1 mにはS D 113と平行に東西溝S D 114が掘られる。両者心々の位置は、坪内南北1/2ラインのやや北寄りにあたる。両者間を坪内通路とみることできる。重複関係からS D 112・113はS D 115よりも新しい。東西溝S D 133は坪内(五条条間路北側溝S D 2006の南端～五条条間路北側溝S D 2008の北端)の南から1/4ライン付近に掘られる。

H J 第579次調査発掘区の西端で、重複関係から南北棟建物S B 209・210よりも古い東西溝15条を、南東隅で南北棟総柱建物S B 231よりも古い東西溝2条を検出した。これらの溝内埋土は、基本的に下層が灰色砂質土で上層が地山ブロックを多く含む褐色土である。溝の間隔は発掘区西端のものが0.5～3.0 m、南東隅のものが約1.5 mである。これらは、畑の排水用の溝とも考えられたため、発掘区西端のS D 116と南東隅のS D 117の溝内埋土を花粉分析したが、溝の用途を特定するには至らなかった(130頁参照)。



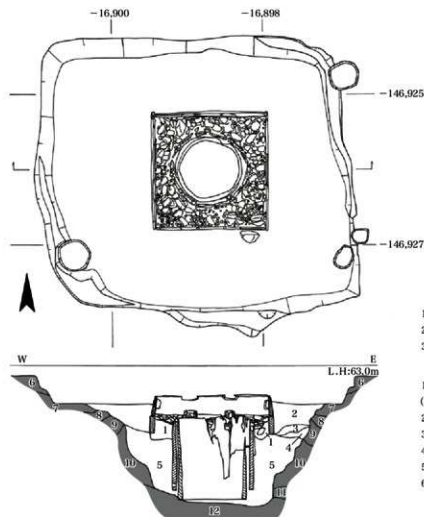
S D 135 a・b、S D 2008 土層図 (1/100)



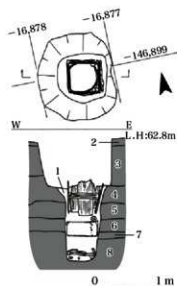
検出遺構平面図 (1/500)

(建物・堀) 坪中央のやや南寄りに南北廂付東西棟建物 S B 245 が建つ。その北西には、S B 245 よりも新しい南北廂付東西棟建物 S B 225 が、S B 225 の西には東廂付南北棟建物 S B 243 が建つ。S B 225 の東妻柱と柱筋を揃えて、東西棟建物 3 棟 (S B 244・246・247) が南北に並立する。この 3 棟の間隔は約 4.4 m である。また、S B 244・246 の西側に建つ S B 243 は、南北妻柱列と S B 244 の北側柱筋と S B 246 の南側柱筋が揃う。S B 225 の北側には、近接した位置に東西廂 S A 224 が築かれる。坪北半には、S B 225 と東妻柱筋を揃えて東西棟建物 S B 221・216・214、南北棟建物 S B 232 が並立する。S B 214 は南廂付き建物で、身舎内には S X 803 がある。S X 803 は径 0.3～1.0 m、深さ 0.1～0.25 m の土坑群で、東西 3 個、南北 2 個の計 6 個が並ぶ。各土坑の深さは S B 214 の柱穴 (深さ 0.4～0.7 m) よりも浅く、断面形が皿状あるいは椀状を呈する。坑内に掘えられていた容器は検出できなかったが、土坑の形状や配置などから S X 803 は貯蔵用埋甕遺構と考えた。S B 243 の北側では、S B 243 の東廂と S B 213・212 の東側柱筋が揃う。

S B 213・212 の西側には、S B 213・212 よりも新しい南北棟建物 S B 211 が建つ。S B 211 の東側柱と S B 243 の身舎東側柱筋が揃う。S B 211・243 の西側には、S B 211 よりも新しい南北棟建物 S B 210 が南北棟建物 S B 239 と妻柱を揃えて建つ。坪東端には南北棟総柱建物 S B 231 が建つ。S B 231 の西側には S B 231 北妻柱筋と柱筋を揃えて東西廂 S A 230 が建つ。S A 230 の西端付近には、南北棟建物 3 棟 (S B 226～228) が建ち、S B 226 の東側柱と S B 227 の西側柱が重なる。また S B 227・228 の北・南妻柱筋も重なる。S B 226・228 は S B 227 よりも新しいことがわかる。S B 231 の南側には S B 231 と東側柱筋を揃えて北廂付東西棟建物 S B 251 が建つ。坪南東部で検出した南北柱列 S A 253 は、坪内の東から約 1/4 ラインに、東西柱列 S A 255 は坪内の南から約 1/4 ラインに建つ。坪南端で検出した S B 263 は五条条間路 S F 2007 に開く門。柱間約 3.0 m の二柱門。坪中央南半に建つ S B 249 は梁行が 2.4 m 等間、桁行が 2.4-3.5-2.4 m で中央柱間が広い。八脚門が想定できるが、S B 249 の東西に並ぶ柱列や閉塞施設の痕跡



S E 501 平面・断面図 (1/50) 左



- | | | |
|----------|---------|---------|
| 1 暗灰色粘質土 | 4 紫灰色粘土 | 7 暗灰色粘土 |
| 2 黄灰色粘質土 | 5 黄灰色粘土 | 8 灰色砂礫 |
| 3 橙灰色粘質土 | 6 灰色粘土 | 2～8:地山 |

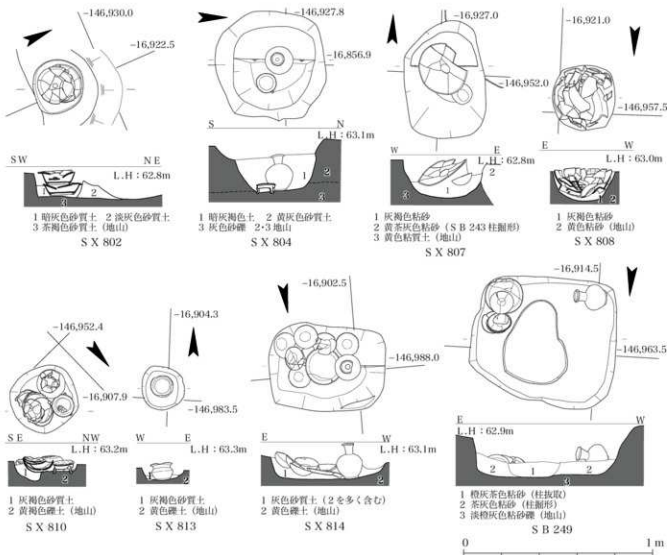
- | | |
|------------------|-----------|
| 1 灰色細砂 (小石～礫を充填) | 7 黄褐色粘土 |
| 2 暗灰色土 | 8 黄白色粘土 |
| 3 灰色砂 | 9 橙灰色細砂土 |
| 4 砂灰色土 | 10 青灰色細砂土 |
| 5 黒灰色土 | 11 黒灰色細砂土 |
| 6 黄灰色粘土 | 12 黄灰色礫 |
| | 6～12:地山 |

0 2 m

は検出できなかった。S B 249の扉口西側の柱掘形内東端に土師器甕A 7点、同皿A 1点、南西隅に須恵器壺L 1点を横的に置く。S B 249の建築時の地鎮と考えられる。S K 48、S B 247・248よりも新しい。S B 249は坪中央のS B 225と建物の中軸をほぼ揃える。

(井戸) S E 501は坪中央の東寄りで検出した井戸で、掘形は南北約3.6 m、東西約4.2 m、深さ約1.7 m。井戸枠は上段が方形横板組、下段外側が円形縦板組で、下段内側に一本割り抜き材を用いる。掘形および枠内から8世紀末～9世紀前半の土器・瓦等が出土。井戸屋形S B 222を伴う。S E 502は坪北東部で検出した井戸で、南北約3.2 m、東西1.0～2.0 m、深さ約2.1 m。井戸枠は抜き取られており残存しない。埋土から8世紀後半の土器が少量出土。S E 503はS E 502の東側で検出した井戸で、掘形は南北約1.2 m、東西約1.0 m、深さ約1.6 m。井戸枠は、方形縦板組横板留で内法一辺0.45 mであ

る。井戸底から約0.3 m上の壁面には曲物が引っ掛かっていた。曲物内の灰色粘土中には、草本植物の種子が多量に含まれておりエノコログサ属、スゲ属等の人里植物や農耕雑草が生育していたことがわかる(136頁参照)。掘形から8世紀代の土器片が、枠内から8世紀後半の土器等が出土。S E 504は坪南半の東寄りで検出した井戸で、南北約2.1 m、東西約1.8 m、深さ約1.3 m。井戸枠は抜き取られており残存しない。最上層埋土中には、8世紀末～9世紀初頭の蓋をした須恵器壺Aが正位に置かれていた。壺内には和同開珎4枚を含む錢貨5枚が納められていた。S E 505は坪南東部で検出した井戸で、発掘区外東に続く。掘形は南北約4.4 m、東西3.2 m以上、深さ3.0 mまで確認した。井戸枠は上段が方形縦板組横板留、下段が円形縦板組であるが、枠の大半が抜き取られていた。掘形および抜き取材から8世紀後半の土器、瓦、土製品が少量出土した。



検出埋納遺構平面・立面・断面図(1/20)

(埋納遺構) S X 802 は坪中央の西寄りで検出した。坑内には蓋をした須恵器杯 B を正位に上下重ねて置く。上の杯 B は内容物を確認できなかったが、下の杯には和同開珎 4 枚と鉄滓が納められていた。S X 804 は坪東端の南北溝 S D 123 の東側で検出した。坑内には須恵器壺 L と奈良三彩火舎を正位に置く。S X 807・808 は坪南半の西寄りで検出した。S X 807 は坑内に土師器碗 A を正位に置き、その上に脚部を欠く土師器高杯を下に向けて被せる。S X 808 は坑内に底部を欠いた土師器甕 B とその下に土師器皿 C 4 点を正位に置く。土師器甕 B は口縁から体部が破砕した状態で埋められていた。S X 810 は坪中央の建物 S B 245 の南側で検出した。坑内には須恵器壺 L と奈良三彩火舎とその横に土師器碗 A 6 点を正位に重ねて置く。S X 813～815 は坪中央南端で検出。S X 813 は門 S B 263 の北側約 7 m にあり、坑内には須恵器壺 H を正位に置く。S X 814 は S B 263 の北側約 3 m にあり、坑内には須恵器壺 L と土師器皿 A と皿の周りに土師器碗 A 7 点を置く。S X 815 は坪南端の東西溝 S D 135 b の南岸で南面築地塼 S A 262 が想定される空閑地の北端に位置する。坑内には銭貨が 5 枚遺存していたが、腐食が激しく銭文を確認できたのは神功開寶 1 枚のみである。

十五坪 溝 2 条 (S D 103・104)、掘立柱建物 1 棟 (S B 202)、土坑 1 基 (S K 601)、柱列を検出した。

H J 第 608 次調査 A 発掘区の南東隅には、厚さ 0.2 m 前後の茶褐色砂質土 (整地層) が堆積し、その上面から十五坪西端の南北溝 S D 104 が掘られる。S D 104 と東四坊坊間東小路東側溝と考えられる S D 1012 の間には空閑地 (幅 2.0～2.5 m) があり、この部分で南北に並ぶ柱列を 2 条検出した。これらは築地の堰止めである可能性が高い。また、S D 104 と S D 1012 に接続する東西溝 S D 103 を検出。S D 103 は幅約 0.3 m、深さ 0.05～0.15 m で、溝底は東から西へ低くなる。S D 103 は築地暗渠になると考えられることから、十五坪の西面築地塼 S A 203 を想定し、S D 104 は築地雨落ち溝になると判断した。S B 202 は棟方向が不明な掘立柱建物で、発掘区外東に続く。S K 601 は坪の南西隅で検出した南北 6.8 m 以上、東西 6.0 m 以上、深さ約 0.5 m の土坑。S K 04、S D 104 よりも新しい。

江戸時代以降の遺構

S X 817 は H J 第 608 次調査 D 発掘区の東端で検出した。径約 0.2 m、深さ 0.05 m の土坑。耕作に伴う素掘溝よりも新しい。坑内から近世以降の木製塔婆片が出土。

なお、調査目的のひとつであった中ツ道¹⁰⁾ に関わる遺構は検出できなかった。

IV 出土遺物

遺物整理箱で 232 箱分の遺物が出土した。

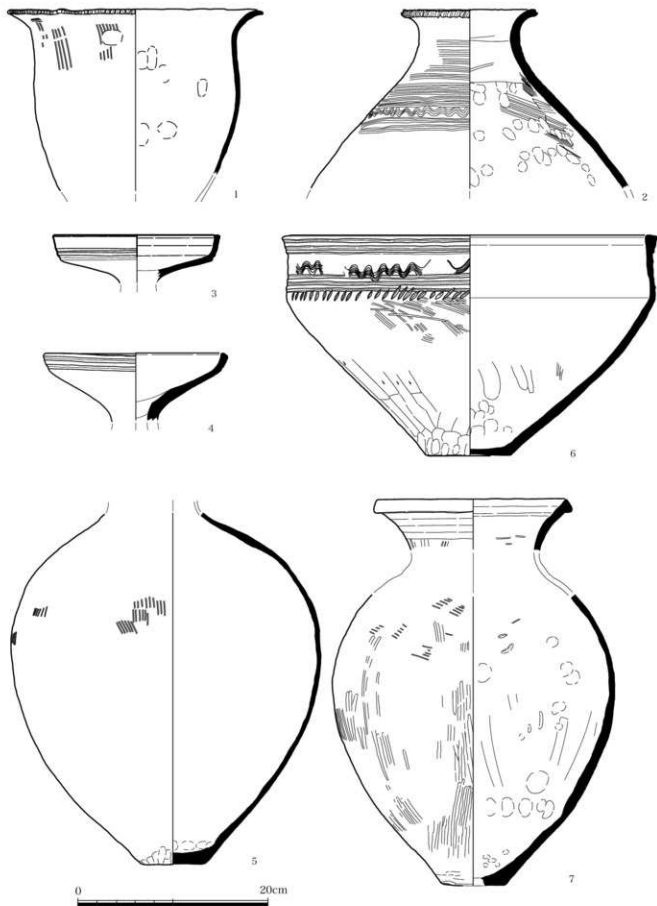
縄文時代晩期の土器、弥生時代中期・後期の土器、古墳時代前期の土師器、8 世紀後半～9 世紀前半の土師器・須恵器・黒色土器 A 類・奈良三彩・緑釉陶器・灰釉陶器・墨書土器・製塩土器・線刻土器、陶硯、土馬、円盤型土製品、瓦磚、石器 (石鏃・楔形石器・剥片)、砥石、銭貨 (和同開珎・神功開寶)、金属製品 (刀装具、鉄釘、輪羽口、鉋澤、伊壁片、焼土塊、木製品 (曲物・塔婆) など) がある。以下、主な遺物について記す。

縄文時代の土器 S K 07 から縄文時代晩期前半の深鉢の口縁部から体部にかけての破片が出土した。外面は二枚貝による条痕があり、頸部をナデ調整する。内面にはナデ調整が施される。その他に S K 06・08・21、河川 25 から出土した縄文時代晩期の土器片がある。

弥生時代の土器 弥生土器には、甕・壺・高杯・鉢がある。弥生時代中期のものが大半で、後期初頭のものが若干含まれる。以下、主なものを記す。

1 は S K 01 から出土した甕である。口縁部に刻目が施され、ヘラによる押捺が 1 箇所ある。内外面とも磨減しているため、頸部から体部外面にかけて縦位のハケ調整の痕跡がわずかに残るだけである。2 は S K 30 から出土した広口壺。口縁部に刻目、頸部から体部上半外面にかけて櫛描き直線文 11 帯 (4 条 / 1 帯)、波状文 1 帯 (4 条 / 1 帯) が施されている。3 と 4 は高杯の杯部である。3 は S T 42 から、4 は S A 51 の柱穴から出土した。いずれも口縁部外面に凹線文 2 条が施されている。内外面とも磨減しているため、調整は不明である。5 は口縁部が欠損している広口壺で、S T 42 から 3 の高杯と共に出土した。内外面とも磨減しているため、体部外面にハケ調整の痕跡がわずかに残るだけである。6 は S K 16 から出土した鉢。口縁部外面に凹線文 2 条が施され、その下には櫛描き波状文 1 帯 (6 条 / 1 帯)、凹線文 2 条、刺突文が施されている。体部上半外面は斜め方向にハケ調整した後、横位のヘラミガキ調整が施されている。体部下半外面は縦位のヘラケズリが施されている。内面は磨減しているため、縦位のハケ調整とナデ調整の痕跡がわずかに残るだけである。7 は S K 13 から出土した広口壺。体部上半外面は横位～斜め方向のタキの痕跡がみられ、体部外面全体に縦位のヘラミガキ調整が施されている。内面は磨減しているため、ナデの痕跡が部分的に残る。

1 は大和部Ⅱ-2 様式、2 は大和部Ⅲ-3 様式、3～6 は大和部Ⅳ-1～2 様式、7 は大和部Ⅴ-1 様式に位置づけられる。



出土弥生土器 (1/4)

奈良・平安時代の土器・土製品 遺物整理箱で62箱分出土した。大半は8世紀後半～9世紀初頭のもので、8世紀前半のものは少ない。道路側溝や築地雨落ち溝からの出土量が多い。以下、埋納遺構などからの出土土器を中心に記す。

S B 249 出土土器 (1～8) 土師器ⅢA (7) は口縁端部が内側に小さく肥厚し、口縁部は開き気味である。口径19.7cm、器高2.6cmである。底部外面はヘラケズリを施す。土師器ⅢA (1～6) は口径12.2～12.8cm、器高3.55～4.05cmである。1～3は外面全体にヘラミガキを施す。4は口縁部外面にヘラケズリとヘラミガキがわずかに残る。5は外面全体にヘラケズリの後、口縁部上半外面にヘラミガキを施す。ヘラケズリは指頭圧痕で凹んだ部分までは及ばない。6は外面全体にヘラケズリを施す。須恵器ⅢL (8) は口径7.5cm、器高17.1cm、底径8.2cm、胴部最大径15.2cmである。体部下半はロクロケズリ、体部上半はロクロナデ、底部外面はヘラ切り後にナデ調整を施す。頸部と体部の接合は3段構成である。

S X 814 出土土器 (9～17) 土師器ⅢA (16) は口径19.2cm、器高2.6cmである。口縁部は開き気味である。底部外面はヘラケズリを施す。土師器ⅢA (9～15) は9～13が口径11.9～12.3cm、器高3.35～3.75cmで、14・15が口径13.0cm、器高3.65～3.9cmで、大きさにより2つに分けることができる。いずれも器面の磨減が著しいが、ヘラケズリと指頭圧痕が僅かに確認できる。須恵器ⅢL (17) は口径6.9cm、器高18.35cm、底径6.2cm、胴部最大径13.8cmであり、成形、調整技法は8と同じである。胴部最大径は8・25・27に比べると小さい。口頸部が長細くなり、器高がやや高くなる。

S X 810 出土土器 (18～25) 土師器ⅢA (18～23) は口径12.2～12.8cm、器高3.4～4.0cmである。いずれも器面の磨減が著しいが、19・20はヘラケズリの後ヘラミガキ、21・22はヘラケズリが確認できる。22は口径が12.8cmで、器高3.4cmと低く、形態的に新しい要素を呈している。23は小片のため大きさは不明。奈良三彩火舎 (24) は口径11.6cm、器高5.3cmである。平らな底部から反折する体部と、斜め下方へ折り曲げた口縁部と丸くつまみ出した端部を持つ。体部内面から外面はロクロナデを施し、底部内面にはロクロ目が残る。脚は3本の獣脚で、体部との接合部には接合痕が明瞭に残る。胎土は軟質で淡黄色である。釉薬は、ほとんど剥落しているが、淡緑釉を全面施釉後、濃緑釉を体部外面から体部内面と脚部外面に、褐釉を体部外面から体部内面上端に施す。須恵器ⅢL (25) は残存高12.5cm、底径8.3cm、胴部最大径14.8

cmである。口頸部を欠く。成形、調整技法は8と同じである。

S X 804 出土土器 (26・27) 奈良三彩火舎 (26) は口径10.8cm、器高5.0cmである。成形、調整技法は24と同じで、脚は3本である。底部内面にはロクロ目が残る。底部外面には右回転ロクロのヘラ切り痕跡が残る。胎土は軟質で浅黄褐色である。釉薬は淡緑釉を全面施釉後、濃緑釉を体部外面から内面上半と脚外面に施す。体部外面の濃緑釉は、脚部の間に施す。須恵器ⅢL (27) は口径7.2cm、器高17.9cm、底径7.8cm、胴部最大径14.6cmである。成形、調整技法は8と同じである。

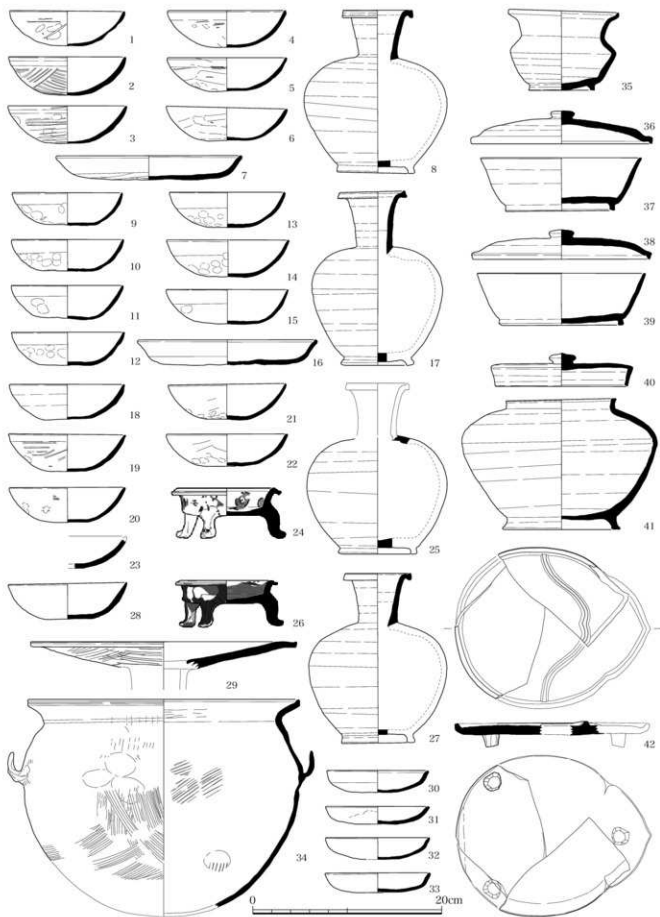
S X 807 出土土器 (28・29) 土師器ⅢA (28) は口径12.6cm、器高3.8cmである。器面の磨減が著しく、調整は不明。高杯 (29) は口径28.2cm。器面の磨減が著しく僅かにヘラミガキが残るだけであるが、ヘラミガキは5単位に分けて施している。

S X 808 出土土器 (30～34) 土師器ⅢC (30～33) は口径10.8～11.1cm、器高1.9～2.3cmである。口縁部はココナデを施す。土師器ⅢB (34) は口径28.8cm、残存高22.0cmである。口縁端部は上方に直立する。頸部付近には粗いタテハケが残る。体部外面中央から下半には、タタキ目と粗いハケ目痕跡が残る。内面には当て具痕跡が残る。体部外面には黒斑がみられる。

S X 813 出土土器 (35) 須恵器ⅢH (35) は口径11.6cm、器高8.4cmである。体部外面上半から内面はロクロナデ、体部外面下半はロクロケズリ、底部外面は磨減しており分かりにくいヘラ切り後ナデと考えられる。S X 802 出土土器 (36～39) S X 802 は蓋をした須恵器ⅢBを上下2段に重ねた埋納遺構で、上段が (36・37)、下段が (38・39) である。須恵器ⅢB (37・39) は37が口径17.0cm、器高5.6cm、39が口径17.8cm、器高5.5cmである。共に底部外面はヘラ切り後ナデ、口縁部外面から内面はロクロナデを施す。須恵器ⅢB蓋 (36・38) は36が口径19.2cm、器高3.5cm、38が口径18.7cm、器高3.15cmである。器面が磨減しており分かりにくい。頂部内外面ともにロクロナデと考えられる。

S E 504 出土土器 (40・41) 須恵器ⅢA (41) は口径11.7cm、器高13.7cm、底径12.5cmである。蓋を被せた状態で焼成しており、肩部以下には自然釉がかかる。体部外面上半はロクロナデ、体部外面下半はロクロケズリを施す。底部外面はヘラ切り後ナデ、底部内面にはヘラ状の工具によるナデ痕跡が残る。壺A蓋 (40) は、口径14.0cm、器高3.5cmである。

土製品 宝珠硯 (42) は十坪東端の南北溝S D 123と十坪中央西寄りのS X 816から破片で出土した。復原



出土奈良・平安時代の土器・土製品 (1/4)

長径 20.5cm、復原短径 17.1cm、器高 2.55～2.65cmである。

視面前部に堤を設けて海と陸を区分する。堤は貼り付け後ナデを施す。視背外縁はヘラケズリで滑らかな段を設ける。脚数は、剥離痕跡から視背後部が2脚、視背前部は位置関係から1脚とし、3脚に復原した。脚は10角形に面取りをする。外面には緑灰色の自然釉が掛かる。視面には伏せ焼きによる焼成台とみられる円形の痕跡が残留。陸部には使用痕がある。

(出土土器・土製品の時期) S B 249、S X 814・810・807から出土した土師器碗Aは形態、調整手法、径高指数から、8世紀末～9世紀初頭のものと考えられる。土師器碗Aは、9世紀前半になると口縁部の開きが大きく、器高が低下する傾向がみられるが、報告資料は9世紀前半の口縁部ほどは開かないことから、8世紀末～9世紀初頭の範疇に収まるものと考えられる。

宝珠碗は窯投窯で限定的に生産され、その窯式編年から8世紀末～9世紀初頭に位置づけられている。

瓦埴類 瓦埴類は遺物整理箱で47箱分出土した。大半は丸瓦・平瓦であるが、軒丸瓦17点、軒平瓦20点、面戸瓦2点、埴17点を含む。ここでは、軒瓦について記す。

今回報告する調査で出土した軒瓦と、既に報告を行っている十坪の調査(H J 第459-3次調査)で出土した瓦類をまとめると、別表のようになる。まず出土量が目立つ軒瓦は、6308型式R種と6671型式I a種で、それぞれ5点出土している。ただし、出土場所をみると、6308型式R種は十五坪内部と坊間東小路、6671型式I a種はすべて十五坪内部からの出土である。十五坪に関しては、6308型式R種と6671型式I a・I b種が主体的な組み合わせと考えられていた⁴⁾。今回出土したものを合わせ、出土割合を算出してみると、6308型式R種が十五坪内出土軒丸瓦の33%を、6671 I a・I b種は十五坪内出土軒平瓦の46%を占めることがわかった。さらには、十五坪の西に隣接する十坪からは、6308型式R種と6671型式I a種は全く出土しておらず、これらのことは、十五坪の組み合わせであったことを追認するものである。

なお6308型式R種については、左京二条五坊北郊⁵⁾や、左京二条二坊十一坪⁶⁾で出土した6308型式J種とともに、平城京に製品が供給された後、瓦工人の移動は伴わず、范型のみが安芸国にもたらされ、中房圏線彫り加えの後、安芸国分寺の創建瓦として生産されたことが、実物照合による同范認定作業や范傷進行・製作技法の比較の結果、明らかになった⁷⁾。

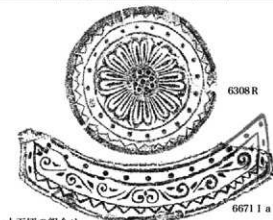
十坪内に関しては、その大半を調査したことになるが、軒丸瓦は9点、軒平瓦は16点と少ない。軒平瓦の中では、

6704型式A種が4点とやや目立つ。6704型式A種は「中」字形の左右に上向きの唐草を配した中心飾りをもつ4回反転均整唐草紋で、幅2cm程度の平坦面をもつ曲線顎IIである。凸面にタテ観タタキを施し、のち瓦当面から約15cmはタテナデを施す。凹面はヨコナデを施し、端部には幅約1cmの面取りをおこなう。6704型式A種は平城宮での出土が顕著で、東院庭園地区での出土品⁸⁾と、十坪出土品はその製作技法も同じである。

平城京左京五条四坊十坪出土軒瓦内訳表

軒瓦	十坪内部				十五坪内部		坊間東小路	
	459-3	579	608-D	608-E	608-A	608-B	608-E	
6012 A a		1						
6301 B			1					
6301 種類不明			1					
6308 R					4	1		
6313 A a					1			
6313 A				1			1	
6320 A a			1					
型式不明	1	1	2		1		1	

軒瓦	十坪内部				十五坪内部		坊間東小路
	459-3	579	608-C	608-D	608-A	608-B	608-A
6663 A		1					
6666 A		1					
6668 A							1
6671 I a					4	1	
6671 I b			1				
6691 A							
6704 A			1	3			
6721 E		1					
型式不明	2	1		3			
平瓦以降	1						



十坪出土
出土軒瓦 (1/4) 0 10 cm

V 調査所見

縄文時代

今回、大森町内で初めて縄文時代の遺構を確認した。大森町の北東に位置する三条本町内でも縄文時代晩期の土坑が確認されている⁹⁾。低湿地型の貯蔵穴は河川に近接する場所で、河川に沿って列状に分布する特徴が指摘されている¹⁰⁾。今回の調査地北東(HJ第557・568次調査)で検出した縄文時代晩期の河川両岸に沿っても低湿地型の貯蔵穴が所在していた可能性が考えられる。

弥生時代

HJ第579次調査発掘区の南東部で方形周溝墓と考えられるSX19を、HJ第608次調査D発掘区の西半で土器棺墓ST42を検出した。また、SX19南東側の近接した位置には、土坑SK15～18がある。各々は規模や埋土が似る上、近接する位置関係からも似た性格の遺構である可能性が高く、SK15～18は土坑墓とも考えられる。調査地の東側で実施したHJ第565・575次調査では、弥生時代中期～末頃の弧状溝1条と堅穴建物3棟を検出しており、溝の東側を居住域、西側を墓域とする時期があったと推察できる。

奈良時代の遺構

条坊遺構 想定していた位置で東四坊坊間東小路SF1010とその両側溝SD1011・1012を検出した。HJ第541次調査においても九・十六坪間で同小路を検出している。この調査で得られた路面心の国土座標値は、X=-146,788.60、Y=-16,849.50(世界測地系座標値に換算)で、今回検出した道路心と比較すると国土方方位北に対してN0°10'13"Wの振れをもつことがわかった。道路側溝の排水については、SD1011・1012の溝底の標高からみて、南から北へ排水していることを確認した。また、五条条間路北側溝SD2008は、基幹排水路として西側へ排水していたものと考えられる。

十坪内の様相 既報告のHJ第459次調査での検出遺構を含めて、遺構の重複関係や配置、出土遺物などから大きく5時期(A～E期)の変遷が認められる。

(A期) 坪周囲の築地の状況は不明であるが、坪端の溝は掘られていない。坪の西半には土坑が掘られ、B期の掘立柱建物に先行するSD116・117などの溝が掘られる。建物は坪中央の北東に南北棟建物SB227が建つ程度である。この1棟以外にも建物や土坑や溝が所在した可能性はあるが、特定し難い。

(B期) 坪の周囲には築地塼が築かれる。坪の東端に南北溝SD123、南端に東西溝SD135A、西端に南北溝SD106・107、北端に東西溝SD119が掘られる。

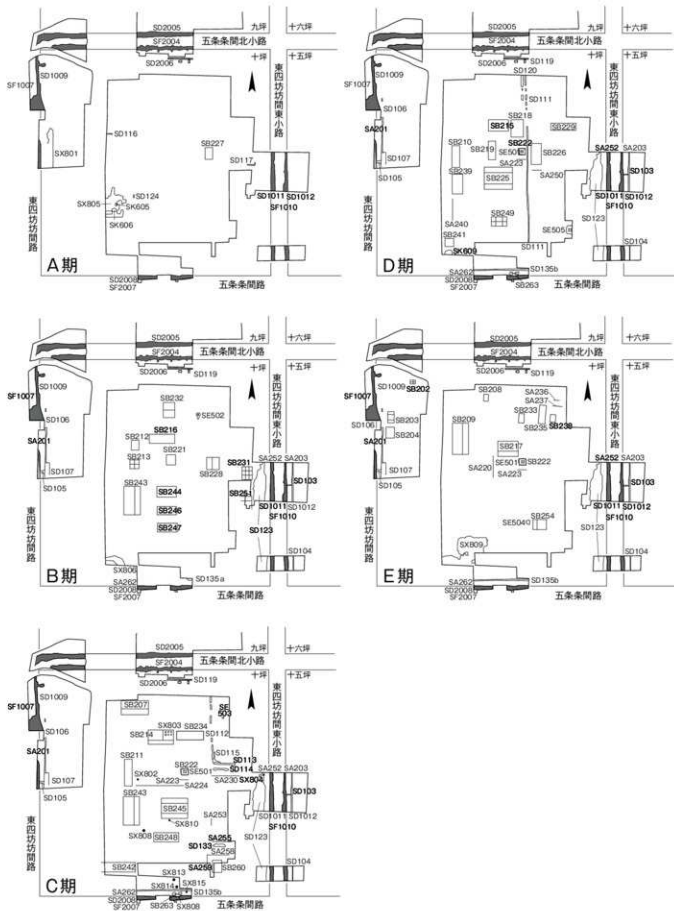
坪の中央北半には、東西棟建物SB244・246・247の3棟が並立する。中央北半には、それらと東妻柱筋を揃えた東西棟建物SB221・216・232が南北に並ぶ。SB244・246・247の西側には東南付南北棟建物SB243が建つ。SB243の北側にはSB243と東側柱を揃える建物SB213・212が置かれる。東半中央には建物SB227・228・231・251が建つ。SB227はほぼ同位置でSB228に建て替えられる。北東部には井戸SE502が築かれる。坪の東半に比べると、西半には建物が整然と並ぶ傾向がある。坪中央ライン上に建物が南北に並立する配置からみて、一町利用と考えられる。

(C期) 北半には坪内東端から1/4ライン付近に南北溝SD112が掘られ、坪内の南北中央ラインのやや北側に東西溝SD113・114が掘られる。また、坪内の南から1/4ライン付近には東西溝SD133が掘られる。坪中央の東西棟建物SB244・246がなくなり、大型の南北南付東西棟建物SB245が建つ。南面には門SB263が開く。SB245とSB263の建物中軸線がほぼ揃う。SB245の西側には、B期に引き続きSB243が、SB245の南側には東西棟建物SB247をほぼ同位置で建て替えたSB248が建つ。坪中央の東西塼SA224によって、坪の南北が画される。坪の南半はSB245を中心建物とする主領域に、SA224の北側には井戸SE501とそれに伴う建物SB222と東西塼SA223、埋喪遺構SX803を設けた南南付東西棟建物SB214などで占められる雑倉域に相当するものと考えられる。また、溝SD112・113で画された坪の北東隅には井戸SE503が築かれる。

当期に、埋納遺構SX802・804・808・810・813～815が築される。SX802は坪中央の西寄りに置かれる。SX808は建物SB243の南東側に、SX810は建物SB245の南側に近接する。SX802・808・810は建物に関わる地鎮と考えられる。SX804は坪の東端中央で、東面築地SA252の西側に置かれ、坪全体あるいは東面築地に関わる地鎮と考えられる。SX813～815は坪の南端中央に置かれ、SX813・814は坪南面の門SB263の北に、SX815はSB263の北東で南面築地塼SA262の北に置かれる。SX813～815は坪全体、あるいはSB263ないしは南面築地塼に関わる地鎮と考えられる。

坪の北東部に掘られる溝SD112～115の性格は不明であるが、南半中央には大型建物SB245が建てられることから、当期も一町利用と考えられる。

(D期) 坪内の東から1/3ライン付近に南北溝SD111・120が掘られる。SD111が掘られたことで、C期に建てられた中心建物SB245をやや北西側に寄せ、



十坪主要遺構変遷模式図

S B 225 に建て替える。S B 225 の南側には、S B 225 と建物中軸を揃えた門 S B 249 が建つ。S B 249 は構築時に柱囲形内に土器が埋納される。S B 225 の北東側にはC期に築かれた井戸 S E 501 が存続する。S E 501 の北側から西側には、建物外側の柱筋を各々揃えた S B 218・215・219 が配される。坪の西半には、C期の南北棟建物 S B 211・243 をほぼ同位置で建て替え S B 210・239 が建つ。東半中央には S B 229・226、S A 250 が建ち、南東隅には井戸 S E 505 を築く。坪中央に中心建物 S B 245 や門 S B 249 が南北に並び、坪内を縦断する南北溝 S D 111 の東西においても建物配置が大きく変わる様子が窺えないことから、当期も一町利用と考える。

(E期) B～D期にみられた整然とした建物配置や中心建物が無くなり、建物・井戸・土坑が点在する。坪の北半には S B 208・233・235・238 が、北西隅には S B 202～204 が建つ。B～D期と比較すると小規模な建物や国土標北で東に振れる建物が多くなる。中央部には、C期に築いた井戸 S E 501 が存続する。S E 501 の北西側には南廂付東西棟建物 S B 217 が近接して建つ。南半には井戸 S E 504 や建物 S B 254 が建つが、S E 504 は短期間の間に井戸枠を抜き取り、壺Aに和同開珎を入れて埋納したと考えられる。

各時期の年代 各期の遺構から出土した土器のうち、年代の手掛かりになるものについて記す。

A期：時期を特定できる出土土器はない。

B期：S E 502 の抜き取り痕跡、S B 212・213・231・243・247 の柱穴から8世紀後半の土師器・須恵器片が出土。
C期：S D 112～115、S E 501 掘形、S B 214・222 の柱穴、S X 810・814 から8世紀後半～末頃の土師器・須恵器片が出土した。

D期：S D 111・120、S B 210・218・219・249 の柱穴から8世紀末～9世紀初頭頃の土師器・須恵器が出土。
E期：S E 504 の枠内から8世紀末～9世紀初頭頃の須恵器壺Aが出土。S E 501 の枠内から9世紀前半の土師器・須恵器・黒色土器A類の破片が出土。

以上のように、出土遺物と遺構の重複関係から、B期は8世紀後半、C期は8世紀後半～末頃、D期は8世紀末～9世紀初頭頃、E期は9世紀初頭～前半頃と考えられる。十坪内の調査においては、8世紀中頃を逆上る土器がほとんどないことから、A期はB期と同じく8世紀後半頃と考えておく。

まとめ

十坪の宅地利用は、8世紀後半からはじまり、9世紀前半頃まで続いていることがわかった。短期間のうちに

建物が頻繁に建て替えられているが、分割されることなく1町利用され続けていることが十坪の特徴といえる。

C・D期には、五条条間路に門が開かれ、宅地内は主殿域と雑舎群域に分けて建物群を配置するようになる。隣接する十五坪も8世紀後半～9世紀初頭頃は1町利用されていたことが判明しており、建物群の配置や黒書土器(「政所」、踏脚門面視の出土点数の多きなどから、一般の宅地というより、公的な施設の可能性が高いと考えられている。十坪と十五坪は同じ1町利用ではあるが、建物配置は大きく異なっており、同じ性格の建物群であるとは考えにくい。

さらに、十坪内では井戸 S E 504 の枠抜き取り痕跡最上層土および門 S B 249 の柱囲形からの出土分を含めて、10基の埋納遺構を検出したことも注目すべきである。平城京内での埋納遺構の検出は約140例¹¹⁾を数え、このうち須恵器壺Lの埋納は3例¹²⁾、須恵器杯・蓋を上下2段に重ねた埋納は1例¹³⁾のみである。奈良三彩火舎は出土例が少ない上、埋納遺構からの出土は今回が初例である。さらに同じ坪内で奈良三彩火舎を埋納する遺構を2基検出したことも特異といえる。これらの様相は奈良時代後半～末における当坪の特徴と考えられる。

(宮崎正裕、原田憲二郎、久保清子、池田裕英、山前智敬、池田富貴子、大原 隼)

- 1) 井上和人「平城京下層中ツ道線の検証」『飛鳥文化財論—納谷守孝氏追悼論文集—』納谷守孝氏追悼論文集刊行会 2005
- 2) 次年度以降、H J 第608次調査F発掘区の花粉分析結果と併せて報告予定。
- 3) 1) および「平城京跡(左京二条四坊十坪・東四坊間路)の調査 第549・598次」『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成19(2007)年度』2010
- 4) 「平城京跡(左京五条四坊十五坪・東四坊大路)の調査」『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成19年度』奈良市教育委員会 2010
- 5) 「公立学校財源組合奈良府所建設予定地発掘調査報告書」奈良国立文化財研究所編 1970および「平城京左京二条五坊北部の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和58年度』奈良市教育委員会 1984
- 6) 「左京二条二坊十一坪の調査」『奈良国立文化財研究所年報 1997—III』奈良国立文化財研究所 1997
- 7) 「平城の豊—平城京出土瓦葺—」奈良市教育委員会 2010および「野野孝之・原田憲二郎『平城京と岡部の軒瓦の調査—6308 J・Rと安芸同分寺軒瓦01 A・B』『奈良文化財研究所紀要 2011』奈良文化財研究所 2011
- 8) 「平城宮発掘調査報告 XV」奈良国立文化財研究所 2003
- 9) 「三条道跡—平城京跡(左京四条五坊五坪)の調査 第446次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成12年度』2002 および奈良県教育委員会 平成19年度調査(平城京左京五条五坊一坪)
- 10) 水ノ江和同「低湿度型貯蔵穴」『縄文時代の考古学5—なりわい—食料生産の技術—』同成社 2007
- 11) 上村和直「宅地と鎮祭」『古代都市の構造と展開』古代都城制研究集第3回報告集1998の構成を元に、現在までに確認できた概数である。
- 12) 奈良県立橿原考古学研究所「石京一条北辺二坊三・四坪」『奈良県道跡調査概要 1992年度(第一分冊)』1993に2例、奈良市教育委員会「平城京跡(左京五条三坊八坪・東三坊間路)の調査 第593次」『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成19(2007)年度』2010に1例掲載。
- 13) 奈良市教育委員会 平成21年度調査H J 第623次調査(平城京左京五条四坊十五坪)で1例確認している。

縄文時代晩期の遺構一覧表

遺構番号	掘形等			主な出土遺物	備考
	平面形等	平面規模 (m)	深さ (m)		
S K 02	円形	径 1.4	0.42	無し	断面が逆台形。縄文時代晩期の貯蔵穴。
S K 03	円形	径 1.8	0.44	無し	断面が半円形。縄文時代晩期の貯蔵穴。
S K 04	円形	径 1.8	0.56	堅果	断面が逆台形。縄文時代晩期の貯蔵穴。
S K 05	円形	径 1.8	0.7	無し	断面が逆台形。縄文時代晩期の貯蔵穴。
S K 06	円形	径 1.6	0.54	縄文時代晩期：縄文土器片	断面が逆台形。縄文時代晩期の貯蔵穴。
S K 07	円形	径 1.8	0.52	縄文時代晩期前半：縄文土器深鉢、堅果	断面が半円形。縄文時代晩期の貯蔵穴。
S K 08	円形	径 1.6	0.56	縄文時代晩期：縄文土器片、サヌカイト剥片	断面が逆台形。縄文時代晩期の貯蔵穴。
S K 09	円形	径 1.5	0.36	無し	断面が半円形。縄文時代晩期の貯蔵穴。南半部は弥生時代中期以降の河川により覆平される。
S K 20	楕円形	南北 1.0×東西 1.2	0.3	無し	断面が逆台形。縄文時代晩期の貯蔵穴。
S K 21	楕円形	南北 0.7×東西 0.9	0.5	縄文時代晩期：縄文土器片	断面が半円形。縄文時代晩期の貯蔵穴。
S K 22	楕円形	南北 0.42×東西 0.54	0.38	無し	
河川 25	蛇行	幅 1.6～2.6×長さ 2.8以上	0.3	縄文時代晩期：縄文土器片	

弥生時代の遺構一覧表

遺構番号	掘形等			主な出土遺物	備考
	平面形等	平面規模 (m)	深さ (m)		
S K 01	不整形	南北 1.5 以上 × 東西 1.5	0.1	弥生時代中期：弥生土器壺か鉢・甕	
S K 02	不整楕円形	南北 0.7×東西 0.9	0.3	弥生時代中期：弥生土器甕	
S K 03	不整円形	径 0.9	0.2	弥生土器壺か甕	重複関係から S D 1012 よりも古い。
S K 04	不整楕円形	南北 0.9×東西 0.6	0.3	無し	重複関係から S K 601 よりも古い。
S K 05	不整楕円形	長さ 3.6×幅 2.0	0.4	弥生時代中期以降：弥生土器壺・甕	重複関係から S D 1012 よりも古い。
S K 06	楕円形	南北 1.5×東西 1.0	0.3	弥生土器片	
S K 07	不整形	南北 0.5×東西 0.4 以上	0.2	無し	重複関係から S D 1011 よりも古い。
S K 08	不整形	南北 0.2 以上 × 東西 0.5	0.4	無し	重複関係から S D 1011 よりも古い。
S K 13	不整形	長さ 4.2×幅 0.8～1.5	0.3	弥生時代後期：弥生土器広口壺	重複関係から S B 226 よりも古い。
S K 14	楕円形	長さ 2.9×幅 0.9	0.3	無し	重複関係から S X 19 よりも新しい。
S K 15	楕円形	長さ 2.0×幅 0.7	0.4	弥生時代中期：弥生土器甕	
S K 16	楕円形	長さ 1.5 以上 × 幅 0.7	0.5	弥生時代中期：弥生土器広口壺・無須壺・鉢、サヌカイト石鏝	重複関係から S D 12 よりも新しく、S B 231 よりも古い。
S K 17	楕円形	長さ 1.0 以上 × 幅 0.7	0.4	弥生時代中期：弥生土器広口壺・甕、サヌカイト石鏝未製品	重複関係から S B 231 よりも古い。
S K 18	楕円形	長さ 2.0 以上 × 幅 0.7	0.4	弥生土器片か土師器片	重複関係から S B 231 よりも古い。
S K 26	不整形	南北 2.2×東西 3.5	0.05	弥生土器片か土師器片	重複関係から S B 232 よりも古い。
S K 30	楕円形	南北 1.2×東西 1.8	0.3	弥生時代中期：弥生土器壺か甕	重複関係から S D 122、S X 804 よりも古い。
S K 31	楕円形	南北 1.8×東西 1.0	0.3	弥生時代前期末～中期：弥生土器壺か甕か鉢	重複関係から S K 32 よりも新しい。
S K 32	不整形	南北 1.8 以上 × 東西 1.0	0.35	弥生時代中期：弥生土器壺・甕	重複関係から S K 33、S D 34 よりも新しく、S K 31 よりも古い。
S K 33	楕円形	長さ 4.5×幅 1.5	0.4	弥生土器片	重複関係から S K 32、S D 121・123 よりも古い。
S K 35	楕円形	長さ 2.0×幅 1.4	0.2	弥生土器壺か甕か鉢、サヌカイト楔形石器	重複関係から S D 121・123 よりも古い。
S K 36	不整形	長さ 1.6×幅 0.6	0.15	無し	
S K 37	楕円形	南北 1.0×東西 1.5	0.12	無し	
S K 38	楕円形	南北 0.95×東西 1.4	0.22	無し	重複関係から S B 243 よりも古い。
S K 39	不整形	長さ 5.0×幅 1.7	0.1～0.2	無し	重複関係から S B 243 よりも古い。
S K 40	不整形	長さ 4.0×幅 0.9	0.25～0.4	サヌカイト剥片	重複関係から S B 243 よりも古い。
S K 41	不整形	南北 0.9×東西 1.8	0.1	無し	重複関係から S B 243 よりも古い。
S K 43	不整形	南北 1.0×東西 0.7	0.1～0.14	無し	
S K 44	不整形	南北 2.8×東西 1.0	0.1	無し	重複関係から S B 247 よりも古い。

遺構番号	掘形等			主な出土遺物	備考
	平面形等	平面規模 (m)	深さ (m)		
S K 45	不整形	長さ 1.6× 幅 0.6	0.1	無し	
S K 46	不整形	長さ 2.0× 幅 0.5	0.1～0.2	無し	
S K 47	不整形	長さ 1.3× 幅 0.9 以上	0.17	無し	重複関係から S B 248 よりも古い。
S K 48	不整形	南北 1.6 以上× 東西 0.8	0.8	無し	重複関係から S B 247・249 よりも古い。
S K 49	不整形	南北 2.6× 東西 1.2	0.15	無し	
S K 50	隅丸長方形	南北 0.5× 東西 2.5	0.2	弥生時代中期：弥生土器短頸壺・甕・高杯	
S D 01	斜行溝か	長さ 1.2× 幅 0.3	0.1	無し	
S D 02	斜行溝か	長さ 2.1× 幅 0.2～0.3	0.05	無し	重複関係から S D 1012 よりも古い。
S D 03	斜行溝か	長さ 1.2× 幅 0.2～0.3	0.05	弥生土器片か土師器片	重複関係から S K 601 よりも古い。
S D 06	斜行溝	長さ 2.2× 幅 0.5	0.2	弥生土器壺か甕か鉢	重複関係から S D 1011 よりも古い。
S D 11	斜行溝	長さ 12× 幅 0.4～0.7	0.2	弥生時代後期～末：弥生土器壺か甕	
S D 12	斜行溝	長さ 8.7× 幅 0.2～0.4	0.2	弥生土器片か土師器片、サマカイト石鏝	重複関係から S X 19 よりも新しく、S K 16、S B 231 よりも古い。
S D 34	斜行溝	長さ 2.7× 幅 0.5～0.7	0.1	弥生時代中期以降：弥生土器壺か甕	重複関係から S K 32、S D 1011 よりも古い。
S T 42	楕円形	南北 0.6× 東西 0.75	0.2	弥生時代中期：弥生土器壺・高杯	口縁を東に向けた壺を横位に置き、壺の口縁部に高杯で蓋をする。弥生時代中期の土器棺蓋と考える。
S X 19	「コ」字状	北東-南西長 14.0× 幅 1.0～2.0 径 0.4	0.2～0.6	弥生時代中期以降：弥生土器壺・甕・鉢、サマカイト石核	溝の南北端は北西に曲がる。重複関係から S K 14、S D 12・113、S B 227・228、S A 230 よりも古い。方形周溝墓の周溝の可能性はある。
P 10	円形	径 0.4	0.4	無し	平打ち込み式の柱穴。柱が遺存する。
P 23	不整形	南北 0.7× 東西 0.6 以上	0.2	無し	断面形状から柱抜き痕跡と考える。
P 24	不整形	南北 0.5× 東西 0.6	0.1	無し	断面形状から柱抜き痕跡と考える。

遺構番号	方向	規模	全長 (m)	柱間寸法 (m)	備考
S A 01	北西-南東	2	2.2	南から 0.9-1.3	柱穴の深さは約 0.3 m。弥生時代の柱列。柱穴から弥生土器片が出土した。
S A 51	南北	1 以上	1.2	1.2 等間	柱穴の深さは 0.14～0.2 m。弥生時代中期の弥生土器高杯が出土。

古墳時代の遺構一覧表

遺構番号	掘形等			主な出土遺物	備考
	平面形等	平面規模 (m)	深さ (m)		
S K 27	不整形	南北 6.0× 東西 4.0	0.1～0.3	弥生時代中期以降：弥生土器壺、サマカイト石鏝	重複関係から S K 28 よりも新しい。
S K 28	楕円形	南北 0.5× 東西 2.0 以上	0.05～0.4	弥生土器片、古墳時代前期後半：土師器高杯・壺	重複関係から S K 27、S D 120 よりも古い。
S K 29	楕円形	南北 0.5× 東西 1.2	0.1	弥生土器片、古墳時代前期後半：土師器壺か甕	

奈良時代(条坊)

遺構番号	掘形等			主な遺物	備考
	平面形等	平面規模 (m)	深さ (m)		
S F 1010	南北道路	長さ 57.4 以上× 幅 2.1～6.1			東四坊坊間東小路。路面心の国土座標値は X = -146,940.00、Y = -16,849.05。東西側溝心々間距離は約 7.0 m。
S D 1011	南北溝	長さ 57.4 以上× 幅 1.5～4.6	0.2～0.7	サマカイト石鏝・楔形石器、8世紀：土師器・須恵器、銅洋、桃核	東四坊坊間東小路の西側溝。溝底の標高は H J 第 608 次調査 A 発掘区で 62.6 m、B 発掘区で 63.1 m。溝心の国土座標値は X = -146,940.00、Y = -16,852.55。重複関係から S K 07・08、S D 06・34 よりも新しい。
S D 1012	南北溝	長さ 57.4 以上× 幅 1.0～3.5	0.4	8世紀前半：軒丸瓦 (6308 R・6313 A)、8世紀後半～末：土師器・須恵器、土馬、鉄釘	東四坊坊間東小路の東側溝。溝底の標高は H J 第 608 次調査 A 発掘区で 63.0 m、B 発掘区で 63.2 m。溝心の国土座標値は X = -146,940.00、Y = -16,845.55。重複関係から S K 03・05、S D 02 よりも新しい。
S F 2007	東西道路	長さ 29.0 以上× 幅 1.4 以上			五条条間路。
S D 2008	東西溝	長さ 29.0 以上× 幅 2.4	0.35	8世紀：土師器・須恵器、土馬、須恵器壺の内面に漆付着、白色物質付着、漆膜片	五条条間路北側溝。溝底の標高は H J 第 608 次調査 E 発掘区の東端で 62.9 m、西端で 62.55 m。溝心の国土座標値は X = -146,993.35、Y = -16,904.00。

遺構番号	方向	規模(間)	全長(m)	柱間寸法(m)	備考	
S X 808	東西	1	1.8	1.8	橋。五条京路路北側溝S D 2008の北岸で、深さ0.35～0.4mの柱穴を検出した。	

奈良時代(十坪内)

遺構番号	棟方向	規模(間)	桁行×梁行	桁行全長(m)	梁行全長(m)	柱間寸法(m)		備考
						桁行	梁行	
S B 207	東西	5×2		13.5	4.8	2.7等間	2.4等間	南側(南の出約3.3m)。柱穴の深さは身倉・廊ともに0.3～0.5m。重複関係からS B 208よりも古い。柱取穴から8世紀末頃の須恵器破片が出土。
S B 208	南北	1以上×2		2.7以上	3.6	2.7	1.8等間	柱穴の深さは約0.1m。重複関係からS B 207よりも新しい。
S B 209	南北	6×1		16.2	5.4	2.7等間	5.4	東側(南の出約3.0m)。柱穴の深さは身倉0.3～0.6m、廊約0.2m。廊の柱はすべて身倉側へ抜き取る。重複関係からS B 210よりも新しい。8世紀末～9世紀初頭の土師器皿A・須恵器杯B片が出土。
S B 210	南北	5×2		12	4.2	2.4等間	2.1等間	柱穴の深さは0.3～0.5m(妻柱約0.2m)。柱脚部から黒土器(須恵器杯か皿の底部外面に「口」が出土。重複関係からS B 211よりも新しく、S B 209よりも古い。柱取穴から8世紀末～9世紀初頭の須恵器杯蓋片が出土。
S B 211	南北	5×2		13.5	4.8	2.7等間	2.4等間	柱穴の深さは0.4～0.6m(妻柱約0.2m)。重複関係からS B 212よりも新しく、S B 210よりも古い。8世紀末頃の土師器杯A・須恵器杯B・杯蓋片が出土。
S B 212	南北	3×2		5.4	3.6	1.8等間	1.8等間	柱穴の深さは0.4～1.0m(妻柱約0.6m)。重複関係からS B 211よりも古い。柱取穴から8世紀末頃の土師器杯C片が出土。
S B 213		2×2	東西4.8	南北4.8	南北・東西ともに	2.4等間		総柱建物。柱穴の深さは0.3～0.5m。
S B 214	東西	5×2		13.5	5.4	2.7等間	2.7等間	南側(南の出約3.3m)。柱穴の深さは0.4～0.7m(妻柱約0.4m、廊0.2～0.3m)。身倉を東から2間目で間仕切る。間仕切った東側に埋没遺構S X 803がある。重複関係からS B 215よりも古い。柱脚部から8世紀後半～末の土師器杯・皿片、須恵器杯B片が出土。
S B 215	東西	5×2		10.5	4	2.1等間	2.0等間	南側(南の出約2.0m)。柱穴の深さは0.5～0.6m(妻柱約0.3m)。重複関係からS B 214よりも新しく、S B 217よりも古い。
S B 216	東西	5×2		13.5	4.8	2.7等間	2.4等間	柱穴の深さは0.1～0.3m。
S B 217	東西	4×2		10.8	4.8	2.7等間	2.4等間	南側(南の出約2.7m)。柱穴の深さは0.6～0.9m(妻柱約0.3m、廊0.4～0.5m)。重複関係からS B 215・218・219よりも新しい。柱取穴から8世紀末～9世紀初頭の土師器皿A片が出土。
S B 218	南北	3×2		6.3	4.8	2.1等間	2.4等間	南側(南の出約2.7m)。柱穴の深さは0.4～0.7m(妻柱約0.2m、廊約0.3m)。重複関係からS B 217よりも古い。8世紀後半～9世紀初頭の土師器皿片が出土。
S B 219	南北	5×2		10.5	3.6	2.1等間	1.8等間	柱穴の深さは0.4～0.7m。重複関係からS B 217よりも古い。柱脚部から8世紀末～9世紀初頭の須恵器杯B片が出土。
S A 220	南北	5		12		2.4等間		柱穴の深さは0.4～0.5m。柱脚部から8世紀末～9世紀初頭の土師器杯B片、須恵器杯蓋・重G片が出土。
S B 221	東西	3×2		5.4	4.2	1.8等間	2.1等間	柱穴の深さは0.2～0.4m。
S B 222		1×1		3.6	2.7			柱穴の深さは0.4～0.5m。井戸SE 501の井戸屋敷。8世紀末頃の土師器皿片が出土。
S A 223	東西	2		5.4		2.7等間		柱穴の深さは約0.3m。井戸SE 501の南側目隠し堀。
S A 224	東西	12		25.2		2.1等間		柱穴の深さは約0.4m。
S B 225	東西	5×2		15.0	6.0	3.0等間	3.0等間	南北両側(南の出約3.0m)。柱穴の深さは0.2～0.5m。東妻柱を持たない。重複関係からS B 245よりも新しい。8世紀末～9世紀初頭の土師器皿A片が出土。
S B 226	南北	4×3		10.8	5.4	2.7等間	1.8等間	柱穴の深さは0.3～0.6m(妻柱約0.3m)。重複関係からS K 13、S B 227よりも新しい。8世紀後半以降の土師器皿片が出土。
S B 227	南北	3×2		6.3	3.6	2.1等間	1.8等間	柱穴の深さは0.2～0.3m。重複関係からS X 19よりも新しく、S B 226・228、S A 230よりも古い。
S B 228	南北	3×2		6.3	3.6	2.1等間	1.8等間	南側(南の出約3.0m)。柱穴の深さは身倉・廊ともに0.3～0.5m。重複関係からS X 19、S B 227よりも新しく、S A 230よりも古い。
S B 229	東西	7×2		12.6	3.6	1.8等間	1.8等間	柱穴の深さは0.2～0.5m。
S A 230	東西	6		15.0	東から2.4-2.4-2.4-3.0-2.4-2.4			柱穴の深さは0.4～0.5m。重複関係からS X 19、S B 227・228・231よりも新しい。
S B 231	南北	3以上×3以上	南北7.2以上	東西5.4以上	南北2.4等間	東西1.8等間		総柱建物。柱穴の深さは0.4～0.5m。重複関係からS K 16～18、S D 12・117よりも新しく、S A 230よりも古い。取穴から8世紀後半の土師器皿・皿片が出土。
S B 232	南北	4×3		8.1	6.0	北から1.8-2.1-2.1	西から2.1-1.8-2.1	柱穴の深さは約0.2m。北から2間目で間仕切る。柱取穴から奈良三彩片、柱穴内から8世紀後半～末の土師器皿A片が出土。重複関係からS K 26・27よりも新しい。
S B 233	南北	3×2		5.1	3.0	北から1.8-1.5-1.8	1.5等間	柱穴の深さは0.1～0.4m。

遺構番号	棟方向	規模(間) 桁行×梁行	桁行全長 (m)	梁行全長 (m)	柱間寸法(m)		備 考
					桁行	梁行	
S B 234	東西	5×2	13.5	4.8	2.7 等間	2.4 等間	柱穴の深さは0.1～0.3 m。
S B 235	南北	5×2	9.6	3.6	北から3・4間目が1.65、他は2.1	1.8 等間	柱穴の深さは0.1～0.3 m。
S A 236	東西	2	3.3		1.65 等間		柱穴から8世紀の土師器杯か皿片出土。
S A 237	東西	3	5.1		西から1.65-1.65-1.8		柱穴の深さは0.1～0.3 m。
S B 238	南北	3×2	4.0	3.0	北から1.25-1.25-1.5	1.5 等間	柱穴の深さは0.1～0.3 m。
S B 239	南北	5×2	10.3	5.4	北から2.1-2.0-2.0-2.1-2.1	2.7 等間	柱穴の深さは0.2～0.45 m。南妻柱を持たない。西側柱はS A 240と柱筋を揃える。重覆関係からS B 243、S K 604、S X 805よりも新しい。柱取穴から8世紀末～9世紀初頭の土師器杯A片が出土。
S A 240	南北	4	9.0		北から2.2-2.3-2.2-2.3		柱穴の深さは0.2～0.25 m。S B 239の西側柱と柱筋を揃える。重覆関係からS K 605、S X 805よりも新しい。8世紀後半以降の須恵器杯B片が出土。
S B 241	東西	2×2	4.8	4.8	西から2.7-2.1	2.4 等間	柱穴の深さは0.25～0.38 m。東側柱はS B 239の西側柱・S A 240と柱筋を揃える。重覆関係からS B 242よりも新しく、S X 809よりも古い。
S B 242	東西	6以上×2	14.4以上	4.8	2.4 等間	2.4 等間	柱穴の深さは0.2～0.45 m。重覆関係からS X 806よりも新しく、S B 241、S K 609、S X 809よりも古い。
S B 243	南北	5×2	15.0	6.0	3.0 等間	3.0 等間	東側(南の出約3.0 m)。柱穴の深さは0.2～0.9 m。北妻柱列はS B 244の北側柱と、南妻柱はS B 246の南側柱と柱筋を揃える。重覆関係からS K 38～41、S D 124よりも新しく、S B 239、S X 807よりも古い。8世紀後半～末の土師器皿A片、須恵器杯蓋片が出土。
S B 244	東西	5×2	10.5	5.6	2.1 等間	2.8 等間	柱穴の深さは0.15～0.5 m。S B 246の北に並立することから同時併存と考える。S B 244・246～248の東西棟建物4棟は建物の中軸が揃う。
S B 245	東西	5×2	13.5	5.4	2.7 等間	2.7 等間	南北両側(南の出約2.7 m)。柱穴の深さは0.2～1.0 m。床東を持ち、東柱には石を据える。柱穴の深さは約0.1 m。重覆関係からS B 225よりも古い。
S B 246	東西	5×2	10.5	4.6	2.1 等間	2.3 等間	柱穴の深さは0.2～0.5 m。西妻柱を持たない。S B 244の南に並立することから同時併存と考える。
S B 247	東西	4×1	10.4	4.8	2.6 等間	4.8	柱穴の深さは0.15～0.35 m。妻柱を持たない。S B 246の南に並立することから同時併存と考える。重覆関係からS K 44・48よりも新しく、S B 249よりも古い。8世紀後半～末の土師器杯、須恵器杯蓋、黒色土器A皿片が出土。
S B 248	東西	5×2	13.0	4.8	2.6 等間	2.4 等間	柱穴の深さは0.15～0.45 m。重覆関係からS K 47よりも新しく、S B 249よりも古い。
S B 249	東西	3×2	8.3	4.8	西から2.4-3.5-2.4	2.4 等間	柱穴の深さは0.15～0.5 m。桁中央柱間が広い八脚門と考える。原口の西側柱の掘形内に8世紀末の土師器門A 6点・皿A 1点・須恵器索L 1点を置く。このうち、皿A 4点と皿Aと索Lは完存する。S B 249建築に伴う地鎮と考えられる。建物の中軸がS B 225と揃う。重覆関係からS K 48、S B 247・248よりも新しい。
S A 250	東西	2	5.3		西から2.7-2.6		柱穴の深さは0.2～0.25 m。南端の柱位置がS B 226の側柱筋と揃う。S B 226 南妻柱との距離は約3.0 m。S B 226の南側を面する目隠し解と考える。
S B 251	東西	1以上×1以上	2.1以上	2.1以上	2.1	2.1	北側(南の出約2.1 m)。柱穴の深さは約0.3 m。
S A 252	南北	基底幅1.5 m					十坪東面の築地解。基底幅は築地堰板止めから判断。
S A 253	南北	3	5.4		1.8 等間		柱穴の深さは0.32～0.46 m。北端の柱穴はS B 245の南側と柱筋を揃える。十坪内を東からほぼ1/4に分割する位置にある。8世紀後半頃の土師器杯A片が出土。
S B 254	南北	3×2	5.6	5.0	北から1.9-1.9-1.8	西から3.0-2.0	西側(南の出約1.9 m)。柱穴の深さは0.1～0.27 m。妻柱のみ身舎の内側に入る。
S A 255	東西	5以上	10.0以上		西から2.4-2.4-1.5-1.6-2.1		柱穴の深さは0.25～0.6 m。西端の柱位置がS D 133の西端と揃う。8世紀後半頃の須恵器杯B片が出土。
S A 256	南北	1以上	2.0以上		2.0		柱穴の深さは0.25 m。南端でS A 257に繋がる。
S A 257	東西	1以上	2.1以上		2.1		柱穴の深さは0.25 m。西端でS A 256に繋がる。
S A 258	東西	5	11.8		西から2.7-2.4-2.6-2.0-2.1		柱穴の深さは0.37～0.63 m。西端でS A 259に繋がる。S B 260の北側を面する目隠し解と考える。
S A 259	南北	1以上	2.7以上		2.7		柱穴の深さは約0.4 m。北端でS A 258に繋がる。S B 260の西側を面する目隠し解と考える。
S B 260	南北	3×2	6.5	4.8	北から2.4-2.3-1.8	2.4 等間	柱穴の深さは0.18～0.5 m。北妻柱とS A 258との距離は約2.7 m。西側柱とS A 250との距離は約2.7 m。8世紀末頃と考えられる土師器杯A片が出土。
S A 261	東西	3以上	4.5以上		1.5		柱穴の深さは0.06～0.14 m。
S A 262	東西	基底幅1.5 m					十坪南面の築地解。基底幅は築地堰板止めから判断。
S B 263	東西	1	3.0		3.0		柱穴の深さは0.3・0.46 m。十坪南面の築地解S A 262から五条条間路S F 2007に開く門。

遺構番号	掘形等			主な出土遺物	備考
	平面形等	平面規模 (m)	深さ (m)		
S D 111	南北溝	長さ 88.0 以上 × 幅 0.4 ~ 0.8	0.15 ~ 0.4	8世紀後半以降:土師器・須恵器・平瓦、須恵器甕の内面に白色物質付着	断面形状はU字形を呈し、途切れながら南北に続く。溝底の標高は北端で 62.4 m、南端で 62.9 m。十坪内を東からほぼ 1/3 に分割する位置に掘られる。重複関係から S E 504 よりも古い。
S D 112	南北溝	長さ 24.0 以上 × 幅 0.4 ~ 1.0	0.05 ~ 0.4	8世紀後半～末:土師器・須恵器	十坪内を東からほぼ 1/4 に分割する位置に掘られる。重複関係から S D 115 よりも新しく、S B 229 よりも古い。
S D 113	東西溝	長さ 12.3 以上 × 幅 1.0	0.2	8世紀後半～末:土師器・須恵器、須恵器杯Aの底部外面に墨書「口」	重複関係から S X 19、S D 115 よりも新しい。
S D 114	東西溝	長さ 8.1 × 幅 1.0	0.2	サヌカイト模形石器、8世紀後半～末:土師器・須恵器	S D 113 と平行して掘られる。
S D 115	L字形溝	南北 6.5 × 東西 3.1 × 幅 1.3	0.3	8世紀後半～末:土師器・須恵器、須恵器杯蓋の頂部外面に墨書「上」	南北溝部分は、十坪内を東から 1/4 に分割する位置に掘られる。重複関係から S D 112・113 よりも古い。
S D 116	東西溝	長さ 3.0 以上 × 幅 0.3	0.2	土師器片・須恵器片	
S D 117	東西溝	長さ 4.0 × 幅 0.4	0.2	無し	重複関係から S B 231 よりも古い。
S D 119	東西溝	長さ 13.0 以上 × 幅 1.0 以上	0.3 以上	8世紀:土師器・須恵器、須恵器杯か皿の底部外面に墨書「所」、S 瓦、須恵器甕の内面に白色物質付着、須恵器甕か鉢の内面に茶色物質付着、刀装具	溝は国土座標 Y = -16.921 辺りで途切れ、以西には続かない。位置的に十坪北端の東西溝と考える。発掘区外に続く。(詳細は次年度報告の予定)
S D 120	南北溝	長さ 14.0 以上 × 幅 0.5 ~ 2.0	0.1 ~ 0.3	8世紀:土師器・須恵器	S D 111 と平行する溝。途切れながら南北に続く。重複関係から S K 27・28 よりも新しい。
S D 121	南北溝	長さ 14.5 以上 × 幅 0.8	0.2	8世紀:土師器・須恵器	重複関係から S K 33・35 よりも新しく、S D 123 よりも古い。
S D 122	南北溝	長さ 5.5 以上 × 幅 0.5	0.2	8世紀:土師器甕・杯か皿・須恵器杯・壺、丸瓦・平瓦	重複関係から S K 30 よりも新しく、S D 123 よりも古い。
S D 123	南北溝	長さ 57.4 以上 × 幅 2.8 ~ 7.0	0.3	8世紀後半以降:土師器・須恵器、須恵器杯Aの内面に漆付着、宝珠眼、土馬、鉄釘	十坪東端の南北溝。溝底の標高はH J 第608次調査発掘区で 63.05 m、B発掘区で 63.15 m。重複関係から S K 33・35 よりも新しい。
S D 124	南北溝	長さ 1.5 以上 × 幅 0.25	0.1	無し	重複関係から S B 243 よりも古い。
S D 125	南北溝	長さ 3.8 以上 × 幅 0.3	0.1 ~ 0.3	8世紀:須恵器甕	S D 127 と溝の北端位置を揃える。重複関係から S K 608 よりも新しく、S B 241 よりも古い。溝は国土座標北で西に振れる。
S D 126	南北溝	長さ 2.1 × 幅 0.3	0.07	8世紀:土師器甕・須恵器甕、平瓦	S D 126・128 ~ 132 は溝の北端位置を揃え、溝は国土座標北で西に振れる。
S D 127	南北溝	長さ 4.3 × 幅 0.6	0.17	縄文土器片、8世紀:土師器皿・須恵器甕	S D 125 と溝の北端位置を揃える。溝は国土座標北で西に振れる。重複関係から S K 608 よりも新しい。
S D 128	南北溝	長さ 2.6 × 幅 0.3	0.1	8世紀:土師器杯か皿・甕、須恵器甕・壺	S D 126・128 ~ 132 は溝の北端位置を揃え、溝は国土座標北で西に振れる。重複関係から S D 129 よりも新しい。
S D 129	斜行溝	長さ 1.1 × 幅 0.3	0.05	無し	重複関係から S D 128・130 よりも古い。
S D 130	南北溝	長さ 3.6 × 幅 0.4	0.1	8世紀:須恵器杯か皿、丸瓦	S D 126・128 ~ 132 は溝の北端位置を揃え、溝は国土座標北で西に振れる。重複関係から S D 129 よりも新しい。
S D 131	南北溝	長さ 2.6 × 幅 0.5	0.2	8世紀:土師器杯か皿・須恵器甕	S D 126・128 ~ 132 は溝の北端位置を揃え、溝は国土座標北で若干西に振れる。
S D 132	南北溝	長さ 2.2 × 幅 0.3	0.1	無し	溝は国土座標北で西に振れる。
S D 133	東西溝	長さ 7.1 × 幅 1.5 ~ 2.0	0.1 ~ 0.3	8世紀:土師器・須恵器、丸瓦・平瓦	溝の深さは西部分が 0.1 m、東部分が 0.25 m。埋土の暗褐色粘質土には地山の黄褐色粘質土ブロックが混入することから、一気に埋め戻したと考えられる。十坪内を南からほぼ 1/4 に分割する位置に掘られる。
S D 134	南北溝	長さ 1.5 以上 × 幅 1.3 ~ 2.0	0.1	無し	十坪南端の東西溝 S D 135 b と五条条間路北側溝 S D 2008 を繋ぐ。
S D 135 a	東西溝	長さ 3.0 以上 × 幅 1.0 以上	0.6	サヌカイト調片、8世紀:土師器甕・須恵器杯B蓋	十坪南端の東西溝(古)。国土座標 Y = -16.898 辺りで途切れ、以西には続かない。
S D 135 b	東西溝	長さ 23.0 以上 × 幅 1.0 ~ 1.4	0.2 ~ 0.4	8世紀:土師器・須恵器、丸瓦、平瓦、鉄釘	十坪南端の東西溝(新)。
S D 136	南北溝	長さ 2.3 × 幅 0.6 ~ 0.8	0.25	8世紀:土師器高杯	十坪南端の東西溝 S D 135 a と五条条間路北側溝 S D 2008 を繋ぐ。
S D 137	東西溝	長さ 3.3 以上 × 幅 0.3 ~ 0.4	0.06	8世紀:丸瓦、製塩土器	重複関係から S D 123 よりも古い。

遺構番号	掘形等			主な出土遺物	備考
	平面形等	平面規模 (m)	深さ (m)		
S D 138	東西溝	長さ 3.6 以上 × 幅 0.3 ~ 0.5	0.05	8 世紀後半: 土師器碗 A	重複関係から S D 123 よりも古い。
S K 603	楕円形	東西 1.4 × 南北 1.0	0.2	8 世紀: 土師器・須恵器壺 L	
S K 604	不整形	東西 2.8 × 南北 2.5	0.25	8 世紀: 土師器・須恵器・軒平瓦 (6671 I b)・丸瓦・平瓦	重複関係から S B 239 よりも古い。
S K 605	楕円形	東西 0.9 × 南北 1.5	0.22	不明	重複関係から S A 240, S X 805 よりも古い。
S K 606	楕円形	東西 2.4 × 南北 1.7	0.55	8 世紀: 土師器・須恵器・丸瓦・平瓦	重複関係から S X 805 よりも古い。
S K 607	不整形	東西 1.1 × 南北 1.0	0.15	8 世紀後半: 土師器杯・皿 A・須恵器杯 A・杯 B・皿・甕・杯 B 蓋・軒平瓦 (6671 I b)・丸瓦・平瓦	
S K 608	不整形	南北 2.2 × 東西 3.0 以上	0.1	8 世紀: 土師器杯・皿・須恵器杯 A	重複関係から S D 125・127 よりも古い。
S K 609	不整形	南北 2.3 以上 × 東西 3.8	0.4	8 世紀: 土師器・須恵器・丸瓦・平瓦	重複関係から S B 242 よりも新しく、S X 809 よりも古い。
S X 802	円形	径 0.3	0.15	8 世紀末: 須恵器杯 B・同蓋・鉄貨 (和同開珎)、鉄洋、小石、土の塊	坪中央のやや西寄りで検出した埋納遺構。蓋をした須恵器杯 B を上下 2 段に重ねて置く。下段の杯には和同開珎 4 枚と鉄洋が納められていた。鉄貨は杯の底から浮いた状態にあり、鉄貨は向かひの有機物上に置かれていた可能性がある。密閉した容器を上下 2 段に重ねて納めた埋納遺構の初層である。
S X 803	隅丸方形または円形	径 0.3 ~ 1.0	0.1 ~ 0.25	8 世紀末頃: 土師器杯・皿・皿 A・須恵器杯 B・杯・皿・杯 B 蓋・壺・甕・製塩土器、丸瓦・平瓦	東西 3 個、南北 2 個ずつ計 6 個の穴、S B 214 の間仕切った身舎裏側に納まる意図的な配置と、個々の深さが 0.1 ~ 0.25 m と比較的浅く、断面形状が皿もしくは碗状を呈する。埋納遺構と考えた。
S X 804	円形	径 0.6	0.3	8 世紀末: 須恵器壺 L・奈良三彩火舎	坪中央東端で検出した埋納遺構。須恵器壺 L 1 点、奈良三彩火舎 1 点を正位に置く。重複関係から S K 30 よりも新しい。
S X 805	不整形	南北 16.0 × 東西 10.0 以上	0.15	8 世紀: 土師器・須恵器・丸瓦・平瓦・鉄洋、取皿	重複関係から S K 605・606 よりも新しく、S B 239・243, S A 240 よりも古い。
S X 806	不整形	南北 0.8 × 東西 5.0	0.15	8 世紀: 土師器・須恵器・丸瓦・平瓦	重複関係から S B 242, S X 809 よりも古い。
S X 807	楕円形	南北 0.6 × 東西 0.45	0.25	8 世紀末: 土師器・高杯	坪南半のやや西寄りで検出した埋納遺構。杯部を下に向けた土師器高杯 (脚部欠損) 1 点の下に、土師器碗 A 1 点を正位に置く。土師器碗 A は 8 世紀末のものである。重複関係から S B 243 よりも新しい。
S X 808	円形	径 0.35	0.2	8 世紀末: 土師器皿 C・甕 B	坪南半のやや西寄りで検出した埋納遺構。底部を打ち欠いた土師器甕 B 1 点の下に土師器皿 C 4 点を正位に置く。
S X 809	不整形	南北 15 以上 × 東西 25 以上	0.2	8 世紀: 土師器・須恵器・丸瓦・平瓦、8 世紀後半: 軒平瓦 (6704 A)、羽口	重複関係から S B 241・242, S K 609, S X 806 よりも新しい。
S X 810	円形	径 0.35	0.15	8 世紀末: 土師器碗 A・須恵器壺 L・奈良三彩火舎	S B 245 の南側で検出した埋納遺構。須恵器壺 L、奈良三彩火舎が 1 点ずつ正位に、その横に土師器碗 A 6 点を正位に重ねて置く。土師器碗 A は 8 世紀末のものである。
S X 811	不整形	南北 4.0 ~ 4.6 × 東西 7.0	0.2	8 世紀: 土師器・須恵器・軒平瓦 (6301 B)・丸瓦・平瓦	
S X 812	不整形	南北 4.0 以上 × 東西 3.4	0.2	8 世紀: 土師器・須恵器・丸瓦・平瓦	
S X 813	円形	径 0.22	0.1	8 世紀末: 須恵器壺 H	坪中央南端の門 S B 263 の北側で検出した埋納遺構。須恵器壺 H 1 点を正位に置く。
S X 814	隅丸長方形	南北 0.6 × 東西 0.4	0.2	8 世紀末: 土師器碗 A・皿 A・須恵器壺 L	坪中央南端の門 S B 263 のすぐ北側で検出した埋納遺構。須恵器壺 L 1 点を置き、その横に土師器皿 A 1 点、皿の周囲に碗 A 7 点を置く。
S X 815	楕円形	南北 0.2 × 東西 0.3	0.1	鉄貨 (神功開寶)	南面築地塼 S A 262 のすぐ北側で、坪内の東からほぼ 1/3 ライン上にある埋納遺構。銅銭 5 枚 (うち 1 枚は神功開寶) を確認した。
S X 816	不整形	南北 0.6 以上 × 東西 1.6 以上	0.15	8 世紀末 ~ 9 世紀初頭: 宝珠鏡	H J 第 579 次調査発掘区南西隅で検出。埋土は暗灰褐色砂で土坑あるいは整地土と考えられる。S D 123 から同一個体の宝珠鏡が出土した。
S X 817	円形	径 0.2	0.05	塔婆片	H J 第 608 次調査 D 発掘区東端で検出。坑内には分断された (長さ 33.5cm 以上、幅 7.7cm 以上、厚さ 5mm 程度に復原できる) 塔婆が納められていた。釈文は「□臨現□神定門一周忌□」で、施餓鬼供養に関わるものと考えられる。重複関係から耕作に伴う表層より新しい。

遺構番号	掘形等			井戸枠		主な出土遺物	備考
	平面形等	平面規模 (m)	深さ (m)	構造	内法 (m)		
S E 501	隅丸方形	南北 3.6× 東西 4.2	1.7	(上段) 横板組; 南北 1.5×東西 1.5 (下段内側) 一木割り抜き; 径 0.8 (下段外側) 円形縦板組; 径 0.9		(撮影) 8世紀末～9世紀前半: 土師器・須恵器・墨書土器か、土師器杯か皿に黒刺(*)、須恵器杯か皿に黒刺(*)、ミニチュア土師器、須恵器の内に白色物質付着、軒平瓦 (6666 A・6721 E)、曲物、角 (採集) 8世紀末～9世紀前半: 土師器・須恵器・墨書土器か、須恵器の内に白色物質付着、円盤型土製品、軒平瓦 (6663 A)・丸瓦・平瓦、9世紀前半: 土師器・須恵器・黒色土器A類、磁石、石製部材、鉄釘か、曲物、柳皮組	一木割り抜きの枠材は丸瓦材を内割りしたもので、厚さは約6cmである。円形縦板組は厚さ約5cmの縦板13枚を底面から約1cmの位置で各々を太物留める。縦板の外側に厚さ約3cmの添板13枚を配し、縦板と縦板の合わせ目を塞ぐ。この上に横板を敷いて、縦板と縦板の間に石を充填する。横板組は、厚さ約5cmの横板の四隅を目違い柄組にて積み上げた井籠組で、上下は各面2箇所を太物で固定する。横板は2段分が遺存する。S B 222はS E 501の井戸屋形と考えられる。
S E 502	不整形	南北 3.2× 東西 1.0～2.0	2.1	(抜き取られている)		8世紀後半: 土師器・須恵器、須恵器皿Aの底部外面に墨書「千」	坑内の断面観察から北側にあった井戸枠をSロープを設けて南側へ抜き取っている。
S E 503	隅丸方形	南北 1.2× 東西 1.0	1.6	方形縦板組横横留: 0.45		(撮影) 8世紀: 土師器・須恵器 (採集) 8世紀後半: 土師器・須恵器、須恵器壺の内面に黒付着、磁石の皮、胡桃、桃核、梅核	曲物の一部は掘形底に崩落していたが、大部分は掘形底から約0.3m上の壁面に引っかかっていた。崩落した曲物下には、先露を加工した棒状の材が遺存していた。
S E 504	不整形	南北 2.1× 東西 1.8	1.3	(抜き取られている)		8世紀後半以降: 土師器・須恵器壺A・壺A蓋、丸瓦・平瓦	井戸枠抜き取り最上層中に蓋をした須恵器壺Aが正位に置かれる。壺A内には銅線5枚(そのうち4枚が和同開珎)が納められていた。重覆関係からS D 111よりも新しい。
S E 505	隅丸方形	南北 4.4× 東西 3.2以上	3.0 以上	(下段) 円形縦板組: 0.7 (上段) 方形縦板組間柱横横留: 1.0		(撮影) 8世紀後半: 土師器・須恵器 (採取) 8世紀後半: 土師器・須恵器、丸瓦・平瓦、土馬、土鍾	圓形・井戸枠は西半分のみ検出。東半分は発掘区外東に続く。掘形は二段に掘り込まれ、掘形内には0.4～0.7mの自然石を多く含む。井戸枠は二段で、上段が方形縦板組間柱横横留、下段が円形縦板組である。上段の枠材は丸平が抜き取られていたが、南側と北側の間柱、西側2枚・南側1枚・北側2枚の縦板、西・南・北面の横板が遺存していた。下段の枠材は北・西側の敷板が抜き取られていた。縦板は底から概ね1.0m間隔で、計3箇所を太物で固定する。

奈良時代(十五坪内)

遺構番号	掘形等			主な出土遺物	備考
	平面形等	平面規模 (m)	深さ (m)		
S D 103	東西溝	長さ 2.5×幅 0.3	0.05～ 0.15	8世紀: 土師器皿B	西面築地堀 S A 203の船渠。十五坪西端の南北溝 S D 104と東西坊間東小路東側溝 S D 1012を繋ぐ。
S D 104	南北溝	長さ 57.4以上×幅 0.3～1.8	0.1～0.3	サマカイト割片、8世紀前半: 軒平瓦 (6308 R・6313 A a)・軒平瓦 (6671 1 a)、8世紀後半: 土師器杯か皿・壺、須恵器杯B・壺C・壺、8世紀: 丸瓦・平瓦、柳皮	十五坪西端の南北溝。溝底の標高はH J 第608次調査A発掘区で63.05 m、B発掘区で63.35 m。重覆関係からS K 601よりも古い。
S K 601	不整形	南北 6.8以上×東西 6.0以上	0.5	弥生時代後期: 弥生土器大口壺、8世紀後半: 土師器杯・皿・高杯・壺、須恵器杯か皿・壺・製塩土器、8世紀: 軒平瓦 (6671 1)・丸瓦・平瓦	重覆関係からS D 03・104、S K 04よりも新しい。

遺構番号	棟方向	規模 (間)		全長 (m)	柱間寸法 (m)		備考
		桁行×梁行			桁行	梁行	
S B 202	不明	3		6.3	2.1等間		柱六の深さ0.5～0.6m。発掘区外東へ続く建物の西側柱列と考えられる。
S A 203	南北	基底幅 1.5 m					十五坪西面の築地堀。基底幅は築地堰板止め痕跡から判断。



H J 第 579 次調査 発掘区全景 (東から)



H J 第 579 次調査 下層遺構全景 (南から)



HJ第608次調査 A発掘区全景(西から)



HJ第608次調査 C発掘区全景(東から)



H J 第 608 次調査 D 発掘区全景 (北西から)



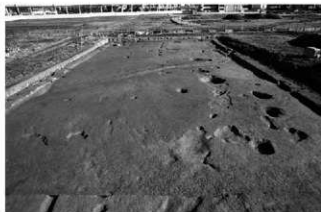
H J 第 608 次調査 E 発掘区全景 (東から)



H J 第 579 次調査 土坑SK 05～09 (南東から)



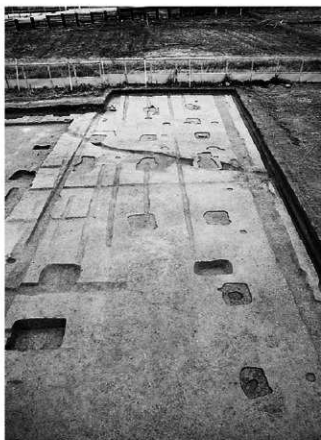
H J 第 579 次調査 柱穴P 10 (東から)



H J 第 608 次調査 C 発掘区 下層遺構全景 (西から)



H J 第 608 次調査 D 発掘区 土器棺墓ST 2 (北から)



H J 第 579 次調査 北西部分 (南から)



H J 第 608 次調査 B 発掘区全景 (西から)



H J 第 608 次調査 A 発掘区 東四坊坊間東小路 S F 1010 (北から)



H J 第 608 次調査 B 発掘区 東四坊坊間東小路 S F 1010 (北から)



H J 第 579 次調査 発掘区中央部分 (北から)



H J 第 579 次調査 総柱建物 S B 231 (西から)



H J 第 579 次調査 井戸 S E 501 (北西から)



H J 第 608 次調査 D 発掘区中央部分 (南から)



H J 第 608 次調査 C 発掘区 埋藏遺構 S X 803 (北東から)



S E 504 須恵器壺 A 出土状態 (左) と X 線写真 (右) (上が北)



H J 第 608 次調査 D 発掘区 門 S B 249 柱形内土器 (北から)



H J 第 608 次調査 D 発掘区 埋納遺構 S X 808 (北から)



H J 第 579 次調査 D 発掘区 埋納遺構 S X 802 (東から)



H J 第 608 次調査 D 発掘区 埋納遺構 S X 810 (北から)



H J 第 608 次調査 A 発掘区 埋納遺構 S X 804 (東から)



H J 第 608 次調査 E 発掘区 埋納遺構 S X 813 (東から)



H J 第 608 次調査 D 発掘区 埋納遺構 S X 807 (東から)



H J 第 608 次調査 E 発掘区 埋納遺構 S X 814 (北から)

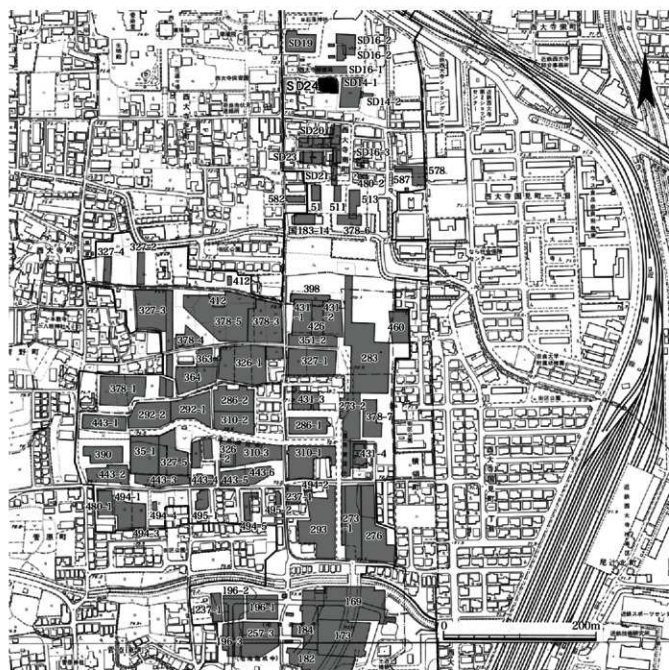
2. 近鉄西大寺駅南土地区画整理事業に係る発掘調査

本調査は、奈良市が進めている近鉄西大寺南土地区画整理事業（総面積約300,000㎡）について実施した埋蔵文化財発掘調査である。奈良市教育委員会では昭和63年から事業地内の発掘調査を実施している。

平成20年度は下表の通り1箇所で行った発掘調査を実施した。今回の発掘面積は400㎡であり、初年度からの総調査面積は109,674㎡になる。今回の調査は平城京の条坊復元では、西大寺旧境内に該当している。

平成20年度 西大寺駅南土地区画整理事業 発掘調査一覧表

調査回数	事業内容	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
SD第24次	臨時交付金事業	西大寺南町 2438-1 他	H20.9.8～11.11	400㎡	松浦・武田



近鉄西大寺駅南土地区画整理事業地内 発掘調査位置図 (1/5,000)

西大寺旧境内の調査 第24次

I はじめに

調査地は、西大寺旧境内の伽藍復原によると、主要伽藍地区東方の寺地部分にあたる。奈良時代後半期に西大寺が創建されるまでは平城京の一般宅地で、平城京条坊復原では右京一条三坊四坪の北東隅部分に該当する。近隣地では数件の調査例があり¹⁾、奈良時代の条坊溝や掘立柱建物等が検出されている。

II 基本層序

基本層序は、造成土の下に黒灰色土（旧耕作土）、明茶灰色土（旧床土）と続き、現地表下0.6～0.7mで、灰褐色粘質細砂、もしくは黄灰色シルトまたは暗茶褐色砂の地山となる。遺構面は地山上面で、その標高は71.5～71.6mである。

III 検出遺構

検出した主要な遺構には、奈良時代後半以降の掘立柱列7条、掘立柱建物4棟、溝4条などがある。以下、遺構の概要を記す。各遺構の詳細は次頁の一覧表を参照。

S D 01 は、発掘区の北辺で検出した東西方向の溝。周辺の調査成果とも併せて考慮すると、一条条間南小路の南側溝とみられる。溝心の位置は、X=-145,006.1 Y=-19,988.0。S D 02 は、発掘区北東部分で検出した南北方向の溝。北端はS D 01 に合流する。南端は発掘区中央付近で途切れている。途切れる直前で深くなる箇所があり、その南側では急に浅くなり、幅も狭まる。S D 03 は、発掘区の南辺中央付近で検出した溝。遺構の様相から見て、東西方向の溝とみられ、発掘区南辺の中央付近で途切れ、西側は発掘区外へと続く。後述のS D 04 より古い。S D 04 は、発掘区中央から南側にかけて検出した南北方向の溝。北端部分は比較的深く、その南側で一度浅くなっている箇所があり、その底で小柱穴を確認した。橋などの施設が存在していた可能性がある。その南側では泥蓋の痕跡があり、部分的に幅が倍程度に広がっているが、発掘区の南端では幅・深さともに北端とほぼ同じ規模となり、発掘区外南へと続く。

S A 05 は発掘区北東隅部分で検出したL字状に屈曲する柱列。柱穴の重複関係から、後述のS A 11 より古い。S A 06 は、発掘区の南側で検出した柱列で、L字状に屈曲し、一部は発掘区外南へ続く。S B 15 よりも古い。S A 07 は、発掘区の中央やや北寄りて検出した掘立柱建物。遺構の重複関係から後述のS B 14 よりも古い。S A 08 は、前述のS D 02 の東側で検出した南北方向の掘立柱列。前述のS D 01 の南から、概ね1.8m等間の柱間で、

発掘区外南へと続く。S A 09 は、前述のS D 04 の東側で検出した掘立柱列。その位置と規模からみて、門の可能性もある。S A 10 は発掘区の南西隅で検出した柱列で、L字状に屈曲し一部は発掘区外南・西へと続く。S A 11 は、発掘区北東部分で検出した掘立柱列。L字状に屈曲し、発掘区外北と東へ続く。なお、上記の掘立柱列のうち、L字を呈するものは建物の一部か、東西・南北部分が別の柱列となる可能性がある。

S B 12 は、発掘区南東隅で検出した南北棟の掘立柱建物。柱間寸法は、梁行・桁行ともに、一尺単位で割り切れない。S B 13 は発掘区西辺の北寄りの部分で検出した東西棟の建物の一部と思われる。西側は発掘区外へと続く。S B 14 は、発掘区中央で検出した総柱の掘立柱建物。東西・南北ともに2間であるが、柱間の全長は南北方向の方が長い。S B 15 は、発掘区の南東隅で検出した東西棟の総柱の掘立柱建物である。

IV 出土遺物

出土遺物は、8世紀後半から9世紀前半にかけての須恵器・土師器および丸・平瓦が主体を占め、製塩土器・線刻土器・甕、軒丸瓦(6304G)・軒平瓦(6663B)・埴、円面硯、土馬、線刻土器「x」・「卍」も出土した。9～10世紀の緑釉陶器、時期不明の輸入陶磁器（華南産）、円盤型土製品などが、遺物整理箱38箱分出土した。

V 調査所見

今回検出したS A 08 は、当坪の東西のほぼ中心付近に位置しており、坪内の区画施設として見なしうる。また、隣接するS D 02-04も同様の役割を果たしていた可能性がある。双方の間には約2.5mの間隔があるので、移動空間である坪内道路の存在が想定できる。さらに、S D 04が一時的に浅くなり橋などの存在が想定される箇所の東側には、2間分の掘立柱列S A 09が位置しており、門の遺構であった可能性もあろう。

S D 02-04 は、出土した遺物の年代からみて、奈良時代後半～末頃を中心に機能していたと考えられる。位置的にS D 04とは併存し得ない総柱建物S B 14は、坪内道路施工以前の時期の遺構とみられる。このほかの遺構の重複関係や配置状況等も勘案すると、発掘区内では少なくとも3時期の遺構変遷が確認できる。

(武田和成・松浦五輪美)

1) 奈良市教育委員会「西大寺旧境内の調査 第14-1-2次」「奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成14年度」2006、同「西大寺旧境内の調査 第16-1-2-3次」「奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成15年度」2007 など。

S D第24次調査 検出遺構一覧表

遺構番号	掘形			主な出土遺物	備考
	平面形	平面規模 (m)	深さ (m)		
S D 01	東西溝	長さ20.0以上×幅0.6～1.6	0.1～0.15	8世紀後半～9世紀前半：土師器・須恵器、軒平瓦 (6663B)・丸瓦・平瓦、土馬	一条桑間南小路南側溝か。
S D 02	南北溝	長さ10.5×幅0.5～1.0	0.1～0.4	8世紀後半～9世紀初頃：土師器・須恵器・製塩土器・甕、丸瓦・平瓦・埴、円盤型土製品	
S D 03	東西溝	長さ4以上×幅0.1～0.25	0.2前後	製塩土器	
S D 04	南北溝	長さ9以上×幅1.0～3.0	0.1～0.4	8世紀後半～9世紀前半：土師器・須恵器・製塩土器・甕、軒丸瓦 (6304G)・丸瓦・平瓦、円面硯・土馬・円盤型土製品	急激に浅くなる陸橋状の箇所あり。幅員は一定でない。

遺構番号	柱列方向	規模 (間)	柱間全長 (m)		柱間寸法 (m)		備考
			東西	南北	東西	南北	
SA 05	東西・南北	2以上×3	東西 3.0～	南北 5.4	1.5等間	1.8等間	柱穴深さ0.3m前後。8世紀の土器が出土。
SA 06	東西・南北	4×1以上	東西 7.8	南北 1.65～	1.8～2.4	1.7	柱穴深さ0.1～0.3m。
SA 07	東西	5以上	10.3～		1.8～2.4		
SA 08	南北	8以上	15.0～		1.5～2.1		柱穴深さ0.2～0.4m。
SA 09	南北	2	3.0		1.5等間		柱穴深さ0.05～0.2m。
SA 10	東西・南北	1以上×2以上	東西 1.5～	南北 3.3～	1.5	1.65等間	柱穴深さ0.15～0.4m。
SA 11	東西・南北	2以上×3	東西 3.9～	南北 4.5	1.95等間	1.5等間	柱穴深さ0.2～0.4m。8世紀末～9世紀初の土器が出土。

遺構番号	棟方向	規模 (桁行×梁行)	桁行全長 (m)	梁行全長 (m)	柱間寸法 (m・桁行×梁行)		備考
					東西	南北	
SB 12	南北	3×2	4.9～5.0	3.3	1.65等間	1.65等間	柱穴深さ0.15～0.4m前後
SB 13	東西	1以上×2	1.5～	3.9	1.5	1.95等間	柱穴深さ0.2～0.3m
SB 14	南北	2×2	4.8	3.6	2.4等間	1.8等間	総柱建物。柱穴深さ0.3～0.4m。8世紀中～後半の土器が出土。
SB 15	東西	3×2	5.6	3.0	1.65～1.95	1.5等間	総柱建物か。柱穴深さ0.05～0.2m。8世紀末の土器が出土。



発掘区北東部 (拡張部分・北から)



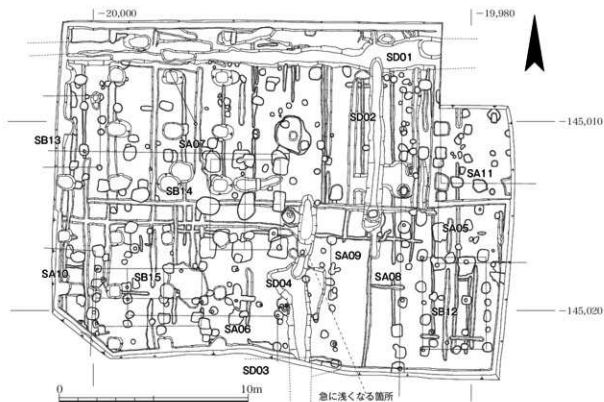
発掘区南半部中央 (北から)



S D 01 (東から)



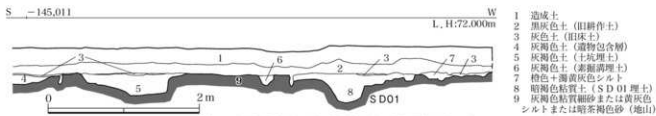
発掘区南東部 SB 12ほか (南から)



S D 第 24 次調査発掘区 遺構平面図 (1/200)



S D 第 24 次調査発掘区 垂直モザイク写真 (北東部拡張部分を除く・上から)



S D 第 24 次調査発掘区 西壁 (北平部分) 土層断面図 (1/50)

- 1 造成土
- 2 黒灰色土 (旧耕作土)
- 3 灰色土 (旧床土)
- 4 灰褐色土 (遺物包含層)
- 5 灰褐色土 (土坑埋土)
- 6 灰褐色土 (素掘溝埋土)
- 7 棕色+濁黄灰色シルト
- 8 暗褐色粘質土 (S D 01 埋土)
- 9 灰褐色粘質細砂または黄灰色シルトまたは暗茶褐色砂 (地山)

3. 平城京跡（左京六条二坊一・二坪）の調査 第602次

事業名	店舗新築	調査期間	平成20年4月3日～4月18日
届出者名	豊田通商株式会社	調査面積	160.5㎡
調査地	奈良市八条町363番1他	調査担当者	原田憲二郎

I はじめに

本調査は店舗新築に伴い設けられる防火水槽と消防用水槽の設置箇所に、合計160.5㎡の発掘区を設定して行った。北側の防火水槽設置箇所を北発掘区、南側の消防用水槽設置箇所を南発掘区と呼称する。平城京の条坊復原によると、北発掘区が左京六条二坊一坪の南東隅に、南発掘区が左京六条二坊二坪の中央部に相当する。

左京六条二坊一坪内では平成7年度に坪中央部で試掘調査が行われており、奈良時代の土坑が1基確認されている（市試掘95-3）。左京六条二坊二坪内では昭和63年度に坪南西部で発掘調査が行われ、奈良時代の掘立柱建物2棟、掘立柱列1条、溝1条の他、古墳時代前期の河川1条が検出されている（市HJ第163次調査）。平成6年度にも坪北西隅で試掘調査が実施され、奈良時代の溝が1条確認されている（市試掘94-24）。本調査は左京六条二坊一・二坪宅地内の利用状況の解明を主たる目的として実施した。

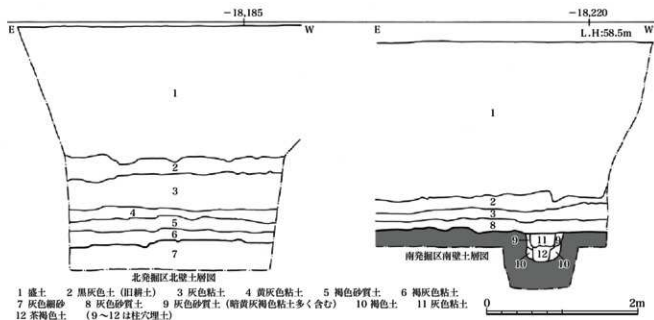
II 基本層序

北発掘区内の基本層序は厚さ約1.8mの盛土の下に、黒灰色土（旧耕土）、灰色粘土、黄灰色粘土、褐色砂質土、褐灰色粘土と続き、現地表面から約2.9mの深さで河川埋土と考えられる灰色細砂層に達する。北発掘区全体が

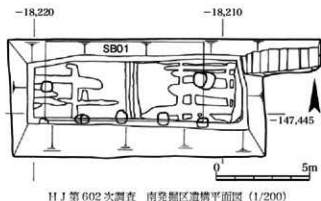


H J 第602次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

この河川内であることが判明した。灰色細砂層上面の標高は概ね55.6mである。灰色細砂層上面(標高約55.6m)で遺構検出作業を行ったが、遺構は無かった。河川の深さや、時期を特定できる遺物の確認を目的として、灰色細砂層の掘り下げを行った。河川埋土は部分的に灰色粗砂、明灰色粘砂、植物遺体を多く含む暗茶褐色粘砂を挟むことを確認したが、約2m掘り下げたところで湧水が激しくなり、危険であると判断し、それ以上の掘り下げは断念した。よって、河川の深さは確認できず、遺物も出土しなかったため河川の時期も不明である。ただし灰色細砂層の上に堆積する褐灰色粘土層からは、8世紀末頃から9世紀初めにかけての黒色土器A類が出土してお



H J 第602次調査 発掘区土層図 (1/50)



H J 第 602 次調査 南発掘区遺構平面図 (1/200)

り、この頃までには埋没していたものと理解できる。

南発掘区内の基本層序は厚さ約 2.1 m の盛土の下、黒灰色土 (旧耕土)、灰色粘土、灰色砂質土と続き、現地表下約 2.5 m で、暗茶褐色砂質土の地山となる。奈良時代の遺構は暗茶褐色砂質土の上面で検出した。その標高は概ね 55.7 m である。

Ⅲ 検出遺構

検出した遺構には、南発掘区で確認した奈良時代の独立柱建物 1 棟がある。建物 SB01 は桁行 4 間 (8.4 m)、梁行 2 間 (4.2 m) の東西棟独立柱建物と推定できる。柱間は桁行・梁行ともに 2.1 m 等間である。柱穴の深さは南側柱列が深さ約 0.5 m、妻柱が東西共に深さ約 0.3 m で南側柱列に比べて妻柱が浅い。南側柱列の柱抜き取り穴から、8 世紀末頃の土器が出土した。

Ⅳ 出土遺物

遺物整理箱 2 箱分の遺物が出土した。出土遺物には奈良時代から平安時代初めにかけての土器 308 点・須恵器 132 点・黒色土器 A 類 1 点・丸瓦 2 点・平瓦 62 点がある。出土遺物の大半は、南発掘区の地山直上にある灰色砂質土層から出土した。

Ⅴ 調査所見

北発掘区で確認した河川について述べる。周辺の現況では、北発掘区東側 5 m 程のところ、大門川が南北方向に流れ、その東約 100 m には菰川が北西から南東方向に流れている。この現況から北発掘区で検出した河川は、大門川旧流路とみることもできる。

しかし、明治 18 年に帝国陸軍参謀本部陸地測量部が作成した地図を見ると、菰川は南東方向に流れておらず、南方向に流れ、まさに大門川的位置にあったことがわかる。昭和 21 年に米軍により撮影された空撮写真による河川的位置関係は現況と同じであることから、明治 18 年から昭和 21 年までの間に菰川が現在のように東側へ付け替えられたものと理解できる。以上のことから北発掘区で

確認できた河川は菰川旧流路の可能性が指摘できる。

奈良時代の菰川については、平城京造営時に条坊道路に沿って付け替えられた人工河川と考え、本調査地の位置する六条では、一坪東にある東二坊坊間路西側溝西側附近に想定する説¹⁾と、四条以南については条坊道路に沿うような付け替えが行われておらず、現在の菰川的位置とほとんど変わっていないとみる説²⁾がある。今回の調査では菰川旧流路とみられる河川を確認したものの、河川から遺物が出土せず、奈良時代の河川か、それ以前のものかは特定できなかった。今後周辺の調査によって、今回確認した河川が機能した時期を明らかにするとともに、奈良時代の河川であったなら、上記の問題も検討していく必要がある。(原田 憲二郎)

- 1) 岸俊男「遺存地割・地名による平城京の復原調査」『平城京朱雀大路発掘調査報告』1974
奈良国立文化財研究所『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』1995
奈良市教育委員会『平城京条坊復元図』
- 2) 奈良県立橿原考古学研究所「平城京左京五条二坊五坪(菰川旧流路)」『奈良県道跡調査概報』第一分冊 2006
近江俊秀「第 7 章総括第 2 節東一坊坊間路と三条大路の交差点の形状について」『平城京左京三条一坊五・十二・十三坪発掘調査報告書』奈良県立橿原考古学研究所 2008



北発掘区全景 (南から)



南発掘区全景 (西から)

4. 平城京跡（左京三条四坊三坪）の調査 第603次

事業名	共同住宅新築	調査期間	平成20年4月7日～4月30日
届出者名	個人	調査面積	119㎡
調査地	奈良市大宮町三丁目205-13	調査担当者	大原 暲

I はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京三条四坊三坪の東辺部南寄りに相当する。三坪内の調査例には、西側に隣接する国第138次、市試掘2001-2、県2005の各調査があり、奈良時代の掘立柱建物・柱列・土坑および中世以降の旧河川が確認されている¹⁾。国第138次調査では北と南に廂を持つ両面廂付東西棟建物が発掘区外東へ続く形で検出されており、今回はこの続きの検出が予測できた。これらの調査成果を踏まえ、三坪内の土地利用の様相把握を主目的として当初、88㎡の発掘区を設定した。その後、遺構の平面的な広がりを確認する目的で、発掘区の北側(20㎡)と北西側(11㎡)に拡張区を設け、合計119㎡の調査を実施した。

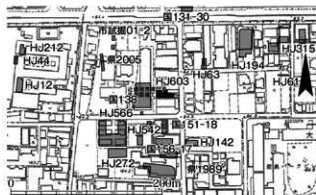
II 基本層序

発掘区内の基本的な層序は、上から造成土、耕作土である黒灰色土・灰色土・淡灰色土、黄褐色粘質土、緑灰色粘質土と続いて、現地表面下1.1～1.3mで黄灰色粘質土の地山となる。地山面は西から東へ緩やかに下がっており、その標高は63.1～63.3mである。遺構検出は地山上面で行った。

III 検出遺構

奈良～平安時代の掘立柱建物3棟(SB01～03)、掘立柱柱列2条(SA04～05)、溝2条(SD06・07)、14～15世紀の素掘溝がある。各遺構の概要は一覧表にまとめた通りで、以下、主要な遺構について述べる。

SB03は発掘区西端で検出した。検出したのは南北2間の掘立柱列であるが、発掘区外西側に隣接する国第138次調査で検出した両面廂付東西棟建物(SB03)の



HJ第603次調査 発掘区位置図(1/5,000)

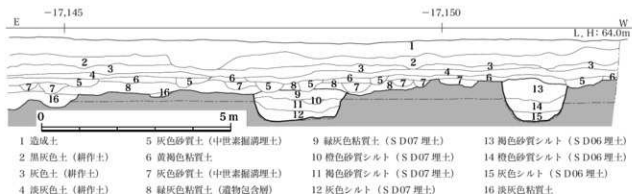
柱筋及び柱間が一致していることから、この東妻柱列にあたるものとする。SB03の復元できる建物の規模は、桁行7間(21.0m)、梁行2間(6.0m)となり、建物の東西中軸ラインは坪内の概ね東西1/3にあたる。

SD06・07は発掘区西側で検出した2条の南北溝である。溝底は全体的に北から南へ排水するよう勾配を下げている。両溝間の空閑地が坪内の東西1/4ラインにあたることから、SD06を西側溝、SD07を東側溝とする坪内道路の存在が想定できる。両側溝の心々間距離は3.0～3.3mである。出土遺物から、埋没時期はいずれも8世紀末頃である。

遺構の構築順序については、重複関係からSB01→SD07と分かり、SD06とSB03は近接していることから、同時併存とは考えにくい。したがって少なくとも2時期以上の変遷がうかがえる。

IV 出土遺物

今回の調査では遺物整理箱2箱分の遺物が出土した。8～9世紀の土師器・須恵器・黒色土器A類・製塩土器・



- | | | | |
|-------------|-----------------|--------------------|--------------------|
| 1 造成土 | 5 灰色砂質土(中世素掘埋土) | 9 緑灰色粘質土(SD07埋土) | 13 褐色粘質シルト(SD06埋土) |
| 2 黒灰色土(耕作土) | 6 黄褐色粘質土 | 10 橙色砂質シルト(SD07埋土) | 14 橙色砂質シルト(SD06埋土) |
| 3 灰色土(耕作土) | 7 灰色砂質土(中世素掘埋土) | 11 褐色粘質シルト(SD07埋土) | 15 灰色シルト(SD06埋土) |
| 4 淡灰色土(耕作土) | 8 緑灰色粘質土(遺物包含層) | 12 灰色シルト(SD07埋土) | 16 灰褐色粘質土 |

HJ第603次調査 発掘区南壁土層図(1/100)

緑軸軒丸瓦 (6151 型式)・丸瓦・平瓦、14～15 世紀の土師器皿、17～18 世紀の国産陶器 (唐津)、時期不明のサヌカイト剥片がある。遺物の大半は S D 06・07 から出土し、その内容は一覧表にまとめた。

V 調査所見

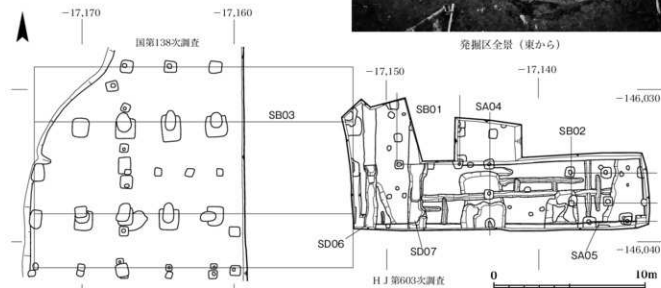
今回の調査では、三坪内を坪内道路によって分割して宅地利用していることが判明し、国第 138 次調査で検出した両面廂付東西棟建物 (S B 03) の規模が確定した。

(大原 隆)

- 1) 奈良国立文化財研究所『左京三条四坊三坪の調査 第 138 次』、『昭和 56 年度平城宮跡発掘調査部概報』1982
奈良県立橿原考古学研究所『平城京左京三条四坊十四坪』、『奈良県遺跡調査概報 2005 年』(第 1 分冊) 2006 (※正しくは三坪)
奈良市教育委員会『4. 試掘調査・確認調査』、『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 13 年度』2004



発掘区全景 (東から)



H J 第 603 次・国第 138 次調査 遺構平面図 (1/250)

H J 第 603 次調査 検出遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規模		桁行全長 (m)	梁行全長 (m)	柱間寸法 (m)			備 考
		桁行×梁行	深さ (m)			桁行	梁行	雨の出	
S B 01	南北	2 以上×2	4.4 以上	4.0	南から 2.1 -2.3	2.0 等間	-	-	柱穴の深さ 0.15～0.4 m。発掘区外北へ続く南北棟建物。重複関係から S D 07 より古い。
S B 02	東西	2 以上 ×1 以上	4.8 以上	不明	2.4 等間	不明	2.0	-	柱穴の深さ 0.15～0.5 m。発掘区外北東へ続く南廂付東西棟建物の可能性。
S B 03	東西	7×2	21.0	6.0	3.0 等間	3.0 等間	3.0	-	柱穴の深さ 0.8～1.0 m。検出したのは南北 2 間の孤立柱列。発掘区外西へ続く両面廂付東西棟建物 (国 138 次調査 S B 03) の東妻柱列にあたる。掲載した建物の規模は復原長である。
S A 04	南北	3 以上	5.8 以上			1.95 等間	-	-	柱穴の深さ 0.15～0.3 m。発掘区外北・南へ続く南北孤立柱列。
S A 05	不明	1 以上	2.35			2.35	-	-	柱穴の深さ 0.25～0.45 m。柱列としたが、発掘区外南東に続く孤立柱建物になる可能性もあり。

遺構番号	掘 形			主な出土遺物	備 考
	平面形等	平面規模 (m)	深さ (m)		
S D 06	南北溝	長さ 8.3 以上 × 幅 0.65～0.9	0.5	8 世紀末：土師器杯 A・皿・椀 A・甕、須恵器杯・甕・壺、丸瓦・平瓦	坪内道路西側溝。溝心の国土座標値は、X=-146,037,000、Y=-17,151,005。
S D 07	南北溝	長さ 7.0 以上 × 幅 0.9～1.3	0.4	8 世紀末：土師器杯 A・椀 A・皿 A・高杯・甕、須恵器杯 A・B・杯蓋・甕・壺、緑軸軒丸瓦 (6151 型式)・丸瓦・平瓦	坪内道路東側溝。溝心の国土座標値は、X=-146,037,000、Y=-17,148,010。重複関係から S B 01 より新しい。

5. 平城京跡（左京三条五坊四坪）の調査 第604次

事業名	ホテル新築	調査期間	平成20年4月7日～5月19日
届出者名	グローバンス・アールイー株式会社	調査面積	470㎡
調査地	奈良市大宮町一丁目52-15他	調査担当者	池田裕英

I はじめに

調査地は、平城京の条坊復原によると左京三条五坊四坪の南東隅部にあたり、敷地の南端部に三条大路とその北側溝がかかると想定される場所である。この四坪内ではこれまでに市HJ第54次調査¹⁾、第84次調査²⁾、国第141-7次調査³⁾が行われており、三条条間南小路や奈良時代の掘立柱建物、柱列が検出されている。それらの調査の結果をみると、この四坪は概して遺構密度は低い。本調査は発掘区南端部に想定される三条大路とその北側溝の検出、坪内の様相の把握を目的として実施した。調査は敷地の関係から北発掘区と南発掘区の2回に分けて行うこととなった。

II 基本層序

発掘区内の層序は、北半では造成土の下に旧耕作土（土層図2～4）、茶褐色土（6）と続き、現地地表約1.1mで茶褐色粘土（14）もしくは茶黄色礫土の地山にいたる。発掘区北端では、茶褐色土の下に灰茶色粘質土（10）、暗黄灰色砂質土（12）が堆積している。南半は造成土が厚く盛られており、現地地表約1.3mで地山上面にいたる。遺構はすべて地山上面で検出したが、南半は以前に建てられていた建物の基礎等で遺構面が壊されている部分が多い。地山上面の標高は64.2～64.3mである。この地山上面の標高は周辺の調査例と比べて大差はない。

III 検出遺構

検出した遺構には奈良時代以前の溝・土坑、奈良時代の土坑、鎌倉時代の粘土探掘坑、時期不明の掘立柱建物がある。

奈良時代以前の遺構 溝と土坑を検出した。S D 01は

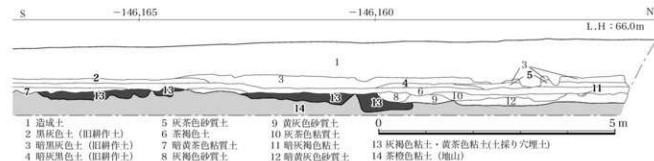


H J 第604次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

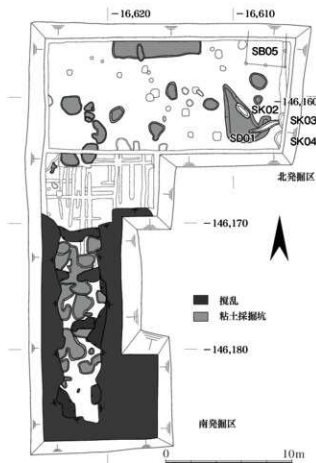
幅0.2～0.3m、深さ0.2mの北東-西南方向の溝で、長さ1.2m分を検出した。溝底はほぼ平坦で、流れの方向は不明である。出土遺物がなく詳しい時期は不明であるが、重複関係から後述する奈良時代の土坑S K 03よりも古く、奈良時代以前の遺構である可能性が考えられる。S K 02は粘土探掘坑を完掘した後に検出した土坑である。遺物が出土しなかったため時期は不明であるが、埋土が暗灰茶色土で、周辺の調査例から、古墳時代以前の遺構である可能性が考えられる。

奈良時代の遺構 土坑2基を検出した。S K 03は東西0.6m以上、南北1.6m、深さ0.3m、S K 04は東西0.5m以上、南北1.5m以上、深さ0.1mの土坑である。いずれの土坑からも奈良時代の土器が出土したが、小片のため詳細な時期は不明である。

鎌倉時代の遺構 発掘区全面にわたって粘土探掘坑がある。地山の黄灰色粘土の部分を開削しており、礫土や砂層に至ると掘削をやめている。発掘区北半部では単独で存在するものが多いが、南半部では重複し重なった形



H J 第604次調査 北発掘区西壁土層図 (1/80)



H J 第 604 次調査 発掘区遺構平面図 (1/300)

状をしている。平面は不整形で、深さは0.1～0.4mである。埋土から13世紀前半の土師器、瓦器が出土したものがあり、これらの遺構はその頃のものと考えられる。南半部のものに重複関係があることから、ある程度の期間にわたって粘土が採掘されていたと思われるが、出土遺物からそれがどれくらいの時間幅であったのかわからない。

時期不明の遺構 北発掘区北東隅で掘立柱建物 S B 05を検出した。南北棟の建物と考えられ、柱間は桁行1.4m、梁間1.5m等間である。柱掘形は径約0.3mの円形で、径0.2mの断面円形の柱が残っていた。遺物が出土しなかったため時期は不明であるが、中世以降の掘立柱建物ではないと思われる。

IV 出土遺物

遺物整理箱に5箱分が出土した。出土した遺物には8～9世紀の土師器・須恵器、13世紀の土師器・瓦器、18～19世紀の土師器・陶器・磁器がある。8～9世紀の土師器の多くは包含層から、18～19世紀の土器は水田耕作に伴うとみられる素掘溝から出土した。13世紀の土師器・瓦器は粘土採掘坑からの出土である。

V 調査所見

発掘区南端部が以前の建物の基礎で壊されており、本調査の主目的であった三条大路とその北側溝は検出することができなかった。また、奈良時代の遺構は、粘土採掘坑で壊されている可能性はあるものの非常に希薄である。周辺の調査での遺構検出面の標高を比べても大きな差はないが、S B 05の柱穴を断ち割ったところ、深さ0.1m程度しか残っておらず、遺構面が削平されていることは確実であろう。しかし、奈良時代の全ての遺構が削平されたとは考えがたいので、奈良時代には建物等の密度が低い場所であったと考えられる。その後、鎌倉時代になると、良好な粘土が採れる場所であったためか、粘土採掘地として利用されたが、それ以降は水田化していったものと思われる。(池田裕英)

- 1) 奈良市教育委員会「14.平城京左京三条五坊四坪の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和58年度』昭和59年
- 2) 奈良市教育委員会「21.平城京左京(外京)三条五坊四坪の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和59年度』昭和60年
- 3) 奈良国立文化財研究所「8 左京(外京)三条五坊四坪の調査第141-7次」『昭和57年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1983



北発掘区全景(東から)



南発掘区全景(北から)

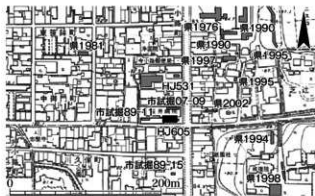
6. 平城京跡 (左京二条七坊十五坪)・奈良町遺跡の調査 第605次

事業名	共同住宅新築	調査期間	平成20年5月8日～6月26日
届出者名	株式会社 日本エスコ	調査面積	144㎡
調査地	奈良市今小路町1-1他14筆	調査担当者	中島和彦 大原 颯

I はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京二条七坊十五坪の東南隅にあたり、東七坊大路と二条条間路の交差点の北西側にある。また所在地の町名の「今小路」の名は平安時代後半から「今小路郷」として史料に現れ、現在に至っている。調査地の北約50mの市HJ第531次調査では8世紀後半から19世紀中頃までの各時期の遺構が多数見つかっており、特に13世紀以降に遺構・遺物が増加していることが判明している。また調査地内の西約20mの位置で行った市試掘89-11次調査では、10世紀前半の井戸が見つかった。

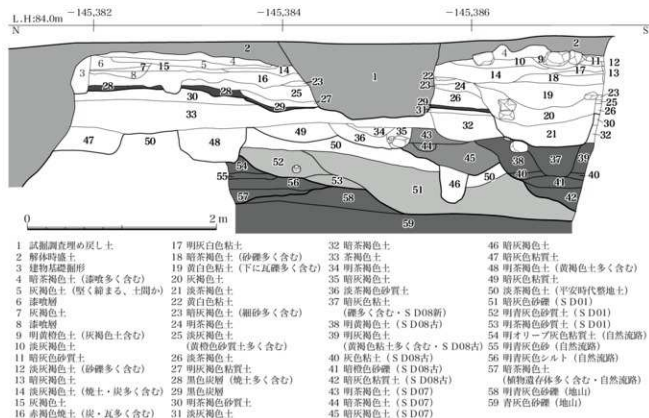
調査地内には、以前に鉄筋コンクリート造りの病院建物が建ち、この建物基礎により遺構面が破壊されていると考えられたことから、事前に試掘調査(市試掘07-09次調査)を行い遺構面の残存状況を確認した。敷地東側に試掘トレンチを南北に2本設定し調査した結果、旧建物部分はすべて基礎掘削・除去工事によって遺構面が破



H J 第605次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

壊されており、敷地東南隅の旧駐車場部分のみに遺構面が残っていることが確認された。したがってこの旧駐車場部分に発掘区を設定し調査を行った。

周辺の発掘調査例から、今回の調査地も各時代の遺構が高密度に重層的に遺存すると考えられ、平城京の条坊遺構の有無の確認、中世以降の宅地内の利用状況の解明を目的として調査を行った。



H J 第605次調査 発掘区東壁土層図 (1/40)

II 基本層序

発掘区内の層序は、多くの層が重複し複雑であるが、発掘区東端では上から大きく、病院解体後の造成土(2)、近代以降の造成土(4)、江戸時代前半～後半の各時期の整地層(5、6、10、11、14～18、22～29)、江戸時代初頭の整地層(30・31・33)、平安時代前半～中頃の遺物包含層(50)で、現地表下約1.7mで奈良時代の遺構面の明オリーブ灰色粘質土の自然流路の上面(54)となる。なお平安時代前半～中頃の遺物包含層は発掘区西北部には存在せず、江戸時代初頭の整地層の下で地山となる。さらに発掘区西側では、後述する18世紀前半の大規模な塵芥処理土坑があり、土坑埋立後の整地土が存在する。

地山面の標高は東端で82.6m、西端で82.3mである。

遺構検出は、地山上面または平安時代前半～中頃の遺物包含層上面と、江戸時代初頭の整地層上面とで2回行い、前者では奈良～室町時代の、後者では江戸時代の遺構を検出した。

III 検出遺構

奈良～江戸時代までの各時代の遺構が大小約250基ある。主要遺構については遺構一覧表に詳細を記し、各時代ごとに遺構を概観する。

奈良～平安時代前半の遺構

東西溝が1条(SD 01)、土坑が1基(SK 02)ある。

SD 01は北岸のみ確認し、南岸は発掘区外の南側にあり全容は不明。深さは西端で約0.6m、東端で約0.7mであるが、地形が西側に下降しており、溝底の標高は西側が約0.2m低い。溝の埋土は下層から中層にかけては橙色系の砂礫、上層は茶灰色系のシルト層である。出土



発掘区全景(奈良時代 東から)



発掘区全景(鎌倉～室町時代 西から)



発掘区全景(鎌倉～室町時代 東から)

遺物から10世紀前半頃には埋没することがわかる。

S D 01の北岸の国土座標はX=-145384.20で、東大寺西面中門心の国土座標X=-145393.52と比べると、その北側約9.3mの位置にあることがわかる。中門正面の二条条間路は、過去の発掘調査で幅が溝心々間で約16mと確認されており、S D 01はほぼ二条条間路の北側溝の位置にあることがわかる。しかしながら、溝の南岸が不明のため、S D 01は北側溝そのもの、または溝状に切り下げられた二条条間路自体の北岸になることの2つの可能性が考えられる。いずれにして、条坊検出例が少ない外京域においては貴重な確認例となる。

土坑S K 02は、S D 01埋没後に掘られた10世紀前半の遺構で、溝の埋没時期の下限を示す。

平安時代後半～鎌倉時代の遺構

井戸2基(S E 03・04)、土坑、小柱穴多数がある。S E 03は井戸枠が抜き取られ、底の集水施設である曲物が1段分残存する。12世紀前半のもの。S E 04は深さ約1.95mの井戸で、石組みと横板組とを組み合わせた井戸である。井戸の構造はまず井戸底に曲物を1段据え、その上面の周囲に人頭大の石を敷く。その上に内法一辺が約0.9mの方形石組みの井戸枠を高さ約0.65m分築き、さらにその上に同規模の方形縦板組横残りの木製井戸枠を設ける。木製井戸枠は高さが0.9mで、上半部は腐朽し失われ、下半部だけが残る。その上に方形石組みの井戸枠を設置する。石組みは西辺と南辺の一部が残存するのみであり、規模等は不明で、高さは約0.3m分が残

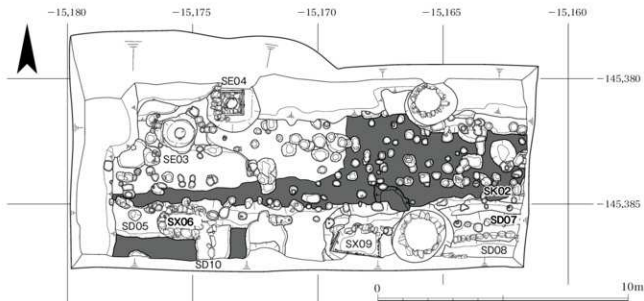
H J 第605次調査 検出遺構一覧表(1)

遺構番号	平面形等	平面規模(m)	深さ(m)	時期	主要出土遺物	備 考
S D 01	東西方向	幅3.5以上・ 長さ17以上	1.5以上	8～10世紀 前半	土師器杯・皿・高杯・甕・羽釜・甕、須恵器杯・杯蓋・壺・横瓶・甕、黒色土器A類杯・B類皿・壺、 軒平瓦(6732H)、丸瓦、平瓦、銅平瓦	二条条間路または北側溝
S K 02	隅丸方形	一辺0.5	0.3	10世紀前半	土師器皿・羽釜、黒色土器A類杯・B類皿、丸瓦、平瓦	重複関係からSD01より新
S D 05	東西方向	幅1.2～1.8・ 長さ9.0以上	0.2～0.5	16世紀後半	土師器皿・羽釜、瓦質土師器鉢・控鉢・浅鉢・深鉢・ 方形浅鉢・羽釜、国産陶器(常滑産壺、瀬戸美濃産壺・ 皿・大皿、備前産壺・肥前産壺・壺、信楽産壺・ 鉢・甕、肥前産壺・皿・壺)、輸入陶磁器(青磁碗、 白磁皿、青白磁皿)、軒平瓦(右巻巴紋(中世))、軒 平瓦(唐草紋(室町・江戸))、羽白丸瓦、丸瓦、平瓦、 銅銭2(朝聖元寶1,判読不能1)、鉄釘1、鉄平、磁石1	重複関係からS X 06、S D 09と同 時期。
S D 07	東西方向	幅0.5・ 長さ3.2以上	0.5	16世紀後半	土師器皿・羽釜、瓦質土師器鉢・控鉢・浅鉢・深鉢・ 方形浅鉢・蓋、国産陶器(常滑産壺、瀬戸美濃産壺・ 皿・大皿、備前産壺・信楽産壺鉢)、輸入陶磁器(青 磁皿)、軒平瓦(大寺大)文字紋、右巻巴紋(中世)、 型式不明)、丸瓦、平瓦、鉄釘2	重複関係からS D 08、S E 12よりも 古。
S D 08	東西方向	幅0.6・ 長さ3.2以上・ 新 長さ3.2以上	0.3 0.7以上	16世紀後半	土師器皿・羽釜、瓦質土師器鉢・深鉢・蓋、国産陶器 (常滑産壺、瀬戸美濃産壺・信楽産壺鉢・壺)、輸入陶 磁器(青磁碗、青花皿)、丸瓦、平瓦、鉄平、用途不明 石製品	重複関係からS E 12よりも古、S D 07より新。新旧2時期あり。新は 北岸を石組みで覆岸する。石組み は一段分残る。
S D 09	南北方向	幅0.6・ 長さ1.3以上	0.2	16世紀後半	土師器皿、瓦質土師器鉢類、国産陶器(信楽産壺鉢)、 丸瓦、平瓦	西岸を石組みで覆岸する。 石組みは一段分残る。
S D 13	南北方向	幅0.2・ 長さ4.6以上	0.4	17世紀 前半?		重複関係からS D 14より古。東西 両岸を石組みで覆岸する。石組み は南側約1.5m分が一段分残る。
S D 14	南北方向	幅0.15～0.2・ 長さ3.5以上	0.2	17世紀 中頃?	土師器皿・甕釜、瓦質土師器鉢類、国産陶器(肥前産壺 皿・壺)、丸瓦、平瓦、碓石2、鉄釘1	重複関係からS D 13、S E 12より 新。S K 17と同時期。東西両岸を石 組みで覆岸する。石組みは一段分 残る。南側へ排水する。
S D 15	不整形円形	東西2.3・ 南北2.2	0.3～0.4	17世紀 中頃?	土師器皿・羽釜・甕、瓦質土師器鉢・深鉢・小型羽釜 ・鉢類、国産陶器(肥前産壺、瀬戸美濃産壺、信楽産 壺、丹波産壺鉢)、軒平瓦(右巻巴紋(中世))、軒平 瓦(型式不明)丸瓦、平瓦、備前口、碓石3、用途不 明石製品1	重複関係からS D 14、S X 16と同 時期。東南部に石組みが一部残る が、全周では不明。底は南半 部が一段深い。
S X 16	南北方向	東西0.2・ 南北0.8	0.2	17世紀 中頃?	土師器皿・羽釜、瓦質土師器深鉢、国産陶器(瀬戸美濃 産壺)、丸瓦、平瓦	重複関係からS K 17と同時期。丸 瓦を利用した船形遺構。丸瓦を2 枚合わせた円筒状にし、玉縁部を南 に向く南北に2本埋めする。丸瓦 周辺には石を充填する。
S K 17	不整形長方形	東西6.8以上・ 南北4.6以上	0.5～0.8	18世紀前半	土師器皿・碓石・鉢、瓦質土師器鉢・浅鉢・壺・風車 ・国産陶器(肥前産壺・皿・鉢、瀬戸美濃産壺、信楽産 壺鉢・壺、備前産壺、産地不明壺、肥前産壺・壺)、 国産磁器(肥前産壺・皿・仏飯器・甕)、軒平瓦(右巻 巴紋(室町))、軒平瓦(唐草紋(室町))、軒平瓦 (唐草紋)、留蓋瓦、丸瓦、平瓦、浅瓦、陶瓦瓦、鉄釘 1(寛永通寶)、鉄釘21、壁土、石礎、碓石2、貝殻	大量の瓦を廃棄した唐草処理用の 土坑。北平均1.8m分が約0.3m 深い。
S K 18	隅丸長方形	東西1.2・ 南北1.6	0.4	18世紀後半	土師器皿・碓石、瓦質土師器深鉢・壺・行灯・鉢類、国 産陶器(肥前産壺・皿、備前産壺、信楽産壺鉢・壺、 産地不明壺)、国産磁器(肥前産壺・皿・壺)、輸入陶 磁器(青花皿)、丸瓦、平瓦、浅瓦、鉄釘1(判読不能) 鉄釘3、碓石2、軒石1	重複関係からS X 20よりも新。

存する。13世紀前半のもので、完形品を多く含む土器が遺物整理箱2箱、瓦類が4箱、木製品他が出土した。また径約4.5cm、長さ約22.0cmの竹筒が出土し、中には柿

渋が入っていた。柿渋の容器と考えられる。

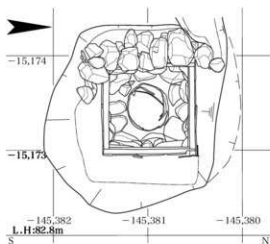
小柱穴は多数検出しているが、建物としてまとめられなかった。12世紀以降の土器が出土するものが多い。後



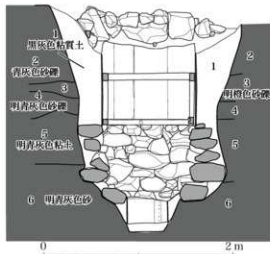
HJ第605次調査 鎌倉・室町時代 遺構平面図 (1/150・網かけ部はSD01と平安時代前半の遺物包含層)



SE 04 上部石組み全景 (東から)



SE 04 下部井戸枠全景 (東から)



HJ第605次調査 井戸SE04 平面・立面図 (1/40)

述するSD 05 以南は、遺構面上が堅くしまっており、小柱穴も分布しないことから、二条条間路埋没後も引き続き道路として利用されていたことが考えられる。

室町時代の遺構

東西溝3条(SD 05・07・08)、南北溝1条、(SD 10)、長方形石組遺構等(SX 06・09)、小柱穴多数がある。

東西溝SD 05 と 07 は、後世の井戸SE 12 をはさみ東西一直線上にある溝で、規模と出土遺物等から本来は一連の東西溝だったと考えられる。溝底のレベルは東側の方が約0.3 m高い。またSD 05 は、SX 09 近くでは道路側に溢れ幅をやや増しており、この部分を上層とし遺物を取り上げた。SD 05 の途中には、石組遺構SX 06 があり、重複関係から同時期のものである。石組は高さ3段分(約0.5 m)残り、SD 05 の溝底からは約0.3 m深い。溝の途中の集水橋のような性格であろうか。SX 06 の東側には、SD 05 に取り付く南北溝SD 10 が

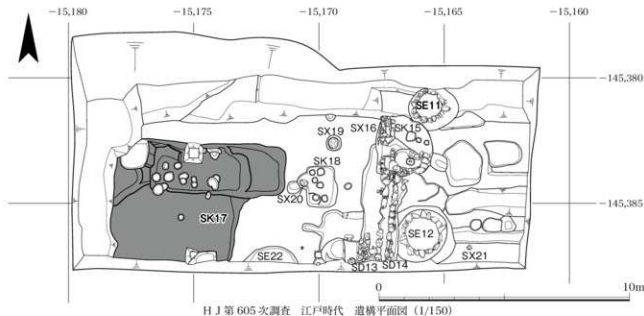
ある。SD 10 は、西岸のみ石組が1段分ある。溝底はSD 05 より0.1 mほど浅い。

東側のSD 07 は、北側の約1.5 m分を埋め立ててSD 08 に作り替えられる。SD 08 は素掘りの時期と北岸を石組みで護岸する時期の新旧2時期ある。石組は高さ1段分(約0.1 m)が残り、発掘区南壁部分にも一部石組みが確認出来るが、SD 08 南岸の石組になるかは不明。SE 12 をはさんで西側にあるSX 09 は、位置と北岸の石組の状況から見て、SD 08 に伴うものと考えられる。SX 09 以西には、新たな溝がないことから、引き続きSD 05 が利用されていたと考えられる。

これら東西溝以南は、遺構分布からみて引き続き道路として利用されていたと見られる。この場合、SX 09 以東の宅地部分が、約1.5 m分道路側に拡張されたことがわかる。これらの遺構は出土土器から16世紀後半の時期である。

HJ 第605次調査 検出遺構一覧表(2)

遺構番号	掘形			枠			時期	主要出土遺物	備考
	平面形	平面規模(m)	深さ(m)	構造	内法(m)	遮蓋装置等			
SE 03	不整楕円形	短径 1.4・ 長径 1.5	0.8			曲物 (径0.42m・ 高さ0.18m)	12世紀 前半	土師器皿・羽釜・瓦器輪・皿、須恵器(東器系)鉢・壺、東海陶器壺・壺、輸入陶磁器(青磁碗(越前系系))、軒丸瓦(6235Ma)、軒平瓦(興隆寺庫平B13)、丸瓦、平瓦、鉄釘、箸	
SE 04	不整形	東西 1.6× 南北 1.6	1.95	上段 方形石組 中段 方形縦板 組横板留 下段 方形石組	南北 7.5 以上 東西不明 一边 0.75	曲物 (径0.35m・ 高さ0.24m)	13世紀 前半	土師器皿・椀・羽釜・瓦器輪・皿、瓦質土器鉢・皿、須恵器(東器系)鉢・壺、東海陶器壺、輸入陶磁器(白磁碗)、軒丸瓦(6235G、型式不明)、軒平瓦(6732Fa)類平瓦以上、丸瓦、平瓦、鉄釘、竹筒(橋梁入)、曲物、箸、用途不明木製品、物種	
SX 06	隅丸長方形	東西 1.7× 南北 1.4	0.55	長方形石組	東西 1.2× 南北 0.65		16世紀 後半	土師器皿・羽釜、瓦質土器鉢鉢・壺・鉢・浅鉢・深鉢・方形浅鉢・蓋・羽釜・壺、東海陶器(常滑産壺、瀬戸美濃産壺、備前産壺、信楽産壺・壺)、輸入陶磁器(青磁碗、白磁皿、青花皿)、丸瓦、平瓦	重複関係からSD 05と同時期。
SX 09	不整形	東西 2.6× 南北 2.2 以上	0.9	長方形 横板組と石組	東西 1.6~1.8 × 南北 0.8~0.9		16世紀 後半	土師器皿・羽釜、瓦質土器鉢鉢・壺・鉢・浅鉢・深鉢・方形浅鉢・蓋・羽釜・壺、東海陶器(常滑産壺、瀬戸美濃産壺、備前産壺、信楽産壺・壺)、輸入陶磁器(青磁碗・皿)、白磁皿、青花皿、皿)、軒丸瓦(聖大寺、文字紋)、軒平瓦(文字紋(鎌倉))、類平瓦、丸瓦、平瓦、鉄釘1、壁土、石F11、碓石2、曲物底板1、棟石	重複関係からSE 12より古。
SE 11	楕円形	東西 2.0× 南北 1.7	2.3 以上	円形石組	径 0.9~1.0		17世紀 前半	土師器皿・羽釜、瓦質土器鉢鉢・壺・鉢・浅鉢・深鉢・方形浅鉢・蓋・羽釜・壺、東海陶器(常滑産壺、瀬戸美濃産壺、備前産壺、信楽産壺・壺)、輸入陶磁器(青磁碗・皿)、白磁皿、青花皿、皿)、軒丸瓦(聖大寺、文字紋)、軒平瓦(文字紋(鎌倉))、類平瓦、丸瓦、平瓦、鉄釘1、壁土、石F11、碓石2、曲物底板1、棟石	上から1.3m分の井戸枠が抜き取られる。重複関係からS K15より古。
SE 12	楕円形	短径 1.9× 長径 2.3	2.4 以上	円形石組	径 1.3		17世紀 前半	土師器皿・羽釜・壺、瓦質土器鉢鉢・壺・鉢・浅鉢・深鉢・蓋・風鈴・羽釜・壺、東海陶器(瀬戸美濃産壺、備前産壺、信楽産壺・壺)、輸入陶磁器(青磁碗・皿)、白磁皿、青花皿、皿)、軒丸瓦(石巻巴紋(中世))、軒平瓦(6732Fa、唐草紋・連続紋(鎌倉))、類平瓦、丸瓦、平瓦、銅製管1、碓石4	上から1.3m分の井戸枠が抜き取られる。井戸埋め戻し時に竹筒を中央に立てる。重複関係からSD 14より古。
SX 19	楕円形?	東西 0.45 以上× 南北 0.65	0.35	瓦質土器深鉢	最大径 0.5 以上		18世紀 中頃?	土師器皿、瓦質土器深鉢、国産陶器(肥前産碗)、丸瓦、平瓦	埋没遺構。
SX 20	楕円形	東西 0.6× 南北 0.65	0.35	信楽産陶器壺	最大径 0.4		18世紀 以降	国産陶器(信楽産壺)、平瓦、浅瓦	埋没遺構。重複関係からS K18より古。
SX 21	不明		0.05	瓦質土器深鉢	最大径 0.2 以上		17世紀 中頃 以降	瓦質土器深鉢	埋没遺構。深鉢底部が僅かに残存する。
SE 22	円形?	東西 2.2 以上× 南北 0.8 以上	1.1 以上	円形石組	不明		20世紀	国産陶器(瀬戸美濃産碗)、丸瓦、平瓦	



H J 第 605 次調査 江戸時代 遺構平面図 (1/150)

東西溝の底では数基の小柱穴を検出し、その一部には柱が残存する。東西方向に列んでおり、塀または護岸施設の一部とも考えられるがいずれとも決しがたい。

江戸時代の遺構

井戸2基 (SE 11・12)、石組溝2条 (SD 13・14)、土坑 (SK 15・17・18)、埋没遺構3基 (SX 19～21)、暗渠遺構1基 (SX 16)がある。これらの遺構は重複関係と出土遺物から次の4時期にまとめられる。

1期 江戸時代で最も古い遺構で、17世紀初頭の整地層 (土層図30・31・33)に覆われるもの (SE 11・12)。16世紀末～17世紀初頭の時期。

2期 17世紀初頭の整地層の上で検出した遺構 (SD 13・14、SK 15、SX 16)。17世紀前半～中頃の時期。

3期 発掘区西半の塵芥処理土坑 (SK 17)。18世紀前半の時期。

4期 SK 17埋没後の整地層より新しい遺構 (SK 18、SX 19・20)。18世紀中頃以降の時期。

1期の井戸2基は、いずれも上半部の石組が抜き取られている。いずれも2m以上と深く、掘削作業の安全上底まで掘削できなかった。ほぼ南北一直線上に位置しており、南北に列ぶ2軒の宅地が復元できる。後述するように18世紀後半の町絵図には、東の道路に面する東西に細長い宅地が描かれており、同様の宅地がこの時期に形成されていたことが判明する。

2期のSD 14、SK 15、SX 16は、一連の排水遺構と考えられる。SX 16は暗渠遺構で、南北両端は失われているが、丸瓦を2つ合わせた土管を南北に2つ繋げる。掘形内には石を充填しているが、東側の石は西側側面を揃えて列んでおり、一時期古い石組溝を利用したことも

想定できる。玉緑部は南側を向き、北から南へ排水する。南側の接続先は失われているが、延長線上に石組溝SD 14の北端があり、ここに接続していたと考えられる。SD 14はSK 15と重なる部分で鉤型に屈曲しており、溝底は北から南へ向かい低くなる。石組は高さ1段分(約0.2m)が残る。SK 15と接する部分では、東側の石組みの一部が低くなってSK 15と接続している。SK 15の底はSD 14より約0.3m深いことから、SK 15を満たした水がSD 14を通じて南側に排水されることがわかる。SD 13はSD 14より古い石組溝で、ほぼ同位置で作り替えられたと考えられる。当時は東西方向に長い宅地と考えられることから、これらの溝は宅地内の排水溝と想定できる。

3期のSK 17は、大量の瓦、焼土、炭を含んだ土で埋まっており、火災後の塵芥処理土坑と考えられる。史料によると、今小路町は宝永元年(1704年)と享保11年(1726年)に大火に見舞われる。出土土器も18世紀前半頃のもので、両大火のどちらかに関わるものと考えられる。

4期のSK 18からは18世紀後半の土器が出土しており、SK 17の下限がわかる。

IV 出土遺物

奈良～江戸時代までの各時期のものがあり、土器類が遺物整理箱28箱、瓦埴類が91箱、木製品(曲物・箸・竹筒他)が2箱、石製品(磁石・硯・石臼・碁石等)が1箱、金属製品等(鉄釘・鋤先・刃物・銅製煙管・輪羽口・鉄滓・ガラス瓶等)が1箱、銭貨が13点ある。各遺構出土品については、遺構一覧表に記した。以下、土器類・瓦埴類・その他に分けて主要なものを報告する。



発掘区全景 (江戸時代 西から)



発掘区全景 (江戸時代 東から)



S D 14・S K 15・S X 16 全景 (北から)

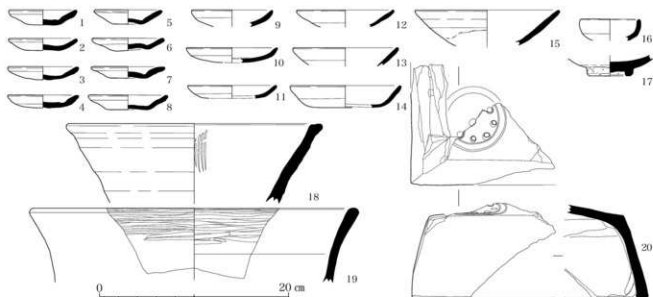
土器類 8世紀から19世紀まで各時代のものが、遺物整理箱28箱分あるが、11・14・15・19世紀のものは他の時期に比べ少ない。以下室町時代の道路側溝関連遺構出土の土器について記す。

S D 05・07・08、S X 06・09 出土土器 各遺構からは、合計約1480点の土器が出土しており、各遺構の

出土点数については表に記す。遺構の重複関係から S D 05・07・S X 06 が、S D 08・S X 09 より古いのが、土器の形式では両者に差が認められない。S D 07、S D 05 と S X 06、S X 09 の3遺構に分けて実測図を掲載し、重複関係からこれらの遺構群より新しい S E 12 出土遺物の組成を比較のために記した。

土師器皿は胎土の色調等から、褐色系と灰色系の2つに分類される。褐色系のもの(1~8、21~36、68~87)は、やや上げ底気味の底部で、口縁部に強いヨコナデ調整を行うため、内面の底部と口縁部の境にはナデ調整による強い窪みがある。外面のナデ調整の範囲は5mm前後と幅が狭い。口径は7cm~8cmの間のものがほとんどである。胎土は砂粒を多く含み、器形と胎土の特徴から、14世紀の赤土器の系譜をひく。S X 09 出土の101は異質な器形で、口径11.6cm、器高2.65cmで、口縁外面には幅広のヨコナデ調整を行う。形態は13世紀頃の土師器皿に似るが、胎土の色調等は褐色系のもに似る。これ1点のみの出土である。また104は口径19.4cmの大型の皿で、内面をハケメ調整の後口縁部をヨコナデ調整する。内外面には煤が多量に付着し、後述する油煙採取用の蓋の可能性も考えられる。胎土の色調等は、褐色系のもに似る。

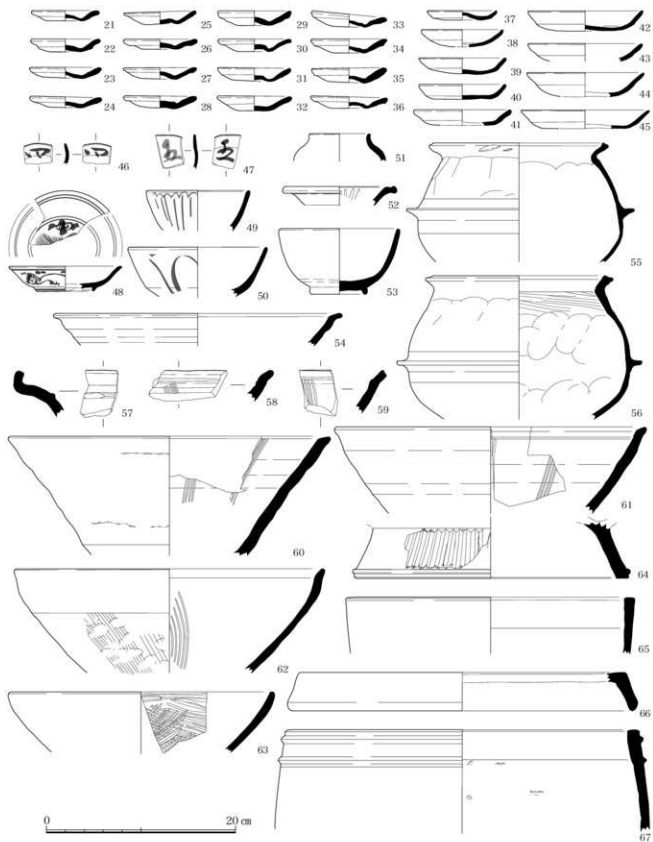
灰色系のもの(9~15、37~45、88~100)は、比較的平坦な底部から緩やかなカーブで短い口縁部へとつづく器形である。口縁部には丁寧なヨコナデ調整をし、凹凸が少なく端正な作りである。口径は6~16cmまで各



H J 第 605 次調査 S D 07 出土遺物 (1/4)

H J 第 605 次調査 遺構出土土器組成表

種類	産地等	器種	S D 07		S D 05		S D 05 上層		S X 06		S D 08		S X 09		S E 12		
			点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率	
土師器		甕	76	57.14	50	23.04	53	27.60	67	31.02	98	43.75	153	30.97	67	18.82	
		(褐色系)	32	24.06	21	9.68	33	17.19	26	12.04	15	6.70	69	13.97	17	4.78	
		(灰白色)	44	33.08	29	13.36	20	10.42	41	18.98	83	37.05	84	17.00	50	14.04	
		須臾・罎	8	6.02	63	29.03	47	24.48	59	27.31	17	7.59	16	3.24	25	7.02	
		(羽釜)	2	2.26	31	14.29	30	15.63	35	16.20	6	2.68	6	1.21	5	1.40	
		(甕)	1	0.75										3	0.61	3	0.84
		小計	85	63.91	113	52.07	100	52.08	126	58.33	115	51.34	172	34.82	95	26.69	
		椀鉢	8	6.02	4	1.84	10	5.21	7	3.24	14	6.25	22	5.21	9	2.53	
		椀鉢	2	1.50	2	0.92	3	1.56	4	1.85	1	0.45	5	1.56	2	0.56	
		浅鉢	1	0.75	9	4.15	2	1.04	4	1.85	6	1.04	6	1.04	6	1.69	
深鉢	4	3.01	2	0.92	3	1.56	5	2.31	49	21.88	13	1.56	21	5.90			
方形浅鉢	5	3.75			3	1.56	2	0.93			10	1.56					
鉢加	8	6.02	46	21.20	30	15.63	35	16.20	31	13.84	152	15.63	101	28.37			
甕	1	0.75					1	0.46	1	0.45	6	1.21	1	0.28			
風戸																	
羽釜			2	0.92	1	0.52						6	1.21	1	0.28		
甕												1	0.20				
甕														2	0.56		
甕	1	0.75															
不明																	
小計		30	22.56	65	29.95	54	28.13	60	27.78	97	43.30	223	45.14	147	41.29		
常世		甕	3	2.26	4	1.84	7	3.65	7	3.24	5	2.23	13	2.63	4	1.12	
		甕	2	1.50	7	3.23							5	1.01	11	3.09	
		甕	1	0.75	1	0.46	1	0.52	1	0.46			3	0.61	3	0.84	
		大甕	5	3.76	1	0.46	3	1.56					4	0.81	5	1.40	
		椀鉢			3	1.38											
		水注															
		小計	8	6.02	12	5.53	4	2.08	1	0.46	0	0.00	12	2.43	20	5.62	
		甕			1	0.46							1	0.20			
		甕														8	2.25
		甕・甕	3	2.26	4	1.84	7	3.65	7	3.24			28	5.67	11	3.09	
小計	3	2.26	5	2.30	7	3.65	7	3.24	0	0.00	29	5.87	19	5.34			
信楽		椀鉢	3	2.26	9	4.15	9	4.69	8	3.70	2	0.89	18	3.64	20	5.62	
		甕・甕			5	2.30	4	2.08	3	1.39	1	0.45	7	1.42	8	2.25	
		甕・甕	3	2.26	14	6.45	13	6.77	11	5.09	3	1.39	25	5.06	28	7.87	
		甕					2	1.04					26	7.30			
肥前		甕					2	1.04					3	0.84			
		甕					1	0.52					8	2.25			
		甕					5	2.60	0	0.00	0	0.00			37	10.39	
		小計	0	0.00	0	0.00	5	2.60	0	0.00	0	0.00					
輸入陶磁		小計	17	12.78	35	16.13	36	18.75	26	12.04	8	3.57	79	15.99	108	30.34	
		青磁			2	0.92	2	1.04	2	0.93	3	1.34	11	2.23	1	0.28	
		甕	1	0.75									1	0.20	3	0.84	
		甕											1	0.20			
		小計			2	0.92	2	1.04	2	0.93	3	1.34	13	2.63	4	1.12	
		白磁			1	0.46			1	0.46			2	0.40	1	0.28	
		青白磁			1	0.46											
		青花									1	0.45	4	0.81			
		甕											1	0.20	1	0.28	
		小計					0	0.00	1	0.46	1	0.45	5	1.56	1	0.28	
小計	1	0.75	4	1.84	2	1.04	4	1.85	4	1.79	20	4.05	6	1.69			
合計		133	100.00	217	100.00	192	100.00	216	100.00	224	100.00	494	100.00	356	100.00		

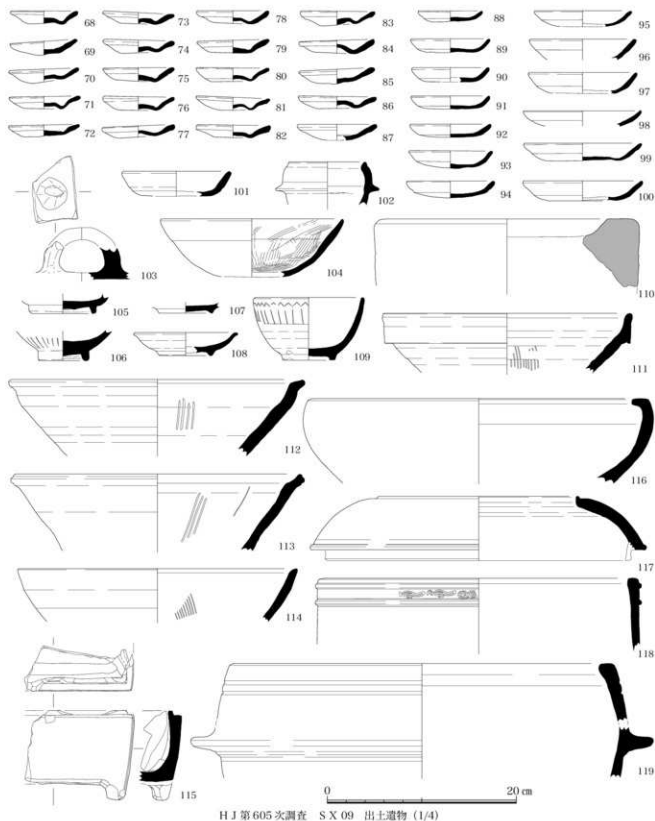


H J 第605次調査 S D 05・S X 06 出土遺物 (1/4)

種あり、8～9cm代と11～12cm代が最も多い。両者を合わせると、口径が判明する破片の内約42%を占める。胎土はきめ細かで砂粒を含まず、褐色系に比べ精良である。褐色系と灰色系の皿の出土比率は、およそ4：6

である。また墨書のある灰色系の皿が2点出土している(46・47)。口縁部の破片に、「四」、「五」と記す。

S D 08の土師器小型鉢(16)は、黄橙色系の精良な胎土で、褐色系・灰色系の皿のいずれとも胎土が異なる。



H J 第605次調査 S X 09 出土遺物 (1/4)

土師器羽釜は、口縁部を外反させ端部を上方に積み上げる大和Ⅰ型(55、56)がほとんどで、他形式は僅か数点である。鈿は体部中位かやや下側に付き、やや下ぶくれ気味の体部である。胎土は灰白色系で、断面部分も同色を呈する。鈿下半には煤が付着する。羽釜は出土場所に偏りがあり、発掘区西側での出土が多い。S X 09から

は、小型の羽釜(102)が1点だけ出土する。

S X 09出土の土師器蓋(103)は、頂部に環状の取手を貼付し、内面は密なヘラミガキ調整、外面は未調整である。内外面に煤が付着するが特に内面に多い。形態・特徴から黒作りのための油煙採取用の蓋と考えられるが、この形態のものは奈良市内で最古の出土となる。

瓦質土器(19、20、62～67、114～119)は多くが浅鉢または深鉢の底部と体部片で、器形の判明する分は少ない。SD 08からは方形の蓋(20)が出土している。上面の隅にはコンパス状の工具で2重の円を描き、円の中央に1個、円の内側に沿って8個ほどの小孔を穿つ。外面は丁寧なヘラミガキ調整を行う。

国産陶器は、主だった産地のものが出土するが、常滑産と肥前産は出土状況や遺物の型式などから、新旧の時期の遺構からの混入品と考えられる。比較的まとまって出土するものとしては、信楽産(18、58～61、112、113)と瀬戸美濃産(51～54、107～109)の製品がある。信楽産陶器には播鉢が多く、内面の播目は3～5条あり、口縁端部の形態は様々ある。出土組成表からは、播鉢は瓦質土器と信楽産がほとんどを占めるのがわかる。瀬戸美濃産陶器は碗皿類が主体で、丸碗が多く天目茶碗は出土していない。また灰胎製品のみで鉄釉等の製品もない。折縁ソギ皿(52)はSD 05上層からの出土で、上層の遺構からの混入品の可能性もある。これを除くと、瀬戸美濃産陶器はおおよそ藤原朝¹⁾の大窯3期以前のものが主体と言える。備前産陶器(57、111)は少量の出土である。

輸入陶磁器の青磁(17、49、50、105、106)はいずれも龍泉窯系のもので、他に稷花皿の破片がある。白磁は小野分類のB群の皿の破片が、青花は口縁部を外反させる小野分類のB群の皿(48)が出土している。

これらの土器群は、森下・立石編年²⁾の奈良IV期のものであり、同期中での編年の位置付けを検討する。奈良IV期終末で肥前陶器が出土する資料には、市GG第48次調査SE 16出土資料がある。これと比較すると当資料は、褐色系の土器器皿は器高が高くやや深みのある器形で、口縁外面のヨコナデ調整の幅がやや狭い点、口径が若干小さい点などが指摘でき、型式には差が認められる。土器器の大和I型羽釜には、器形・鈿の貼付位置にやや古い様相が見られる。瀬戸美濃産陶器は大窯3期以前のものであることなどから、肥前産陶器出現以前の時期と言えよう。また肥前産陶器が出土していない市HJ第482次調査SX 14出土資料は、供伴する備前産陶器大甕が栗岡編年³⁾の中世5～6期のもので、16世紀前半頃と考えられる。この資料と比較すると、土器器の大和I型羽釜は器形・鈿の貼付位置から明らかに数形式の差が認められる。これらのことから当資料は16世紀後半と考えられ、資料数の少ない奈良IV期の編年を考える上で貴重な資料といえる。(中島和彦)

瓦埴類 瓦埴類は遺物整理箱で91箱分出土した。瓦類の大半は丸瓦・平瓦・椀瓦で、軒丸瓦25点、軒平瓦31点、

面戸瓦1点、埴7点、留蓋1点を含む。

出土した軒瓦は別表に示した。これらのうち、遺構から出土した軒瓦に関しては検出遺構一覧表に掲げた。

型式番号が判明した奈良時代の軒瓦のうち、6235型式G・Ma種と6732型式F a種は東大寺創建瓦である。6732型式D・H種は東大寺僧房所用と考えられている。鎌倉時代の軒瓦でも、東大寺805型式A種⁴⁾は建長元年(1249年)の東大寺僧房再建で、東大寺509型式A種は天福元年(1233年)の戒壇院再建瓦と考えられている。また東大寺502型式は内区に右から「東大寺大佛殿」と文字を飾り、東大寺所用品である。このように奈良時代と鎌倉時代の軒瓦の中には、東大寺所用品が多いことがわかる。

江戸時代の軒瓦には、特筆すべき軒椀瓦がある。左右両側面に椀部を設ける「両椀軒瓦⁵⁾」である(1)。上向きに三葉紋の下に大きめの椀を飾った中心飾りである。唐草は3回反転均整唐草紋であるが、左右第3単位の唐草の先端は、巻き切れないまま、外縁に接続しており、左右両端を切り縮めた范型を用いて製作されたと思われる。瓦当幅25.6cm、全長25.6cm、厚さ1.7cmである。外縁はヨコナデを施し、平滑に仕上げる。接合面にカキメを施した顎貼り付け式段顎である。顎面と顎部瓦当裏面はヨコナデを施す。椀部は稷をもたない。平瓦部狭端側の両側面付近を長さ6.0cm、幅3.5cmずつ切り欠き、凸字形にする。このため狭端幅は16cmに減している。平瓦部狭端側に、凹面側から穿孔した方形の釘穴がある。SK 17から3点出土した。

「両椀瓦」は、塀の屋根に右椀瓦と左椀瓦を用い、その接点に使用する例が報告されている⁶⁾。ただし、「両椀軒瓦」が複数出土していることから、この使用法は考えにくい。

他に「両椀軒瓦」が用いられた建物は、山口県岩国市所在の重要文化財目加田家住宅がある。ここでは、本瓦

H J 第605次調査 出土軒瓦集計

軒丸瓦 型式	点数	軒平瓦	
		型式	点数
6235 G	2	6732 F a	1
6235 Ma	1	6732 F a	3
6235 種類不明	1	6732 H	3
東大寺 805 A (鎌倉)	1	6733 A	1
「東大寺」文字瓦 (鎌倉)	2	東大寺 533 B (奈良～平安)	1
右巻巴紋 (中世)	5	興福寺埴平瓦 (平安)	1
右巻巴紋 (中世)	2	東大寺 502 (鎌倉)	1
右巻巴紋 (江戸)	3	東大寺 509 A (鎌倉)	2
左巻巴紋 (江戸)	2	文字紋 (鎌倉)	2
型式不明 (奈良)	3	前草紋 (鎌倉)	1
型式不明 (中世)	3	雑珠紋 (鎌倉)	1
		唐草紋 (室町)	1
		唐草紋 (関ヶ原・江戸)	3
		唐草紋 (江戸)	4
		型式不明 (奈良)	2
		型式不明 (平安)	1
		型式不明 (江戸)	3
軒丸瓦計	25	軒平瓦計	31

葺きの2ないし3筋のなかに、両椀瓦を2または3筋交互に交えて葺かれてある。このような葺き方は「二平瓦葺き」と呼称されている。

「二平瓦葺き」の可能性を考え、「両椀軒瓦」が出土したSK 17出土瓦類について、丸瓦・平瓦・椀瓦の分類を試みた。分類は、椀部と一般的な椀瓦に見られる切欠きの有無、椀部、切欠きが左右いずれに位置するかなどを考慮して行った、その結果が右の表である。なお丸瓦・平瓦・椀瓦のうち、完形に近い資料の法量についてはその下に掲げた。

端部が残っておらず、椀瓦か平瓦か区別できないものが多いが、屋根を復元するための傾向はうかがえる。ひとつ目の特徴として、丸瓦が平瓦・椀瓦に比べてかなり少ないということが挙げられる。いまひとつは両椀瓦の出土が多いとみられることである。左椀瓦といえる資料が無く、⑤の「左椀瓦か両椀瓦」とした資料はすべて両椀瓦の可能性が高いと見られる。④の「右椀瓦か両椀瓦」とした資料も、③のように切欠きを有し、右椀瓦と判断できる資料がかなり少ないことから、④に両椀瓦が占める割合も低くないと考えられる。丸瓦をさほど必要とせず、両椀瓦・平瓦を主として用いる屋根であれば、「二平瓦葺き」であったと考えるのが妥当である。

「両椀軒瓦」と組むとみられる軒平瓦には、「両椀軒瓦」と同じくSK 17から3点出土しており、中心飾りの形状が似ることから、図示した軒平瓦(2)を挙げることができる。唐草は下方から上方へのびて、内側に巻き込む2回反転均整唐草紋である。瓦当部はやや欠失するが、平瓦部は完存する(2)と同範の資料は幅25cm、全長

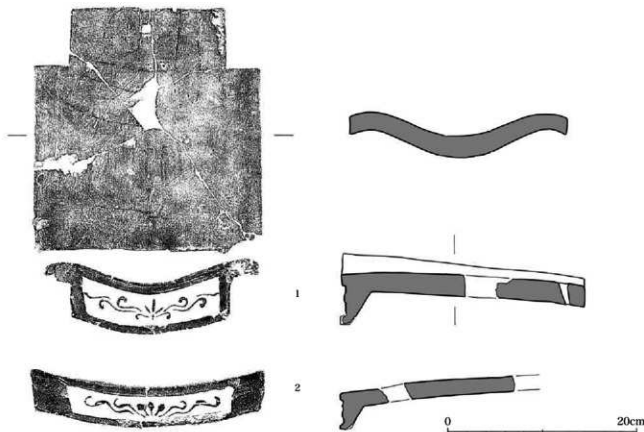
SK 17出土丸瓦・平瓦・椀瓦集計表

番号	種類	破片数(点)	割合(%)	重量(g)	割合(%)
①	丸瓦	199	17.16	28,115	13.52
②	両椀瓦	4	0.34	5,970	2.87
③	右椀瓦	6	0.52	1,990	0.96
④	右椀瓦か両椀瓦	43	3.71	10,140	4.88
⑤	左椀瓦か両椀瓦	40	3.45	11,970	5.76
⑥	椀瓦	121	10.43	21,410	10.30
⑦	平瓦	4	0.34	8,190	3.94
⑧	椀瓦か平瓦	743	64.05	120,128	57.78
合計		1,160	100.00	207,913	100.01

SK 17出土丸瓦・平瓦・両椀瓦の法量表

丸瓦	後端径	広端径	全長	玉縁長	厚さ	重量
	14.0	13.0	26.0	4.0	1.7	(1,080)
備考: 広端径より後端径のほうが長い。9割残存資料。						
平瓦	後端幅	広端幅	全長	広端側厚さ	狭端側厚さ	重量
	23.0	24.0	26.7	2.0	1.7	2,020
備考: 完存品						
両椀瓦	幅		全長	厚さ	重量	
	23.0		26.0	1.7	(1,660)	
備考: 広端・後端の差は無く、切り欠き・打欠も無い。9割残存資料。						

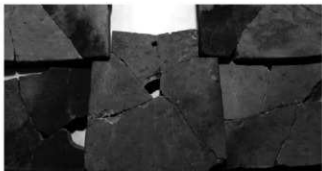
凡例 1. 単位については重量がg、その他がすべてcmである。
2. それぞれ最も残りの良い資料1点の計測値である。丸瓦・両椀瓦は、最も残りの良い資料が9割残存のため、重量は()付きで記した。



HJ第605次調査 SK 17出土軒瓦(1/4)



想定される「二平葺き」



「両棧軒瓦」狹端部切欠きと両側の平瓦隅部との合わせ

26.2cm、狹端部の厚さ1.7cmである。外縁はヨコナデで平滑に仕上げる。接合面にカキメを施した顎貼り付け式段顎である。顎面と顎部瓦当裏面はヨコナデを施す。興福寺XⅡ平A 9⁷⁾と同範の可能性が高い。興福寺XⅡ期は大きく天正8年(1580年)から享保2年(1717年)と区分されているが、1680年頃まで残る瓦当上縁における中央幅広の面取り⁸⁾は無く、1680～1717年の製作とみられる。軒平瓦(2)の年代観から、これと組み合う「両棧軒瓦」の製作年代は17世紀第4四半期から、18世紀第1四半期の間におさまると考える。

SK 17の瓦類を用い、「二平葺き」を復元したのが上の写真である。「両棧軒瓦」の狹端部が凸字形を呈するのは、ここに軒平瓦の上に重なる平瓦の隅が当たる為と判断できる。したがって軒平瓦と、その上にくる平瓦との重ねは6.0cmで、軒平瓦のきき足は20.2cmと、全長の77%と算出できる。また「両棧軒瓦」のきき幅は「両棧軒瓦」の棧の幅が3cmであることから19cmとなり、全幅の76%と算出できる。

なお「両棧瓦」を用いた「二平葺き」は、唯一の使用例の岩国市の旧城下町でも限定的で、綿見から岩国・川西・横山地区の住宅のみで見られると報告されている。奈良の地で、なぜ岩国城下町の一部でしか見られない瓦が使用されたのか、興味深い問題である。(原田憲二郎)

その他の遺物 SX 09からは石臼の上白の上縁部分の破片(110)が出土している。径は28.0cmで花崗岩製である。

(中島和彦)

V 調査所見

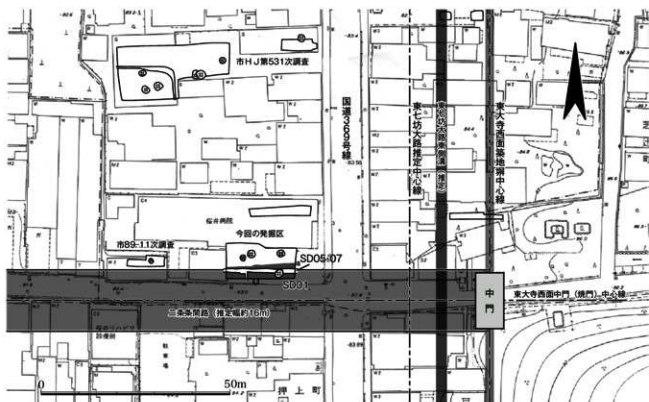
今回の発掘調査では、限られた範囲であったが、奈良～江戸時代の各時期の遺構を数多く検出した。特に奈良時代の二条条間路を検出し、奈良～江戸時代に至る道路の変遷と、室町時代以降の宅地割の変化が判明したことが注目される。

SD 01は、東大寺西面中門(焼門)との位置関係からほぼ二条条間路北側溝の位置にあたり、出土遺物の年代からも二条条間路に関する遺構と考えられる。しかしながら、SD 01は北岸を検出したのみで全容が判明せず、二条条間路の北側溝にあたるか、溝状に切り下げられた二条条間路自体にあたるかの2つの可能性が考えられる。出土遺物から、SD 01は10世紀前半には埋設する。

二条条間路上は、SD 01埋設後も道路として機能していたようである。11～15世紀には、明瞭な区画施設を確認していないものの、路面上には遺構が分布しないことがそれを裏付けている。16世紀後半には、道路と宅地の間に東西溝SD 05他が掘られ、境界が明瞭となる。さらにその後SX 09以東の部分で溝を一部埋立て宅地が南側に約1.5m拡張する。

この宅地の拡張が、道路全体一律に行われず、SX 09以東の部分のみに行われていることは注目される。道路部分が浸食されて宅地化することは、平安京内でも確認されているが、当調査地では平安時代以降、道路の位置はほぼ一定であったと見られる。これは東大寺の西面中門正面の道路としての性格があったためとも考えられる。道路部分への宅地の拡大は、この制約が16世紀後半には失われたことを示唆する。さらにSX 09を境にして東西で宅地の拡張の差が見られることから、SX 09を境に東西2つの宅地割を想定できる。この場合、調査地東側の現在の南北道路(国道369号線)は中世に遡る道路であることから、この道路を超えて東側に宅地が存在するとは考えられず、SX 09～国道間の約17m内に1つ以上の宅地が収まることがわかる。これらの状況を考慮すると、調査地内には、旧二条条間路上の道路に開口をあげた南北方向の宅地が2つ想定でき、東側の宅地が開口正面部分を道路側に拡張したと考えられる。

一方、現在の今小路町は、国道369号線を中心にその東西に宅地がひろがり、調査地では東に開口をもつ宅地となっている。また安永2年(1773年)の今小路町を描いた絵図「今小路北南両町大絵図券文(天保4年[1833年])



H J 第 605 次調査発掘区とその周辺 (1/1,000)

写し)³⁾にも、現在と同じ宅地割りが描かれている。さらに発掘調査検出の井戸の分布からも、調査地内では17世紀初頭には、東に間口をもつ宅地が確認できる。

以上のことから、調査地内では16世紀後半には南に間口を持つ宅地が存在していたが、17世紀初頭には東に間口をもつ現在の宅地割りに変わったことがわかる。またこの時期に、旧二条京路上の東西道路も幅を狭め、発掘区南側3.7mの所にある現在の道路となっている。奈良町遺跡内の町割り構造の変化を考える上で貴重な類例であろう。16世紀末～17世紀初頭の時期は、元興寺旧境内の主要伽藍地区でも大規模な造成が行われ、土地の改変が激しい時期である。これらの改変が奈良町遺跡全体に及ぶものか、部分的なものかは不明であるが、今後の発掘調査において注意する必要がある。

最後に江戸時代の宅地内の様相を記す。先の今小路町の絵図によると、調査地は東西に長い宅地が南から3つならび、南から「戸屋嘉兵衛」「油屋孫三郎」「扇屋利右衛門」の宅で、それぞれ間口は「三間五尺、四間一尺、五間四尺六寸」とある。この間口の合計は現在の敷地の東端の幅とほぼ同じであり、調査地内にこれら宅地が収まっていることがわかる。南端の「戸屋嘉兵衛」とその北「油屋孫三郎」との宅地境を、発掘区内に当てはめると、SE 11とSK 17の間にあたり、おおよそ遺構の空白地に宅地境があることがわかり、この線にあるSX 16は宅

地境に作られた暗渠遺構となる。またSK 17の北層が境界線に沿って直線的であること、さらにSE 11と12は別々の宅地の井戸であると考えれば、今小路町の絵図に描かれた宅地割りは17世紀初頭まで遡り、江戸時代を通じて存在していたことが考えられる。

その場合、SK 17は、後の「戸屋嘉兵衛」宅となる南端の宅地の住人が、宅地内で塵芥処理を行った遺構であり、その出土遺物も18世紀前半の当地地の住人に由来するものと考えられる。(中島和彦)

- 1) 藤澤良祐「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『財 瀬戸市埋蔵文化財センター 研究紀要 第10号(財)瀬戸市埋蔵文化財センター 2002
- 2) 森下恵介・立石聖志「大和北部における中近世土器の様相」『奈良市埋蔵文化財センター紀要 1986』奈良市教育委員会 1986
- 3) 栗岡実「備前焼大窯編年レクチャー資料」『関西近世考古学研究会IX』関西近世考古学研究会 2001
- 4) 鎌倉時代の東大寺の軒瓦型式番号は、奈良県教育委員会「東大寺防災施設工事・発掘調査報告書」東大寺 2000に拠った。
- 5) (財)文化財建造物保存技術協会「重要文化財目加田家住宅修理工事報告書」岩国市 1979によると、この種の瓦は、「一般に用いられている棧瓦に対し、両傍に丸みを付けた平瓦形式の棧瓦で、土地で通称両軸瓦」と呼ばれるという。しかし「油瓦」とは丸瓦・棧瓦の端部に「軸重」と呼ばれる、破風に使われるものと定義されている。(坪井利弘『図鑑瓦屋根』理工学社 1977) このことから「両軸瓦」の名称には疑問があり、ここでは両端に棧がある瓦、「両棧瓦」と呼び、さらに瓦当部があるものは「両棧軒瓦」の名称を用いた。
- 6) 大藪潔「左棧瓦記行」『帝塚山大学考古学研究所研究報告IX』帝塚山大学考古学研究所 2007
- 7) 興福寺の軒瓦型式番号は、叡中五百樹「安土桃山・江戸時代に於ける興福寺の造営と瓦」『帝塚山大学考古学研究所研究報告VII』帝塚山大学考古学研究所 2005に拠った。
- 8) 山崎信二「近世瓦の研究」奈良国立文化財研究所 2008
- 9) 個人蔵

7. 平城京跡（左京五条四坊十二坪・東四坊坊間路）の調査 第606次

事業名	共同住宅新築	調査期間	平成20年5月21日～6月17日
届出者名	個人	調査面積	216㎡
調査地	奈良市大安寺六丁目841番1	調査担当者	久保清子

I はじめに

調査地は、条坊復原によると左京五条四坊十二坪の南西隅及び東四坊坊間路上に相当する。これまでに十二坪内では、調査地の東側において平成3年度に市試掘第91-5次調査を実施しており、時期不明の土坑を確認している。北隣の十一坪では、平成14年度の市HJ第481次調査で古墳時代以前の溝、奈良時代の掘立柱建物、土坑を確認している。また、南側の五条大路が想定される地点では、昭和59年度の市HJ第79次調査を実施しているが、旧河道内にあたるため大路を確認していない。

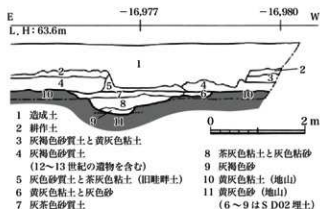
本調査は、十二坪の様相ならびに東四坊坊間路を確認することを目的として調査を行った。

II 基本層序

発掘区内の基本層序は、北端で造成土(0.6～0.7m)、耕作土(0.1～0.2m)と続き、現地表下0.8mで黄灰色粘土の地山となる。南端では耕作土の下に、灰褐色砂質土と黄灰色粘土の混合土(0.1～0.2m)、その下に12～13世紀の遺物を含む灰褐色砂質土(0.2～0.3m)が堆積し、現地表下1.0mで黄灰色粘土の地山となる。地山面は北から南に向かって緩やかに下がっており、その標高は、北端で62.5m、南端で62.2mである。遺構検出作業はすべて地山上面で行った。

III 検出遺構

検出遺構には奈良時代の東四坊坊間路(SF01)及び同東側溝(SD02)、井戸1基(SE03)、掘立柱列2条(SA04・05)、江戸時代の土坑11基(SK06～16)がある。各遺構の概要は一覧表にまとめた。



東四坊坊間路東側溝SD02土層図(1/80)



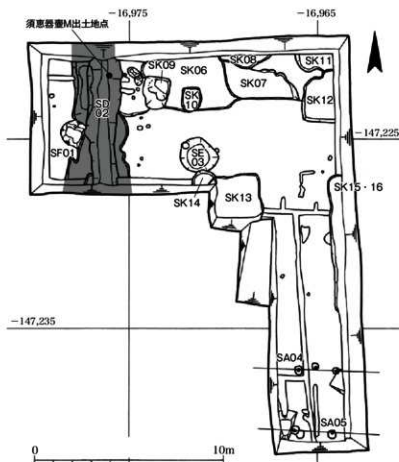
HJ第606次調査 発掘区位置図(1/5,000)



発掘区全景(南から)



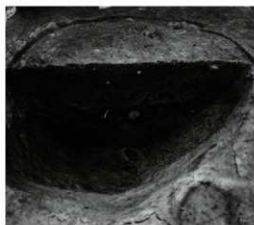
発掘区北半(西から)



H J 第606次調査遺構平面図 (1/200)



坊間路東側溝 SD02 須恵器壺M出土状況 (北から)



井戸 S E 03 (東から)

奈良時代の遺構 SF 01 は東四坊坊間路、SD 02 は同東側溝である。SF 01 の路面幅は、東側溝西肩から1.5 m分を検出している。西側溝は発掘区外のため、坊間路の幅員は不明である。東側溝SD 02 最深部の国土座標値は、 $X=-147,220.80$ 、 $Y=-16,976.50$ で、調査地北側の五条四坊地点(市H J 第459-1～4次調査)で検出している坊間路東側溝最深部との振れは、 $N 0^{\circ} 10' 8'' E$ である。また、溝底の標高は北端で61.8 m、南端61.7 m と南に向かって低くなっており、南側の五条大路との交差点に向かって排水していたことが考えられる。東側溝SD 02 の埋土は、基本的には上から灰茶色砂質土、茶灰色粘土と灰色粘砂の混合土、灰褐色砂の順に堆積し、埋土中からは、8世紀後半～末頃の土器などが遺物整理箱2箱分出土している。出土遺物の大半は破片であるが、中層埋土中からは、須恵器壺Mが2点接する状態で出土した。2点とも口縁部分が欠損している。壺内には上半部に土が入っていたのみで、他に内容物はなかった。

十二坪内では、東側溝SD 02 の約3 m東で井戸SE 03 を検出した。枠材はすべて抜き取られている。枠抜き取り穴の埋土中には3 cm前後の炭が多量に含まれていることから、当初掘えられていた枠の底には、濾過装置と

してこれらの炭が敷かれていたことが考えられる。掘り埋土中からは8世紀後半頃の土器や木製品、桃核などが少量出土した。枠抜き取り穴の埋土中からは、8世紀後半～末頃の土器、緑色ガラス片1点などが遺物整理箱2箱分出土した。

この他、坪の南端にあたる地点では、東西方向の掘立柱列SA 04・05を検出した。いずれも、主軸が国土方眼方位に対し西やや北に振れている。

江戸時代の遺構 発掘区東半で土坑SK 06～16を検出した。掘形の平面形は隅丸方形・円形・不整形で、検出面からの深さは0.4～1.1 mと様々であるが、埋土はいずれも黄灰色粘土ブロックと灰色砂質土もしくは茶灰色砂質土との混合土である。埋土中からは、16世紀後半から17世紀にかけての土師器・国産陶磁器片などが少量出土している。調査地周辺には、良質の粘土層が厚く堆積していることから、これらの土坑は粘土採掘を目的として掘削されたものと考えられる。

IV 出土遺物

遺物整理箱10箱分の遺物が出土した。遺物には時期不明のサヌカイト製楔型石器・剥片、古墳時代前期の土師器、古墳時代中期の埴輪、8世紀後半～9世紀初頭の土師器、

須恵器、黒色土器、墨書土器、線刻土器、製塩土器、土製品、軒平瓦、丸瓦、平瓦、木製品、石製品、鍛造関連遺物、12～13世紀の須恵器・瓦器・焼締陶器、16世紀後半～17世紀の土師器、信楽産陶器種鉢、肥前産染付碗などがある。

このうちSE 03 枠抜き取り穴の出土土器には、土師器杯A・杯B・杯Bか皿B・皿A・皿C・杯か皿蓋・高杯、須恵器杯か皿・壺・壺蓋・甕、製塩土器の破片などがある。土師器、須恵器ともにその出土量の過半数を食器類が占める。土師器の杯Aと皿Aは口縁部下半から底部外面にかけてヘラケズリで仕上げている。また、土師器杯か皿の底部外面に「十」と墨書されているものや、皿Cの口縁部に煤が付着しているもの、判読不明の墨書がある須恵器杯Bか皿B、墨痕のある須恵器杯または皿及び蓋、口縁部内面に漆が付着している杯または皿がある。

V 調査所見

今回、東四坊間路及び同東側溝を検出した。西側溝は、調査地西側に隣接する現道路下にあるものと想定される。東側溝は、北から南に下がる地形に沿って五条大路との交差点に向かって排水されていたものと考えられる。調査地北側の市HJ第459-1～4次調査(左京五条四坊七・九・十坪)においても同坊間路を検出しているが、東側溝は五条条間北小路に向かって北へ排水されており、同じ五条地点でも地形条件により、排水経路が異なることが考えられる。

十二坪の様相については、坪の南西隅に井戸と東西方向の掘立柱列を設けているが、坪の西端を限る掘立柱列等の閉塞施設については、今回の調査では見つからなかった。平安時代以降には、耕作地として利用する他、江戸時代に粘土採掘を行っていた時期があることがわかる。(久保清子)

HJ第606次調査 検出遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規模		柱間寸法(m)		備考
		桁行×梁行(m)	桁行全長(m)	梁行全長(m)	桁行 梁行	
SA 04	東西	1以上	2.1以上		2.1	柱穴の深さ0.4m。
SA 05	東西	1以上	2.1以上		2.1	柱穴の深さ0.4m。
遺構番号	平面形等	平面規模(m)	深さ(m)	主な出土遺物		備考
SF 01	南北道路	路面幅1.5m分、長さ6.5m分検出				東四坊間路。
SD 02	南北溝	幅2.3～3.5m、長さ6.5m以上	0.5～0.8	古墳時代中期：門簡埴輪、8世紀後半～9世紀初頭：土師器杯・皿・高杯・壺・甕、須恵器杯・皿・蓋・壺・鉢・甕、黒色土器B類、製塩土器、土馬、軒平瓦(6671 I・6716 F)、丸瓦、平瓦、鉄滓		東四坊間路東側溝最深部標高X=-147,220.80、Y=-16,976.50
SE 03	円形	径1.9～2.0m	1.0	(掘形) 時期不明サカイト製模形石器・割片、8世紀後半：土師器杯・皿・蓋・高杯・甕、須恵器杯・皿・蓋・壺・甕・平瓶、製塩土器、平瓦、番串、棒状木製品、桃核、磁石(枠抜き穴) 古墳時代前期：土師器甕、8世紀後半～末：土師器杯・皿・蓋・高杯・甕、須恵器杯・皿・壺・甕蓋、墨書土器、線刻土器、製塩土器、平瓦、面物、惣えきし、切灰、緑色ガラス片		枠は抜き取られている。枠底には遮断用に炭敷があったことが考えられる。枠抜き取り穴の出土の土師器・須恵器はともに食器類が過半数を占める。
SK 06	不整形	東西4.5以上×南北3.0以上	0.6	16世紀後半～17世紀：国産陶器種鉢(信楽産)、土師器皿・羽釜、須恵器甕、瓦質土器片、格子平瓦		SK 07・08・09・10より古い。
SK 07	不整形	東西3.5×南北2.0	0.5	出土遺物なし		SK 08より古くSK 06より新しい。
SK 08	不整形	東西2.8×南北1.0以上	0.5	出土遺物なし		SK 06・07より新しい。
SK 09	隅丸方形	東西1.4×南北1.8	0.6	須恵器壺、平瓦		SK 06より新しい。
SK 10	隅丸方形	東西1.0×南北1.3	0.4	16世紀後半～17世紀：土師器羽釜、須恵器片、平瓦、格子平瓦		SK 06より新しい。
SK 11	不整形	東西2.4以上×南北1.2以上	0.6	13世紀：焼締陶器(常滑産)、16世紀後半～17世紀：国産磁器染付椀(肥前産)、須恵器甕、土師器片、平瓦		SK 12より古い。
SK 12	不整形	東西2.0以上×南北2.8	0.8	須恵器甕、土師器皿、瓦片		SK 11より新しい。
SK 13	隅丸方形	東西2.8×南北2.4以上	1.1	須恵器甕、丸瓦、平瓦		SK 14より古い。
SK 14	円形	東西1.3×南北0.8以上	0.6	16世紀後半以降：土師器皿、平瓦		鎌倉時代の遺物包含層上面から掘られている。
SK 15	不整形	東西0.7以上×南北3.7	0.4	丸瓦、平瓦		SK 16より古い。
SK 16	不整形	東西0.7以上×南北7.5	0.8	出土遺物なし		SK 15より新しい。

8. 平城京跡（左京四条二坊五坪・四条条間南小路）の調査 第607次

事業名 住宅付配送センター新築
 届出者名 株式会社 共栄商会
 調査地 奈良市尼辻町乙454-2他

調査期間 平成20年6月2日～6月26日
 調査面積 264㎡
 調査担当者 池田裕英

I はじめに

調査地は平城京の条坊復原では左京四条二坊五坪の北西隅に位置し、北辺に四条条間南小路が、西辺に東二坊坊間西小路が通ることが想定される場所にあたる。調査地周辺では、過去に四条二坊三坪で平成7年度に市HJ第346次調査¹⁾、平成18年度に市HJ第550次調査²⁾を実施している。第346次調査では奈良時代の掘立柱建物、掘立柱塼、井戸の他、5世紀末葉の方墳1基を検出した。HJ第550次調査では奈良時代の掘立柱建物、掘立柱塼、河川などとともに入古墳時代の溝2条を検出し、この溝からは川西福年IV期の円筒埴輪、盾、鳥形などの形象埴輪が出土している。

このように本調査地周辺の発掘調査では、奈良時代の遺構の他、古墳時代の遺構を検出していることから、この調査においても境界小路の検出や宅地内の様相を把握するとともに、奈良時代以前の遺構・遺物の広がりを確認することを目的として調査を行った。

II 基本層序

発掘区内の基本的な層序は、造成土の下に黒褐色土、灰褐色砂質土、暗灰褐色砂質土と続き、現地表下約1.6mで暗褐色茶土もしくは黄褐色土（地山）となる。遺構は全てこの暗褐色茶土、黄褐色土上面で検出した。暗褐色茶土は後述する奈良時代以前の溝の埋土である。遺構検出面の標高は概ね58.4mである。

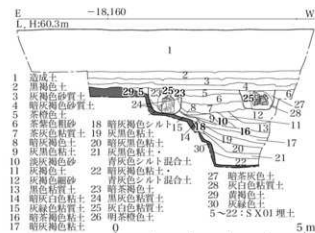
III 検出遺構

検出した遺構には、奈良時代以前の溝、奈良時代の四条条間南小路とその両側溝、掘立柱建物、掘立柱塼、土坑、井戸、江戸時代の土坑がある。

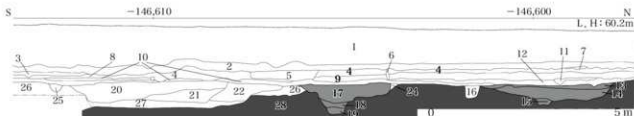


HJ 第607次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

奈良時代以前の遺構 S X 01 は幅4.3m以上、深さ2.2mの溝で、溝底は北東から南東にむけて低くなる。埋土は灰褐色から黒灰色の粘土が堆積しており（南壁土層図5～22）、流水が少なく、滲水していたような状態であったと考えられる。上層の埋土の堆積状況から、最終的には人為的に埋められたと思われる。遺物が出土しな



HJ 第607次調査 発掘区南壁土層図 (1/100)



1 造成土 5 青黄褐色土 9 青褐色土 13 暗灰褐色粘質土 17 暗茶灰色土 21 暗灰褐色粘質土 25 灰褐色土
 2 黒褐色土 6 明黒褐色粘質土 10 暗黄灰色砂質土 14 暗褐色土 18 暗茶灰色土 22 暗灰褐色粘質土 26 暗褐色茶土
 3 明黄灰色砂質土 7 暗黄褐色土 11 暗黄褐色土 15 灰褐色土 19 暗黒褐色粘質土 23 灰紫粘質土 27 茶褐色土
 4 黄褐色土 8 黄灰色土 12 明黄褐色粘質土 16 明黄褐色粘質土 20 明茶灰色土 24 灰黄色粘質土 28 黄褐色土
 (13～15はS D03埋土、17～19はS D04埋土、28は地山)

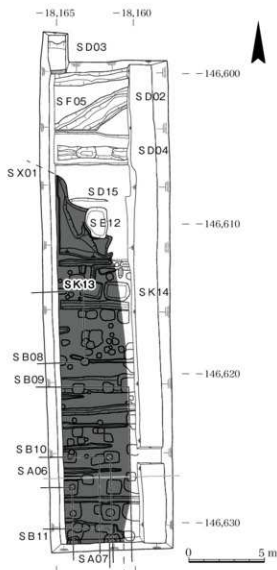
HJ 第607次調査 発掘区西壁土層図 (1/100)

H J 第 607 次調査 検出遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規模		桁行全長 m	梁行全長 m	桁行柱間寸法 m		梁行柱間寸法 m		廂の出 m	備考
		(桁行×梁行)									
SA 06	東西	2以上		2.7以上		2.7					S B 09より新しい
SA 07	南北	2以上		3.0以上		3.0					S B 10より古い
SB 08	東西?	2以上×3		1.5以上	4.5	1.5		1.5			
SB 09	南北?	5以上×2以上		10.4以上	3.3以上	2.4-1.8-2.4-1.8-1.8		3.3			
SB 10	東西?	1以上×3以上		-	3.6以上	-		1.8等間	2.4		掘形底に礎盤
SB 11	不明	1以上		1以上	東西2.4m以上	-		東西2.4			

遺構番号	掘形	井戸枠	主な出土遺物・備考
SE 12	東西1.7m×南北2.1m	残存しない	土師器・須恵器・黒色土器、奈良時代末頃に枠を抜き取り

遺構番号	平面形	平面規模 (m)	深さ (m)	主な出土遺物	備考
SD 03	東西溝	幅3.0、長さ4.8	0.5	8世紀:土師器・須恵器	四条条間南小路北側溝
SD 04	東西溝	幅2.2、長さ4.8	0.7~1.0	8世紀:土師器・須恵器	四条条間南小路南側溝
SK 13	隅丸方形	東西1.5、南北1.0	0.3	18世紀:陶器	
SK 14	隅丸方形	東西1.7、南北1.2	0.5	18世紀:陶器	



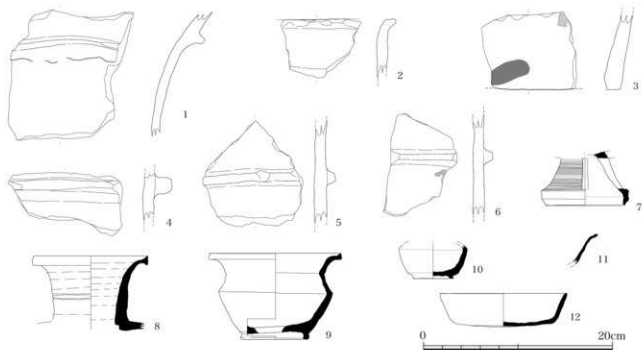
H J 第 607 次調査 発掘区遺構平面図 (1/250)

幅 1.5m、深さ 0.2m である。埋土から奈良時代の遺物が出土し、奈良時代に埋められたと考えられる。

奈良時代の遺構 SD 03 は四条条間南小路北側溝、SD 04 は同南側溝、SF 05 は四条条間南小路路面である。SD 03 は幅 3.0m、深さ 0.5m、SD 04 は幅 2.2m、深さ 0.7~1.0m。いずれも 2 段掘りで、下段部の断面は逆台形状である。SF 05 は路面幅約 3m、側溝中心間距離(側溝の最深部間距離)は 5.6m で、道路心の国土座標値は X=-146,602.5、Y=-18,163 である。SA 06 は東西方向の掘立柱列で、柱間は 2.7m。SA 07 は南北方向の掘立柱列としたが、建物の隅柱の可能性もある。柱間は 3.0m。SB 08 は南北棟建物の東半部と考える。桁行 3 間 (4.5m)、梁行 1 間 (1.5m) を検出した。柱間は桁行、梁行とも 1.5m。SB 09 は南北棟建物の一部と考える。桁行 5 間 (10.4m)、梁行 1 間 (3.3m) 分を検出した。発掘区外西、南に続く。柱間は桁行 1.8~2.4m、梁間 3.3m。SB 10 は東西棟建物の北東隅部と考える。発掘区外西、南へ続く。北・東面に廂が付く。身舎部分の梁行は 1.8m、廂の出は 2.4m。柱掘形の底に石や磚を用いて礎盤にしているものがある。掘形から 8 世紀後半の軒瓦が出土した。SB 11 は発掘区外西、南へ続く建物の北東隅と考えておきたい。柱間は 2.4m。SE 12 は東西 1.7m、南北 2.1m の平面隅丸方形で、深さは 1.1m である。湧水が激しいことから、枠が抜き取られた井戸跡と思われる。埋土から 8 世紀後半の土師器、須恵器、黒色土器が出土した。

江戸時代の遺構 SK 13 は東西 1.5m、南北 1.0m、深さ 0.3m、SK 14 は東西 1.7m、南北 1.2m、深さ 0.5m のいずれも平面隅丸方形の土坑で、SK 14 から 18 世紀中頃に降の信楽焼・唐津焼片が出土し、SK 13 も同時期と考えておきたい。

かったため、時期は不明である。SD 02 は北東-南西方向の斜行溝で、重複関係から後述する SD 04 より古い。



H J 第 607 次出土土器 (1/4)

IV 出土遺物

今回の調査では遺物整理箱にして 16 箱分の遺物が出土した。出土遺物には古墳時代の円筒埴輪、須恵器、奈良時代の土師器、須恵器、黒色土器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、磚、平安時代の灰軸陶器、江戸時代中頃以降の信楽焼・唐津焼片がある。

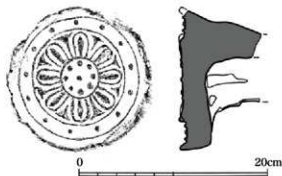
古墳時代の遺物

埴輪 発掘区の広範囲にわたって出土し、破片数で 50 点以上ある。出土した埴輪には円筒埴輪 (2～6)、朝顔形埴輪 (1)、形象埴輪 (盾?) があるが、いずれも小片で摩滅が激しい。円筒埴輪は口縁の形態がわかる例は 2 のみで、端部が外側に屈曲する。体部はヨコハケ調整が認められる例 (1) がある。厚さ 0.9～1.3cm、タガの高さは 0.8～1.4cm である。底部片 (3) の下端付近に黒斑がある。埴輪は川西編年 IV 期に位置づけられるものであろう。1 のみ S D 15 出土で、それ以外は S X 01 の発掘区南端部で出土したものである。

須恵器 高杯 (7) は S D 03 から出土した。短脚で、三あるいは四方向透しである。脚部外面をカキ目で調整している。田辺編年 T K 23 から T K 47 の幅で考えておきたい。(池田裕英)

奈良時代の遺物

瓦 瓦埴類は遺物整理箱で 6 箱分出土した。大半は丸瓦・平瓦であるが、軒丸瓦 4 点、軒平瓦 1 点、埴 10 点がある。軒丸瓦は全て柱穴から出土しており、S B 08 東側南北から 2 つ目の柱掘形から 6133 D a 種 1 点、6134 D



H J 第 607 次調査 出土軒丸瓦 (1/4)

種 1 点、6133Db 種 1 点 (『平城宮調査報告 X V』による分類の II 段階) が、同じく 3 つめの柱掘形から 6133 D 種 1 点、6801 A 種が出土した。図示した 6134 D 種は既存の瓦当文様を補うものである。今回の資料で弁数が単弁 8 弁であることと外区内縁の珠文数が 13 個であることが判明した。(山前智敬)

土器類 8～10・12 は須恵器である。8 は S D 14 から出土した長頸壺である。頸部に 2 条の沈線がみられる。頸部の接合方法は 3 段構成である。9 は S D 15 から出土した壺 H で、口径 13.8cm (復原)、器高 9.2cm。底部が穿孔されている。10 は S D 16 から出土した。ミニチュアの壺であろう。底部外面に「x」のへら記号がある。12 は S E 12 から出土した杯 A で、口縁部内外面ともロクロナデである。

平安時代の遺物 11 は S K 13 から出土した灰軸陶器碗である。内外面ともロクロナデで調整している。

V 調査所見

今回の調査で最も時期の古い遺構は、遺物が出土しな



発掘区全景 (南から)



S D 03・04・S F 05 (北西から)



S X 01 断面 (北から)



S B 08 礎盤・柱根 (西から)

かったため時期は特定できないが、重複関係からみて S X 01 である。第 550 次調査で奈良時代に埋められる河川 03 の西肩を検出しているが、その埋土が基本的に砂であるのに対して、S X 01 は粘土であり、埋土に違いがある。S X 01 がこの河川の東肩になるかどうかは現状では不明である。あるいは、埋土が黒色～灰褐色粘土であり、滞水していたようであることや調査区全域から埴輪が出土していること、付近で古墳が検出されていることなどから推測すれば、S X 01 が古墳の周濠である可能性も考えられるのかもしれない。

奈良時代の遺構では、当初の想定通り四条条間南小路を検出した。S D 03 と S D 04 の側溝中心間距離を溝の最深部で測ると 5.6m となる。小路の多くは幅員が約 6 m であり、それらと比べると若干狭い。溝から出土した遺物からみると奈良時代に埋まったと考えられる。S D 04 の南に幅 3 m 程の遺構のない部分があり、遺構としては残らないような閉塞施設があった可能性も考えられる。なお、発掘区西辺に想定された東二坊坊間西小路は検出されなかったことから、小路はさらに西にあるものと考えられる。発掘区南半部では奈良時代の掘立柱建物や掘

立柱脚を検出した。発掘区の幅が狭いため規模がわかるものはなく、敷地内の建物配置などはわからない。建物は S D 01 が埋まった部分に建てられており、地盤が弱かったためか柱掘形の底に石や磚などを置いて礎板にしているものがいくつかみられた。建物の位置や重複関係から 3 時期以上の宅地の変遷が考えられる。

平安時代以降の遺構としては江戸時代の土坑 (S K 13・14) があるが、湧水が激しく、東西方向の素掘り溝とともに水田耕作にともなう遺構と考えられる。

以上のことから、奈良時代以前、この地域には古墳や溝があったが、平城京造営に伴い土地が造成され、宅地化されたとみられる。そして都が長岡京に遷ってからほどなくして宅地としては使われることはなくなり、水田化が進んでいった様子を窺うことができる。(池田裕英)

- 1) 『4 平城京左京四条二坊三坪の調査 第 346 次』、『奈良市埋蔵文化財発掘調査概要報告書』平成 8 年度 1997 奈良市教育委員会
- 2) 『平城京左京四条二坊三坪の調査 第 550 次』、『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成 18 年度』2008 奈良市教育委員会

9. 平城京跡（左京四条一坊二坪）の調査 第609次

事業名	賃貸住宅新築	調査期間	平成20年7月7日～8月4日
届出者名	個人	調査面積	200㎡
調査地	奈良市四条大路三丁目966-1他	調査担当者	原田香織

I はじめに

調査地は、平城京の条坊復原によると左京四条一坊二坪の東半部北寄りに相当する。二坪の調査としては、平成7年度市HJ第328次調査で、弥生時代の溝・土坑、下ッ道、朱雀大路、四条条間路などを検出した際に二坪南西隅を確認したが、宅地内の調査は今回が初めてである。

調査は、道路敷設予定部分に東西40m、南北5m、面積200㎡の発掘区を設定し、平城京の宅地内の様相の確認を目的に行った。また、HJ第328次調査で、弥生時代の遺構を検出しており、奈良時代以前の遺構の有無の確認も合わせて行った。

II 基本層序

上から黒灰色砂質シルト（耕作土）、淡灰色砂質土（床土）、明黄茶灰色粘質土（床土）と続き、発掘区東端部では地表下約0.3mで奈良時代の遺構面である旧河川堆積土（古墳時代の遺物を包含する淡黄灰色シルトなど）上面に至る。標高は概ね61.85mである。しかし発掘区のほとんどの部分では、同一面からさらに淡灰茶色粘砂土（16世紀以前の遺物包含層）があり、旧河川堆積土上面の標高は概ね61.7mとなる。



HJ第609次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

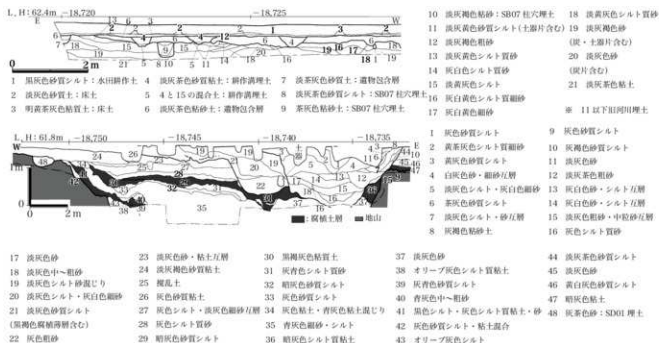
遺構検出は、旧河川堆積土上面で行った。

III 検出遺構

主な検出遺構には、古墳時代の河川に平行する溝（SD01）、奈良時代の掘立柱建物6棟（SB02～07・溝1条（SD08）・土坑2基（SK09・10）、整地1（SX11）、平安時代以降の耕作溝（SD12他）、16世紀以降の土坑5基（SK13～17）がある。

古墳時代の遺構

発掘区内は全面が旧河川堆積土に覆われており、そこから古墳時代の土器が出土したため、発掘区南半に東西



HJ第609次調査 上：発掘区南壁土層断面図 (1/100)・下：補足調査区北壁古墳時代河川土層図 (縦1/100 横1/200)

23 mの補足調査区を設定し、人力や重機によって掘削した。その結果、発掘区中央付近をほぼ北から南へ流れる河川を検出した。奈良時代の遺構検出面からの深さは東肩で0.7 m、西肩で0.4 mである。補足調査区北端での川幅は16.8 mであるが、河川を斜めに横断しているため、実際には少し狭くなる。埋土の主体が砂であり、湧水が激しく危険であるため、奈良時代の遺構検出面から深さ2.1 m(標高59.64 m)までしか確認できなかった。断面観察からは、全体がある程度埋まった段階で、2回ほど位置を東へ変えた小規模な流路があり、それらの埋土が最終的に周辺を覆った様子が窺える。河川掘削底付近で古墳時代前期前半の土師器、埋土上層から古墳時代中期中～後半の土師器・須恵器が出土した。また、上層に重複する小規模流路埋土や、発掘区全体を覆っている埋土から古墳時代中期後半～末の土師器・須恵器が出土した。

SD 01 河川の西側に平行する素掘りの溝。奈良時代の遺構検出面から東肩までの深さは0.4 m、西肩までの深さは0.2～0.3 m。溝幅1.0 m。溝底の標高は北端で61.13 m、南端で61.09 m。埋土は灰茶色砂。河川と共に埋没する。

奈良時代の遺構

SB 02～07 掘立柱建物6棟のいずれも発掘区外へ続

いており、全容が分かるものはない。各建物の詳細は一覧表にまとめた。

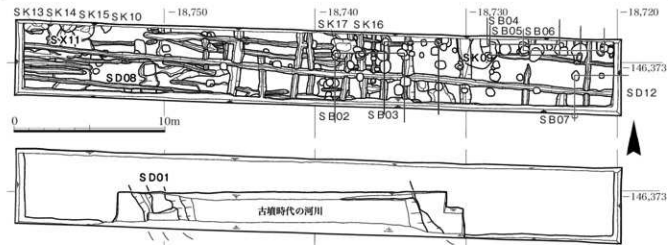
SB 02から8世紀後半の土師器杯または皿・甕、須恵器杯・杯または皿・杯蓋・壺・甕、SB 05から5世紀と6世紀の須恵器杯身、8世紀後半の土師器杯または皿・高杯・甕、須恵器杯または皿・壺・鉢・甕、SB 06・07から8世紀後半～末の土師器杯・皿・甕、須恵器杯・杯蓋・皿・甕が出土した。SB 03からはこれらに加えて8世紀末～9世紀初頭の黒色土器A類も出土した。SB 04は8世紀の土師器杯または皿・甕が出土したが小片のため詳細な時期は不明である。この他に丸瓦・平瓦、製塩土器、鉄滓が出土した。

柱穴は発掘区全体で検出したが、建物としてまとまらないものが多い。浅くて確認できないもの以外は、すべて柱を抜き取っている。また、東半にくらべて西半ではまばらになり、深さも東半では0.05～0.6 m、西半では0.05～0.35 mと浅くなる傾向がある。

SD 08 発掘区西側で検出した南から東へL字に曲がる素掘りの溝。溝の続きが南壁で確認できないことから南端はその直前まで、東端は耕作溝と重複する付近とみられる。遺構検出面からの深さは、南端で0.05 m、東端で0.15 m。埋土は淡灰色砂質シルトである。8世紀の土師

H J 第 613 次調査 検出遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規模		桁行全長 (m)	梁行全長 (m)	柱間寸法 (m)		備 考
		桁行×梁行				桁行	梁行	
SB 02	東西	3×1以上		4.5	1.8以上	1.5等間	1.8-	柱穴の深さ: 妻柱西0.35、東0.45、北側柱西から0.5・0.35・0.4・0.35 m。
SB 03	南北	2以上×2		3.0以上	3.6	1.5等間	1.8等間	柱穴の深さ: 妻柱0.15、西側柱北から0.3・0.3、東側柱北から0.55・0.5・0.4 m。
SB 04	南北	?×2			4.8		2.4等間	柱穴の深さ: 妻柱0.45、その他0.5・0.45 m、SB 05より新しく、SB 06より古い。
SB 05	南北	?×2			6.0		3.0等間	柱穴の深さ: 妻柱0.35、その他0.4・0.25 m以上、SK 09より新しく、SB 04より古い。
SB 06	南北	?×2			5.4		2.7等間	柱穴の深さ: 妻柱0.4 m、その他0.5・0.4 m、SB 04・05より新しい。
SB 07	南北?	1以上×1以上		2.4以上	1.8以上	2.4-	1.8-	柱穴の深さ: 妻柱0.1、その他0.4・0.4 m。



H J 第 609 次調査 上: 発掘区遺構平面図・下: 補足調査区遺構平面図 (1/250)

器杯または皿・甕、須恵器壺が出土したが、小片のため詳細な時期は不明である。

SK 09 発掘区東側で検出した土坑で、発掘区外北へ続く。掘形の断面形は、東半では碗形、西半では台形状に底が広がる。底面は平坦である。深さは0.5 m。埋土は茶褐灰色砂質土にブロック状の地山(灰白色シルト・暗灰色粘土)が混合したもので、上部の一部に淡灰茶色砂質土、底面の一部に薄く灰色粘質砂礫がある。7世紀末～8世紀初頭の須恵器杯蓋、8世紀の土師器杯または皿・甕、須恵器甕、丸瓦が出土した。SB 04・05よりも古い。

SK 10 発掘区西端で検出した土坑で、発掘区外北へ続く。深さは0.3 m。埋土は淡茶灰色細砂。重複関係からSX 11よりも古い。8世紀の土師器高杯・甕が出土した。

SX 11 発掘区西端で検出した浅い凹みで、南へ行くほど薄くなり、発掘区南壁の手前で終わる。深さは北東部で0.18 m、中央付近で0.07 m、南端で0.02 mである。埋土は北部が茶褐灰色土、南部が茶灰色砂質土。8世紀後半の土師器杯または皿・杯蓋・甕、須恵器杯・杯蓋・皿・甕、丸瓦・平瓦、製塩土器が出土した。この部分の地盤面は、旧河川埋土のシルト質砂で、かなり軟弱であるため、これを埋めて整地したのと考えられる。

その他の遺構

平安時代以降の耕作溝 東西方向と南北方向の溝がある。

東西溝は方眼方位西で北に振れる。南北溝は、東西溝とほぼ同角度に方眼方位北で東に振れるものと、北でやや西に振れるものがある。埋土は淡灰色～淡灰茶色砂質粘土である。すべて奈良時代の遺構よりも新しく、南北溝は淡灰茶色粘砂土よりも古いものと新しいものがあり、それよりも東西溝が新しい。さらに発掘区西部では東西溝よりも新しい南北溝がある。これらのうち、東西溝SD 12は、発掘区を横断して発掘区外に続いているもので、他の耕作溝が断面半月形で深さ0.15 m前後を中心にして0.05～0.25 mであるのに対して、底面は平坦で壁はほぼ垂直に立つ断面箱形をしている。深さは東端で0.25 m、西端で0.35 mである。埋土は上下2層に分かれ、上層は淡灰茶色砂質粘土、下層は茶灰色粘質土である。5世紀の土師器甕、須恵器杯蓋と8世紀後半～末の土師器杯・杯または皿・碗・高杯・甕、須恵器杯・杯蓋・皿・鉢・壺・壺蓋、8世紀末～9世紀初頭の黒色土器A類、丸瓦・平瓦、製塩土器、流紋岩製砥石、漆の塊が出土した。さらに他の耕作溝から軒丸瓦(型式不明1点)、軒平瓦(6721型式A種1点)、鉄釘、鉄滓、取瓶が出土した。

SK 13～17 SK 13～15は発掘区西側で、SK 16・17は発掘区中央付近で検出した。前三者は発掘区外北に続く。深さは番号の若い順から0.3 m、0.15 m、0.25 m、0.3 m、0.15 mである。埋土はいずれも灰色砂質土で、耕作溝や淡灰茶色粘砂土よりも新しい。SK 15・17か



発掘区全景(東から)



補足調査区全景(西から)

ら8世紀の土師器杯または皿・甕、須恵器杯・杯蓋・杯または皿・鉢・壺・甕、丸瓦・平瓦が、SK 16からはこれらに加えて14～16世紀の土師器羽釜・皿、16世紀の天目茶碗が出土した。SK 13・14からの出土遺物はなかった。

IV 出土遺物

古墳時代の河川から土器類、木製品、サヌカイト剥片、モモ核、ウリ種、奈良時代の各遺構や時期が下る耕作溝・土坑・遺物包含層から、奈良時代の瓦類(軒丸瓦6282 B a 1点・6703 A 1点・型式不明2点、軒平瓦6271 A 1点、6721 種別不明1点・型式不明2点)・土器類・金属製品・鋳造関係品、漆の塊、室町時代の土器類などが、遺物整理箱で28箱分出土した。これらのうち、古墳時代の河川から出土した遺物について記す。(原田香織)

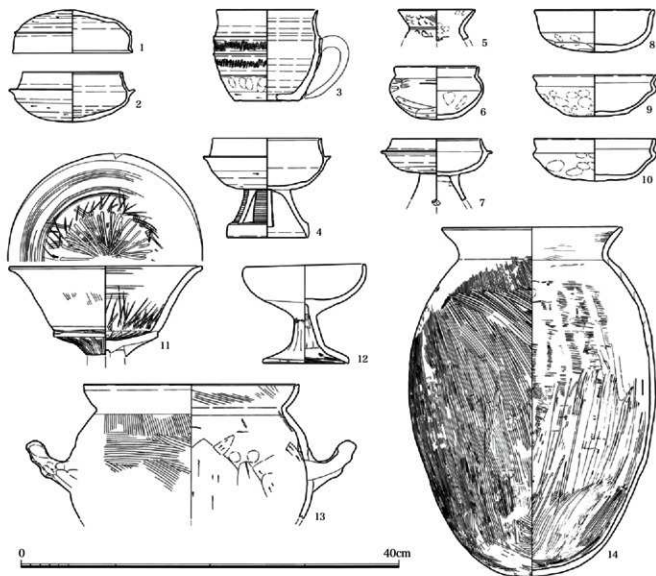
古墳時代の河川出土遺物

古墳時代の河川は層位と重複関係によって、西半部に

厚く土砂が堆積するA期と東半部に流路が偏るB期に分かれる。そして、A期の堆積層は中位に堆積する腐植土層を境にして上下層に分かれ、B期の堆積層は砂を主体とする下層とシルトが堆積する上層に大きく分かれる。ここからは遺物整理箱7箱分の須恵器・土師器、3箱分の木製品が出土した。

河川A期出土土器 須恵器杯蓋・把手付碗、土師器甕・高杯・壺・鍋・製塩土器が出土している。図示した須恵器把手付碗(3)と土師器高杯の有稜大型品(11)・鍋(13)は下層出土品である。11は硬質の密窯焼成品。

腐植土層出土土器は、土師器甕・高杯・製塩土器に限られる。土師器甕には球形と長胴形があり、土師器高杯には有稜大型品1点・碗形品(12)8点・形状不明10点がある。両者の比率は甕20%・高杯80%で、高杯の出土率が非常に高い点は平城宮下層S D 6030上層¹⁾と共通する。



H J 第609次調査 出土土器実測図(1/4)

製塩土器は器壁が薄く砂粒を含まない筒形の小型品で、外面ナデの破片が多いものの、外面タタキの破片も少量認められる。紀淡海峽周辺に分布するものと同類だろう。

なお、湧水が激しく河川底まで掘削できなかったが、下層の下位に堆積する砂層から庄内～布留式古相の土器が若干出土しており、旧河川の上層時期を推察させる。

河川B期出土土器 須恵器には、杯〔蓋26点・身35点・分別不明32点〕・有蓋高杯〔身6点・蓋4点〕・無蓋高杯4点・壺5点・甕42点・甕3点・器台2点の破片がある。その中心はTK 208～TK 47型式で、TK 216型式・MT 15型式の個体が少量認められる。下層からTK 216～TK 208型式、上層からTK 23～47型式が出土する傾向を看取できる。図示した須恵器有蓋高杯(7)は下層出土品、杯身(2)・杯蓋(1)・有蓋高杯(4)は上層出土品である。

土器器には甕〔41%〕・高杯〔37%〕・杯〔7%〕・鉢

〔1%〕・壺〔8%〕・器台〔1%〕・甕〔2%〕・鍋〔1%〕があり、他に製塩土器〔3%〕がある。鉢・器台は小型品で、A期と比べて甕の出現率が高くなり、杯が新たに加わる。甕では、長胴甕(14)の比率が75%を占める。高杯には、有稜〔32%〕・無稜〔16%〕・椀形〔51%〕があり、椀形が約半数を占める。杯は口縁部の形態によって、S字状に強く屈曲するa類(9・10)〔14点〕、内湾するb類〔4点〕、直立して短く外反するc類(8)〔1点〕、内湾した後に直立するd類〔1点〕に分類でき、a類の出土比率が高い。種別が判明する壺は少ないが、口縁部～肩部の外面に竹管文を付ける小型壺片(5)が1点認められる。図示した土器器甕(14)・杯(8・10)・壺(6)は下層出土品、杯(9)・壺(5)は上層出土品である。

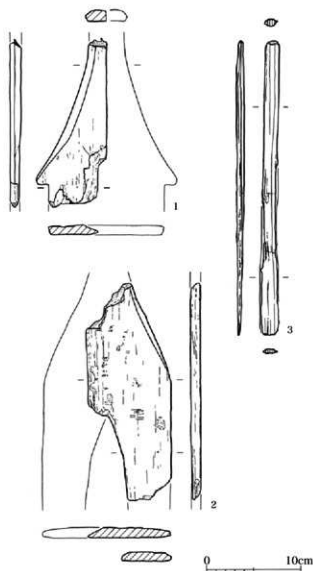
製塩土器はA期の出土品と同類である。(鎌方正樹) 河川出土木製品²⁾ 曲柄又鎌・鎌・農具柄・杓子形木器・杭・板材・カゴ残欠がある。1は曲柄平鎌D式または又鎌D式で、いわゆるナスビ形である。残存長17.9cm、残存幅7.4cm、厚さ1.1cm。2は曲柄又鎌である。CⅡ式かDⅢ式かは不明であるが、供伴土器の時期からDⅢ式となる可能性が高い。残存長22.9cm、残存幅9.1cm、厚さ1.2cm、刃部復原幅13.8cm。3は杓子形木器である。柄と身は直線を成し、身は柄よりもやや幅広く、両側や先に向けて薄く作る。全長31.1cm、柄幅1.5cm、身残存幅1.9cm、厚さ0.8cm。3点とも河川A期上層から出土した。

V 調査所見

今回の発掘調査で、古墳時代前期～中期後半の河川と溝を検出した。平城宮周辺で同時期の遺構が確認されているが、遺物の残存状態は非常に良好で、流されたことによる摩擦がほとんどみられないことから、調査地周辺にも同時期の遺構が存在する可能性が考えられる。当初想定した弥生時代の遺構はなかった。

奈良時代については、柱穴は浅いものが多く、全体的に後世の削平を受けていると考えられるが、発掘区西半においては特に柱穴が希薄で建物としてまとまるものがない。このことは、ある時期空地であった可能性を示すものとする。発掘区西端から朱雀大路東側溝までは約45mで、この部分は坪内北半中央付近に相当する。また、建物の重複関係から少なくとも3回の建て替えが行われていたことが判明し、二坪における宅地利用状況を解明する手掛かりが得られた。(原田香織)

- 1) 『平城京発掘調査報告 X』奈良国立文化財研究所 1981
- 2) 木製品の型式は『史料第36冊 木器集成図録 近畿原始編』奈良国立文化財研究所 1993による。



HJ 第609次調査 出土木製品実測図(1/4)

10. 平城京跡（右京三条二坊五坪）の調査 第610次

事業名	共同住宅新築	調査期間	平成20年7月31日～8月21日
届出者名	個人	調査面積	238㎡
調査地	奈良市尼辻北町327-1	調査担当者	大窪淳司

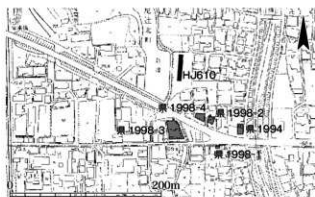
I はじめに

調査地は平城京の条坊復原では右京三条二坊五坪の北西部に相当する。同坪内南半部の調査¹⁾では、坪を東西に二分する奈良時代中葉の区画溝や柱列、近世の粘土採掘坑、秋篠川の旧流路等が見つかっている。本調査は、坪内北西部の様相確認を主目的として実施した。

なお、調査地は西から東へ緩やかに下がる傾斜地に位置し、農業用貯水池「長池」の東隣に位置する。付近の貯水池が谷地形に造成されていることから、調査地全体が谷地形内に位置する可能性も考えられた。

II 基本層序

発掘区内の基本層序は、現代の耕作土（暗灰色砂質シルト）の下に床土（橙色砂質シルト）、旧耕作土（灰白色砂質シルト）と続き、現地表下0.3～0.5mで黄白色シルト質極細砂の地山となる。ただし発掘区南側の一部では、旧耕作土の下に8世紀の土器片を含む黄灰色砂質シルトがあり、この直下で褐灰色シルトの地山となる。地山上面の標高は、67.4～67.5mで南西から北東へ緩やかに下がる。遺構検出は地山上面で行った。



HJ 第610次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

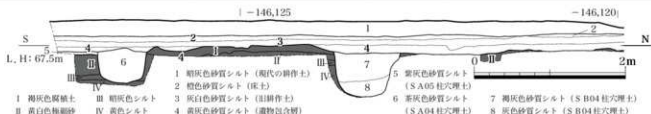
III 検出遺構

ほぼ発掘区全域に遺構が分布するが、地山の標高がやや高い発掘区南半で遺構密度が高い。検出遺構には奈良時代の掘立柱建物6棟、掘立柱列4条、土器埋納遺構1基があり、また、時期不明の土坑2基、溝2条がある。このうち掘立柱建物と柱列の概要については、表にまとめた。以下、主要な遺構について述べる。

掘立柱建物・柱列 掘立柱建物は、方位に対する主軸方向から、ほとんど振れないもの（SB02・06）、北

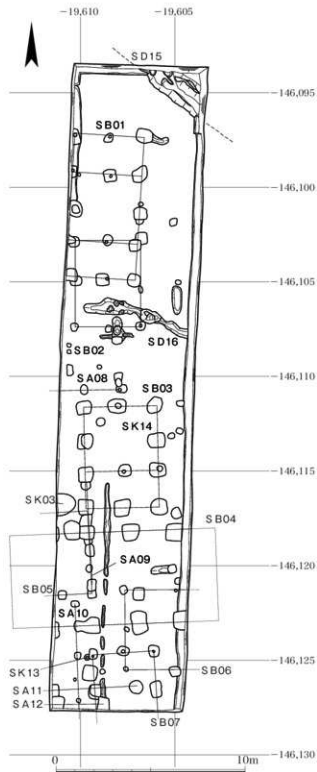
HJ 第610次調査 検出遺構一覧表

遺構番号	規模 桁行(間)×梁行(間)	桁行全長 (m)		梁行全長 (m)		柱間寸法 (m)		主軸方向	備考
		(m)	(m)	(m)	(m)	桁行	梁行		
SB01	2×4	7.5	3.6	2.1-1.8-1.8-1.8	1.8等間	N 03° 29' 0" E		間仕切りあり。重複関係から SB02 より新。	
SB02	2×2	4.8	3.6	2.4等間	1.8等間	南北			
SB03	2×3	1.5以上	1.8以上	1.5	1.8	N 01° 20' 20" W		間仕切りあり。重複関係から SA 09 より新。	
SB04	2以上×3以上	7.2以上	5	2.4等間	不明	E 02° 10' 30" N		柱抜き埋土から多量の瓦片と、8世紀後半～末の土器が出土。平行する櫛列の可能性あり。	
SB05	3×2以上	4.5	1.5以上	1.5等間	1.5	N 02° 37' 20" W		L字に曲がる柱列の可能性もあり。SB04 より古。	
SB06	1以上×2	2.7以上	4.2	2.7	2.1等間	E 00° 15' 00" N			
SB07	1以上×2	2.1以上	3.4	2.1等間	1.7等間	N 03° 58' 00" W		重複関係から SA 11 より古。	
SA08	1以上	1.9以上		1.9		E 00° 58' 50" N			
SA09	3以上	5.4		1.8		N 02° 23' 20" W		重複関係から SB05 より新、SB04 より古。	
SA10	2以上	5.1以上		2.7-2.4		N 02° 09' 40" W			
SA11	2以上	4.8以上		2.4等間		E 03° 52' 10" N		掘立柱建物の可能性もあり。	
SA12	1以上	2.4以上		2.4		E 01° 08' 20" N		掘立柱建物の可能性もあり。	



HJ 第610次調査 西壁土層断面図 (1/50)

に対し約3°東に振れるもの(SB01)、北に対し西、あるいは東に対し北に約1~4°振れるもの(SB03~05・07)の3群に分けられる。また柱穴の規模から、一辺0.6m以上の柱穴の建物(SB01・03・04)、一辺0.5m前後の柱穴が大半を占める建物(SB02・05~07)の2群に分けられる。柱穴の深さは0.1~0.3mと浅いものが多く、かなり削平を受けていると考えられるが、



HJ 第610次調査 発掘区遺構平面図 (1/200)

SB04のみ約0.6mと際だって深い。また大半の建物からほとんど遺物が出土しないのに対し、SB04のみ柱の抜取埋土から8世紀後半~末の土器と多量の瓦が出土するなど、他と異なった特徴が認められた。

掘立柱列は発掘区南半にあり、柱穴の規模が一辺0.5m以下の比較的小さい柱列(SA08・10)と、一辺0.6m前後の柱列(SA09・11・12)がある。柱穴の深さは、SA11が0.5m前後と最も深く、この他は0.1~0.2mと浅い。出土遺物には8世紀の土師器・須恵器の細片がある。また主軸方向の振れがSB03~05・07とはほぼ共通し、重複関係からSA09がSB04より古い。

SK13 発掘区南端部で検出した直径約0.3m、深さ約0.04mの円形土坑で、内部に8世紀の須恵器壺A・壺A蓋を埋納する。後世の削平により壺底部から約4cm分しか残っておらず、壺口縁部と蓋の破片は中から検出された。細片化した銅銭が表面に露出するため、X線撮影を実施したところ、壺内部に銅銭4枚(同開珎2・不明2)を確認した。銅銭の一部には布が付着し、壺底部には緑錆を一部に帯びた平面台形状の付着物(長さ5.5cm・最大幅4.2cm)が残存する。炭化種実1点が内部から出土した。重複関係からSB07より古い。



発掘区全景 (北から)



発掘区全景 (南東から)

SK 14 発掘区中央部で検出した直径約 0.5 m、深さ約 0.05 m の円形土坑である。底面の地山直上に直径約 3.5 m の円形礎墩があり、礎には直径 3～7 cm のチャート製円礎が用いられていた。時期を示す出土遺物がなく、時期不明である。

SK 15 発掘区南部の西壁際で検出した短径 1.1 m、長径 1 m 以上、深さ約 0.4 m の土坑である。埋土から 8 世紀の土師器の細片が出土した。

SD 16 発掘区北東隅で検出した幅約 2.0 m 以上、深さ約 0.6 m の溝の一部である。埋土は橙色細砂・茶灰色極細砂・灰色粗砂等の水成堆積層で構成され、少なくとも 4 時期に区分できるが、出土遺物はなかった。

SD 17 発掘区中央で検出した幅 0.3～0.9 m、深さ約 0.1～0.5 m の溝である。埋土は灰白色細砂の水成堆積層で、8 世紀の土師器の細片が 1 点出土した。

IV 出土遺物

遺物整理箱 3 箱分の遺物があり、その内訳は古墳時代の形象埴輪(盾形 1・不明 1)と 8 世紀の土師器・須臾器が 2 箱、8 世紀の丸瓦・平瓦が 1 箱である。大半が S B 04 からの出土であるが、他に S K 13 出土の須臾器壺 A・壺 A 蓋 1 点とこの内部に納められていた銅銭 4 枚(相同開跡 2、不明 2)がある。

V 調査所見

谷地形内部に位置するという当初の予想に反し、比較的浅い位置で多数の奈良時代遺構を検出し、銅銭 4 枚等を納めた土器埋納遺構を発見することができた。

掘立柱建物や柱列は、詳細な時期を特定できる遺物がほとんどないものの、重複関係から奈良時代末までに少なくとも 3 時期以上の変遷があることが分かり、とりわけ S B 04 が他と一線を画した建物であったことが窺える。また、建物位置からは、発掘区南半で S B 03・07 の西側柱列や S B 05 の東妻柱列、また S A 14 の柱列が南北一列に並ぶ。県 1998 の一連の成果から、この付近に坪の東西 1/4 ラインを想定できるが、このラインを重視する何らかの意図があったのかもしれない。

地形に関しては、発掘区北東隅へ向かって地山が緩やかに下がることや、調査地北側の水田が周囲より一段低いことから、調査地北側が谷地形となる可能性が高い。S D 15 が谷を流れる流路の一部となる可能性もあろう。したがって、長池は谷地形に造成されたのではなく、むしろ西から東へ延びる微高地の一部を掘削して造成されたと考えられる。また、遺構は地山の標高の高まりと共にその密度を増すが、これは近接する谷地形に制約を受けているのかもしれない。(大窪淳司)



SK 13 須臾器壺 A 出土状態(北から)



SK 14 (南西から)

- 1) 奈良県教育委員会 1995「平城京右京三条二坊五坪の調査」『奈良県遺跡調査概報 1994 年度』
奈良県教育委員会 1998「平城京右京三条二坊五坪の調査」『奈良県遺跡調査概報 1998 年度』



SK 13 須臾器壺 A X線写真(上が東南方向)

11. 平城京跡 (右京三条二坊十五坪)・菅原東遺跡の調査 第 611 次

事業名	個人住宅新築	調査期間	平成 20 年 8 月 6 日～8 月 20 日
届出者名	個人	調査面積	62㎡
調査地	奈良市西大寺国見町二丁目 10-13	調査担当者	中島和彦

I はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では右京三条二坊十五坪の中央部のやや北よりにあたり、また古墳時代の遺跡の菅原東遺跡とも重複する。調査地の西側隣接地の発掘調査では、平城京の遺構とともに古墳時代後期の埴輪窯跡群が確認された(市HJ第200次調査)。今回の調査は、平城京の遺構とともに、埴輪窯関連の遺構の検出が想定された。なお敷地が狭小なため、南北2回に分けて発掘調査を行った。

II 基本順序

発掘区内の層序は、上から近現代の造成土(土層図1・4、以下同じ)、耕作土(5)、淡茶灰色砂質土(6)、暗茶灰色砂質土(8)、黄橙色砂質土(10)、淡茶褐色砂質土(13)、茶褐色砂質土(14)とつづき、地表下約1.6mで明オリブ灰色砂の地山となる。地山面の標高は概ね70.3mである。14層は奈良時代の整地層と考えられ、多くの古墳時代後期の埴輪・土師器とともに、奈良時代の土器・瓦が僅かに出土する。淡茶褐色砂質土上で奈良時代の遺構を、地山上で古墳時代前期の遺構を検出した。

III 検出遺構

古墳時代前期の溝1条、奈良時代の掘立柱建物1棟・土坑1基・小柱穴21個を検出した。

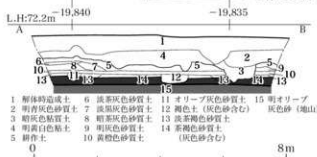
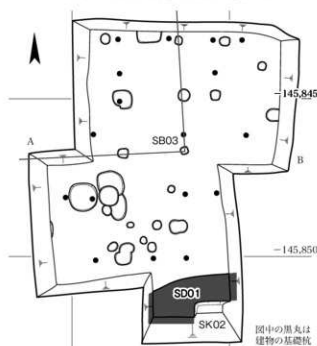
SD 01 発掘区南端で検出したやや斜行した東西方向の溝である。北肩から約1.2m分を抽出し発掘区外へつづく。深さは約0.5mで、最下層から土師器甕の破片が9点出土した。甕は口縁部が受口状で、底部は平底である。肩部に柳描直線文と列点文を施しており、近江系のものであると考えられる。古墳時代前期初頭頃のものである。

SK 02 東西約1.2m以上、南北約0.5m以上で、平面形は方形と考えられる。発掘区外東と南に続く。壁面はほぼ垂直で、深さ約0.8mまで掘削したが底には至らず、井戸の可能性もある。土師器杯1点・皿1点、須恵器杯A1点・甕C1点・壺1点と、円筒埴輪5点が出土した。土器は形態等から8世紀でも古い様相を示す。

SB 03 東西1間(1.95m)以上、南北2間(3.6m)以上の建物と考えられる。南東隅部を検出したのみで全容は不明。柱間は東西が1.95m、南北が1.8mである。



HJ 第 611 次調査 発掘区位置図 (1/5,000)



- 1 解体時造成土
- 2 明灰色砂質土
- 3 暗灰色粘質土
- 4 明白色粘土
- 5 耕作土
- 6 淡茶灰色砂質土
- 7 淡黒灰色砂質土
- 8 暗茶灰色砂質土
- 9 明黄色砂質土
- 10 黄橙色砂質土
- 11 オリブ灰色砂質土
- 12 褐色土(灰色砂含む)
- 13 淡茶褐色砂質土
- 14 茶褐色砂質土
- 15 明オリブ灰色砂(地山)

HJ 第 611 次調査 遺構平面図・発掘区中央部土層図 (1/120)

柱穴からは少量の土師器と須恵器が出土したが、詳細な時期は不明である。

この他に小柱穴を21個検出したが、発掘区が狭く建物としてはまとめられなかった。



発掘区北半部全景(北東から)



発掘区北半部全景(北西から)



発掘区南半部全景(北東から)



発掘区南半部全景(北西から)

IV 出土遺物

出土遺物には、土器類が遺物整理箱1箱分、・瓦類が1箱分ある。土器類には古墳時代前期の土師器甕、古墳時代後期の埴輪・土師器、8世紀の土師器・須恵器がある。瓦類には8世紀と考えられる丸瓦と平瓦があるが、全部で7点(635g)にすぎない。

V 調査所見

今回の発掘調査地は、埴輪窯跡群が立地する微高地の北東側の約2mほど低い谷部に位置しているが、灰原等の埴輪窯関係の遺構は確認できなかった。一方で古墳時代前期の溝が確認され、菅原東遺跡の広がり的一端を知る資料が得られた。奈良時代には整地後に掘立柱建物が築かれて、宅地として利用されていたことが確認できた。

(中島和彦)

12. 芝辻遺跡・平城京跡（左京二条大路）の調査 第612次

事業名	市道二条線拡幅事業	調査期間	平成20年8月20日～9月8日
届出者名	奈良市長	調査面積	68㎡
調査地	奈良市芝辻一丁目地内	調査担当者	武田和哉 松浦五輪美

I はじめに

調査地は、平城京条路復原では左京五坊付近の二条大路が想定される場所に該当する。周辺地に調査事例があり、二条大路北側溝と思われる遺構¹⁾や、東五坊坊間路などの条坊間連遺構²⁾などの遺構を検出している。加えて、前年度に調査地南隣の敷地で実施した市試掘07-4次では、弥生時代後期後半頃の河川跡を検出した。

こうした成果を踏まえて、本調査では奈良時代およびそれ以前の遺構の様相把握を目的として、調査を実施した。発掘区は5箇所計68㎡であり、西側から順に第1～第5発掘区とした。

II 基本層序

調査地は地形的にみて、東側の山地から西側の平野部分へとさしかかる付近に該当している。東から西へとゆるやかに下っており、基本層序も発掘区によって幾分異なる。ただし、5箇所の発掘区のうち、第2と第3発掘区、そして第4と第5発掘区の基本層序は概ね類似した様相を呈している。

第1発掘区の基本層序は、造成土以下、暗褐色土（旧耕作土）、暗灰色粘質土（旧床土）、茶灰色粘質土と続き、現地表下0.7～0.8mで、暗褐色または灰色の砂礫層に達する。砂礫層は数層に分かれていて、さらに下層へと続いている。砂礫層の上面の標高は67.4m前後である。

第2・3発掘区の基本層序は、造成土以下、黒褐色土（旧耕作土）、暗灰色粘質土（旧床土）、と続き、現地表下約1.2mで、青灰色シルトの層に達する。この層は厚さ約0.2m程度で遺物包含層であり、その下に青灰色粘土またはシルトの地山層がある。地山層はさらに数層に分かれているが、上面の標高は67.2～67.3mである。第2発掘区では青灰色シルト層の上面と地山上面の2面で遺構検出を実施した。

第4・5発掘区の基本層序は、造成土以下、暗黄褐色土、暗茶灰色土と続き、その下に暗茶灰色粘質土、暗灰色土が堆積している。暗灰色土には17～19世紀頃の陶磁器が含まれており、その下層に青灰色粘土またはシルトの地山層がある。地山上面の標高は67.6m前後である。

III 検出遺構

本調査では、河川跡2条を検出した。



HJ 第612次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

河川01は、第2発掘区の南東側で検出した。発掘区内では北肩部分を検出したのみで、残りは発掘区外へと続いている。第2発掘区の南約5mの地点で前年に実施した市試掘07-4次調査では、やはり同様な層相で、発掘区全体が河川の中に取りまざる状況であったので、この続きではないかとみられる。そのように仮定した場合、少なくとも幅員が7～8m以上であると推定される。深さは第2発掘区内では約0.95mである。埋土には木質が含まれており、弥生時代後期後半の土器が出土した。

河川02は、第2発掘区の北西隅および第1発掘区で検出した。幅は少なくとも20m以上はあるものと推測される。深さは少なくとも1m以上あり、埋土には拳大の砂礫や粗砂が多く含まれている。今回の調査では遺物が出土しなかったため、その時期を特定する直接の手掛かりはない。ただし、第2発掘区の内土層観察の結果から、河川02は地山の上に堆積する青灰色シルト層の上面で検出しているのので、前述の河川01より新しいことが判る。遺物はほとんど出土しなかった。

このほか、各発掘区において、小土坑や東西方向の素掘溝等を検出しているが、詳細な時期は不明である。

IV 出土遺物

第2発掘区の河川01から弥生時代後期後半の土器（甕）、第5発掘区の包含層から古墳時代の円筒埴輪（5世紀後半～6世紀）が出土した。また、各発掘区から8～9世紀前半の須恵器・土師器、丸瓦・平瓦の小片、16世紀の瓦質土器が出土している。この他に時期不明の土管・桃核等も合わせて、整理箱4箱分の遺物が出土した。

V 調査所見

今回検出した河川01は、北東から南東方向へと水流があったとみられ、弥生時代後期後半の遺物が出土したことは、周辺地域に当該時代の遺構が存在している可能性が高いことを示唆している。

また、河川02は想定される幅も比較的規模が大きく、東北東から西南西へと流れていくものとみられる。調査地の西南西約400mの地点では、過去の調査においてやはり幅員20m近い河川跡が確認されており、中世の時代の遺構と推定されている³⁾。本調査では河川02に関して

は詳細な時期の特定はできなかったが、河道の方向がほぼ合致しており、規模や埋土の様相も類似していることから、この河川跡の上流部分である可能性が高いと考えられる。(武田和哉)

- 1) 奈良市教育委員会『平城京跡(左京二条五坊五・十二坪)の調査 第444・448・456次』、『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成12年度』2002
- 2) 奈良県立橿原考古学研究所『平城京跡の調査 左京三条五坊七・八坪の調査』、『奈良県遺跡調査概報2001年度』(第1分冊) 奈良県教育委員会 2002 および 同『平城京左京三条五坊十坪』、『奈良県遺跡調査概報2003年度』(第1分冊) 2004
- 3) 奈良国立文化財研究所『平城京左京三条四坊七坪発掘調査概報』1980



第5発掘区全景(南より)



第4発掘区全景(西より)



第2発掘区全景(東より)



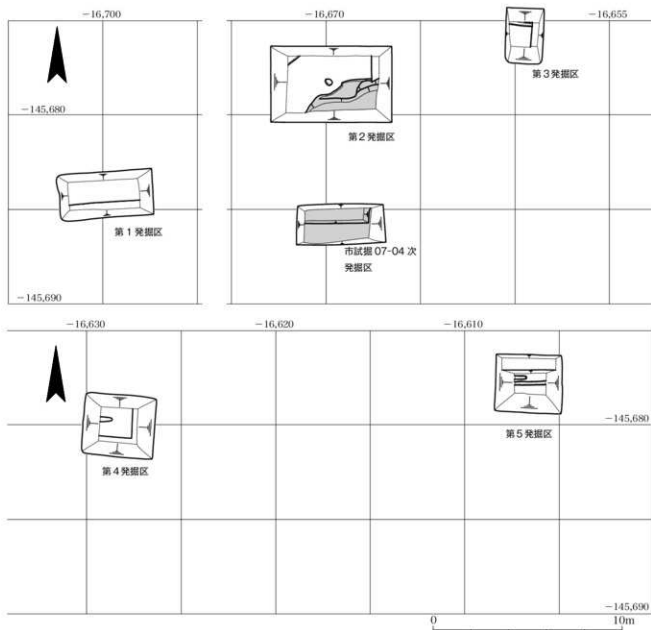
第2発掘区流路断面(北西より)



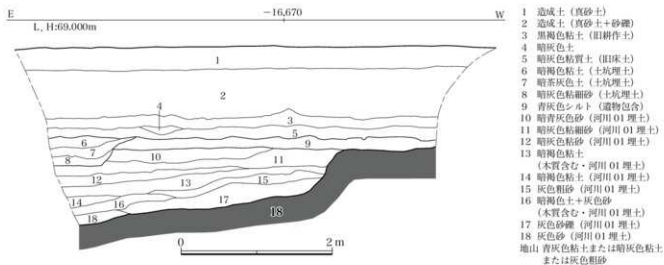
第3発掘区全景(北より)



第1発掘区全景(東より)



H J 第612次調査 発掘区遺構平面図 (1/200)



H J 第612次調査 第2発掘区南壁土層断面図 (1/50)

- 1 造成土 (真砂土)
 - 2 造成土 (真砂土+砂礫)
 - 3 黒褐色粘土 (田耕作土)
 - 4 暗灰色土
 - 5 暗灰色粘質土 (田床土)
 - 6 暗褐色粘土 (土坑埋土)
 - 7 暗茶灰色土 (土坑埋土)
 - 8 暗灰色粘細砂 (土坑埋土)
 - 9 青灰色シルト (遺物包含)
 - 10 暗青灰色砂 (河川O1埋土)
 - 11 暗灰色粘細砂 (河川O1埋土)
 - 12 暗灰色粘砂 (河川O1埋土)
 - 13 暗褐色粘土
(木質含む・河川O1埋土)
 - 14 暗褐色粘土 (河川O1埋土)
 - 15 灰色粗砂 (河川O1埋土)
 - 16 暗褐色土+灰色砂
(木質含む・河川O1埋土)
 - 17 灰色砂礫 (河川O1埋土)
 - 18 灰色砂 (河川O1埋土)
- 地山 青灰色粘土または暗灰色粘土
または灰色粗砂

13. 平城京跡（左京八条三坊十四坪）の調査 第613次

事業名	道路工事・宅地造成	調査期間	平成20年8月20日～9月18日
届出者名	株式会社 福岡屋住宅流通	調査面積	310㎡
調査地	奈良市東九条町491他	調査担当者	原田徹

I はじめに

調査地は、平城京の条坊復原によると左京八条三坊十四坪の北辺部西半に相当する。当坪は東市市町の一部に推定されている。昭和57・59年度に実施した東市跡推定地第3・5次調査で、十四坪西側の坪境小路とその東西両側溝を検出しているが、坪内における調査は今回が初めてである。調査は、宅地内道路敷設予定地に南北15m、東西41m、幅6mのL字形に発掘区を設定し、坪内の様相確認を目的に行った。

II 基本層序

上から黒灰色土（耕作土）、淡灰色砂質土、明茶灰色粘質砂、マンガンを含む灰褐色土、発掘区西端ではさらに褐灰色粘質砂と続き、東側は現地地表下0.3m（標高57.8m）で灰黄茶色砂質シルト、西側は現地地表下0.4m（標高57.6m）で灰褐色砂の地山に至る。遺構検出は地山上面で行った。

III 検出遺構

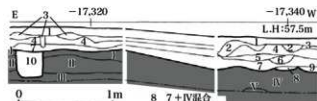
主な検出遺構には、奈良時代の掘立柱建物12棟（SB01～12）・掘立柱塼1条（SA13）・井戸2基（SE14・15）・南北溝1条（SD16）、平安時代以降の耕作に伴うとみられる素掘溝などがある。掘立柱建物・塼・井戸の詳細については次頁の表にまとめた。以下、各遺構の概要について述べる。



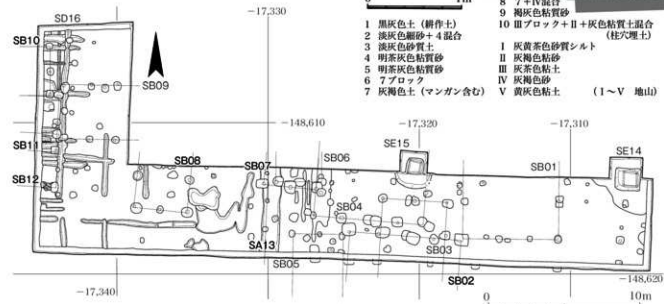
H J 第613次調査 発掘区位置図 (1/5,000)



発掘区全景（南西から）



- | | |
|-----------------|-----------------------------|
| 1 黒灰色土（耕作土） | 8 7+IV混合 |
| 2 淡灰色細砂+4混合 | 9 褐灰色粘質砂（柱穴埋土） |
| 3 淡灰色砂質土 | 10 IIIブロック+II+灰色粘質土混合（柱穴埋土） |
| 4 明茶灰色粘質砂 | I 灰黄茶色砂質シルト |
| 5 明茶灰色粘質砂 | II 灰褐色粘砂 |
| 6 7ブロック | III 灰褐色粘土 |
| 7 灰褐色土（マンガンを含む） | IV 灰褐色砂 |
| | V 灰黄色粘土（1～V 地山） |



H J 第613次調査 発掘区遺構平面図 (1/250)・発掘区南壁土層図 (1/40)

掘立柱建物・塀はすべて発掘区外に続いており、全容の分かるものはない。これらのうちS B 01・05・06・09・10の棟方向はほぼ国土方眼方位に沿っている。その他の棟方向については、国土方眼方位北でやや東に振れる。また、柱穴は浅いものが多く、遺構面が後世の耕作によって削平されているとみられる。S B 01・06の柱穴埋土から8世紀後半の土師器・須恵器、S B 02・04・11の柱穴埋土から8世紀後半から9世紀初頭の土師器・須恵器、S B 03・08・10の柱穴埋土から8世紀後半から9世紀初頭の土師器・黒色土器A類・須恵器が出土した。S B 05・07・09・12は8世紀代の土師器・須恵器が出土したが、小片のため詳細な時期は不明である。S A 13は出土遺物がなかった。

井戸S E 14は発掘区北東隅で検出し、掘形の北と東は

発掘区外に続く。掘形が広く歪で、掘形埋土に多くの遺物が含まれている点から判断すると、S E 14より古い井戸が重複している可能性がある。掘形埋土から8世紀後半の土器類、枠内埋土から7世紀の軒平瓦、8世紀後半～9世紀初頭の土器類・土馬・楡屑等が出土した。

井戸S E 15は発掘区中央付近で検出し、掘形の北は発掘区外に続く。井戸枠上部断削の際に発掘区を拡張したところ、井戸西側でS E 15より古い井戸の掘形の一部を確認した。S E 14と同様にほぼ同位置で井戸の掘り直しが行われていたことがわかる。掘形埋土から8世紀後半の土器類、枠内埋土から7世紀の軒平瓦、8世紀後半～9世紀初頭の土器類・倉車・砥石等が出土した。

南北溝S D 16は、発掘区西端付近で検出した素掘りの溝である。11.5 m分を検出したが、北は発掘区外に続く。

H J 第613次調査 検出土物一覧表

遺構番号	棟方向	規模		桁行全長		梁行全長		柱間寸法 (m)		備考
		桁行・梁行	深さ (m)	(m)	(m)	桁行	梁行	桁行	梁行	
S B 01	東西?	3 × 1 以上	6.3	2.4 以上		西から 2.4-2.1-1.8		2.4		S B 02 より古い。 柱穴の深さ 0.05 ~ 0.3 m
S B 02	東西	4 × 1 以上	7.4			西から 1.9-2.0-1.7-1.8				S B 01・03・05 より新しい。 柱穴の深さ 0.1 ~ 0.5 m
S B 03	南北	2 以上 × 2	2.1 以上	4.2			2.1	2.1 等間		S B 02 より古い。 柱穴の深さ 0.2 ~ 0.25 m
S B 04	東西	4 × 1 以上	5.4	1.8 以上			1.8 等間	1.8		S B 07 より古い。 柱穴の深さ 0.2 ~ 0.25 m
S B 05	南北	1 以上 × 2		3.3				西から 1.8-1.5		S B 02 より古い。 柱穴の深さ 0.1 ~ 0.15 m
S B 06	南北	1 以上 × 2		3.0				1.5 等間		S B 07 より古い。 柱穴の深さ 0.2 ~ 0.35 m
S B 07	南北	1 以上 × 2		3.5				西から 1.8-1.7		S B 04・06 より新しい。 柱穴の深さ 0.3 ~ 0.35 m
S B 08	南北	1 以上 × 2	2.1 以上	3.55			2.1	西から 1.75-1.8		柱穴の深さ 0.2 ~ 0.4 m
S B 09	東西	2 以上 × 2	3.45 以上	3.5		西から 1.75-1.7		1.75 等間		S B 12・S D 16 より古い。 柱穴の深さ 0.2 ~ 0.55 m
S B 10	東西	1 以上 × 2		3.3				北から 1.8-1.5		柱穴の深さ 0.25 m
S B 11	東西	1 以上 × 2		3.6				北から 1.7-1.9		S D 16 より新しい。 柱穴の深さ 0.3 ~ 0.4 m
S B 12	東西	1 以上 × 2		3.4						妻柱遺存しないため不明 柱穴の深さ 0.25 ~ 0.3 m
S A 13	南北	2 以上		3.6 以上				1.8-1.8		柱穴の深さ 0.2 m

遺構番号	掘形			井戸枠		水溜・遺構施設等	主な出土遺物・備考
	平面形	平面規模 (m)	深さ (m)	構造	内法 (m)		
S E 14	不整形	東西 4.0 以上 × 南北 3.6 以上	2.25	方形縦板 組間柱横 棧留	東西 0.84 × 南北 0.85	一部埋 敷き	掘形) 8世紀後半:土師器杯・皿・内面漆付着皿・高杯・甕、須恵器杯蓋・皿・壺・甕、平瓦 枠内) 7世紀:軒平瓦(重瓦紋)、8世紀:丸・平瓦、8世紀後半~9世紀初:土師器杯・皿・高杯・鉢・甕、黒色土器A類杯、須恵器杯・杯蓋・皿・壺・鉢・甕、製塩土器、ミニチュア壺、土馬、楡屑、曲物底取・楕板、刀子、椀形石、サヌカイト剥片、鱗、桃核・梅核・瓜・瓢箪の種子
S E 15	隅丸方形	東西 2.5 × 南北 2.4 以上	3.1	方形縦板 組間柱横 棧留	東西 0.7 × 南北 0.67	埋 敷き	掘形) 8世紀後半:土師器杯・皿・高杯・壺・甕、須恵器杯・杯蓋・壺・鉢、平瓦 枠内) 7世紀:軒平瓦(重瓦紋)、8世紀:丸・平瓦、8世紀後半~9世紀初:土師器杯・壺、杯蓋・皿・高杯・壺・甕、黒色土器A類杯、須恵器杯・杯蓋・皿・壺・甕、製塩土器、円盤型土製品、輪引口、倉車、面物底取、建築部材、サヌカイト剥片、砥石、桃核

幅は約0.4m、遺構検出面からの深さは北端で0.12m(底面標高57.39m)、南端で0.09m(底面標高57.43m)である。溝底は、ほぼその深さの範囲で凸凹しており、南北どちらに向かって低くなるのかは明確ではない。埋土は灰黄茶色粘質土で、8世紀後半の土師器・須恵器の破片が出土した。重複関係からS B 09・12が壊された後に掘削され、S D 16が埋まった後にS B 11が建てられたことがわかる。

平安時代以降の耕作溝は南北方向のものと東西方向のものがある。埋土は灰褐色粘質土や砂質土で、出土する土器類はほとんどが8世紀のものであるが、ごくわずかに9世紀半ば～後半の土師器、12世紀の瓦器碗を含む。

IV 出土遺物

遺物整理箱10箱分の遺物が出土し、サマカイト割片、7世紀の軒平瓦(重弧紋)・8世紀の丸瓦・平瓦、8世紀後半～9世紀初頭の土師器・須恵器・黒色土器A類・製塩土器・土馬・ミニチュア甕・墨書のある檜扇・斎串・曲物・建築部材・用途不明木製品・刀子・砥石・モモ核・ウメ核・瓜の種子類、9世紀半ば～後半の土師器、12世紀の瓦器などがある。

このうちS E 14 井戸枠内出土の檜扇は、骨板が16枚

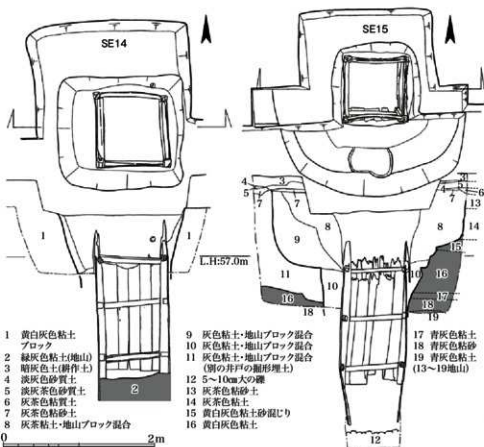
分以上確認でき、そのうちの1枚には、「…麻呂」「…刀四刀自女」などの人名の一部とみられる文字が墨書されている。墨書は骨板上端に文字の途中から残っており、もともと一枚の木簡を再利用して製作されたと考えられる。長さ22.55cm以上、幅2.85cm、厚さ0.05cm。

V 調査所見

掘立柱建物の新古は、重複関係からS B 09→S B 12→S D 16→S B 11、S B 06→S B 04→S B 07となる。このうちS B 11は、同時期のS B 10との位置関係から併存はあり得ないので、少なくとも奈良時代には4回の建て替えが行われていたとみられ、重複関係や出土遺物から、国土方眼方位に沿っている建物の方が、東に振れている建物より古い傾向にあることがわかった。また、奈良時代後半に造られて未頭廃絶した2基の井戸が、14.5mほど離れて東西に並んでおり、これらの間に宅地の境界が存在した可能性が考えられる。そしてS D 16では、溝が掘られた前後とも溝に重複して建物の端が揃えられており、この付近にも宅地の境界があった可能性が考えられる。このことから奈良時代後半には、十四坪内に東西に分割して宅地利用されていたと推測できる。

(原田香織)

□ 麻呂
□ 刀四刀自女



S E 14 出土木簡赤外線写真
(撮影:奈良文化財研究所 中村一郎氏)

H J 第613次調査 井戸S E 14 (左)・S E 15 (右) 平面・立面図 (1/50)

14. 平城京跡（左京三条六坊十二坪）・奈良町遺跡の調査 第614次

事業名 店舗新築
届出者名 株式会社藤本忠商店
調査地 奈良市小西町29-1・2・3

調査期間 平成20年9月8日～9月12日
調査面積 30㎡
調査担当者 池田裕英

I はじめに

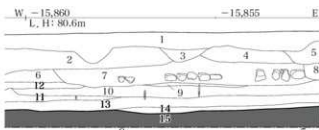
本調査地は、平城京の条坊復原では左京三条六坊十二坪のほぼ中央部にあたる。十二坪では、昭和60年度に市HJ第89次調査、平成元年度に市HJ第176次調査、平成5年度に市HJ第228次調査、平成18年度に市HJ第556次調査が行われている。それらの調査では奈良時代の井戸、平安時代の掘立柱建物・土坑、室町時代の土坑・溝・石組遺構、江戸時代の土坑・井戸を検出している。

II 基本層序

発掘区内の基本的な層序は、造成土、暗黄茶色土・灰褐色土混合土、暗茶緑色土・暗灰褐色土混合土、暗灰色粘質土、灰色粘土、暗灰褐色シルトと続き、現地表下約2.1mで黄灰色砂礫の地山にいたる。暗灰褐色シルトから8世紀の土器が出土した。遺構はすべて地山上面で検出した。地山上面の標高は78.2～78.4mで、東から西に向かって緩やかに下る。

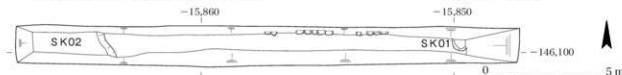
III 検出遺構

検出した遺構は土坑2基である。SK01は発掘区東端で検出した径0.5m以上、深さ0.3mの平面円形の土坑、SK02は発掘区西端で検出した東西3m以上、南北0.8m以上、深さ0.3mの土坑である。いずれも12世紀後半の土器が出土した。なお、時期は不明であるが北壁の中間に東西方向の石列があり、南端部で面を描いている。

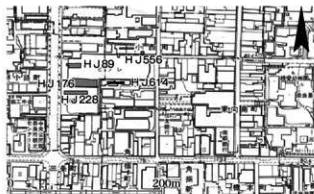


- 1 黒灰色土
2 暗黄茶色土・灰褐色土混合土
3 灰黒色土
4 黄茶色砂質土
5 灰褐色土・暗黄茶色土混合土
6 暗茶緑色土・暗灰褐色土混合土
7 暗灰褐色土・暗黄茶色土混合土
8 暗灰褐色粘質土
9 暗灰色粘土
10 暗灰色粘質土
11 暗灰褐色土
12 灰色粘土
13 暗灰褐色シルト
14 灰褐色砂質土
15 黄灰色砂礫

HJ 第614次調査 発掘区北壁土層図 (1/1000)



HJ 第614次調査 発掘区遺構平面図 (1/150)



石列あるいは石組遺構の南端部と考えられる。

IV 出土遺物

遺物整理箱2箱分の遺物が出土した。土坑から出土した12世紀後半の土師器の他に、包含層から出土した8世紀の土器、18～19世紀の土師器・陶磁器、瓦類がある。

V 調査所見

今回の調査では平安時代の土坑を部分的に検出したが、それ以前の時期については地山直上の暗灰褐色シルトから奈良時代の土器が出土したのみで遺構はなかった。周辺の調査で奈良時代の遺構が検出されているところもあるが、発掘区が狭いこともあり、今回の調査から奈良時代の様相を推測することは困難である。更なる周辺での調査の増加を待ちたい。

(池田裕英)



さで敷き整地をしている。

SD 03 発掘区中央で検出した南北方向の素掘溝である。H J 第313次調査で検出した東五坊坊間路東側溝の延長上にあることから、続きの溝と考える。幅2.4 m、深さ0.3 mで15.4 m分検出している。埋土は褐色土一層で埋没している。8世紀後半の土師器、須恵器、丸瓦、須恵質の土製紡錘車が出土した。溝心の座標値はX=-147,038.67 m、Y=-16,446.73である。

SA 04 SD 03の東側に沿って2列の小柱穴の柱列を確認している。柱列の柱穴は直径0.2 m程度で、不定の間隔に並んでいる。2列の間隔は1.5 mである。検出状況から、これらの柱列の間の空間には十一坪の宅地を限る築地塀が想定され、柱列は構築時の添柱と考える。

SB 05・SB 06 発掘区中央やや東寄りの位置で検出した柱列である。添柱列の間で検出していることから築地塀に取り付く門であると考える。ともに南北1間の柱列で柱間はSB 05が1.5 m、SB 06が1.65 mである。柱穴は重複せず、新古関係は不明である。

SD 07 発掘区北東隅で検出した南北方向の素掘溝である。東肩は発掘区外東側になり、幅1.92 m分、長さ3.4 m分を確認した。埋土は上から淡褐色土、灰色粘質土、褐灰色粘質土の順に堆積し、最上層から8世紀後半の遺

物が出土した。SA 04と並行することから、雨落溝であると考えられる。また、溝は門に想定されるSD 05・06付近で途切れていることから、この位置に東西道路が取り付く可能性がある。

IV 出土遺物

遺物整理箱で2箱分が出土した。SD 01からは弥生時代前期の壺(口縁部が欠失)1個体分、サヌカイト片が出土し、溝、柱穴などから8世紀後半の土師器甕・高杯・皿、須恵器壺、甕・杯身・杯蓋、丸瓦、須恵質の土製紡錘車が出土した。

V 調査所見

当初の目的どおり、東五坊坊間路およびその東側溝を検出することができた。また、東五坊坊間路東側の十一坪を限る築地塀の存在をうかがわせる添柱列、雨落溝を確認し、東西方向の坪内道路が取り付く可能性も想定できた。

さらに、今回弥生時代前期の壺を含む溝SD 01を検出した。これまで発掘区西方の大森町において中期～後期の遺構を確認しているが、前期は今回が初例である。周辺を含めた弥生時代集落の変遷を考える上で重要な成果を得ることができた。

(秋山成人)



発掘区全景(北から)

16. 平城京跡（左京四条四坊十坪）の調査 第616次

事業名	個人住宅新築	調査期間	平成21年1月7日～2月4日
届出者名	個人	調査面積	143㎡
調査地	奈良市三条宮前町6-12	調査担当者	中島和彦

I はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京四条四坊十坪の北東部にあたる。調査地の東側の十五坪では、奈良市教育委員会が広範囲にわたる発掘調査を行っており、古墳時代の流路、奈良・平安時代の建物群、中近世の粘土探掘土坑群などを確認している。今回の調査地でも同様な遺構の検出が想定された。なお造成土が厚く排土置き場を確保しつつ、東から順に西に第1～5発掘区を連続して設定し調査を行った。

II 基本層序

発掘区内の層序は、上から現代の造成土(0.6m)、耕作土(0.1m)、灰色砂質土(0.2m)、淡灰色砂質土(0.05m)、暗オリーブ灰色粘土(0.05m)とつづき、地表下約1.0mでオリーブ灰色粘土または明黄橙色粘土の地山となる。地山面の標高は概ね62.4mである。遺構面はオリーブ灰色粘土上面であるが、遺構検出は地山上面で行った。なお暗オリーブ灰色粘土からは縄文時代の石鏃が1点出土した。

III 検出遺構

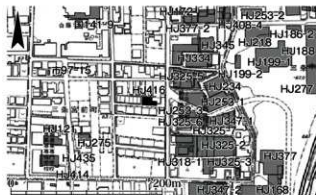
奈良時代の掘立柱建物2棟、掘立柱列1条、鎌倉時代以降の粘土探掘土坑群、素掘小溝を検出した。

SB 01 東西5間(9.75m)、南北1間(3.0m)以上の北廂付東西棟建物で、発掘区外南側につづく。柱間は東西が1.95m等間、廂の出は3.0mである。柱掘形は深さ約1mで、柱はすべて抜き取られている。柱穴の1つから、8世紀中頃～後半頃の土器が出土した。

SB 02 東西4間(6.6m)、南北1間以上の掘立柱建物で、発掘区外南側につづく。柱間は西から1.5-1.8-1.8-1.5mで、柱間が不等間の東西棟建物の北側柱列、または東西廂付の南北棟建物の北妻柱列と考えられる。重複関係からSB 01より古い。なお両建物は、南北方向の中軸線が同じである。

SA 03 柱穴を一部欠くが東西4間以上の掘立柱列で、柱間は3.0m等間である。柱穴からの遺物は小片のため時期不明である。

SX 04 複数の粘土探掘土坑が重複したもので、重複が複雑で個々の規模は不明である。深さは最大約0.7mで、底面は凹凸がはげしい。土坑群は、明黄橙色粘土を採掘



HJ 第616次調査 発掘区位置図(1/5,000)

しており、粘土が分布しない発掘区西側と南側には及ばない。埋土から8～9世紀の土師器杯・皿・甕、須恵器杯・蓋・壺・甕、丸瓦、平瓦、12～13世紀の瓦器椀、常滑産陶器甕が出土した。

IV 出土遺物

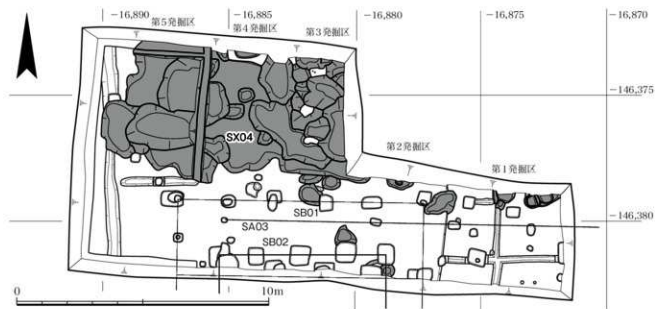
出土遺物には縄文時代の石鏃1点、8～9世紀の土師器・須恵器・製塩土器、瓦類、12・13世紀の土師器・瓦器・国産陶器が遺物整理箱2箱分、土器の多くは小片で、SX 04出土のものが多い。

V まとめ

今回の発掘調査では、当初の想定通り奈良時代の掘立柱建物、列、中世の粘土探掘土坑群が検出された。掘立柱建物は2時期以上あることがわかるが、発掘区が狭く全容は不明である。(中島和彦)



発掘区全景(第1発掘区 北から)



HJ第616次調査 免掘区遺構平面図 (1/150)



免掘区全景 (第2免掘区 北から)



免掘区全景 (第3免掘区 北から)



免掘区全景 (第4免掘区 北から)



免掘区全景 (第5免掘区 北から)

17. 平城京跡（右京一条二坊十二坪）の調査 第617次

事業名	共同住宅新築	調査期間	平成21年2月9日～3月12日
届出者名	近鉄不動産株式会社	調査面積	135㎡
調査地	奈良市西大寺園見町 2137-86、-88	調査担当者	秋山成人

I はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では右京一条二坊十二坪の南東にあたる。今回の調査対象地の西半では、昭和63年に市HJ第160次調査を実施しており、古墳時代から奈良時代にかけての流路、奈良時代以降の土坑を確認している。また、調査地から約70m南西の位置で平成14年に実施した市HJ第485次調査でも奈良時代以前の流路、奈良時代の土坑、平安時代の土坑を確認している。さらに南側で、平成15年度に実施した市HJ第504次調査でも、弥生後期から古墳時代にかけての溝、奈良時代の西二坊坊間西小路とその両側溝、掘立柱建物・掘立柱列・土坑を検出している。これまでの調査例から周辺には奈良時代以前の流路、遺構が点在し、奈良時代の遺構も見つかっているが、その遺構密度は低い。

今回の調査は、周辺の調査結果を考慮し、奈良時代以前の遺構の有無の確認と十二坪内の宅地の様相確認を目的として実施した。

II 基本層序

発掘区内の基本的な層序は、上から造成土(0.15m)、黒灰色土(0.5m)、赤灰色土(0.15m)の順で堆積し、現地地表下0.8mで黄灰色砂質土の地山に至る。発掘区西端は、旧建物の基礎掘削で遺構面が失われている。

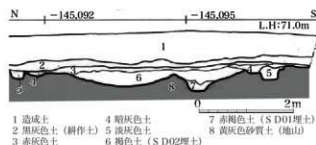


HJ第617次調査 発掘区位置図(1/5,000)

遺構検出は地山上面で行った。遺構検出面の標高は70.0mである。

III 検出遺構

古墳時代前期の溝SD 01・02、土坑SK 03、奈良時代後半の掘立柱建物SB 04・05、掘立柱列SA 06～



HJ第617次調査 発掘区東壁土層図(1/80)

HJ第617次調査 検出遺構一覧表

遺構番号	平面形	平面規模(m)	深さ(m)	主な出土遺物・備考		
SD 01	斜行溝	幅0.6～1.0、長さ10.7以上	0.3～0.4	古墳時代前期の土師器壺・鉢		
SD 02	斜行溝	幅2.3～3.5、長さ8.3以上	0.3	古墳時代前期の土師器壺・鉢 SD 01より新しい		
SK 03	不整形	長径1.8×短径0.8	0.2	古墳時代前期の土師器壺		
遺構番号	棟方向	規模		柱間寸法(m)		備考
		桁行×梁行(m)	桁行全長(m)	桁行	梁行	
SB 04	南北?	2以上×2	4.2以上	2.1	2.1	掘立柱建物 柱穴掘形一辺0.5～0.8m、深さ約0.3m。
SB 05	南北	1以上	5.0以上	1.8以上	3	柱穴掘形一辺0.8m、深さ0.2m。
SA 06	南北	2以上	3.6以上		1.8	柱穴掘形一辺0.35m、深さ0.1～0.3m。
SA 07	東西	3以上	7.2以上		2.4	柱穴掘形一辺0.2～0.3m。
SA 08	東西	1以上	2.1以上		2.1以上	柱穴掘形一辺0.6m、深さ0.4m。重複関係からSB 04より新しい。
遺構番号	掘形			井戸枠		主な出土遺物・備考
	平面形	平面規模(m)	深さ(m)	構造	内法(m)	
SE 09	隅丸方形	東西1.6×南北1.3	1.1	板取り	0.6	8世紀後半：土師器杯・碗・甕・須恵器壺・甕
SE 10	不整形円形	一辺3.3 改修後径2.5	2.4	方形板葺組 隔柱横棧留	0.9	8世紀：須恵器壺・甕・甕・ 8世紀後半：土師器高杯・須恵器高杯・壺・甕・平瓦・ 軒平瓦6675A、6664C、4期平瓦「理」1点 (枠内) 8世紀中頃：土師器皿 8世紀後半：碗・甕・須恵器杯・ 甕
				改修後0.6		

08、井戸SE 09、10を検出した。なお、検出遺構については一覧表にまとめ、井戸SE 10について詳述する。

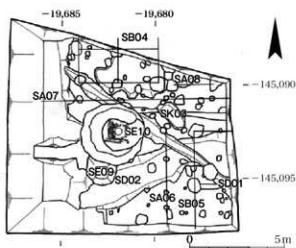
SE 10 発掘区中央部に検出した方形縦板組隅柱横棧留の井戸。掘形は二重になっており、当初の井戸枠はすべて抜き取られ新たに造り替えられていることがわかる。造り替えた後、西側の側板が崩落したため、隅柱と横棧を加えて補修をしている。

IV 出土遺物

遺物整理箱で38箱分が出土した。SD 01・02、SK 03から古墳時代前期の布留式土器古段階の壺・鉢・甕が出土した。SB 04、SA 05～08、SE 09・10などから8世紀後半の土師器碗・皿・杯・甕、須恵器杯身・杯蓋・壺・甕、軒丸瓦6311 A a型式1点、軒平瓦6664 C・6675 A各型式1点、刻印平瓦「理」b種1点、丸瓦・平瓦、磚が出土した。

V 調査所見

今回の調査では、隣地の調査成果と同様に古墳時代前期の溝・土坑を確認した。調査地より約400m南西方向の一带は古墳時代の菅原東遺跡が広がり、それとの関連性も考慮される。また、井戸SE 09・10の重複関係・造り替え・補修行為から、同じ場所で長期間井戸の利用が継続したと考えられ、奈良時代後半に重点的に宅地利用されていることがわかる。掘立柱建物・塀は発掘区外に続くものが多く、詳細不明である。(秋山成人)



H J 第617次調査遺構平面図 (1/200)



井戸SE 10 (南から)



発掘区全景 (東から)

18. 平城京跡（右京北辺三坊六坪）の調査 第618次

事業名	宅地造成	調査期間	平成21年2月2日～2月5日
届出者名	吉川商事	調査面積	40㎡
調査地	奈良市西大寺北町一丁目358番4他	調査担当者	武田和哉

I はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では右京北辺三坊六坪の南西隅付近に該当している。同坪内での調査は過去に例がなく、遺構の様相把握を目的として、調査を実施した。

II 基本層序

発掘区内の基本層序は、黒灰色粘土（水田耕作土）以下、暗灰色粘質土（水田床土）、茶褐色粘質土、暗褐色粘質土（遺物包含層）と続き、現地表下約0.3～0.4mで黄褐色粘土の地山に達する。遺構検出作業は地山上面において実施した。地山上面の標高は、78.3～78.4mである。

III 検出遺構

検出した主要な遺構には、奈良時代の土坑1基、柱列2条などがある。以下、その概要について記す。

SK 01は発掘区の北側で検出した土坑。平面ほぼ円形を呈し、径約1.6m、深さ約0.4m。埋土から、8世紀の土師器・須恵器が出土したが、ごく僅かであり、かつ小片のため、詳細な時期については不明である。SA 02は発掘区の中央やや北寄りで見出した東西方向の柱列。発掘区内では1間分を検出したのみである。柱間は4.2m、柱穴はともに一辺約0.5～0.6mで、検出面からの深さは0.6～0.8mである。SA 03は発掘区の中央やや南寄りで見出した東西方向の柱列。発掘区内では1間分を検出したのみである。柱間は3.6m、東側の柱穴は一辺約1.0mの方形で、検出面からの深さは0.6mである。西側の柱穴には沈下防止のための根石や、瓦・埴の破片が埋め込まれていた。

IV 出土遺物

遺物は、8世紀後半～9世紀初めの土師器・須恵器・丸瓦・平瓦・埴、12世紀頃の輸入青磁（龍泉窯系）、時期不明の製塩土器・輪羽口・鉄滓・凝灰岩切石が、遺物整理箱



発掘区全景（西より）

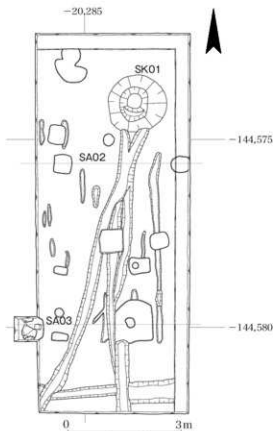


H J 第618次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

2箱分出土した。

V まとめ

本調査では、奈良時代の遺構の存在が確認された。SA 03の柱穴は比較的規模が大きく柱間も長いことから、大型建物の一部である可能性も考えられる。（武田和哉）



H J 第618次調査 発掘区遺構平面図 (1/100)

19. 平城京跡（左京六条一坊七坪・東一坊坊間路）の調査 第619次

事業名	宅地造成	調査期間	平成21年3月9日～3月19日
届出者名	個人	調査面積	185㎡
調査地	奈良市柏木町157-1他	調査担当者	武田和哉

I はじめに

調査地は、条坊復原によると左京六条一坊七坪東辺中央付近および東一坊坊間路に相当する。同坪内での調査は過去に例がなく、遺構の様相把握を目的として西・東・南の3発掘区を設定し調査を行った。

II 基本層序

基本層序は各発掘区により異なる。東発掘区では、造成土の下に黒灰色粘土（旧耕作土）、暗褐色粘土（奈良時代遺物包含）と続き、地表下約1.0mで淡灰色シルトまたは黄灰色粘土の地山となる。地山上面の標高は55.9～56.1mである。西発掘区では、造成土の下に黒灰色粘土（旧耕作土）、暗灰色土（旧床土）、黄灰色シルト、暗灰色粘土と続き、地表下約1.0mで淡灰色シルトまたは黄灰色粘土の地山となる。地山上面の標高は55.9～56.0mである。南発掘区では、造成土の下に黒灰色粘土（旧耕作土）、暗灰色土（旧床土）、暗茶褐色粘質土および暗灰色粘土（8世紀の遺物包含）と続き、現地表下1.8～1.9mで淡灰色シルトの地山となる。地山上面の標高は55.4～55.5mである。

遺構検出作業は、各発掘区とも地山上面で実施した。南発掘区は西・東発掘区に比べ地山上面の標高が低く、その上に暗茶褐色粘質土の層が堆積していた。当該層は、奈良時代以降の堆積とみられ、その下面では遺構を確認していない。また西発掘区では遺構は検出できなかった。

III 検出遺構

主要な遺構は、東発掘区で検出した奈良～平安時代前半の溝2条である。S D 01は、東発掘区の西側で検出した南北方向の溝。発掘区内では約3m分を検出し、幅約2.0m、深さ約0.5m。埋土は概ね3層に大別され、うち下の2層は溝本体部分の埋土を構成する。他方、上の1層は溝の中央から西側にかけて薄く広がる幅広い堆積である。上層には遺物がほとんどなく、下層からは8世紀後半～9世紀前半の土師器・須恵器、丸・平瓦が出土した。S D 02は、東発掘区の中央やや東寄りでも検出した南北方向の溝で、S D 02との間に約2mの間隔がある。発掘区内では約3m分を検出し、幅は約6m、深さは約1.55m。埋土は砂と粘土が主体で数層に分かれており、どの層からも8～9世紀前半の丸・平瓦、土師器・須恵器が



H J 第619次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

出土。溝の最深部分の国土座標値は、X = -147,409.0 Y = -18,582.0である。

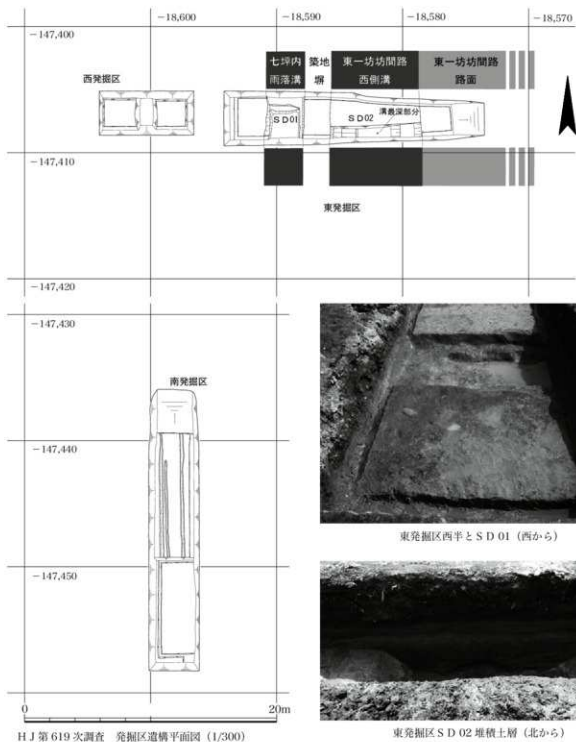
IV 出土遺物

出土遺物は比較的数量少なく、遺物整理箱4箱分が出土した。遺物包含層から8世紀の軒丸瓦（型式不明）が出土したほか、8世紀後半～9世紀前半の土師器・須恵器、丸・平瓦がある。これらのほとんどはS D 01・02から出土したもので、瓦類が大半を占めている。

V まとめ

本調査で検出した溝S D 02は、周辺での調査例や調査地近隣の遺存地割の様相などから、東一坊坊間路の西側溝とみられる。S D 01は七坪内の築地塀の雨落ち溝である可能性があり、S D 02と01の間には築地の存在が想定される。双方の溝から出土した遺物の大半が瓦類であることも、この想定を補強する事実であると言えよう。

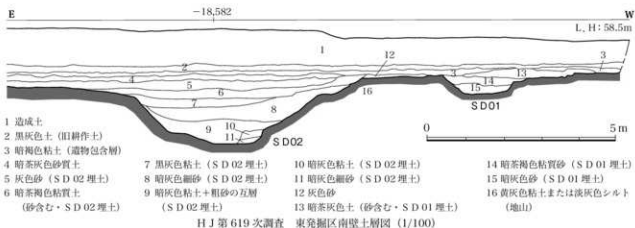
東一坊坊間路は、平城宮南面の壬生門に通じる条坊道路であり、平城京内の他の坊間路に比べて広い幅員で設定されていることが知られている。さらに、その西側溝はこれまでに京城内で確認された条坊側溝の中でも大規模な部類に属する。過去の京城内での調査でこの西側溝は4地点で検出されている。そのうち3地点は本調査地の近辺であり、その様相は類似する。残りの1地点は、本調査地より約1.7km北の平城宮南面に近い地点で検出されているが、その幅と深さの規模は本調査で検出したS D 02と大差がない。西側溝は宮内からの主たる排水路の役割を果たすとともに、京内においても幹線的な排水路の機能を果たしていたとみられる。（武田和哉）



東発掘区西半と S D 01 (西から)



東発掘区 S D 02 堆積土層 (北から)



- | | | | |
|---------------------------|---------------------------|--------------------------|------------------------|
| 1 造成土 | 7 黒灰色粘土 (S D 02 埋土) | 10 暗灰色粘土 (S D 02 埋土) | 14 暗茶褐色粘質砂 (S D 01 埋土) |
| 2 黒灰色土 (旧耕作土) | 8 暗灰色細砂 (S D 02 埋土) | 11 暗灰色細砂 (S D 02 埋土) | 15 暗灰色砂 (S D 01 埋土) |
| 3 暗褐色粘土 (遺物包含層) | 9 暗灰色粘土+粗砂の互層 (S D 02 埋土) | 12 灰色砂 | 16 黄灰色粘土または淡灰色シルト (地山) |
| 4 暗茶灰色砂質土 | | 13 暗茶灰色土 (砂含む・S D 01 埋土) | |
| 5 灰色砂 (S D 02 埋土) | | | |
| 6 暗茶褐色粘質土 (砂含む・S D 02 埋土) | | | |

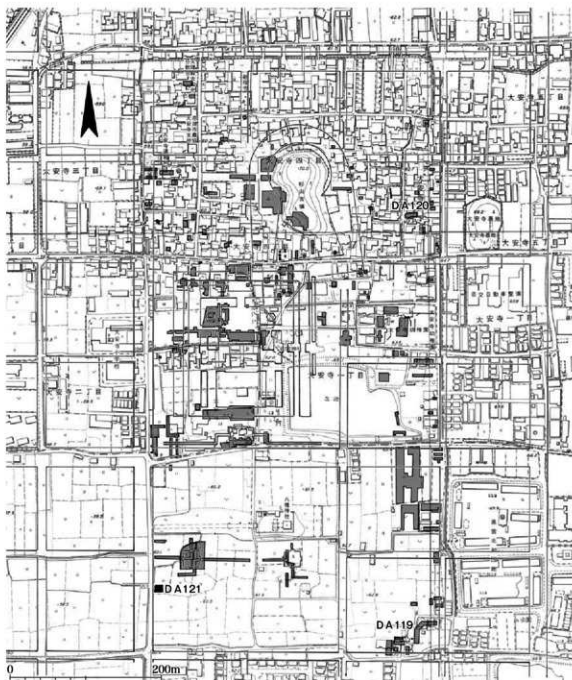
20. 史跡大安寺旧境内の調査

奈良市教育委員会では、平成20年度に史跡大安寺旧境内において計3件の調査を実施した。第119次調査は「花園院推定地」で、第120次調査は「賤院推定地」にあ

る。第121次は「塔院」の西塔跡の南の位置で実施した。いずれも現状変更許可申請に係る調査で、ともに条件付き許可となったものである。

平成20年度 史跡大安寺旧境内 発掘調査一覧表

調査次数	事業内容	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
DA第119次	農業用倉庫新築	東九条町1376-2他	H20.6.2～6.6	4㎡	安井
DA第120次	住宅の除却及び新築	大安寺四丁目1103-2他	H20.12.10～12.19	24㎡	原田香
DA第121次	史跡大安寺旧境内保存整備事業	東九条町1348-1他	H21.2.23～3.19	103㎡	松浦



史跡大安寺旧境内の調査 発掘調査位置図 (1/5,000)

(1) 花園院地区の調査 第119次

I はじめに

調査地は花園院推定地の南辺東寄りにあたり、現状は畑地である。周辺では過去に5件の調査が実施されており、すぐ西側で実施した市DA第17～19次調査(昭和59年度)・41次調査(平成元年度)では、水田面下1.0～1.5m(標高61.0～61.4m)の地山上面で奈良時代の七条条間路北側溝とみられる東西溝や平安時代後半の土坑が検出されている。

今回の調査は、奈良時代の遺構面の様相の確認を目的として実施した。

II 調査の概要

発掘区内の層序は、畑地の耕作土(厚さ0.1m)及び盛土(厚さ0.6m)、旧水田の耕作土(厚さ0.1m)及び床土(5層あり、厚さ1.2m)の下で沖積層の地山上面となる。旧水田の床土は灰色あるいは黄褐色砂質シルトで斑鉄がみられ、8世紀以降の土器片を含む。

奈良時代の遺構面はオリブ褐色砂質シルトの地山上面で、その標高は概ね61.5mである。地山上面で遺構検出を行ったが、遺構はなかった。

III 出土遺物

遺物整理箱で1箱分あり、その内訳は旧水田の床土から出土した8世紀の須恵器甕・杯B、土師器甕と18世紀後半頃の磁器碗である。いずれも小片である。

IV まとめ

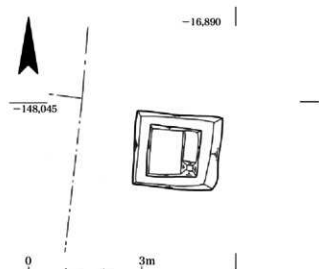
近接する調査地とほぼ同様に、旧水田面下1.3mで奈良時代の遺構面である地山上面を確認した。調査地一帯の地山上面の標高の差が小さいことから、奈良時代の旧地形はかなり平坦であったと推察される。(安井宣也)



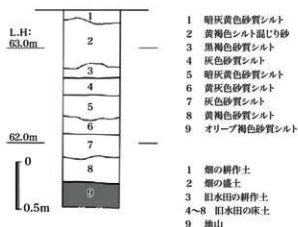
調査地全景(東から)



発掘区全景(北から)



DA第119次調査 発掘区平面図(1/100)



DA第119次調査 発掘区土層模式図(1/40)

(2) 賤院地区の調査 第120次

I はじめに

調査地は、平城京条坊復原では左京六条四坊十坪中央部にあたり、賤院推定地区内の杉山古墳東側に相当する。この付近での過去の調査はどれも規模が小さく、奈良時代の遺構は、調査地南西のDA第22次調査で井戸1基、調査地南東のDA第40次調査で坪境小路西側溝、調査地東向かいのDA第107次調査で掘立柱建物1棟が確認されている。また、奈良時代の可能性がある遺構として、調査地北東のDA第59次調査の溝1条がある。

今回の調査は、奈良時代の遺構面の深さと、その残存状態の把握を目的として実施した。

II 基本層序

層序は、近・現代の造成土(暗褐色土、暗茶褐色土)が厚さ0.2~0.4mあり、発掘区南側ではその直下が地山(黄灰色粘質シルト)となる。北側南寄りでは、造成土と地山との間に固く締まった灰黄色砂質土が厚さ0.1mほど堆積している。発掘区全体では現地表下0.3~0.4mで地山上面となり、その標高は63.55~63.65mである。遺構検出は地山上面で行った。

III 検出遺構

検出した遺構には、奈良時代の可能性が高い柱穴6基(P01~06)、溝1条(SD07)、井戸1基(SE08)、室町時代以降の溝2条(SD09・10)、井戸2基(SE11・12)、土坑1基(SK13)があり、この他に近・現代の擾乱がある。なお、遺構保存の観点から、遺構は完掘せず一部を掘削するにとどめた。

奈良時代の遺構

柱穴は平面隅丸方形で、P03の平面規模は一辺0.85m、それ以外の平面規模は一辺0.4~0.6mである。これらのうち、P03を断割ったところ、深さは0.25mで、柱は抜き取られていた。掘形埋土から土師器小片が出土したが、残存状態が悪く、詳細な時期は不明である。どの

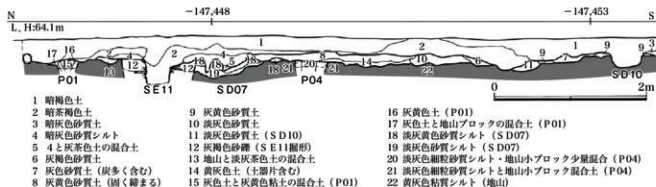


発掘区全景(北から)

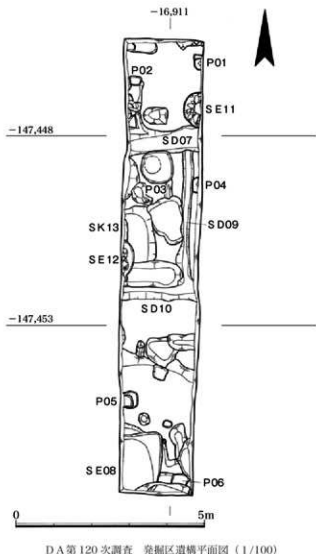
柱穴も、層序や重複関係から他の遺構よりも古い。発掘区が狭く、ほとんどが建物としてまともでないが、P01とP04は3.2mの間隔で南北方向に並んでおり、掘立柱建物の一部になる可能性がある。

SD07は発掘区北側で検出した東西溝で、幅0.65m、深さは0.25mである。埋土から8世紀の土師器甕、須恵器杯・甕、鬘土瓦・平瓦が出土した。重複関係からP03より新しく、後述のSD09よりも古い。発掘区西壁沿いに同じ埋土で深さ0.03mのごく浅い窪みが北に延びているが、溝となるのかは発掘後に続くため不明である。

SE08は発掘区南西隅で検出した井戸の一部で、平面形は隅丸方形になると思われる。西壁沿いに幅0.3m、



DA第120次調査 発掘区東壁土層図(1/50)



井戸 SE 08 検出状況 (東から)



井戸 SE 11 検出状況 (西から)

深さ0.4mほど掘り下げた結果、枠が抜き取られていることが判明した。埋土から5世紀後半の埴輪、8世紀の土師器杯か皿・甕、須恵器杯・杯蓋・壺・甕、製塩土器、丸・平瓦、流紋岩製砥石が出土した。

室町時代以降の遺構

SD 09は発掘区北側東寄りで検出した南北溝で、後述のSD 10に南端で接続する。幅は0.25～0.35m、深さは0.05mで、SD 07より新しい。

SD 10は発掘区中央で検出した東西溝である。幅は0.5m、深さは0.15mで、SD 09よりも深い。SD 09・10とも8世紀の土師器小片・平瓦・埴のほかに15世紀後半の青磁椀、瓦質土器挿鉢が出土した。固く締まった灰黄色砂質土層よりも古い。

SE 11は発掘区北側で検出した瓦積みの井戸で、東半部は発掘区外となる。井戸枠材に用いられている瓦は布目がなく、成形時に離れ砂を使用し、燻さず焼成した平瓦・丸瓦である。掘形は平面円形で直径1.0m、枠内径は0.42mで、枠内上部は近・現代の造成土で埋まっている。掘

形から土師器小片とともに14世紀後半から15世紀前半にかけての土師器羽釜が出土した。

SE 12は発掘区中央で検出した石組みの井戸で、井戸枠の裏込めの一部しか検出できなかったため、詳細は不明。掘形は近・現代の造成時に壊されている。15世紀の瓦質土器火鉢、土師器小片が出土した。

SK 13は発掘区中央で検出した平面隅丸方形の土坑で、発掘区外西へ続く。検出面からの深さ0.15mで、西壁の際で0.25mとさらに一段深くなる。8世紀の土師器小片・須恵器・平瓦、14世紀半ばの土師器羽釜が出土した。重複関係ではSE 12より古い。

IV 出土遺物

出土遺物には、前述の各遺構から出土したもののほか、攪乱、造成土などから埴輪、8世紀の土師器・須恵器・丸瓦・平瓦、14～15世紀の土師器・丸瓦・平瓦、15世紀後半の土師器・瓦質土器、17～19世紀の土師器・陶磁器・丸瓦・平瓦・椀瓦が合わせて遺物整理箱3箱分ある。その大半は小片のため、詳細な時期は不明である。

V まとめ

調査地周辺では、後世の削平により奈良時代の遺構が残存しないことも多い。今回、残存状態は悪いが、奈良時代の可能性が高い柱穴や井戸・溝を検出することができた。今後も資料の蓄積を期待したい。(原田香織)

(3) 塔院地区の調査 第121次

I はじめに

史跡大安寺旧境内保存整備事業に係る塔院地区の調査は平成13年度から着手し、今回が7回目の調査となる。これまで塔跡を中心に調査してきたが、今回は寺地の西を区切る東三坊大路と塔院敷地との関連を探るべく、想定される築地塼等の区画施設の位置を知ることと目的として調査を実施した。

調査地は西塔跡の南西約50mに位置し、塔院敷地の西辺中央からやや南に下がった場所にあたる。現在の旧境内西端を南北に走る道路は、東三坊大路を踏襲したものと考えられ、道路に若干の湾曲があるが、現況は遺存地割りをよく表しているものと見られる。この状況に基づき、調査区はできるだけ現道路に接近させる状態で設定し、一部についてはさらに道路際（歩道の側溝）まで補足確認をおこなった。

II 基本層序

基本層序は、水田耕作土である黒色土約0.2mと灰色土約0.05m以下、濁黄灰色粘質土が0.05～0.15m堆積し、礫混じり橙褐色土の地山に達する。しかし、発掘区内の地山面は西に向かって下っており、発掘区西端では旧河川が南北に貫流している。そしてこの旧河川および河岸部を覆うように、整地土と考えられる褐色シルト質土が最大0.4mの厚さで堆積しており、発掘区東半の地山面と高さを含わせ、敷地を平坦にした意図をうかがわせる。この層には瓦・須臾器・土師器・黒色土器A類が含まれており、9世紀末以降に行われた整地と考えられる。また、この整地範囲付近のみ、上部に最低3度の砂層の堆積が認められ、この付近が常に流路となっていた状態がうかがえる。

地山上面の標高は発掘区東端付近で約59.4m、旧河川東肩部で約59.1m。整地土上面は、範囲の東端で約59.3m、発掘区西端でも約59.3mである。

III 検出遺構

整地層上面レベルで、掘立柱跡跡1条、掘立柱建物跡1棟、溝3条、土坑1基、整地層下で溝1条、土坑1基および旧河川1条を検出した。遺構については一覧にまとめ、補足点を記す。

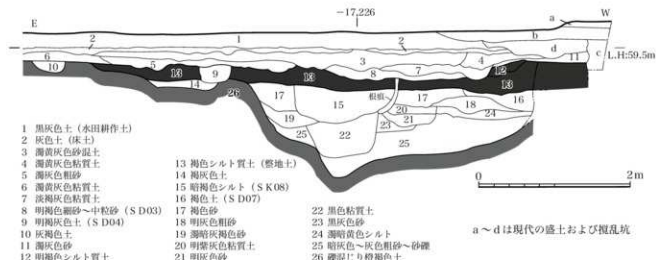
掘立柱建物・柱列については可能性として示したが、実態および時期は不明確である。

溝S D 03は、整地層上面から掘り込まれた状態をみせるが、あるいは整地作業の段階で窪んだ状態に成形された可能性も考えられる。埋土には明灰色の細～中粒砂が充填しており、かなりの水流があったものと判断される。砂層中に含まれる土器・瓦は小片が多く、埋没時期の詳細は不明である。

溝S D 05と土坑S K 06との切り合い関係は極めて不明瞭であったが、溝が土坑より古いと判断した。溝の埋土には弥生土器が若干含まれるが、主軸は南北方位にっており、出土遺物のみで弥生時代に帰属させることには慎重な検討を要するものと思われる。

S K 08は土坑の一部と考えられ、埋土は締まりのよい暗褐色シルトである。弥生土器片が僅かに出土したが、時期は不詳である。

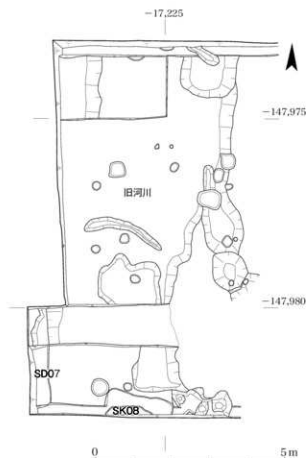
旧河川は幅5m以上、深さ0.9m前後で発掘区西端を南北に貫流している。東肩のみ確認したが、底面が発掘区内で西へ上がり始めている部分もあることから、狭いところでは幅5m程度であろう。断面を観察すると堆積した砂層は数層に分別可能で、なかには粘質土がレンズ



D A 第121次調査 南壁西半土層図 (1/50)



DA 第121次調査 遺構平面図 (1/100) 網掛けは整地範囲



DA 第121次調査 整地層下遺構平面図 (1/100)

状に嵌入したり、層界からの掘り込みが認められたりする部分もあり、流水と滞水が繰り返された状況がうかがえる。堆積土の大半を占める灰色粗砂中には弥生時代前期～古墳時代初頭の土器が含まれている。

IV 出土遺物

出土遺物は整理箱8箱分で、主な遺物には石鏃、弥生土器、古式土師器、8～9世紀と考えられる須恵器、土師器、瓦がある。河川出土の土器は摩滅しているものが多いが弥生前期およびV様式の壺と判断されるものを認めている。整地層からは、少量であるが杯とみられる黒色土器A類が出土し

ている。なお、軒瓦は確認していない。

V 調査所見

今回の調査では当初目的とした築地塀およびその関連遺構と断定できる遺構は確認できなかった。平成15年度のDA第104次調査の成果から推定される大安寺西面築地塀位置から考えても、塔院西面築地塀は現道路下になる可能性が高い。DA第104次調査で検出された築地塀の雨落ちと考えられる溝については、同様のものが存在したとすれば、今回の発掘区と僅かに重なってくる可能性がある。しかし推定位置に近い溝SD07は検出部分が少ないため、築地塀に関連するものとは判断し難く、形状や埋土からみると、雨落ちとは異なる可能性が高いと考える。

この付近では敷地西端が整地されていることが判明したが、これは旧地形の傾斜や旧河川の砂層に対しての処置と考えられる。本調査地の北側でおこなったDA第94次調査でも一部には整地と思われる層が認められているが、標高差が大きく層の模様も異なっており、同一層とは判断し難い。整地層の上には浅く広い溝が走っており、この溝が整地に伴って成形された、塔院敷地周囲を廻る排水施設(堆積砂からすると恒常的な流路として機能していた可能性が高い)とするならば、出土遺物から

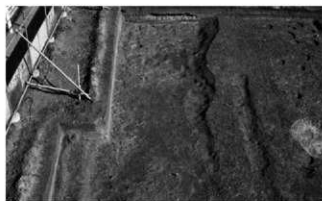
D A 第 121 次調査 検出遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規模 (間)	桁行全長	梁行全長	柱間寸法 (m)		備 考
		桁行×梁行 (m)	(m)	(m)	桁 行	梁 行	
S A 01	南北	2 以上	3.6 以上			1.8-1.8	柱穴深さ 0.2 ~ 0.25 m
S B 02	不明	2 以上×2 以上	2.1 以上	1.5 以上		2.1	柱穴深さ 0.1 ~ 0.25 m

遺構番号	平面形等	平面規模 (m)	深さ (m)	主な出土遺物	備 考
S D 03	南北溝	長さ 10 以上× 幅 3.0 前後	0.2	8 ~ 10 世紀:土師器杯か皿、須恵器杯・甕、灰釉陶器柄、 平瓦・丸瓦	ほとんどが小破片
S D 04	南北溝	長さ 10 以上× 幅 0.3 前後	0.2	8 世紀:土師器・須恵器	少量
S D 05	南北溝	長さ 10 以上× 幅 0.4 前後	0.2	弥生時代末~古墳時代初頭:土器	S K 06 より古い
S K 06	楕円形	長径 3.2× 短径 1.7	0.25	8 世紀後半:土師器杯・皿、須恵器杯 B・甕	S D 05 より新しい
S D 07	南北溝	長さ 1.5 以上× 幅 1.0 以上	0.25	土師器小片	
S K 08	円形	径 1.3 以上	0.4 以上	弥生土器壺か甕	



S D 03 の堆積砂 (南東から)



S D 03 (南から)



発掘区全景 (北から)



発掘区全景 (整地下層) (北から)

みて 9 世紀末から 10 世紀の間に塔院敷地が改めて整備されたものと考えられる。9 世紀前半に完成したと推測される西塔の建立時期とは少し時間を隔てたものであり、少なくとも創建時の作業との関連性は薄いと考えられる。また、8 世紀後半には S K 06 のような土器廃棄用の土坑が掘られており、この付近は塔院区画内でも当初あまり手をつけられなかった場所かもしれない。

この整地作業が、何に端を発しているかは不明であるが、鎌倉時代までは東塔を中心に何度か修復や整備が行われており、西塔の焼失後も西面築地周辺については

手が入られた可能性がある。想定される築地塀とどのように繋がっていくのかは今回の調査区では確認できなかったが、地形の様相から推測すると、東三坊大路は塔院敷地より原地形が低かったと考えられることから、築地塀の建造に関しても何らかの工夫が施された可能性がある。今回の調査地付近は現道路が東にやや寄っている部分で、遺存地割りとは言え、条坊復原としては塔院敷地側に入り込んでいる部分である。したがって塔院区画施設については、より西側に張り出した区域での確認が必要となる。(松浦五輪美)

21. 東紀寺遺跡の調査 第10・11次

事業名	奈良市立病院建替事業	調査期間	HK第10次 平成20年7月1日～8月26日 HK第11次 平成21年4月10日～5月1日
届出者名	奈良市長	調査面積	HK第10次 360㎡ HK第11次 96㎡
調査地	奈良市東紀寺町一丁目50番1	調査担当者	HK第10次・第11次 池田裕英

I はじめに

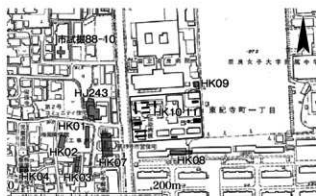
本調査地は東紀寺遺跡の西端部に位置する。東紀寺遺跡は、これまでに奈良国立文化財研究所（現奈良文化財研究所）、奈良県立橿原考古学研究所、奈良市教育委員会によって発掘調査が行われており、古墳時代や奈良時代の遺構が検出されている遺跡である。

調査は平成20年度と21年度の2カ年にわたって実施した。平成20年度の第10次調査は事業予定地が広いことから遺構の有無と分布、その範囲の確認を目的に実施した。事業対象地を4区域に分け、A～Kの計11の発掘区を設けて試掘調査を行った。平成21年度の第11次調査は、試掘調査の結果に基づき奈良時代の遺構を検出したJ発掘区の西に隣接して、遺構の時期や広がりを確認するため2箇所の発掘区を設けて実施した。

II 基本層序

第1区（A～E発掘区） 層序は上からクラッシャー・真砂土・造成土・黒灰色土（旧耕土）・暗黒灰色砂質土（床土）・暗灰褐色砂質土（遺物包含層）と続き、灰緑色土の地山となる。地山上面の標高は、最も東に位置するE発掘区で94.5m、西に位置するA発掘区で93.7mである。地山は東から西に向かって下り、敷地中央のB・C・D発掘区の西半部には水田耕作に伴うとみられる地下げによる段差がある。遺構は全て地山上面で検出した。

第2区（F～H発掘区） 駐車場のクラッシャーを除去すると、すぐに旧陸軍聯隊の煉瓦造りの基礎を検出した。基礎の一部にコンクリートが敷設された箇所があり、こ

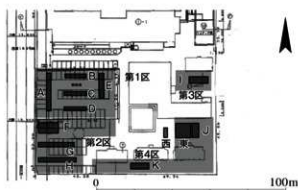


HK第10・11次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

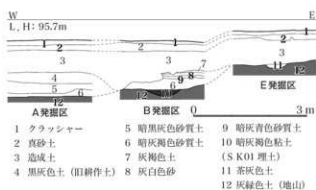
の部分は旧国立病院の建物であったと考えられる。最も南のH発掘区では煉瓦の基礎の南にコンクリート管が埋設されていたため、部分的な掘り下げにとどまった。地山上面の標高は、南端の発掘区が93.5m、北端の発掘区が93.9mである。

第3区（I発掘区） 上から造成土、灰黒色土（旧耕土）、灰褐色砂質土（床土）、茶灰色砂質土、灰褐色砂と続き、現地地表約1.1mで暗茶褐色粘土の地山にいたる。地山上面の標高は概ね95.5mである。

第4区（J・K発掘区） J発掘区は、上から黒色腐植土、造成土、灰褐色土と続き、現地地表0.3mで黄茶色土の地山にいたる。第11次調査区も同様である。K発掘区では黒灰色腐植土、造成土、灰褐色土、茶褐色土・茶褐色土混合土、茶褐色砂、茶褐色粗砂、黄茶色砂質土、暗灰白色粗砂と続き、現地地表1.3～1.5mで暗灰褐色砂礫の地山にいたる。地山上面の標高は93.8～94.1mである。

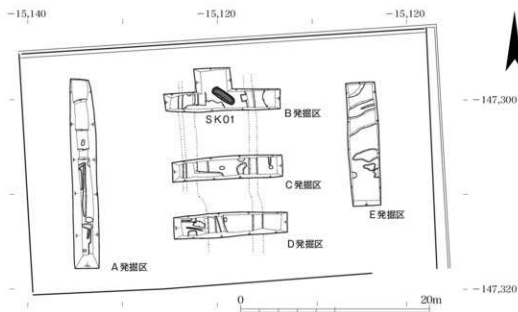


HK第10・11次調査 発掘区配置図 (1/2,000)

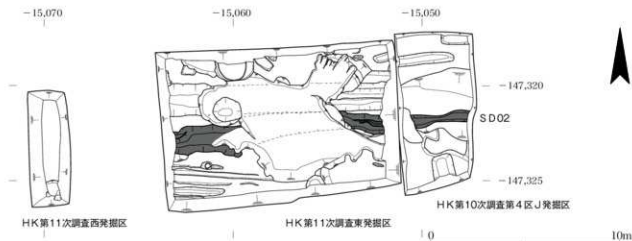


HK第10次調査 第1区土層柱状図 (1/100)

- | | | |
|---------------|-----------|------------------|
| 1 クラッシャー | 5 暗黒灰色砂質土 | 9 暗灰青色砂質土 |
| 2 真砂土 | 6 暗灰褐色砂質土 | 10 暗灰褐色粘土 |
| 3 造成土 | 7 灰褐色土 | 11 茶灰色土 (SK01埋土) |
| 4 黒灰色土 (旧耕作土) | 8 灰白色砂 | 12 灰緑色土 (地山) |



HK第10次調査 第1区道溝平面図 (1/400)



HK第10・11次調査 第4区道溝平面図 (1/200)

Ⅲ 検出遺構

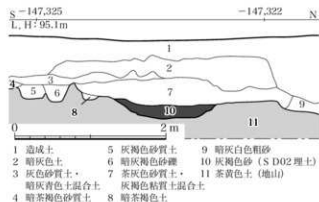
第1区 B発掘区で長辺2.7m、短辺0.8m、深さ0.2mの土坑SK01を検出した。埋土から土師器の小片が1点出土したが、時期は不明である。これ以外には19世紀以降の素掘溝や土坑を検出したのみである。

第2区 G・H発掘区は遺構がなかった。F発掘区では土坑を検出したが、土坑は灰緑色粘土の部分にだけ認められ、粘土採掘坑であったと思われる。埋土から18～19世紀の土師器、陶器、磁器が出土したが、これらの中に8世紀の土師器・須恵器もみられた。

第3区 水田耕作に伴うとみられる素掘溝を検出した以外に遺構はなかった。

第4区 K発掘区は遺構がなかった。J発掘区では中央部に攪乱坑があったが、この攪乱の土を除去すると、暗

灰色粗砂が堆積する幅約0.3～0.7mの東西方向の溝SD02を検出した。深さは0.2mである。埋土からは8世紀の土師器・須恵器が出土し、上部は削平されているものの奈良時代の溝の底部が残ったものと判断した。このため、この溝の方向や時期を確認することを目的として、そのすぐ西側に東西2つの発掘区を設けてHK第11次調査を実施した。その結果、東発掘区でHK第10次調査で検出したSD02の続きを検出した。幅約1.4m、深さ0.15mで、長さは中央部が攪乱により壊されているが東西11m分を検出した。国土方眼方位西で南に若干振れている。埋土は灰褐色砂で、水が流れた痕跡と考えられる。地形や溝底の標高からみて東から西に流れていたであろう。埋土から8世紀の土師器、須恵器が出土したが、小片のため詳しい時期は不明である。また、6世紀後半



HK第11次調査 東発掘区西壁土層図 (1/50)

の須恵器も出土しており、周辺に古墳時代の遺構があったことが推測される。

SD02が西に続くかどうかを確認するため、西発掘区を設定した。現地表下1.6m(標高94.1m)まで掘り下げたが、攪乱が続き東発掘区の遺構検出面より1m深い位置で黄茶色粘土の地山を検出した。遺構はなく、遺構面は削平されたものと考えられる。

IV 出土遺物

本調査では遺物整理箱で7箱分の遺物が出土した。出土遺物には5世紀中頃の埴輪、6世紀後半の須恵器、8世紀の須恵器・土師器、16世紀の土師器・瓦質土器、17～19世紀の土師器・陶器・磁器・瓦・木製品(下駄)、銭貨(寛永通宝)がある。遺構に伴うものは第1区S K 01出土の土師器小片と第2区F発掘区の粘土探掘坑出土の18世紀の土師器、陶磁器、第4区S D 02出土の6世紀後半の須恵器杯蓋、8世紀の土師器杯・甕、須恵器杯・壺・甕である。

V 調査所見

本調査地は平城京外に位置するが、奈良時代の東西溝S D 02を検出した。この溝について、出土遺物が小片なため掘られた時期や埋没した時期の詳細な特定は困難であるが、その位置が南北の出入りはあるものの添上郡京東五条三里の条里遺存地割にほぼ合致することに留意したい。溝中央の座標値はX=-147321.9、Y=-15050.0である。本調査例だけの断定はできないが、条里に関わる遺構の可能性も考えられよう。今後の周辺での調査成果に期待したい。HK第11次調査西発掘区の状況やHK第10次調査の成果を勘案すると、この西発掘区より西側では遺構面は削平されている可能性が高いと思われる。これらのことから、本調査地は東紀寺遺跡の範囲内でも遺構の密度が低く、かつ本来は存在した遺構が削平された部分が多い地点と考えられる。(池田裕英)



第4区発掘区的位置と条里遺存地割(『大和国条里復原図』に加筆)



HK第10次調査 第2区H発掘区全景(東南から)



HK第10次調査 第4区J発掘区全景(南から)



HK第11次調査 東発掘区全景(東から)

22. 池田遺跡・中ツ道推定地の調査 第1次

事業名	倉庫新築	調査期間	平成20年6月30日～7月15日
届出者名	株式会社ベーバル	調査面積	168㎡
調査地	奈良市池田町2-1	調査担当者	武田和哉・鐘方正樹

I はじめに

本調査は、倉庫建設に伴う発掘調査である。調査地付近は、池田遺跡および中ツ道の推定地に該当している。

調査地周辺では奈良県立橿原考古学研究所が調査を実施しており¹⁾、5～6世紀の土坑群を検出したほか、5～8世紀にかけての土器を包含する堆積層を確認している。ただし、中ツ道と推定される遺構は検出できていない。

本調査地は、上述の奈良県調査における第7・11トレンチの中間点から北北東に約40m離れた地点に、東西約21mの発掘区を2箇所（合計面積168㎡）設定し、遺構の様相把握を目的として調査を実施した。

II 基本層序

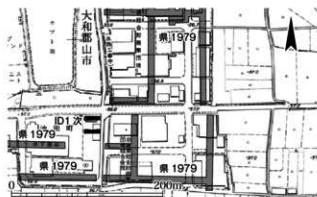
南発掘区では、造成土が約0.8mあり、その下に黒灰色粘質土（旧水田耕土）、暗茶灰色粘土（旧水田床土）、暗茶褐色粘質土、淡茶褐色粘土（遺物包含層）と続き、地表下約1.4mで暗灰色粗砂もしくは黄灰色（または青灰色）粘土の地山となる。また北発掘区では、造成土が約0.8m程度あり、その下に黒灰色粘質土（旧耕作土）、暗茶灰色粘土（旧床土）、暗茶褐色粘質土、暗茶褐色粘土（遺物包含層）と続き、現地表下約1.2mで暗灰色粗砂もしくは黄灰色（または青灰色）粘土（粗砂）の地山となる。遺構面の標高は、北・南発掘区ともに54.9m前後である。遺構検出作業は地山上面で実施した。

III 検出遺構

本調査で検出した主要な遺構には、溝2条、土坑3基、性格不明遺構2基がある。以下にその概要を記す。

S D 01 は北発掘区の西端で検出した溝。後述のS X 07より古い。概ね南南東より北北西へと流れる様相を呈す。最大幅約3m・深さ約0.3mで、埋土は灰色粗砂である。出土遺物はなく、時期は不明である。S D 02 は北・南発掘区の東端で検出した南北方向の溝。東側は発掘区のため幅員は不明であるが、少なくとも2.5m以上ある。深さ約0.3mで、埋土からは6世紀後半～末の土器・須恵器が出土した。S D 03 は北・南発掘区の中央付近で検出した溝で、概ね南北方向に流れるが北でやや西に振れる。幅1.0～1.5m・深さ約0.15mで、7世紀以前の土器および8世紀の須恵器が出土した。

S K 04 は南発掘区の中央東寄り検出した土坑。平面



ID 第1次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

楕円形を呈し、長径約0.8m・深さ約0.1mである。6世紀後半～7世紀前半頃の土器（高杯主体）・須恵器が出土した。S K 05 は北発掘区の中央付近で検出した土坑。平面は不整形を呈し、長径約1.0m・深さ約0.1mである。土器破片が少量出土したのみで詳細な時期は不明。S K 06 は北発掘区の中央東よりで検出した土坑。平面はほぼ隅丸方形を呈し、東西幅約0.8m・深さ約0.15mで、6世紀末の須恵器破片が出土した。

S X 07 は北発掘区の西側で検出した性格不明の遺構。西側に向かって徐々に低くなる様相を呈し、幅は5m以上、深さは約0.15m。S X 08 は南発掘区西側で検出した性格不明の遺構。上述のS X 07同様に西側に向かって徐々に低くなる。幅は10m以上、深さは約0.3mで14世紀後半～15世紀の土器器片が出土している。

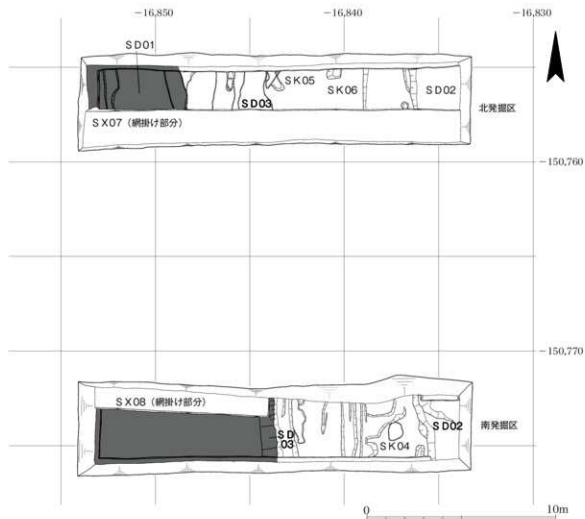
IV 出土遺物

出土遺物は、整理箱約6箱分が出土した。大半を6～7世紀の土器・須恵器が占める。土器高杯の出土量が多く、注意される。その他8世紀の須恵器、丸・平瓦、12～13世紀の瓦器、14世紀後半～15世紀の土器器片があるが、いずれも小片が多い。

V まとめ

本調査で検出したS D 02・03は、ともに南北方向の溝であり、埋土に6～7世紀の土器を含んでいることから、調査地付近に推定されている中ツ道に関連する遺構である可能性がある。今後の近隣地等での調査成果を持って検討したい。（武田和哉）

1) 奈良県立橿原考古学研究所「奈良市池田遺跡調査概報」奈良県遺跡調査概報1979年度第一分冊 1980



I D第1次調査 発掘区道構平面図 (1/200)



南発掘区全景 (東から)



北発掘区全景 (東から)

23. 奈良山第 52 号窯の調査 第 1 次

事業名	宅地造成	調査期間	平成 20 年 5 月 26 日～6 月 20 日
届出者名	三和住宅株式会社	調査面積	150㎡
調査地	奈良市秋篠町 1546-1 の一部地	調査担当者	山前智敬

I はじめに

調査地は、奈良盆地の北縁を画する奈良山丘陵の西縁部で、泉宮平城団地西側の北から南に延びる尾根の先端部の東斜面に位置する。現状は、西から東に延びる舌状の高まりとなっており、北・南及び東縁は切土により急崖に改変されている。

今回の調査地が位置する尾根の東斜面では、昭和 39・40 年に奈良国立文化財研究所が日本住宅公団の平城ニュータウン造成計画に伴い実施した遺跡の分布調査により、奈良山第 51 号窯（奈良県遺跡地図¹⁾ 第 1 分冊 5 A-21）・同第 52 号窯（同 5 A-22）の 2 基の奈良時代の瓦窯が確認されている。ただし、この分布調査成果²⁾の報告書の所在が確認できないので、県遺跡地図に記載されているものの具体的な位置は不明であった。

平成 18 年に奈良市教育委員会が宅地造成に伴う試掘調査を実施したところ、奈良時代の瓦窯 1 基を確認したため、発掘調査を実施した³⁾。この調査で、51 号窯の位置とその構造が明らかになった。51 号窯は瓦の專業窯で、半地下式の無床平窯である。焼成室半ばから煙出し部が残存しており、平面方形の焼成室と、その奥壁から天井にむかつてのびる煙突 3 本を確認した。奈良山丘陵上では 40 基近くの窯が確認されているものの詳細不明な場合が多く、51 号窯は構造が判明する貴重な例である。操業時期や供給先は、軒瓦の出土が不確定できないが、恭仁宮出土の平瓦と同技法の平瓦が出土していることから恭仁宮以降の 8 世紀中頃と考えられている。この調査の結果、今回の調査地が位置する尾根の東斜面に瓦窯跡がある可能性が考えられた。



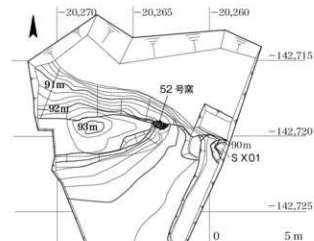
NARA 52 第 1 次調査 発掘区全景（北東から）



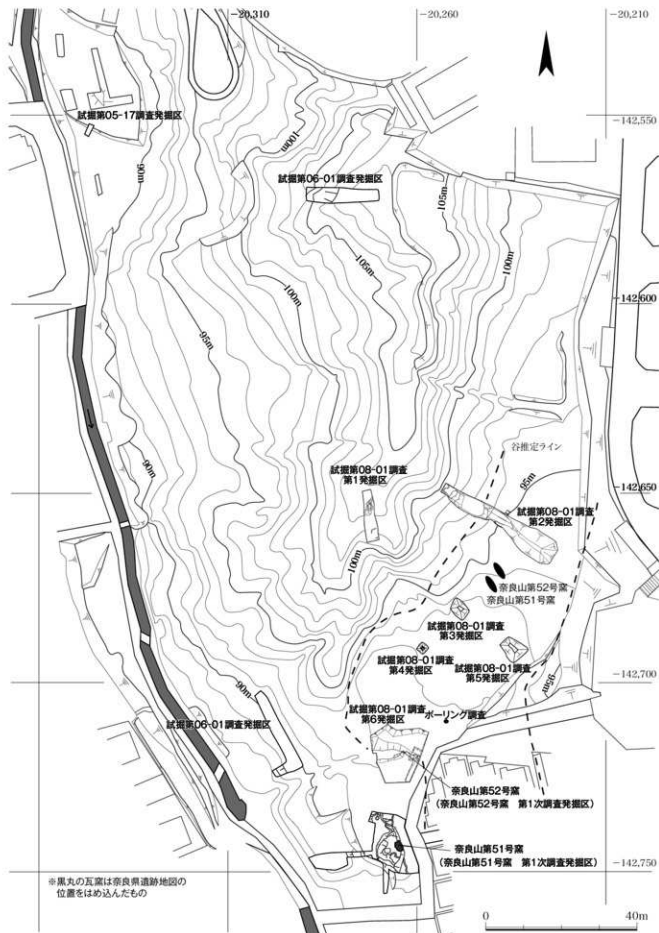
NARA 52 第 1 次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

平成 20 年に、今回の調査地とその北側一帯の尾根の東斜面で宅地造成が計画されたため、市教委が予定地内の遺跡の有無を把握することを目的に、6 箇所（総面積 389㎡）の発掘区を設定し試掘調査（市試掘 08-01）を実施した。その結果、届出地南端の舌状の高まりの東縁の急崖で瓦窯 1 基を確認し、以下の 4 点が判明した。

- 県遺跡地図に 51・52 号窯が記載されている場所は谷であり、瓦窯跡は存在しない。
- 調査地北方の尾根の東斜面では、奈良時代の遺物の散布や遺物包含層がみられず、地山上面でも遺構は検出されなかった。
- 調査地北方の尾根の裾部と、今回調査を実施した舌状の高まりの北縁は、調査地の西側にあった溜池の堤防を築成するための採土の結果、急崖になっている。
- 舌状の高まりの東縁の急崖は、里道や現況道路の敷



トーン部分は奈良山第 52 号窯 コンタは 25cm 間隔
NARA 52 第 1 次調査 発掘区平面図 (1/250)



周辺の地形と発掘区位置図 (1/1,000)

設工事の際の切土で形成されたものである。

以上のことから、尾根の東斜面に残存する瓦窯が、前述した平成18年調査の瓦窯跡とこの瓦窯の2基しかないことがわかり、昭和39・40年の分布調査で確認された51号窯、52号窯に比定できた。

この試掘調査の結果を踏まえて、予定地内の取扱いについて、奈良県教育委員会ならびに開発事業者と協議した結果、届出地南端で確認した瓦窯の残存状況や構造を把

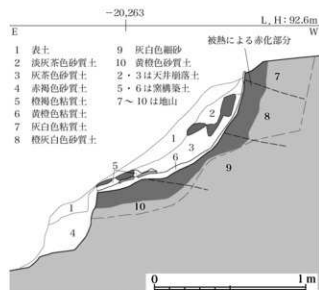
握し、加えて瓦窯跡に関連する遺構の有無を確認することを目的に発掘調査を実施した。

II 基本層序

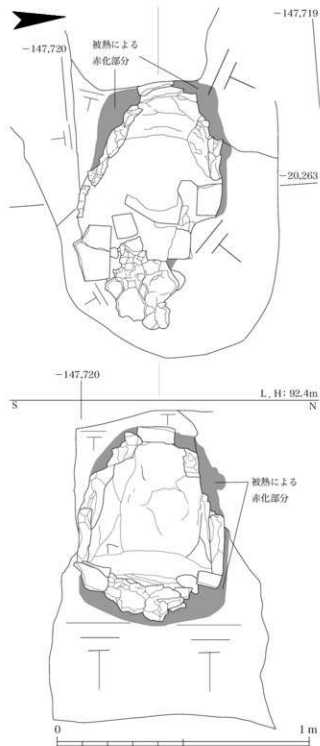
発掘区内の層序は、尾根の高まりおよびその東・南と高まりの北で大きく異なる。前者は表土直下で灰白色粘質土の地山となる。地山上面の標高は、高まりの上面で92.3～93.0 m、高まり南の平坦面で90.5～91.1 mである。高まりの北・東縁は切土により大きく削平されて



瓦窯全景（東から）



NARA 52 第1次調査 瓦窯断面図 (1/25)



瓦窯平面図(上)・立面図(下) (1/15)

いる。後者は表土層、崩落土、砂とシルトの互層からなる谷内の堆積層となる。発掘区のすぐ北東側ではボーリング調査が実施されており、その成果から谷内の堆積層は現地表下5mまで続き、その下で地山の砂層となることが推察される。

Ⅲ 検出遺構

高まりの東縁で瓦窯1基、土坑1基を検出した。

瓦窯 後世の削平により大部分が破壊されているが、平窯の奥壁の通燭孔と煙出し部分が遺存していた。残存長1.0m、残存幅0.5m、残存高0.7m。窯体は地山を掘り込んで構築されている。奥壁の通燭孔部分は長さ約0.4m、幅約0.5m。残存していたのはその最下部で、地山上面に4cm程の厚さで粘土を貼り、その上に平瓦を置いて、さらに粘土を5cm程の厚さで貼り造っている。粘土の上面は焼き締まっている。煙出し部は長さ約0.6m、幅約0.5m。わずかに粘土を貼り付けて造っている。奥壁の通燭孔部分と同様に焼き締まっている。南に残る部分から、円弧を描いて煙出しの天井に向かう。熱の影響で地山が赤く変色している部分が南に比べ北の範囲が広いので東側に焚口を向ける平窯の端であると思われる。

SX01 発掘区の東で検出した、東西0.9m以上、南北1.6m以上、深さ0.5mの平面隅丸方形の土坑で、発掘区東に続く。埋土から奈良時代の丸瓦・平瓦が出土した。

Ⅳ 出土遺物

遺物整理箱で13箱分あり、大半は8世紀の瓦類で二次的に堆積した崩落土から出土した。

瓦類には、8世紀の丸瓦213点(16.81kg)・平瓦944点(108.865kg)・丸平不明瓦204点(1.38kg)・熨斗瓦1点(0.46kg)がある。

平成18年度報告の51号窯で分類した基準³⁾(平瓦分類表)を使用し平瓦を分類した(型式別出土表)。SX01からはII B a 1型式が30点(3.21kg)・II B a 2型式が14点(1.17kg)・II B b 1型式が15点(1.19kg)・型式不明が157点(6.09kg)、瓦窯の上部からはII B a 1型式が11点(4.52kg)・II B b 1型式が4点(0.48kg)・型式不明6点(0.56kg)、瓦窯の部材はII A b 1型式が1点(0.2kg)・II A b 2型式が1点(0.93kg)・II B a 1型式が5点(2.3kg)、これ以外は崩落土および表土から出土した。重量比較ではII B a 1が4割5分、II A b 1が1割5分出土しており、型式不明を除くと、その他は微量であることわかる。51号窯と同じく出土瓦の主体は窯の構築部材であるII B a 1型式である。なお、試掘調査時に、軒丸瓦2点・軒平瓦2点が出土しているが、いずれも型式不明である。

NARA 51・52 第1次調査 出土平瓦分類表

凹面		凸面		型式名
模骨痕	ナデ調整	最終調整	砂目	
有 (I類)	無 (A類)	タタキ	無(1類)	II A a 1
		(a類)	有(2類)	II A a 2
		ナデ調整	無(1類)	II A b 1
	有 (B類)	(b類)	有(2類)	II A b 2
		タタキ	無(1類)	II B a 1
		(a類)	有(2類)	II B a 2
無 (II類)	無 (A類)	ナデ調整	無(1類)	II B b 1
		(b類)	有(2類)	II B b 2
		タタキ	無(1類)	II A a 1
	有 (B類)	(a類)	有(2類)	II A a 2
		ナデ調整	無(1類)	II A b 1
		(b類)	有(2類)	II A b 2

NARA 52 第1次調査 出土平瓦型式別出土表

形式名	点数	%	重量(g)	%
II A a 1	24	2.5%	2,017	1.9%
II A a 2	1	0.1%	120	0.1%
II A b 1	96	10.2%	16,860	15.5%
II A b 2	2	0.2%	946	0.9%
II B a 1	233	24.7%	48,744	44.8%
II B a 2	30	3.2%	3,440	3.1%
II B b 1	19	2.0%	1,670	1.5%
II B b 2	42	4.5%	5,871	5.4%
不明	497	52.6%	29,197	26.8%
	944		108,865	

V まとめ

奈良山第52号窯は大きく削平を受けていたが、平窯の奥壁通燭孔と煙出し部の一部が残存していた。焚口を東に向ける平窯の南西隅であろう。

51号窯と構造面での共通性は残存状態が悪いので不明である。ただ、52号窯で瓦窯の構築材として確認できるものは1群³⁾(II B a 2型式を除く平瓦群で、51号窯の構築材として利用された一群)だけで、3群³⁾(II B a 2型式の平瓦群で、51号窯の製品の可能性が高い一群)が使用されていないことから、8世紀中頃にされる51号窯に遅れることなく築造されたと思われる。51号窯から出土した模骨痕があるI類が1点も出土していない。

SX01からは51・52窯の構築材である1群と51号窯の製品の可能性がある3群が出土している。瓦窯に関連する遺構の可能性も考えられるが、窯が大きく削平されているので詳細は不明である。(山前智敬)

- 1) 『奈良県遺跡地図 第1分冊』奈良県教育委員会 1998.3
- 2) 『文化財分布調査(平城地区)及び開発と保存の一般的ルールについて』日本住宅公債大阪支所 1975.4
- 3) 『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成18(2006)年度』奈良市教育委員会 2009.3

24. 帯解黄金塚古墳の調査 第1・2次

事業名	1次：水道工事 2次：重要遺跡範囲確認調査	調査期間	1次：平成19年7月18日～7月30日 2次：平成21年1月14日～3月18日
届出者名	1次：奈良市水道事業管理者 2次：奈良市教育委員会教育長	調査面積	1次：18㎡ 2次：120㎡
調査地	1次：奈良市田中町地内 2次：奈良市田中町574-1-3	調査担当者	1・2次：安井宜也・大窪淳司

I はじめに

帯解黄金塚古墳は、大和高原の西麓で菩提仙川の北側に広がる台地の南寄りに位置する飛鳥時代の方墳である。明治23年に墳丘が開削された際に石室が発見され、同年に宮内庁が墳丘を御陵墓伝説地（大正15年以降は陸墓参考地）に指定している。

現状の墳丘は一辺約27mで、2段の段築が認められる。埋葬施設は「椋原石」と呼ばれる流紋岩質溶結凝灰岩の磚を積み上げて構築された磚積式の横穴式石室である。石室の全長は約16mと推定され、平面が正方形に近い玄室と二か所の柱状の張り出し部で区画された羨道がある。石室内部には塗られていた漆喰の一部が残る。奈良盆地北部で磚積式の横穴式石室を埋葬施設とする唯一の古墳で、かつ墳丘や石室の規模が大きい部類に入る。

墳丘の周囲には平坦面があり、その東・西・北辺を外堤がコの字状に囲む（以下、東外堤・西外堤・北外堤とする）ことが以前から指摘されている。外堤の規模は東西約120m、南北約65m、幅10～20mで、上部が粘土ブロックの盛土で構築されていることが削られた断面で観察できる。東外堤上では流紋岩質溶結凝灰岩製の組合式石棺を埋葬施設とする田中古墳が確認されている¹⁾。

古墳の現状に関しては、墳丘と東外堤は比較的古く保たれ、西外堤の南寄り、北外堤の中央部と市道の南側は切土による改変が著しい。また、墳丘の東側に接し北外堤を横断する南北に細長い宅地が造成されている。

この古墳に関する過去の主な調査には、墳丘とその周辺及び横穴式石室の測量調査と発掘調査がある。

昭和26年には日本考古学協会、昭和33年には宮内庁が墳丘周辺及び横穴式石室の実測調査を実施した。その後、平成18・19年には宮内庁が墳丘及び横穴式石室の詳細な実測調査を実施した。これらの調査成果は、平成20年に宮内庁によってまとめて公表された²⁾。

平成16年には、市道の拡幅計画に伴い、宮内庁が墳丘南面中央の拝所部分で遺構の有無の確認を目的とした発掘調査を実施したところ、現地地表下0.5m（標高99.1～99.2m）で墳丘裾とそれに沿う石列、石敷を検出し、



KGZ 第1・2次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

墳丘裾の位置が現状の約1.6m南であることを確認した。また、石列や石敷の石材には付近の河川で採取したものとみられる10～30cm大の花崗岩、斑岩やチャートの礫が主に用いられていることもわかった³⁾。

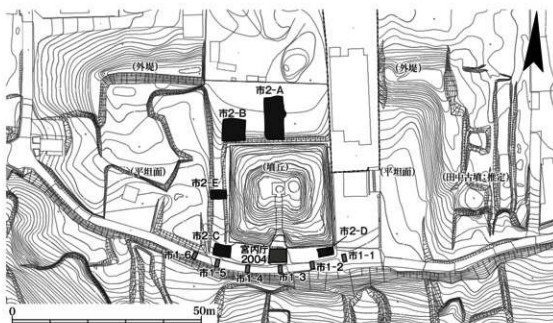
平成19年には、墳丘南側の平坦面上を東西に通る市道の水道管敷設工事に先立ち、本市教委が遺構の有無の確認を目的として市第1次調査を実施した。6箇所の発掘区（東から西に向かって第1～6発掘区と呼ぶ）を設定して調査を実施した結果、後述するように石敷が市道の下まで広がることを確認した。

これらの調査の出土遺物はきわめて少なく、築造時期を把握する手掛かりとなるものは今のところない。

以上の経緯と遺跡の重要性を踏まえ、本市教委ではこの古墳の範囲確認調査を今後継続的に実施することにした。平成19年度には墳丘周辺の現状を把握するための地形測量を実施し、宮内庁から墳丘測量図の提供を得て、外堤を含めた古墳全体の測量図(1/100、等高線間隔25cm)を作成した。

平成20年度の市第2次調査は、墳丘規模の確認と墳丘周囲の遺構の様相及び遺存状態の確認を目的として、墳丘の北面にA・B、墳丘南面にC・D、墳丘西面にEの計5箇所の発掘区を設定して実施した。

ここでは、未報告の第1次調査と合わせて調査成果を報告する。なお、平成19年度に作成した古墳の測量図は付図とし、第2次調査で行った石敷の礫種同定とその使用傾向の分析成果報告を本書第2章に掲載した。



KGZ第1・2次調査 調査地平面図 (1/1,000)



墳丘全景 (東から)



墳丘全景 (北西から)



西外堤 (南西から)



墳丘西側の平地面と北外堤 (南から)



墳丘北側の平地面 (北西から)



墳丘東側の平地面と東外堤 (南西から)



(この図はPDF化にあたり全体を66%に縮小しています。)

II 調査の概要

1 墳丘南面の調査 (第1次調査 第1～6発掘区、 第2次調査 C・D発掘区、以下次略略)

(1) 基本順序

市道上の第1～6発掘区では、道路に伴うアスファルト舗装・盛土層 (厚さ0.3～0.4 m)、灰色や黄色の砂質粘土層 (厚さ0.2～0.3 m) の下で築造時の面となる。

墳丘南西隅に面したC発掘区では、近年の表土層及び盛土層 (厚さ0.2～0.3 m)、褐色や黄褐色の砂質粘土混じりシルト層 (厚さ0.6～0.7 m) の下で築造時の面となる。また、墳丘南東隅に面したD発掘区では、表土層 (厚さ0.1 m)、黄褐色の砂質粘土混じりシルト層 (厚さ0.2 m) の下で築造時の面となる。

各発掘区で築造時の面を覆う砂質シルトあるいは粘土層は概して層厚の変化が少なく層理が水平に近いことから、人為的な盛土層と考えられる。C発掘区北東部でみられる明黄褐色砂質粘土混じりシルト層 (土層図10層) から7世紀の土器片が出土した。

(2) 検出遺構

第1～6発掘区 墳丘南面の平坦面と石敷等を検出した。

平坦面は、東寄りの第1～3発掘区では大阪群の地山を成形しているのに対し、西寄りの第4～6発掘区で

は主に黄褐色の砂質シルトあるいは粘土の盛土で形成されており、第6発掘区では盛土の厚さが0.5 m以上あることを確認した。上面の標高は、第1発掘区が99.3 m、第2発掘区が99.1 m、第3～5発掘区が98.9 m、第6発掘区が98.7 mで、東から西に向かって緩やかに下る。

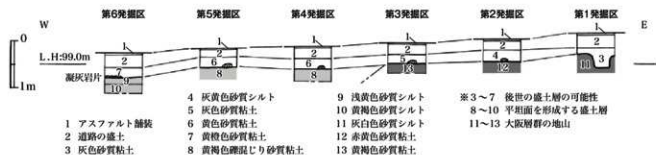
石敷は墳丘南側の第2～5発掘区で検出したが、遺存状態は良くない。10～30 cm大の花崗岩を主とした礫が用いられている。

なお、東端の第1発掘区では地山上面で時期不明の東西方向の溝 (幅0.8 m、深さ0.4 m) を検出したが、古墳に伴うものではない。また、西端の第6発掘区の南寄りでは、盛土上面で5～10 cm大の流紋岩質溶結凝灰岩片の集積を検出した。

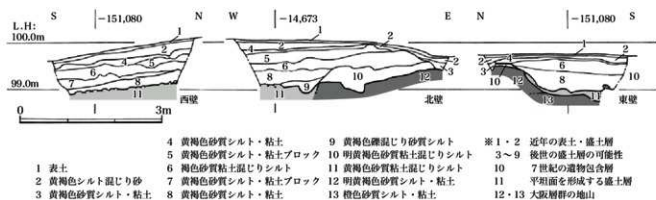
C発掘区 墳丘南西隅の基底部とそれに面する平坦面、墳丘裾に沿う石材採取痕跡と墳丘の外周に沿う石敷を検出した。

墳丘基底部は上段石敷の上面から0.5 m上までを検出した。全体に大阪群の地山を成形している。上位は後世の切土によって改変されているため、現状の墳丘南西隅の位置は築造時よりも北へ約3.5 m、東へ約1.5 m後退している。

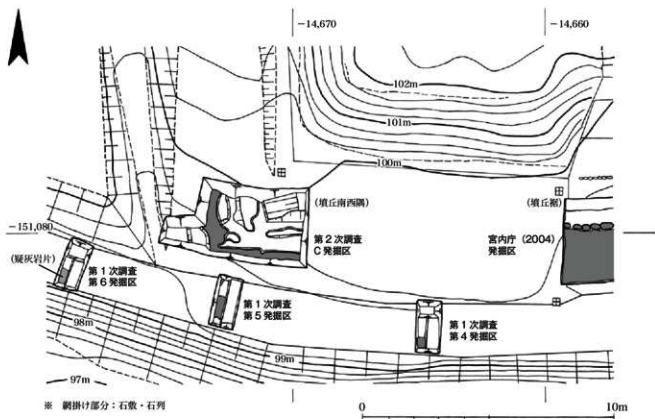
平坦面は黄褐色砂質粘土混じりシルトの盛土によって形成されており、発掘区南西隅では盛土の厚さが0.4 m



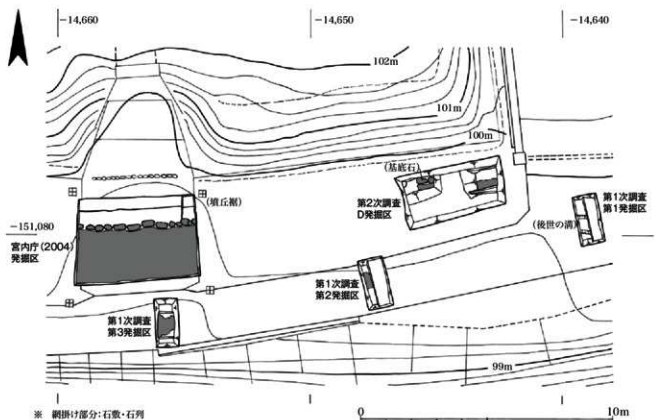
K G Z 第1次調査 第1～6発掘区土層模式図 (1/80)



K G Z 第2次調査 C発掘区土層断面図 (1/80)



墳丘南面西半 発掘区平面图 (1/150)



墳丘南面東半 発掘区平面图 (1/150)



第1次調査 第1発掘区全景(北東から)



第1次調査 第2発掘区全景(東から)



第1次調査 第3発掘区全景(東から)



第1次調査 第4発掘区全景(南東から)



第1次調査 第5発掘区全景(東から)



第1次調査 第5発掘区 石敷(南から)



第1次調査 第6発掘区全景(北東から)



第1次調査 第6発掘区 凝灰岩片の集槽(上から)



第2次調査 C発掘区全景
(南西から)



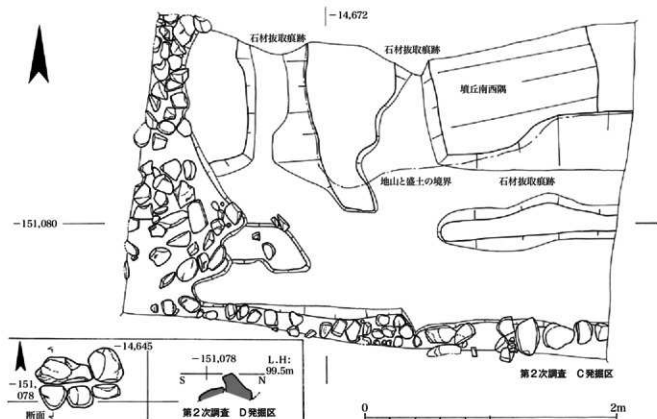
第2次調査 D発掘区全景
(南東から)



第2次調査 D発掘区北西隅 基礎石・石敷 (南東から)



第2次調査 C発掘区 北壁土層・7世紀土器出土状況 (南から)



K G Z 第2次調査 C発掘区 平面図、(左下) D発掘区北西隅 基礎石・石敷平面・断面図 (ともに 1/30)

以上あることを確認した。

墳丘裾沿いは後世の変更が著しく、石敷は発掘区の南・西辺で残存する。石敷には10～20cm大の花崗岩や斑輝岩の礫が主に用いられている。上面の標高は99.0～99.2mで、北から南に向かって低くなる。

なお、幅0.4m、深さ0.1mの溝状の凹みを墳丘の西裾沿いに2条、同南裾沿いに1条検出したが、後述する墳丘西面のE発掘区の状態を踏まえれば、墳丘裾沿いの基礎石や石敷の緑石の石材採取痕跡と判断される。

D発掘区 墳丘南面の平坦面と墳丘裾の基礎石、石敷を検出した。後世の変更が著しく、遺存状態は良くない。平坦面は地山を成形している。基礎石は発掘区の北西隅、石敷は発掘区の北西隅や北東隅に残存する。基礎石には30～40cm大、石敷には20cm大の花崗岩の礫が用いられている。石敷上面の標高は99.5mである。

なお、地山上面で石室の構築部材とみられる礫が1点出土した。

2 墳丘北面の調査 (第2次調査 A・B発掘区)

(1) 基本層序

A・B発掘区の基本層序はほぼ同様で、近年の表土層及び造成土層 (厚さ1.1～1.3m)、黄褐色の砂質シルト・粘土層あるいはシルト・粘土ブロック層 (厚さ1.0～1.2

m)の下で築造時の面となる。

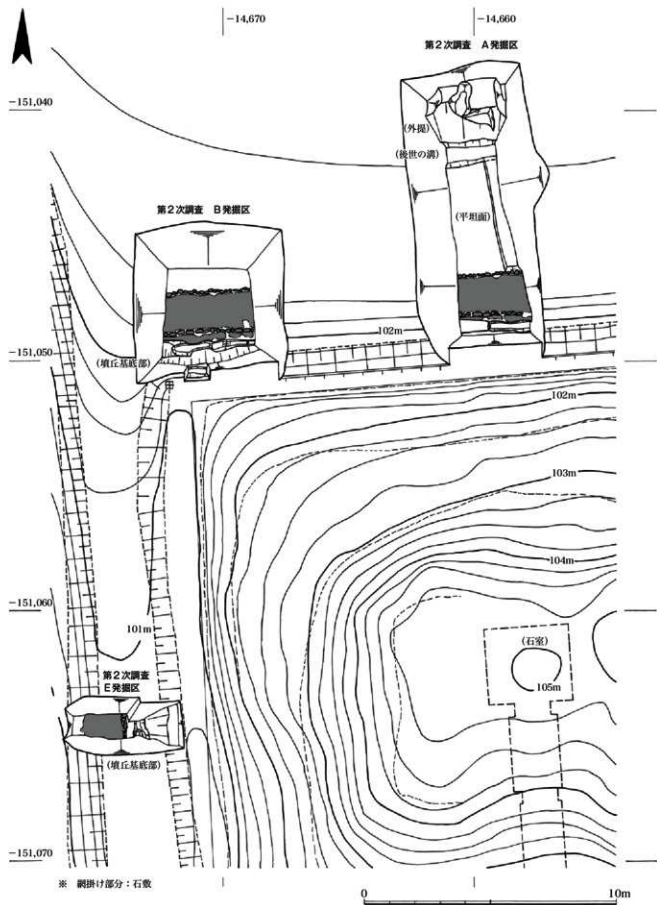
築造時の面を覆う黄褐色の砂質シルト・粘土層あるいはシルト・粘土ブロック層の層理は比較的水平で、層相や周辺の状態を踏まえれば外堤や墳丘を切り崩して形成された盛土層と判断される。B発掘区の明黄褐色硬凝じりシルト・粘土ブロック層 (土層図12層) から18世紀の磁器片が出土した。

(2) 検出遺構

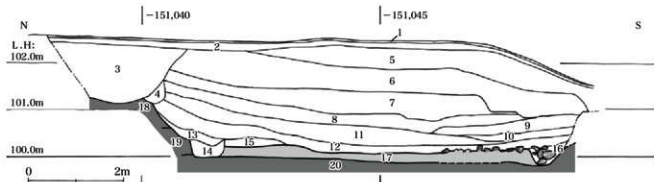
A発掘区 墳丘裾、墳丘北面の平坦面、外堤下部、墳丘裾に沿う基礎石の石材採取痕跡と墳丘の外周を巡る石敷を検出した。

墳丘裾、墳丘北面の平坦面と外堤下部は、地山を削って一体で成形されている。墳丘裾の位置は、現状の約1m北である。平坦面は幅7.2mで、外堤から墳丘に向かって緩やかに下る。地山直上にはシルト・粘土ブロックを敷いた整地土層 (厚さ0.2m)があり、後述する石敷はこの上面に敷設されている。外堤は平坦面の地山上面から1.3m上までが残るが、後世の変更が著しい。墳丘や外堤の裾に排水施設は設けられていない。また、崩落して堆積した土や外装施設の石材はみられない。

墳丘裾に沿う基礎石の石材採取痕跡は幅0.4m、深さ0.4mの溝状で、平坦面の整地土層上面で検出した。

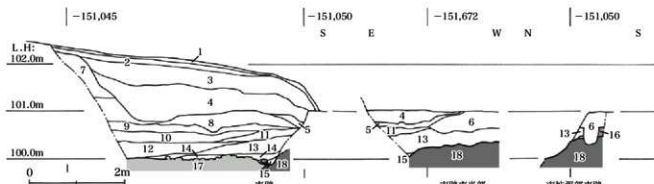


墳丘北・西面 発掘区平面図 (1/150)



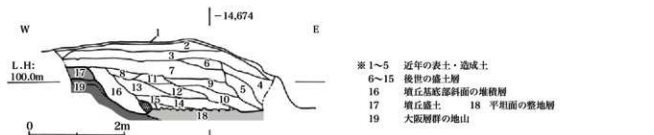
- | | | | |
|---------------------|--------------------|----------------------------|---------------------------|
| 1 表土 | 8 黄褐色砂質粘土混じりシルト | 17 破砕された18層と灰色砂質シルト | ※1~6 近年の表土・造成土 |
| 2 黄褐色シルト混じり砂礫 | 9 浅黄色砂質シルト・粘土 | ・粘土ブロック | 7~12 外堤や墳丘裾を切り崩して形成された盛土層 |
| 3 黄褐色砂質シルト・粘土 | 10 黄褐色砂質シルト・粘土ブロック | 18 灰白色砂質シルト・粘土 | 13・15 外堤斜面の崩積層 |
| 4 明黄褐色砂質粘土混じりシルト | 11 明黄褐色砂質粘土混じりシルト | 花崗岩片等を含む | 14 後世の溝の埋土 |
| 5 明黄褐色砂質シルト・粘土 | 12 黄褐色砂質粘土混じりシルト | 19 灰白色砂質シルト・粘土 | 16 石材採取跡の埋土 |
| 6 黒褐色腐植質シルト・粘土 | 13 明黄褐色砂質粘土混じりシルト | 20 花崗岩等の砂礫、隙間に淡黄色砂質シルトが混じる | 17 平坦面の整地層 |
| 7 黄褐色砂質粘土混じりシルトブロック | 14 明黄褐色砂質粘土混じりシルト | | 18~20 大板層群の地山 |
| | 15 明黄褐色砂質シルト・粘土 | | |
| | 16 黄色砂質シルト・粘土 | | |

K G Z 第2次調査 A発掘区 東壁土層断面図 (1/80)



- | | | |
|--------------------|-------------------------|---------------------------|
| 1 表土 | 9 黄褐色砂質シルトブロック | 17 浅黄色又は明黄褐色砂質シルト・粘土ブロック |
| 2 黄褐色シルト混じり砂礫 | 10 明黄褐色砂質シルト・粘土ブロック | 18 灰白色砂質シルト・粘土 |
| 3 明黄褐色砂質シルト・粘土ブロック | 11 明黄褐色砂質シルト・粘土ブロック | |
| 4 黒色腐植質砂質シルト | 12 明黄褐色砂質シルト・粘土ブロック | ※ 1~6 近年の表土・造成土 |
| 5 黒色腐植質砂質シルト | 13 褐色砂質シルト・粘土 | 7~14 外堤や墳丘裾を切り崩して形成された盛土層 |
| 6 暗灰色腐植質混じり砂質シルト | 14 黄色砂質シルト・粘土 | 15 石材採取跡の埋土 |
| 7 明黄褐色砂質シルト・粘土ブロック | 15 明黄褐色砂質シルト・粘土ブロック | 16 墳丘盛土 17 平坦面の整地層 |
| 8 明黄褐色砂質シルト・粘土ブロック | 16 18層のブロック、ブロック間に砂礫を含む | 18 大板層群の地山 |

K G Z 第2次調査 B発掘区 土層断面図 (1/80)



- | | | |
|--------------------|--------------------|----------------------------|
| 1 表土 | 8 黄褐色砂質シルト・粘土 | 15 黄褐色シルト・粘土混じり砂礫 |
| 2 黄褐色シルト混じり砂 | 9 黄褐色砂質シルト・粘土 | 16 褐色砂質シルト・粘土 |
| 3 灰黄褐色砂質粘土混じりシルト | 10 黄褐色砂質シルト・粘土ブロック | 17 黄褐色砂質シルト・粘土ブロック |
| 4 灰黄褐色腐植質シルト混じり砂 | 11 黄褐色砂質シルト・粘土 | ブロック間に花崗岩片等を含む |
| 5 オリーブ褐色砂質粘土混じりシルト | 12 黄褐色砂質粘土混じりシルト | 18 黄褐色砂質シルト・粘土 |
| 6 明黄褐色砂質シルト・粘土ブロック | 13 黄褐色砂質シルト・粘土 | 19 花崗岩等の砂礫、隙間に灰白色砂質シルトが混じる |
| 7 黄褐色砂質粘土混じりシルト | 14 黄褐色砂質シルト・粘土 | |

K G Z 第2次調査 E発掘区 南壁土層断面図 (1/80)



第2次調査 A発掘区全景
(北西から)



第2次調査 A発掘区 石敷
(南から)



第2次調査 A発掘区全景 (南から)



第2次調査 A発掘区 墳丘裾付近 (南西から)



第2次調査 B発掘区全景
(北西から)



第2次調査 B発掘区 石敷
(南から)



第2次調査 B発掘区 基底石の石材採取痕 (西から)



第2次調査 B発掘区 墳丘基底部 (西から)



左：第2次調査 E発掘区東半部（北西から）

上：第2次調査 E発掘区西半部（北から）

底面には石材を反映する凹凸があり、使用された石材は40～50cm大の礫と推察される。

墳丘の外周を巡る石敷は、高低差がある上下二段の石敷で構成される。墳丘裾の基底石に沿う上段は幅0.5m、その外側にある下段は幅1.6mで、ともに外縁を緑石で区画する。上段は下段よりも5～10cm高い。上・下段とも敷石には10～20cm大、緑石には20～30cm大の礫を用いており、礫種は花崗岩と斑崗岩が多い。飛鳥の寺院跡や宮殿遺跡の外装施設とよく似ている。

主な部位の標高は、上段石敷の上面が100.3m、下段石敷の上面が100.2m、平坦面の整地土層上面が100.1～100.2mである。

B発掘区 墳丘基底部、墳丘北面の平坦面、墳丘裾に沿う基底石の石材採取痕跡、墳丘の外周を巡る石敷を検出した。墳丘裾に沿う基底石の石材採取痕跡、墳丘の外周を巡る石敷は、前述のA発掘区とほぼ同様である。

墳丘基底部は上段石敷の上面から0.7m上までを検出した。上段石敷の上面から0.5m上までが地山で、その上は地山の粘土ブロックの盛土となる。基底部の斜面は後世の切土による改変を受けている。裾付近に墳丘から崩落して堆積した土や外装施設の石材はない。

主な部位の標高は、上段石敷の上面が100.2m、下段石敷の上面が100.1mで、A発掘区よりわずかに低い。

3 墳丘西面の調査（第2次調査 E発掘区）

(1) 基本層序

近年の表土層及び造成土層（厚さ0.4m）、黄橙色や黄褐色の砂質シルト・粘土層や砂質シルト・粘土ブロック層（厚さ1.1m）の下で築造時の面となる。築造時の面を覆う砂質シルト・粘土層や砂質シルト・粘土ブロック層には層相がほぼ水平で、層厚の変化が少ない層もある。層相及び周辺の状態を踏まえれば、墳丘や外堤を切り崩して形成された盛土層と判断される。

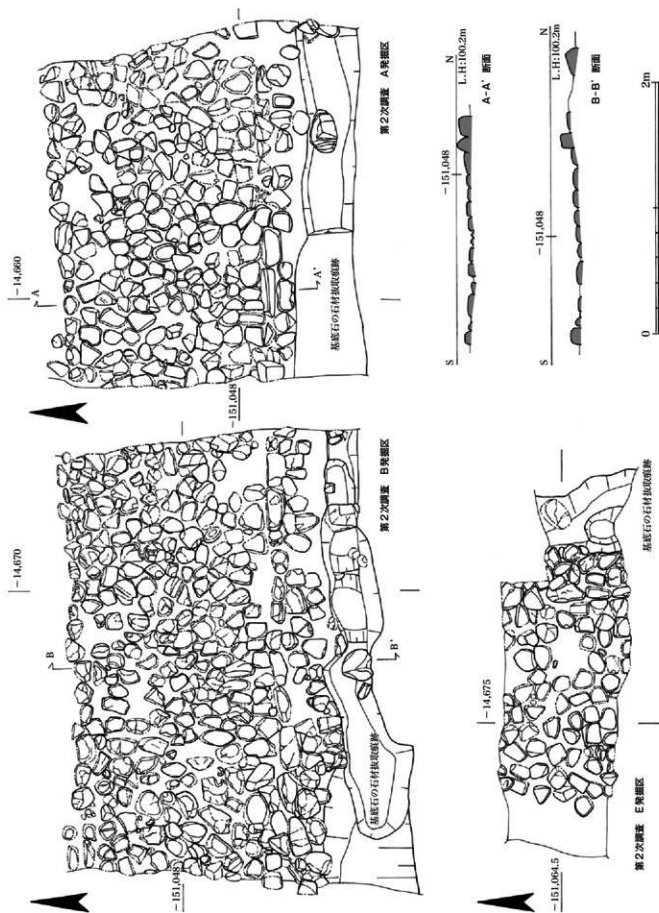
(2) 検出遺構

墳丘基底部、墳丘裾に沿う基底石の石材採取痕跡、墳丘の外周を巡る石敷を検出した。

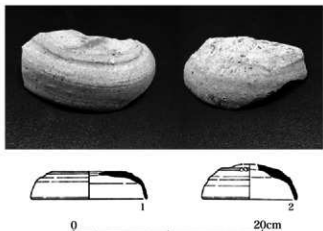
墳丘裾の位置は現状より約3m西である。墳丘基底部は上段石敷の上面から0.9m上までを検出した。上段石敷の上面から0.6m上までが地山で、その上は地山の粘土ブロックの盛土となる。基底部の斜面は後世の改変を受けて凹凸が多く、3～10cm大の礫を含む橙色砂質シルト・粘土層（図中16層、厚さ0.3m）で覆われている。

石敷の様相はA・B発掘区と同様で、整地土層上に敷設されている。下段石敷の西端は失われているが、残存部の幅は1.7mで、A・B発掘区よりも広い。

主な部位の標高は、上段石敷の上面が99.6m、下段石敷の上面が99.5mで、墳丘北面のA・B発掘区より低い。



KGSZ第2次調査 A・B・E発掘区 基礎石の採取痕及び石敷平面・断面図 (1/30)



K G Z第2次調査 C発掘区出土須恵器杯H蓋 (1/4)

Ⅲ 出土遺物

遺物整理箱で1箱分がある。その内訳は、古墳時代の埴輪、7世紀の土師器、須恵器、碑と18世紀頃の陶磁器で、埴輪と土器のほとんどが小片である。

このうち大半を占めるのは、C発掘区の明黄褐色砂質粘土混じりシルト層(土層図10層)から出土した7世紀の土器で、器種には土師器杯・高杯・甕、須恵器杯H蓋・甕がある。須恵器杯H蓋は2点ある。1は口径12.3cm、器高2.9cm。天井部はへら切り無調整で平たい。2は口径10.2cm、器高3.6cm。天井部はへら切り無調整で丸みを帯びる。これらの須恵器杯H蓋は、形態や法量から飛鳥Ⅰ～Ⅱ段階のものとみられる。

埴輪には、E発掘区の築造時の面を覆う盛土層の掘削時に出土した円筒埴輪片と、第6発掘区の黄褐色砂質粘土層(土層図7層)から出土した朝顔形埴輪片が1点ずつある。ともに突帯の形状から埴輪編年Ⅲ～Ⅳ期のものとみられる。碑は、D発掘区から1点出土した。ほぼ完形で、長さ25cm、幅14cm、厚さ6cm。流紋岩質溶結凝灰岩製で、石室の構築部材とみられる。

Ⅳ まとめ

市K G Z第1・2次調査では、墳丘の南・北・西辺の基底部分及びその周囲の平坦面と外装施設、墳丘北面の外堤の基底部分を検出した。その結果、墳丘の本来の形状・規模、古墳の築造方法、墳丘の外装施設に関する新たな知見を得ることができた。

墳丘の本来の形状・規模については、現状の墳丘裾の1～3m外側で築造当初の墳丘裾を検出したことから、一辺約30mの方墳に復元できる。また、墳丘裾とそれに面した平坦面が北から南に向かって約1m、東から西に向かって約0.5m低くなることが判明した。

古墳の築造方法については、墳丘北辺の基底部分と墳丘

北面の平坦面及び外堤の基底部分が地山の切土によって一体で成形され、墳丘西・南辺の基底部分と墳丘南面東寄りの平坦面も地山の切土によって成形されていることや、墳丘南面西寄りの平坦面が盛土によって形成されていることを確認した。このことから、墳丘周囲の平坦面及び外堤が古墳に伴うもので、築造にあたって地形をかなり広範囲に造成していることが明確になった。

墳丘の外装施設については、墳丘の裾に沿う基底石の周囲に石敷が巡り、その範囲が墳丘南面で5m以上、北面で2.1m、同西面で2.1m以上あることを確認した。また、石敷は飛鳥の寺院跡や宮殿遺跡の外装施設とよく似ており、同時期の古墳であり例を見ない外装施設を伴うことが明らかになった。

遺存状態が良くない墳丘南西隅の石敷については、墳丘西面のE発掘区との対比から、2条ある石材採取痕跡が基底石と上段石敷の緑石に対応し、墳丘北・西面と同様の形状であったと考えられる。また、位置関係から宮内庁調査地の石列は上段石敷の緑石、D発掘区の石敷は上段石敷にあたと判断できる。

未調査である墳丘東面の外装施設については、平坦面や外堤の形態が墳丘の南北中軸線に対して対称であることを踏まえれば、西面と同様と想定される。墳丘基底部分については、裾付近に墳丘から崩落した土や石材がみられず、墳丘西面のE発掘区で斜面上を覆う橙色砂礫質シルト・粘土層に3～10cm大の礫を含むことを考慮すれば、礫を用いた外装施設が本来存在し、後世に石材が持ち去られている可能性がある。

なお、C発掘区の明黄褐色砂質粘土混じりシルト層から出土した7世紀の土器は、出土遺物の大半を占めることから、古墳の築造時に使用されたものと推測され、築造時期を推定する手がかりになると考えられる。飛鳥Ⅰ～Ⅱ段階のものとみられる須恵器杯H蓋が含まれることを踏まえれば、築造時期は7世紀中頃と推定される。飛鳥Ⅰ～Ⅱ段階の土器は、奈良盆地南部にある磚積式の横穴式石室を埋葬施設とする古墳にも副葬されており⁴⁾、帯解黄金塚古墳はこれらの古墳と同時期に築造された可能性がある。(安井宣也)

- 1) 小島俊次「奈良市田中町字上之口 田中古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』8 奈良県教育委員会 1956
- 2) 清宮裕二「黄金塚陵墓参考地の墳丘及び石室現況調査報告」『書陵部紀要』59 宮内庁陵墓課 2008
- 3) 清宮裕二「黄金塚陵墓参考地石室前面部の事前調査」『書陵部紀要』57 宮内庁陵墓課 2006
- 4) 奥田 尚「黄金塚陵墓参考地の石材の石種とその採取地」『書陵部紀要』57 宮内庁陵墓課 2006
- 5) 林部 均「土器からみた磚積石室の年代」『舞古墳群の研究』碑田墳研究会編 1994

25. 平成 20 年度実施 試掘調査一覧

調査回数	遺跡名	調査地	調査期間	調査面積	事業者/事業内容	届出受理番号
2008-1	遺物散布地 (軌道跡地内 5A-20) 奈良山第 51・52 窟	押熊町 689-1 他	H20.4.21 ~ 5.16	389.21㎡	三和住宅株式会社 / 宅地造成	H20.3467
	調査結果：奈良時代の瓦葺 1 基を確認。なお、軌道跡地内の奈良山第 51・52 号窟の位置には瓦葺がなかったことから、この瓦葺が奈良山第 52 号窟、平成 18 年度に南隣後地で確認された瓦葺が同第 51 号窟であることが判明。 調査後の措置：瓦葺 1 基（奈良山第 52 号窟）を本調査。					
2008-2	平城京右京五条三坊十三坪	五条三丁目 9-1	H 20.12.1	64㎡	共栄社化学株式会社 / 共同住宅新築	H20.3293
	調査結果：盛土下面 0.1 ~ 0.6m (標高 79.3 ~ 79.8m) の地山上面で奈良時代の柱穴と土坑を確認。 調査後の措置：次年度に本調査を予定していたが計画中止。届出の取り下げ。					
2008-3	平城京左京四条一坊一坪	四条大路三丁目 943-2	H21.2.13	24㎡	大和情報サービス株式会社 / 店舗新築	H20.3403
	調査結果：水田下面 0.3 ~ 0.8m (標高 62.1 ~ 62.3m) の地山上面で奈良時代の柱穴、土坑を確認。 調査後の措置：基礎形状を計画変更し、遺跡保護の協力を得て工事立会。					
2008-4	平城京左京六条三坊十五坪	大安寺三丁目 82-2 他	H21.2.19	26.1㎡	個人/共同住宅新築	H20.3247
	調査結果：盛土下面 0.5m (標高 58.3m) の地山上面で奈良時代の柱穴、土坑、井戸を確認。 調査後の措置：基礎形状を計画変更し、遺跡保護の協力を得て工事立会。					
2008-5	平城京左京三条四坊六坪	大宮町三丁目 162-2	H21.3.11	33.4㎡	個人/共同住宅新築	H20.3398
	調査結果：盛土下面 0.9m (標高 63.8m) の地山上面で奈良時代の柱穴を確認。広範囲で乱掘を受け、遺構がほとんど残存しないことが判明。 調査後の措置：基礎掘削時に工事立会。					

26. 平成 20 年実施 工事立会一覧

(1) 平成 20 年度文化財保護法第 93 条 1、第 94 条の 1 の埋蔵文化財届出書及び通知に伴う工事立会

番号	届出・通知受理番号	遺跡	届出地	届出・通知者	事業内容	現況	立会日	立会結果
1	H19.3466	左京二条六坊八坪	法蓮町 1007-12、1097-10、2081	個人	共同住宅新築	宅地	H20.4.1	GL -0.7 m まで掘削、盛土内。
2	H19.3138	左京二条五坊一坪	法蓮町 724 ~ 328	大阪ガス株	ガス管敷設	道路	H20.4.1 H20.4.2 H20.4.3	GL -0.75 m まで掘削、黄灰色砂層確認。 GL -0.7 m まで掘削、灰色砂層確認。 GL -0.75 m まで掘削、黄灰色土確認。
3	H19.3395	左京三条四坊十四坪	大宮町二丁目 127-64・65	個人	診療所付住宅	宅地	H20.4.2	GL -1.7 m まで掘削、GL -1.2 m まで地山確認。
4	H19.3418	右京五条一坊十五坪・西一坊坊間西小路	五条町地内	奈良市長	下水道工事	道路	H20.4.3	GL -1.7 m まで掘削、灰色土内。
5	H19.3475	二条条間路	法蓮町 238-6 ~ 21	大阪ガス株	ガス管敷設	道路	H20.4.4	GL -1.5 m まで掘削、旧河川埋土内。
6	H19.3443	左京八条二坊五坪・八条条間南小路	杏町 66-2	個人	個人住宅新築	宅地	H20.4.7	GL -0.25 m まで掘削、耕作土内。
7	H19.3465	右京四条四坊十坪・四条条間北小路	宝来四丁目 224-1・2	個人	共同住宅新築	駐車場	H20.4.8	GL -1.1 m まで掘削、GL -1.0 m まで地山確認。
8	H19.3389	左京四条四坊九坪	三条宮前町 2-3 ~ 5-6	大阪ガス株	ガス管敷設	道路	H20.4.8	GL -0.8 m まで掘削、盛土内。
9	H19.3472	東五坊大路 奈良町遺跡	油阪町 382-2 他	宗蓮長寺	寺院 (トイレ) 改築	宅地	H20.4.9	整地のみ。
10	H20.3012	左京二条七坊二坪 奈良町遺跡	三条京町 199-3	佛奈良オートセンター	中古車展示場	宅地	H20.4.9	GL -1.3 m まで掘削、盛土内。
11	H19.3449	左京二条七坊二坪 奈良町遺跡	北袋町 21	個人	個人住宅新築	宅地	H20.4.14	GL -0.2 m まで掘削、盛土内。
12	H19.3433	右京七条四坊五坪	七条内町一丁目 627-97	個人	個人住宅新築	宅地	H20.4.14	GL -0.2 m まで掘削、盛土内。
13	H19.3362	元興寺旧境内	中袋町 32-1	個人	店舗新築	宅地	H20.4.14	GL -1.0 m まで掘削、盛土内。
14	H19.3450	左京五条二坊十坪	秋篠早月町 209-23 番地 19	個人	個人住宅新築	宅地	H20.4.15	GL -0.3 m まで掘削、盛土内。
15	H19.3458	右京北辺二坊八坪	秋篠早月町 209-23	個人	個人住宅新築	宅地	H20.4.18	GL -0.3 m まで掘削、盛土内。
16	H19.3482	右京四条五坊十一坪	杉ヶ町 45-4	奈良交通株	事務所改築	宅地	H20.4.18	GL -1.7 m まで掘削、GL -1.0 m まで地山確認。
17	H20.3010	左京五条四坊十二坪	大安寺六丁目 830-5、828-1 の一部	個人	賃貸住宅新築	宅地	H20.4.18 H20.5.13	GL -0.6 m まで掘削、GL -0.35 m まで地山確認。 GL -0.9 m まで掘削、耕作土内。
18	H19.3477	五条東二坊大路	四条大路南町 439-12	オーエスハウジング株	分譲住宅新築	宅地	H20.4.18	GL -0.1 m まで掘削、盛土内。
19	H20.3007	古市城跡	古市町 2059-23 番地	個人	宅地造成 個人住宅新築	宅地	H20.4.21 H20.7.14	GL -0.4 m まで掘削、GL -0.15 m まで地山確認。 GL -0.4 m まで掘削、盛土内。

番号	届出・通知 受理番号	道 跡	届出地	届出・通知者	事業内容	現況	立会日	立会結果
20	H19.3474	左京二条五坊十三坪	北市町 20 番 2	個人	個人住宅新築	宅地	H20.4.21	G L -0.4 m まで掘削、盛土内。
21	H19.3399	二条六坊坊間路	法蓮南二丁目 1089 ～ 1071	大阪ガス機	ガス管敷設	道路	H20.4.22	G L -0.7 m まで掘削、盛土内。
22	H19.3501	紀寺跡 奈良町道跡	紀寺町 658-8	佛日本中央 住販	分譲住宅新築	宅地	H20.4.22	G L -0.2 m まで掘削、盛土内。
23	H19.3478	左京三条一坊五坪 三条大路	三条大路二丁目～ 三丁目・四条大路 二丁目～三丁目 地先の国道24号線・ 国道308号線・市 道中部第264号線	西日本電信 電話機	NTT 設備支障 移転工事	道路	H20.4.23	G L -0.8 m まで掘削、灰色土（遺物 包含層）内。
24	H19.3371	左京五条二坊五坪	四条大路南町 368 番 36	個人	個人住宅新築	宅地	H20.4.23	G L -0.3 m まで掘削、盛土内。
25	H19.3421	左京一条架間路	今在家町 45-1 手 貝町 3	大阪ガス機	ガス管敷設	道路	H20.4.25	G L -1.0 m まで掘削、盛土内。
26	H19.3487	右京北辺四坊四坪	西大寺堂ヶ丘 723-5	府宜住建	分譲住宅新築	宅地	H20.4.25	G L -0.5 ～ 1.5 m まで掘削、G L -0.5 ～ 1.5 m まで地山確認
27	H20.3018	右京五条三坊十五坪	平松二丁目 325、 339	佛八州エイ ジェント	青空資材置場	水田	H20.4.25 H20.5.13	掘削なし。 G L -0.95 m まで掘削、G L -0.6 m まで地山確認
28	H19.3392	左京五条七坊六坪・ 七坊坊間西小路	井上町 6-1	個人	個人住宅新築	宅地	H20.4.28	G L -0.7 m まで掘削、G L -0.5 m まで地山確認
29	H19.3333	西二坊二条大路	二条大路南五丁目 454 番 2	個人	個人住宅新築	宅地	H20.4.28 H20.6.11	G L -0.3 ～ 0.4 m まで掘削、盛土内。 G L -2.0 m まで掘削、盛土内。
30	H19.3484	左京五条四坊四坪	大安寺七丁目 2-10	個人	自己用倉庫新 築	宅地	H20.4.30	G L -0.4 m まで掘削、赤褐色土（遺 物包含層）内。
31	H19.3488	右京五条三坊三坪	五条寺七丁目 11-18 他	大阪ガス機	ガス管敷設	道路	H20.5.7	G L -0.7 m まで掘削、盛土内。
32	H19.3331	左京八条四坊十一坪	東九条町 622-7	個人	青空駐車場	畑地	H20.5.8	G L -0.5 m まで掘削、灰色土内。
33	H19.3460	右京二条三坊八坪	西大寺芝町一丁目 2105-15	個人	個人住宅新築	畑地	H20.5.8	G L -0.5 m まで掘削、盛土内。
34	H20.3011	左京五条四坊十二坪	大安寺六丁目 830-1	個人	賃貸住宅新築	雑種地	H20.5.9	G L -1.2 m まで掘削、G L -1.0 m まで地山確認
35	H20.3004	左京八条四坊十二坪	東九条町 686、 688、644 番の一部	個人	駐車場利用	水田	H20.5.12	盛土のみ。
36	H20.3021	右京一条四坊六坪	法蓮町 536-1、-2、 537-2 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H20.5.12	G L -1.0 m まで掘削、盛土内。
37	H19.3491	南紀寺道跡	南紀寺三丁目 64 番 4、5	個人	個人住宅新築	宅地	H20.5.12	G L -0.1 m まで掘削、盛土内。
38	H19.3503	左京五条四坊五坪	大安寺七丁目 853 番 1	個人	個人住宅新築	宅地	H20.5.12	G L -0.4 m まで掘削、盛土内。
39	H19.3473	左京三条五坊十四坪 東五坊大路	今辻子町 34 番 1	個人	店舗付個人住 宅新築	宅地	H20.5.12	G L -0.4 m まで掘削、盛土内。
40	H19.3498	左京七条四坊十三坪	東九条町 1009 番 1	個人	個人住宅新築	宅地	H20.5.15	G L -0.3 m まで掘削、盛土内。
41	H19.3497	左京五条六坊九坪 奈良町道跡	南城町 42-5	個人	個人住宅新築	宅地	H20.5.15	G L -0.3 m まで掘削、盛土内。
42	H19.3489 H19.3397	左京二条四坊九坪	法蓮町 407-1 の一 部	個人	賃貸住宅新築	水田	H20.5.15 H20.5.16 H20.5.21	盛土のみ。 G L -0.15 m まで掘削、耕作土内。 G L -0.6 m まで掘削、茶褐色土内。
43	H19.3464	左京九条三坊十二坪	東九条町 16 番 1	宗真澄寺	フェンス、ス ロップ道路の 新設	駐車場	H20.5.19	G L -0.45 m まで掘削、耕作土内。
44	H20.3053	左京五条四坊五坪	五条三丁目 867-6	個人	個人住宅新築	宅地	H20.5.20	G L -1.2 m まで掘削、地表面が地山。
45	H19.3431	左京四条三坊十五坪	三条添川町・三条 栄町地内	奈良市長	下水道埋設	道路	H20.5.21 H20.5.23	G L -2.4 m まで掘削、黄灰色土内。 G L -1.7 m まで掘削、盛土内。
46	H20.3027	左京二条五坊北部	法蓮町 939-2	個人	個人住宅増築	宅地	H20.5.22	G L -0.35 m まで掘削、盛土内。
47	H19.3494	右京五条三坊六坪	平松二丁目 241-3	個人	個人住宅新築	宅地	H20.5.22	G L -0.3 m まで掘削、灰白色砂確認。
48	H19.3500	右京五条三坊十五坪	平松二丁目 281 番 118、119	個人	個人住宅新築	宅地	H20.5.23	G L -0.6 m まで掘削、盛土内。
49	H19.3422	左京二条五坊十坪	法蓮町 273-1	個人	個人住宅新築	宅地	H20.5.26 H20.5.27	G L -0.4 m まで掘削、盛土内。 G L -1.25 m まで掘削、盛土内。 G L -1.7 m まで掘削、G L -0.9 m まで地山（遺物面？）確認。
50	H19.3417	東一坊九条大路	西九条四丁目 市道九条線	関西電力機	電気の管路新 設	道路	H20.5.26 H20.5.27	G L -1.25 m まで掘削、盛土内。 G L -1.7 m まで掘削、G L -0.9 m まで地山（遺物面？）確認。
51	H20.3051	右京五条四坊十一坪	平松四丁目 402-19	個人	個人住宅新築	宅地	H20.5.28	G L -0.55 m まで掘削、盛土内。
52	H20.3014	左京二条五坊三坪	法蓮町 64-2	個人	個人住宅新築	宅地	H20.5.30	G L -0.1 m まで掘削、盛土内。
53	H20.3022	左京五条三坊十六坪 ・四条大路	恋の産一丁目 624-6	個人	個人住宅新築	宅地	H20.6.2	G L -0.3 m まで掘削、盛土内。

番号	届出・通知 受理番号	遺 跡	届出地	届出・通知者	事業内容	現況	立会日	立会結果
54	H20.3032	左京三条三坊三坪	大宮町七丁目1番57号	佛ケイ・キャット	アンテナ支持 鉄柱設置	宅地	H20.6.2	GL -1.0 mまで掘削、盛土内。
55	H19.3504	東七坊一条南大路 奈良町遺跡	東包永町2、3、 4-1、5	個人	共同住宅新築	宅地	H20.6.2	GL -1.0 mまで掘削、盛土内。
56	H20.3026	東二坊大路・四条 大路	西条大路南町 439-7	オーエスハ ウジング㈱	分譲住宅新築	宅地	H20.6.2	GL -0.2 mまで掘削、盛土内。
57	H20.3016	左京九条二坊十坪	西九条町二丁目 13-1	大明㈱	携帯基地局の 無線設備増設	宅地	H20.6.2	GL -0.4 mまで掘削、盛土内。
58	H19.3479	左京六条二坊七坪	八条町 358 番-1	日本食研㈱	事務所新築	水田	H20.6.2 H20.6.5	GL -0.2 mまで掘削、床土上面で取る。 GL -0.8 mまで掘削、床土内。
59	H20.3052	左京五条六坊十六 坪 奈良町遺跡	鳴川町 39	個人	個人住宅新築	宅地	H20.6.4 H20.6.19	掘削工事、GL -1.6 mまで掘削、黒 褐色土内。 建物基礎工事、GL -0.2 mまで掘削、 盛土内。
60	H20.3038	二条東六坊大路	北袋町 17-5	個人	個人住宅新築	宅地	H20.6.6	GL -0.4 mまで掘削、盛土内。
61	H19.3172	西大寺旧境内	西大寺町見一丁目 2196-1	近畿日本鉄 道㈱	駅舎増築	駅舎	H20.6.7	プラットフォーム上から -2.0 mまで 掘削、黄灰色粗砂上面で土坑一基礎 礎。
62	H20.3041	六条山東遺跡	六条西三丁目 1481 番 72	個人	個人住宅新築	宅地	H20.6.9	工事先行。
63	H20.3063	左京四条六坊六坪 奈良町遺跡	西城戸町 7-4、馬場 町 14-5	個人	店舗新築	宅地	H20.6.9	GL -1.0 mまで掘削、盛土内。
64	H20.3009	元興寺旧境内 奈 良町遺跡	中塚町 20-1	個人	店舗付住宅改 装	宅地	H20.6.10	GL -0.5 mまで掘削、暗茶褐色土層 内。
65	H20.3005	右京三条三坊五坪	宝来一丁目 84-7、8、 9	個人	宅地造成	畑地	H20.6.11	GL -0.3 mまで掘削、床土内。
66	H20.3057	左京五条三坊八坪	恋の窟一丁目 607-1 の一部	オーエスハ ウジング㈱	分譲住宅新築	宅地	H20.6.12	GL -0.3 mまで掘削、盛土内。
67	H20.3024	右京二条二坊十二 坪	西大寺町見二丁目 291-22	個人	個人住宅新築	宅地	H20.6.12	GL -0.9 mまで掘削、盛土内。
68	H19.3476	田村第跡	四条大路一丁目 726-3	ファースト 住建㈱	分譲住宅新築	宅地	H20.6.12	GL -0.4 mまで掘削、盛土内。
69	H19.3427	左京五条一坊十六 坪・東一坊大路 集落跡 (奈良県遺 跡地図 5 C-67)	柏木町 572 番 4、 581 番 1	個人	店舗新築	宅地	H20.6.16	GL -1.2 mまで掘削、盛土内。
70	H20.3062	左京三条五坊九坪	芝辻町 11-79	US建築デ ザイン研究 所	分譲住宅新築	宅地	H20.6.16	GL -0.2 mまで掘削、盛土内。
71	H19.3480	右京七条一坊十二 坪	七条町 1174 他	三和建設㈱	倉庫新築	宅地	H20.6.16	GL -0.8 mまで掘削、盛土内。
72	H19.3461	西大寺旧境内	西大寺小坊町 306 番の一部、316 番 3	個人	共同住宅新築	宅地	H20.6.17	GL -0.3 mまで掘削、暗褐色土内。
73	H20.3003	左京三条二坊四坪	三条大路一丁目 581-3、582-2、 584-54	大和ハウス 工業㈱	店舗新築	宅地	H20.6.17	GL -0.3 mまで掘削、盛土内。
74	H20.3040	右京北辺三坊一坪	西大寺新町一丁目 123-13	個人	個人住宅新築	宅地	H20.6.20	GL -0.2 mまで掘削、盛土内。
75	H19.3403	東四坊二条大路	芝辻町二丁目 244-3 他 3 筆	個人	賃貸住宅新築	宅地	H20.6.20 H20.6.23	GL -0.2 mまで掘削、盛土内。 GL -1.0 mまで掘削、耕作土内。
76	H20.3002	奈良町遺跡	紀寺町 1037 ~ 992-1	大阪ガス㈱	ガス管敷設	宅地	H20.6.25	GL -0.65 mまで掘削、茶褐色土内。
77	H20.3060	東七坊一条南大路 奈良町遺跡	東包永町 13 番 1	佛アーネ ストウ ン	分譲住宅新築	宅地	H20.6.27	GL -0.2 mまで掘削、盛土内。
78	H20.3017	左京一条三坊五坪・ 東三坊四間路	法華寺 1275 の一部	個人	共同住宅新築	宅地	H20.6.27	GL -0.2 mまで掘削、盛土内。
79	H20.3047	奈良町遺跡	高畑町 908-1、 908-2	個人	個人住宅新築	宅地	H20.6.30	GL -0.1 ~ 0.4 mまで掘削、盛土内。
80	H20.3061	左京三条五坊九坪 奈良町遺跡	芝辻町 11-38	US建築デ ザイン研究 所	分譲住宅新築	宅地	H20.6.30	GL -0.4 mまで掘削、旧表土内。
81	H20.3034	東五坊二条大路	芝辻町三丁目 49 番 24	個人	個人住宅新築	宅地	H20.6.30	盛土のみ。
82	H19.3502	左京六条三坊十一 坪	大安寺二丁目 8 番 1 号の一部	佛アーネ キネ ット	モデルハウス 新築	宅地	H20.7.1	GL -0.45 mまで掘削、盛土内。
83	H20.3025	右京四条四坊九坪	宝来四丁目 9-5 ~ 224-1	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H20.7.1 H20.7.2	GL -0.4 mまで掘削、GL -0.3 m まで地山確認。 GL -1.2 mまで掘削、GL -0.6 m まで地山確認。
84	H18.3026	左京二条五坊三坪 奈良町遺跡	北市町 72-1、2 他	佛徳山堂	共同住宅新築	宅地	H20.7.7	GL -0.2 mまで掘削、茶褐色土内。
85	H20.3090	左京四条六坊六坪 奈良町遺跡	西城戸町 7-4、馬場 町 14-5	個人	看板新設	宅地	H20.7.10	GL -1.6 mまで掘削、GL -1.0 m まで地山確認。

番号	届出・通知 受理番号	道 跡	届出地	届出・通知者	事業内容	現況	立会日	立会結果
86	H20.3063	紀寺跡 奈良町道跡	紀寺町 658-7	徳日本中央 住販	分譲住宅新築	宅地	H20.7.10	G L -0.2 mまで掘削、盛土内。
87	H20.3068	右京五条四坊四坪・ 西四坊間東小路	五条三丁目 867 番 4	個人	個人住宅新築	宅地	H20.7.10	G L -1.8 mまで掘削、地表面が地山。
88	H20.3074	左京四条一坊十一 坪・四条条間南小 路	四条大路二丁目 42-1	個人	賃貸・共同住 宅新築	宅地	H20.7.11	G L -0.2 mまで掘削、盛土内。
89	H20.3036	一条南大路・西四 坊大路	若葉台三丁目 1913-14	個人	個人住宅新築	宅地	H20.7.14	G L -0.3 mまで掘削、盛土内。
90	H20.3055	東四坊八条大路	東九条 279-1 番地	個人	駐車場造成	水田	H20.7.15	G L -0.45 mまで掘削、盛土内。
91	H20.3037	雀之庄北浦道跡	山町 682-1、雀之 庄町 519-1 他	個人	個人住宅新築	宅地	H20.7.17	G L -0.4 ～ 0.5 mまで掘削、G L -0.1 ～ 0.4 mで地山確認。
92	H20.3118	東紀寺道跡	東紀寺一丁目 703-6	個人	個人住宅新築	宅地	H20.7.17	G L -0.2 ～ 0.3 mまで掘削、盛土内。
93	H19.3414	東二坊三条大路・ 東二坊坊間路 田村第跡	三条大路一丁目～ 西条大路一丁目地 内	奈良市長	下水道工事	宅地	H20.7.17	G L -1.2 mまで掘削、盛土内。
94	H20.3066	左京二条六坊北部	法蓮町 916-4 の一 部	個人	個人住宅新築	宅地	H20.7.22	G L -0.4 ～ 1.0 mまで掘削、水田造 成土内。
95	H20.3082	右京六条三坊六坪	六条一丁目 744-4	麻蔵工務店	分譲住宅新築	宅地	H20.7.22	G L -0.1 ～ 0.7 mまで掘削、盛土内。
96	H20.3124	左京四条一坊五坪	西条大路三丁目 941-1 他	個人	個人住宅新築	宅地	H20.7.22	G L -0.3 mまで掘削、盛土内。
97	H20.3065	三条大路・左京三 条一坊五坪	三条大路二丁目～ 三丁目・西条大路 二丁目～三丁目 地先の国道24号線・ 国道 308 号線・市 道中部第 264 号線	西日本電信 電話株	NTT設備支 障移転工事	道路	H20.7.22	G L -1.3 ～ 1.7 mまで掘削、北西部 分 G L -1.0 mで地山確認。
98	H20.3116	左京二条四坊十三 坪	芝辻町三丁目 94-2	個人	個人住宅新築	宅地	H20.7.22	G L -0.4 mまで掘削、盛土内。
99	H20.3083	多聞城跡	法蓮町 1514-21、 1514-61	個人	個人住宅新築	宅地	H20.7.22 H20.7.28	G L -1.0 mまで掘削、盛土内。 工事先行。G L -2.0 mまで掘削、一 部で G L -0.1 mで地山確認。
100	H20.3101	元興寺旧境内	醍醐 9-1、2	個人	個人住宅新築	宅地	H20.8.18 H20.7.25	G L -0.6 mまで掘削、盛土内。 G L -0.3 ～ 0.5 mまで掘削、盛土内。
101	H20.3125	左京四条一坊八坪	西条大路三丁目 932-1、2	個人	個人住宅新築	宅地	H20.7.25	G L -0.2 mまで掘削、盛土内。
102	H19.3419	右京四条一坊八・ 九坪	西条大路四丁目～ 五丁目地内	奈良市長	下水道工事	道路	H20.7.25 H20.7.29 H20.7.30 H20.7.31	G L -2.2 mまで掘削、G L -0.9 m まで遺構面・地山確認。 G L -1.9 mまで掘削、G L -1.4 m で地山確認。 G L -2.0 mまで掘削、灰色砂層内。 G L -2.0 mまで掘削、灰色砂層内。
103	H19.3485	右京三坊五条大路	五条町二丁目 500-1 の一部	個人	共同住宅新築	宅地	H20.7.29	G L -0.9 mまで掘削、G L -0.35 m で地山確認。
104	H20.3050	左京四条三坊九・ 十五坪	三条添川町～三条 栄町地内	奈良市水道 事業管理者	水道工事	道路	H20.7.31 H20.8.1 H20.8.4	G L -2.0 mまで掘削、G L -1.25 m で地山確認。 G L -1.3 mまで掘削、耕作土内。 G L -1.5 mまで掘削、G L -1.3 m で地山確認。
105	H20.3099	東紀寺道跡	東紀寺町一丁目 703-5 の一部、	市立病院	託児施設新設	宅地	H20.8.1	G L -0.5 mまで掘削、盛土内。
106	H20.3081	右京四条二坊二坪	西条大路五丁目 6-1	奈良市長	学校体育倉庫 新築	学校地	H20.8.6	G L -0.45 mまで掘削、盛土内。
107	H20.3143	佐伯院跡 奈良町 道跡	西木辻町	藤泉見住宅	宅地造成	宅地	H20.8.6	G L -2.0 mまで掘削、G L -1.2 m 下で地山確認。
108	H19.3279	左京三条七坊北部 奈良町道跡	多門町 1、川上町 563-4	奈良社会福 祉院	共同住宅新築	宅地	H20.8.6	G L -0.45 mまで掘削、盛土内。
109	H20.3035	左京三条五坊十三 坪 奈良町道跡	三三条町 33-1	個人	店舗付個人住 宅新築	宅地	H20.8.7	G L -1.0 mまで掘削、盛土内。
110	H20.3078	左京四条五坊五坪	杉ヶ町 28-1	個人	店舗新築	宅地	H20.8.7	G L -1.0 mまで掘削、盛土内。
111	H20.3076	二条東五坊坊間路	法蓮町 292-1	個人	個人住宅新築	宅地	H20.8.7 H20.8.12	工事先行。 G L -0.4 mまで掘削、床土内。
112	H20.3067	七条東四坊大路	東九条町 1556-6	藤 K ネット 一建設	店舗新築	宅地	H20.8.7 H20.9.1	G L -2.7 mまで掘削、盛土内。 G L -0.8 ～ 1.3 mまで掘削、盛土内。
113	H20.3079	六条大路・西四坊 大路	六条西四丁目 3-2	一建設	分譲住宅新築	宅地	H20.8.8	G L -1.4 mまで掘削、G L -0.8 mで 地山確認。
114	H19.3453	田村第跡	西条大路一丁目 462-102	佛福岡屋住 宅流通	分譲住宅新築	宅地	H20.8.8	G L -0.2 mまで掘削、盛土内。
115	H18.3025	左京二条五坊十四 坪 奈良町道跡	北市町 72-1 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H20.8.8	G L -0.1 mまで掘削、盛土内。
116	H20.3015	左京二条六坊一坪	法蓮町 1000 番地	佛エヌ・ ティ・ティ・ ドコモ関西	携帯電話工事 に伴うアース 線設置	学校用 地	H20.8.11	G L -0.9 mまで掘削、G L -0.5 m 下で地山確認。

番号	届出・通知 受理番号	遺 跡	届出地	届出・通知者	事業内容	現況	立会日	立会結果
117	H20.3142	西四坊二条条間小路 法世寺跡	疋田町一丁目1番1	個人	個人住宅新築	宅地	H20.8.11	GL -0.3 mまで掘削、盛土内。
118	H20.3112	田村第跡	四条大路一丁目 462-90	個人	個人住宅新築	宅地	H20.8.11	GL -0.9 mまで掘削、盛土内。
119	H20.3110	田村第跡	四条大路一丁目 1000 番地 112	個人	個人住宅新築	宅地	H20.8.18	GL -0.35 mまで掘削、盛土内。
120	H20.3087	右京三条一坊十三 坪・西一坊間小路	三条大路四丁目 490、491-1	個人	賃貸住宅新築	背空駐 車場	H20.8.18	GL -0.2 mまで掘削、盛土内。
121	H19.3414	東二坊三条大路・ 東二坊四坊間路 田 村第跡	三条大路一丁目～ 四条大路一丁目地	奈良市長	下水道工事	道路	H20.8.18	GL -2.5 mまで掘削、GL -2.4 m で地山確認。
122	H20.3148	左京五条三坊八坪	恋の窟一丁目 607-12	オーエスハ ウジンク㈱	分譲住宅新築	宅地	H20.8.19	GL -0.4 mまで掘削、盛土内。
123	H20.3059	左京五条六坊九坪	南城ノ町 42 番 4	個人	個人住宅新築	宅地	H20.8.19	GL -0.25 mまで掘削、盛土内。
124	H20.3172	右京三条二坊十五 坪 菅原東遺跡	西大寺町見町二丁 目 385 番 7	個人	個人住宅新築	宅地	H20.8.19	GL -0.35 mまで掘削、盛土内。
125	H20.3085	右京三条四坊十坪	宝来町 950-1、949、 944	㈱大誠	葬儀会館新築	宅地	H20.8.19	GL -0.85 mまで掘削、盛土内。
126	H20.3133	左京二条五坊北部	法通町 829-5、10	個人	個人住宅新築	宅地	H20.8.20	GL -0.3 mまで掘削、盛土内。
127	H19.3505	紀寺跡	紀寺町 682 番 1	個人	店舗新築	水田	H20.8.20	GL -2.0 mまで掘削、GL -2.0 m で地山確認。
128	H20.3019	左京二条三坊十四 坪	菅原町 291 番 4 の 一部	個人	賃貸住宅新築	宅地	H20.8.21	GL -0.3 mまで掘削、盛土内。
129	H20.3091	七条東三坊大路	東九条町 1279 番 1、 1279 番 4	㈱アイロー ド・ジャパ ン	資材置場造成	水田	H20.8.22	GL -0.5 mまで掘削、旧水田耕作土 内。掘削床で炭、時期不明の土師器・ 瓦片の包含層確認。
130	H20.3155	東四坊二条大路	芝辻町二丁目 9-15 ～38	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H20.8.25	GL -0.8 ～ 1.3 mまで掘削、GL -0.9 mで地山確認。
131	H20.3137	右京五条三坊一坪	五条一丁目 481 番 74	個人	個人住宅新築	宅地	H20.8.26	GL -0.4 ～ 0.9 mまで掘削、旧耕作 土内。一部 GL -0.65 mで地山確認。
132	H20.3168	左京六条二坊八坪・ 五条大路	大安寺町 497-1	個人	畑地造成	水田	H20.8.26	工事先行。GL -0.5 mまで掘削、旧 水田耕作土内。
133	H20.3071	田村第跡	四条大路一丁目 462 番 86	個人	個人住宅新築	宅地	H20.8.27	GL -0.6 mまで掘削、盛土内。
134	H20.3048	左京二条六坊九坪 二条東七坊間東 小路	法通町 1095-7 他	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H20.8.27	GL -0.7 mまで掘削、耕作土内。
135	H20.3147	左京二条六坊九坪 二条東七坊間東 小路	南半田町 3 番地	個人	個人住宅新築	宅地	H20.8.28	GL -0.4 mまで掘削、盛土内。
136	H20.3073	六条朱雀大路	西ノ京町 1-4	個人	個人住宅新築	宅地	H20.8.29	GL -0.4 mまで掘削、盛土内。
137	H20.3126	佐船前跡 奈良町 遺跡	西木土町 200-12 ～ 47	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H20.8.29	GL -0.8 ～ 1.1 mで掘削、GL -0.55 ～ 0.9 mで地山確認。
138	H20.3075	西大寺旧境内	西大寺小坊町 360 番 1	個人	個人住宅新築	宅地	H20.9.1	GL -0.26 mまで掘削、盛土内。
139	H20.3163	奈良町遺跡	紀寺町 891-6	個人	個人住宅新築	宅地	H20.9.2	GL -0.5 mまで掘削、暗茶褐色土内。
140	H20.3103	右京六条三坊十五 坪	六条一丁目 826-1、 826-2 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H20.9.4	GL -0.6 mまで掘削、GL -0.2 m で地山確認。
141	H20.3146	左京九条一坊九坪	西九条町五丁目 2 番 9 の一部	アサノ不動 産㈱	店舗新築	宅地	H20.9.4	GL -0.7 mまで掘削、盛土内。
142	H20.3097	右京北辺二坊八坪	西大寺新町一丁目 118-20	個人	個人住宅新築	宅地	H20.9.4	GL -0.25 mまで掘削、盛土内。
143	H20.3157	右京北辺四坊四坪	西大寺室ヶ丘 723-5	個人	個人住宅新築	宅地	H20.9.4	GL -0.2 mまで掘削、盛土内。
144	H20.3175	右京二条二坊十三 坪	西大寺町見町二丁 目 291 番 27	個人	個人住宅新築	宅地	H20.9.8	GL -0.6 mまで掘削、盛土内。
145	H20.3006	左京五条二坊六坪	八条町 363-2 他	㈱フクダ不 動産	道路建設	道路	H20.9.10	GL -0.7 mまで掘削、一部 GL -0.7 m で堤の盛土確認。
146	H20.3152	左京五条二坊四坪	大安寺町 504-1 他	㈱小嶋	店舗新築	宅地	H20.9.11	GL -1.3 mまで掘削、盛土内。
147	H20.3173	右京六条三坊十五 坪	西木土町 1 丁目 826 番 3	個人	個人住宅新築	宅地	H20.9.12	GL -0.2 ～ 0.4 mまで掘削、GL -0.2 ～ 0.4 mで地山確認。
148	H20.3158	秋篠町遺物散布地	秋篠町 1667 番地の 一部	オーエッチ 工業㈱	分譲住宅新築	宅地	H20.9.12	GL -0.1 mまで掘削、盛土内。
149	H20.3156	秋篠町遺物散布地	秋篠町 1667 番地の 一部	オーエッチ 工業㈱	宅地造成	原野	H20.9.12	工事先行。
150	H20.3225	右京七条一坊一坪・ 六条大路	西ノ京町 1-54	個人	個人住宅新築	宅地	H20.9.12	GL -0.2 mまで掘削、盛土内。
151	H20.3115	左京三条一坊三坪	三条大路三丁目地 内	奈良市長	下水道工事	道路	H20.9.12 H20.9.17	GL -1.0 mまで掘削、コンクリート スラブ上面。 GL -1.6 mまで掘削、GL -1.4 m で地山確認。
152	H20.3194	左京七坊五条大路 奈良町遺跡	紀寺町 658-12	㈱日本中央 住産	分譲住宅新築	宅地	H20.9.17	GL -0.3 mまで掘削、盛土内。
153	H20.3141	左京五条三坊八坪	恋の窟一丁目 607-4	オーエスハ ウジンク㈱	分譲住宅新築	宅地	H20.9.19	GL -0.4 mまで掘削、盛土内。
154	H20.3209	奈良町遺跡	紀寺町 922-14、13 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H20.9.22	GL -0.2 mまで掘削、盛土内。

番号	届出・通知 受理番号	遺 跡	届出地	届出・通知者	事業内容	現況	立会日	立会結果
155	H20.3104	左京二条五坊十三坪 奈良町道跡	北市町 25-1, 2	個人	個人住宅新築	宅地	H20.9.22	掘削なし。
156	H20.3209	左京二条五坊北郊	法蓮町 727-9	ミサワホーム 近畿㈱	分譲住宅新築	宅地	H20.9.24	G L -0.2 mまで掘削、盛土内。
157	H20.3132	右京五条三坊六坪	五条二丁目 601 番 50	個人	個人住宅新築	宅地	H20.9.25	G L -0.4 mまで掘削、G L -0.2 m で地山確認。
158	H20.3167	右京四条四坊八坪	宝来町三丁目 190 番 1 他	個人	個人住宅新築	宅地	H20.9.25	G L -0.2 mまで掘削、盛土内。
159	H20.3214	左京六条四坊十三坪	大安寺一丁目 1228-1 他	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H20.9.26	G L -0.9 mまで掘削、盛土内。
160	H20.3179	西大寺旧境内	若菜台三丁目 1968 番 5	個人	個人住宅新築	宅地	H20.9.29	G L -0.2 ～ 0.3 mまで掘削、地表面 で地山確認。
161	H20.3205	左京五条三坊八坪	恋の窪一丁目 607-11	O S ハウジ ング㈱	分譲住宅新築	宅地	H20.9.29	G L -0.2 mまで掘削、盛土内。
162	H20.3206	左京五条三坊八坪	恋の窪一丁目 607-8	O S ハウジ ング㈱	分譲住宅新築	宅地	H20.9.29	G L -0.2 mまで掘削、盛土内。
163	H20.3121	右京五条一坊十四坪	五条町 195-6 の一 部	個人	個人住宅新築	水田	H20.9.30	G L -1.5 mまで掘削、G L -1.3 m で地山確認。
164	H20.3193	左京五条七坊六坪 奈良町道跡	井上町 3-5, 5-3 の 一部	興和不動産	下水道建設	宅地	H20.10.1 H20.10.2	G L -2.0 mまで掘削、G L -0.3 mで 地山確認。 G L -2.0 mまで掘削、G L -0.3 mで 地山確認。
165	H20.3211	右京七条四坊十二坪	七条西町一丁目 627-34	個人	個人住宅新築	宅地	H20.10.2	工事先行、G L -0.4 mまで掘削、盛 土内。
166	H20.3006	西大寺旧境内	西大寺芝町 2526-1, 2	個人	個人住宅新築	宅地	H20.10.3	G L -0.3 mまで掘削、盛土内。
167	H20.3181	左京二条四坊二坪	法蓮町 381-1 の一 部	個人	共同住宅新築	宅地	H20.10.6	G L -0.15 mまで掘削、盛土内。
168	H20.3182	左京二条四坊二坪	法蓮町 381-1 の一 部	個人	共同住宅新築	宅地	H20.10.6	G L -0.1 ～ 0.15 mまで掘削、盛土内。
169	H20.3183	左京二条四坊二坪	法蓮町 381-1 の一 部	個人	共同住宅新築	宅地	H20.10.6	G L -0.1 mまで掘削、盛土内。
170	H20.3227	左京八条四坊十三坪	東九条町 639-1 他	㈱おたすけ マン	デイサービス センター新築	宅地	H20.10.6	G L -0.6 mまで掘削、盛土内。
171	H20.3145	元興寺旧境内 奈良 町道跡	鳴川町 18 番地	個人	個人住宅新築	宅地	H20.10.6	工事先行、G L -0.2 ～ 0.4 mまで掘 削、盛土内。
172	H20.3210	五条西三坊間西小 路	平松二丁目 281-06 他	個人	個人住宅新築	宅地	H20.10.8	G L -0.25 mまで掘削、盛土内。
173	H20.3178	左京五条七坊十六坪	十輪院畑町 12-1 ～ 13-1	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H20.10.8	G L -0.7 mまで掘削、G L -0.25 m で 14 ～ 15 世紀の遺物包含確認。
174	H20.3160	右京二条三坊十五坪	青野町 92 番 1 他	個人	個人住宅新築	宅地	H20.10.10	G L -0.5 mまで掘削、G L -0.3 m 以下で遺物包含層 2 層確認。
175	H20.3180	左京二条四坊二坪	法蓮町 381-1 の一 部	個人	共同住宅新築	宅地	H20.10.14	G L -0.2 mまで掘削、盛土内。
176	H20.3199	右京五条三坊十五坪	平松二丁目 325-1 の一部	ファースト 住建㈱	分譲住宅新築	宅地	H20.10.14	G L -0.3 mまで掘削、盛土内。
177	H20.3196	左京二条五坊北郊	法蓮町 714-1 他	個人	共同住宅新築	宅地	H20.10.15	G L -0.15 ～ 0.2 mまで掘削、盛土内。
178	H20.3127	右京三条三坊五坪	宝来一丁目 84-8	個人	個人住宅新築	宅地	H20.10.15	G L -0.4 mまで掘削、盛土内。
179	H20.3120	奈良町道跡	高畑町 880 番 1 他	個人	共同住宅新築	宅地	H20.10.15 H20.11.5	G L -1.2 mまで掘削、G L -0.7 m で遺構面の可能性がある灰青色シル ト質細砂層確認。 G L -0.3 mまで掘削、盛土内。
180	H20.3246	奈良山第 17 号室	中山町 1296-7 他	㈱ソニック	分譲住宅新築	宅地	H20.10.16	G L -0.1 mまで掘削、盛土内。
181	H20.3138	左京二条七坊一坪 広上土宅跡 奈良 町道跡	西笹鉦町 30 番 3	個人	個人住宅新築	宅地	H20.10.16	G L -0.3 mまで掘削、黒褐色土の表 土層内。
182	H20.3241	右京五条四坊十三坪	五条西一丁目 1029-23	㈱ファース トホーム	分譲住宅新築	宅地	H20.10.20	G L -0.1 ～ 0.3 mまで掘削、盛土内。
183	H20.3230	左京二条三坊一坪 東二坊大路	法華寺町 368-6	個人	共同住宅新築	宅地	H20.10.20	G L -0.3 mまで掘削、盛土内。
184	H20.3201	二条東四坊大路	芝辻町三丁目 76 番 13 他	㈱未来	個人住宅新築	宅地	H20.10.21	掘削なし。
185	H20.3149	遺物散布地 (奈良県道跡地図 5A-51)	山陵町 639 番 1	個人	個人住宅新築	宅地	H20.10.21	G L -0.2 mまで掘削、盛土内。
186	H20.3207	左京五条六坊十坪 奈良町道跡	西木辻町 289	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H20.10.22	G L -0.9 mまで掘削、盛土内。
187	H20.3139	右京六条一坊三坪	西ノ京町 1 番 14	個人	個人住宅新築	宅地	H20.10.24	G L -0.3 mまで掘削、盛土内。
188	H20.3229	左京一条四坊十一坪	法蓮町 599-3	個人	共同住宅新築	宅地	H20.10.27	G L -0.7 mまで掘削、G L -0.3 m で地山確認。
189	H20.3239	東二坊九条大路	西九条町四丁目 2-6 他	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H20.10.27	G L -0.8 ～ 1.3 mまで掘削、盛土内。
190	H20.3046	東紀寺道跡	東紀寺町一丁目 50-1	奈良市長	病院新築	宅地	H20.10.28	G L -0.1 mまで掘削、盛土内。

番号	届出・通知 受理番号	遺 跡	届出地	届出・通知者	事業内容	現況	立会日	立会結果
191	H20.3240	三条東三坊大路	大宮町三丁目218-3	個人	店舗新築	宅地	H20.10.28	GL -0.7 mまで掘削、GL -0.45 m 流路理上(15世紀遺物包含)確認。
192	H19.3445	右京四条一坊七坪	四条大路四丁目 41-1 他	奈良市長	水路工事	水田	H20.10.28	GL -1.4 mまで掘削、GL -1.2 m で地山確認。
							H20.10.30	GL -1.0 mまで掘削、GL -0.7 m 下で地山確認。
							H20.11.5	GL -1.0 mまで掘削、GL -0.8 m で地山確認。
							H20.11.6	GL -1.0 mまで掘削、GL -0.8 m で地山確認。
							H20.11.13	GL -1.0 mまで掘削、GL -0.8 m で地山確認。
H20.11.18	GL -1.0 mまで掘削、GL -0.8 m で地山確認。							
193	H20.3084	左京五条二坊十六坪	四条大路南 439-11	オーエスハ ウジング㈱	分譲住宅新築	宅地	H20.10.29	GL -0.15 mまで掘削、盛土内。
194	H18.3312	左京五条二坊八坪	大安寺町 565-1・2	オーエスハ ウジング㈱	共同住宅新築	宅地	H20.10.30	GL -0.5 mまで掘削、盛土内。
195	H20.3138	左京二条七坊一坪 広土上宅跡 奈良 町遺跡	西笹井町 30 番 3	個人	個人住宅新築	宅地	H20.10.30	GL -0.2 mまで掘削、盛土内。
196	H20.3228	左京二条六坊北郊	法蓮町 1263-3 の一 部	個人	個人住宅新築	宅地	H20.10.30	GL -0.4 mまで掘削、盛土内。
197	H20.3261	遺物散布地 (奈良県遺跡地図 5A-20)	押熊町 689-10	三和建設㈱	分譲住宅新築	宅地	H20.10.30	GL -0.4 mまで掘削、盛土内。
198	H20.3202	二条西一坊大路	二条町三丁目 90 番 34	個人	個人住宅新築	宅地	H20.10.31	GL -0.4 mまで掘削、盛土内。
199	H20.3154	右京二条三坊三坪 菅原東遺跡	菅原町 185、186、 194-1	佛ひかりエ ステート	店舗新築	宅地	H20.11.4	GL -1.7 mまで掘削、一部GL -1.35 mで地山確認。遺構・遺構面あり。
200	H20.3184	左京三条五坊十二坪	油断池地方町 5 番地	個人	店舗付個人住 宅新築	宅地	H20.11.4	GL -1.4 mまで掘削、GL -1.0 m で地山(遺構面)確認。
201	H20.3259	左京四条一坊十三坪	四条大路二丁目24 番 11	個人	個人住宅新築	宅地	H20.11.4	GL -1.0 mまで掘削、耕作土内。
202	H20.3098	東三坊三条大路・ 左京四条三坊一坪	大宮町七丁目～三 条京町地内	奈良市水道 事業管理者	水道工事	道路	H20.11.5	GL -1.7 mまで掘削、GL -1.65 m で地山確認。
203	H20.3232	左京三条五坊一坪	芝辻町一丁目 77 番 60	個人	個人住宅新築	宅地	H20.11.6	工事先行、GL -0.2 mまで掘削、盛 土内。
204	H20.3287	古市城跡	古市町 268 番地	奈良市長	体育倉庫新築	学校地	H20.11.7	GL -0.4 mまで掘削、盛土内。
205	H20.3243	左京八条四坊十一坪	東九条町 684-2 他	個人	上下水道理設 工事	宅地	H20.11.10	GL -1.45 mまで掘削、GL -0.7 m で奈良時代の遺構面確認。
206	H20.3123	東一坊坊間路	南新町 77-1	個人	青空駐車場造 成	水田	H20.11.11	GL -0.5 mまで掘削、一部GL -0.5 mで地山確認。
207	H20.3266	左京八条四坊六坪	東九条町 623-1	個人	青空駐車場造 成	水田	H20.11.12	掘削なし。
208	H20.3295	南紀寺遺跡	南紀寺町四丁目 109-1・3 の一部	個人	店舗新築	宅地	H20.11.12	GL -0.6 mまで掘削、盛土内。
209	H16.4002	菖蒲下池	あやめ池北一丁目9 番地 1号他地内	近畿日本鉄 道㈱	区画整理	公園跡 地	H20.11.12	GL -1.5 mまで掘削、GL -1.5 m で池の堆積層。
210	H20.3262	奈良町遺跡	香寺町 891-20	個人	個人住宅新築	宅地	H20.11.17	GL -0.25 mまで掘削、盛土内。
211	H20.3310	左京二条七坊十一坪 奈良町遺跡	押小路町 9 番 3	佛神明	分譲住宅新築	宅地	H20.11.17	GL -0.8 mまで掘削、盛土内。
212	H20.3318	六条山東遺跡	六条西三丁目 1481-108	個人	個人住宅新築	宅地	H20.11.19	GL -0.2 mまで掘削、盛土内。
213	H20.3162	左京六条二坊十二坪	八条五丁目 425 番 1、426 番 2 の各 一部	個人	共同住宅新築	宅地	H20.11.20	GL -0.2 mまで掘削、盛土内。
214	H20.3190	左京四条二坊六坪	四条大路一丁目 462-91	個人	個人住宅新築	宅地	H20.11.20	GL -0.5 mまで掘削、盛土内。
215	H20.3129	左京三条三坊十坪	大宮町六丁目-2-8	佛州保ジェ パン	駐車場増設	駐車場	H20.11.20	GL -0.45 mまで掘削、盛土内。
216	H20.3256	奈良町遺跡	高畑町 1203-6	個人	個人住宅新築	宅地	H20.11.25	GL -0.35 mまで掘削、盛土内。
217	H20.3290	左京六条一坊十一坪 (管路新設部分)	柏木町 305 地先 泉京線停車場築 師寺跡	関西電力㈱	電気工事	宅地	H20.11.25	GL -2.1 mまで掘削、GL -0.87 m で遺物包含層確認、GL -1.05 mで 地山確認。
218	H20.3135	左京四条六坊五坪・ 五条六坊八坪 奈良 町遺跡	北風呂町～南袋町 地内	奈良市長	下水道工事	道路	H20.11.25	GL -1.5 mまで掘削、GL -1.5 m 地山確認。
219	H20.3161	左京四条六坊五坪 奈良町遺跡	南魚屋町 13 番 1	個人	共同住宅新築	宅地	H20.11.25	GL -0.2 ～ 0.4 mまで掘削、盛土内。
220	H20.3260	左京三条二坊十三 ・十四坪	三条大路一丁目1-1 ～四条大路一丁目 1-30	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H20.11.26	GL -1.15 mまで掘削、盛土内。

番号	届出・通知 受理番号	遺 跡	届出地	届出・通知者	事業内容	現況	立会日	立会結果
221	H20.3188	左京三条三坊十三坪	大宮町四丁目241-1	個人	賃貸住宅新築	宅地	H20.11.27	G.L.-0.7 mまで掘削、G.L.-0.7 mで地山確認。地山面から電橋面。
222	H20.3281	左京八条三坊十四坪	東九条町 493-3～491	大阪ガス機	ガス管敷設	道路	H20.11.27	G.L.-1.6 mまで掘削、盛土内。
223	H20.3304	右京五条三坊三坪	五条二丁目 578-6	個人	個人住宅新築	宅地	H20.11.28	G.L.-0.2～0.25 mまで掘削、盛土内。
224	H20.3280	左京九条三坊十五坪	東九条町 383-1の二部、382の一部	飛ライフラック	倉庫新築	宅地	H20.12.1	G.L.-1.3 mまで掘削、淡灰色粘砂礫(流路埋土内、中近世出土遺物あり。)
225	H20.3317	左京五条七坊六坪 奈良町遺跡	井上町 5-3の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H20.12.1	G.L.-0.4 mまで掘削、盛土内。
226	H20.3187	西大寺旧境内	西大寺新田町 505	個人	個人住宅新築	宅地	H20.12.1	G.L.-2.1 mまで掘削、G.L.-0.3 mで地山確認。
227	H20.3244	骨蔵器出土地 (奈良県遺跡地図 I2B-83)	都祁吐山町 3625	KDD I ㈱	携帯電話無線 基地局新設	水田	H20.12.1	G.L.-2.5 mまで掘削、現地表面から地山面。
228	H20.3306	左京北辺坊三坊五坪	西大寺北町三丁目 409-1の一部	個人	共同住宅新築	宅地	H20.12.3	工事先行。
229	H20.3170	左京三条五坊五坪	大宮町一丁目 15 番 4	個人	店舗新築	宅地	H20.12.4	G.L.-2.0 mまで掘削、盛土内。
230	H20.3327	奈良町遺跡	紀寺町 1064-7	㈱日本中央 住販	分譲住宅新築	宅地	H20.12.4	G.L.-1.7 mまで掘削、G.L.-0.6 mで地山確認。
231	H20.3251	右京三条三坊五坪	宝来一丁目 9-11～ 10	大阪ガス機	ガス管敷設	道路	H20.12.4	G.L.-1.1 mまで掘削、旧水田耕土内。
232	H20.3226	佐伯院跡 奈良町 遺跡	京経地方東側町 12 番地 1	個人	個人住宅新築	宅地	H20.12.8	G.L.-0.5 mまで掘削、盛土内。
233	H20.3297	左京四条四坊十・ 十一坪	三条宮前町 279-1	個人	店舗新築	宅地	H20.12.9 H20.12.10	G.L.-0.8 mまで掘削、G.L.-0.8 mで地山確認。
234	H20.3286	左京二条五坊北部	法蓮町 717 番 3 他	個人	個人住宅新築	宅地	H20.12.10	G.L.-0.2 mまで掘削、盛土内。
235	H20.3303	左京九条五坊十六坪	東九条町 215-20～ 236	大阪ガス機	ガス管敷設	道路	H20.12.15 H20.12.16 H20.12.17	G.L.-0.7 mまで掘削、G.L.-0.7 mで地山確認。地山面が遺構面。 G.L.-0.7 mまで掘削、旧水田土内。 G.L.-0.7 mまで掘削、水田耕土内。
236	H20.3291	左京五条三坊一坪・ 東二坊大路 遺物 散布地 (奈良県遺 跡地図 5C-66)	四条大路南町 439- 14	オーエスハ ウジング㈱	分譲住宅新築	宅地	H20.12.16	G.L.-0.4 mまで掘削、盛土内。
237	H20.3309	西大寺旧境内	西大寺新池町 1739- 8	個人	個人住宅新築	宅地	H20.12.17	G.L.-0.4 mまで掘削、G.L.-0.1 mで地山確認。
238	H20.3325	遺物散布地 (奈良 県遺跡地図 5A-41)	秋篠町 1667-4	オーエッチ 工業㈱	分譲住宅新築	宅地	H20.12.19	G.L.-0.4 mまで掘削、盛土内。
239	H20.3308	左京二条三坊十四 坪・二条条間南 小路・東三坊坊間東 小路	法華寺町 83-18	松浦林業㈱	店舗新築	宅地	H20.12.22	G.L.-1.1 mまで掘削、盛土内。
240	H20.3269	六条西二坊大路	六条一丁目 551-1	個人	個人住宅新築	宅地	H20.12.22	G.L.-0.3 mまで掘削、G.L.-0.3 mで地山確認。
241	H20.3305	奈良町遺跡	榊塚町 178-5 他	個人	賃貸・共同住 宅新築	宅地	H20.12.24	G.L.-0.7 mまで掘削 G.L.-0.7 mで地山確認。
242	H20.3316	左京六条三坊十六 坪 1	大安寺三丁目 109 番 1	個人	個人住宅新築	水田	H20.12.24	G.L.-0.6～0.7 mまで掘削、床上、 時期不明遺物包含層内。
243	H20.3258	左京六条二坊十六 坪	大安寺西二丁目 281	奈良市長 (衛生浄化セ ンター)	施設増築	宅地	H20.12.26	G.L.-1.0 mまで掘削、盛土内。
244	H20.3354	元興寺旧境内	高御門町 4-1	個人	店舗付個人住 宅新築	宅地	H20.12.26 H21.1.8	G.L.-0.3 mまで掘削、盛土内。
245	H20.3354	左京六条四坊八坪	六条二丁目 1008-1 他	㈱アスカ電 工	庭の造成	水田	H21.1.6	G.L.-1.05 mまで掘削、G.L.-0.4 m で地山確認。
246	H20.3254	左京八条四坊十二 坪	東九条町 684-2 他	個人	賃貸・共同住 宅新築	宅地	H21.1.7	G.L.-0.3 mまで掘削、盛土内。
247	H20.3320	左京一条三坊十三 坪	法華寺町 1351 (一 条高校)	奈良市長	自転車置き場 確認	学校用地	H21.1.7	G.L.-0.6～0.8 mまで掘削、G.L. -0.5 mで地山確認。
248	H20.3320	左京一条三坊十三 坪	法華寺町 1351	奈良市長	自転車置き場建 設	宅地	H21.1.7	G.L.-0.6～0.8 mまで掘削、地山確 認。
249	H20.3254	左京八条四坊十二 坪	東九条町 684-2 他	個人	賃貸・共同住 宅新築	宅地	H21.1.7	G.L.-0.3 mまで掘削、盛土内。
250	H20.3342	右京一条二坊四坪	二条町二丁目 72-19	個人	個人住宅新築	宅地	H21.1.8	G.L.-0.3 mまで掘削、盛土内。
251	H20.3208	左京四条一坊三坪	四条大路三丁目 989-1 他	オーエスハ ウジング㈱	宅地造成	水田	H21.1.8	G.L.-1.05 mまで掘削、G.L.-0.7 m で遺構面・地山確認、G.L.-0.6 m で奈良時代の遺物包含層確認。
252	H20.3319	赤田横六窟群	西大寺赤田町一丁目 296 番 51	奈良市長	バンビーホー ム改装	学校内 用地	H21.1.9	G.L.-1.1 mまで掘削、盛土内。
253	H20.3237	西二坊二条条間路	西大寺町見町二丁目 296 番 51	個人	個人住宅新築	宅地	H21.1.13	G.L.-0.3 mまで掘削、盛土内。
254	H20.3238	左京四条一坊八坪	四条大路三丁目 933-2	個人	個人住宅新築	宅地	H21.1.13	G.L.-0.95 mまで掘削、G.L.-0.5 m で地山確認。

番号	届出・通知 受理番号	遺 跡	届出地	届出・通知者	事業内容	現況	立会日	立会結果
255	H20.3329	四条西二坊坊間東小路	尼辻町 24 他	個人	賃貸住宅新築	宅地	H21.1.13	G L -0.25 ~ 0.3 m まで掘削、盛土内。
256	H20.3236	左京四三条坊九坪	大宮町四丁目 250-1 ～三条添山町 5-27	大阪ガス株	ガス管敷設	道路	H21.1.14	G L -1.0 m まで掘削、盛土内。
257	H20.3265	左京五条坊六坪	西木辻町 75-1	俄商商店	賃貸住宅新築	宅地	H21.1.15	G L -0.4 m まで掘削、盛土内。
258	H20.3312	左京四三条坊十三坪・四条大路	大森町～三条本町地内	奈良市水道事業管理者	水道工事道路	道路	H21.1.15	G L -1.5 m まで掘削、盛土内。
259	H20.3203	南戒寺遺跡	白毫寺 19-1 ~ 75	大阪ガス株	ガス管敷設	道路	H21.1.16	G L -1.5 m まで掘削、盛土内。
260	H20.3372	遺物散布地 (奈良県遺跡地区 5A-41)	秋篠町 1667-3	オーエッチ 工業物	分譲住宅新築	宅地	H21.1.17	G L -0.4 m まで掘削、盛土内。
261	H20.3351	右京五条坊四坪十一坪 五条桑園路	平松四丁目 396-38	個人	個人住宅新築	宅地	H21.1.19	G L -0.3 m まで掘削、G L -0.15 m まで地山確認。
262	H20.3348	左京五条坊十六坪	西木辻町 150-2-306	個人	個人住宅新築	宅地	H21.1.19	G L -0.3 m まで掘削、盛土内。
263	H20.3341	左京二条坊五坊北郊	法蓮町 727-8 番	個人	個人住宅新築	宅地	H21.1.19	G L -0.3 m まで掘削、盛土内。
264	H20.3296	遺物散布地 (奈良県遺跡地区 12B-0)	關生町地内	奈良市長	ため池改修工事	ため池	H21.1.21	G L -1.0 m まで掘削、池内の堆積土内。
265	H20.3346	広大寺池遺跡	今市町 837-4	奈良市長	U 型水路設置	水路	H21.1.26	旧水路底より、0.55 m 掘削、旧河川埋土確認。
266	H20.3333	左京二条坊四坪	三条大路一丁目 584-39 他	個人	個人住宅新築	宅地	H21.1.27	G L -0.4 m まで掘削、盛土内。
267	H20.3331	五条東七坊大路 奈良町遺跡	福智院町 45-2-紀 寺町 785	大阪ガス株	ガス管敷設	道路	H21.1.28	G L -1.3 m まで掘削、盛土内。
268	H20.3368	左京二条坊北郊	法蓮町 1276 番 6	個人	個人住宅新築	水路	H21.1.28	G L -0.2 ~ 0.8 m まで掘削、盛土内。
269	H20.3377	左京二条坊十坪	法蓮町 1137 の一部	個人	共同住宅新築	宅地	H21.2.2	掘削なし。
270	H20.3263	右京二条坊十五坪	若葉台四丁目 242-10	個人	個人住宅新築	宅地	H21.2.3	G L -0.2 m まで掘削、盛土内。
271	H20.3279	左京二条坊九・十六坪	法蓮町 632-2 ~ 408	大阪ガス株	ガス管敷設	道路	H21.2.3	G L -0.8 ~ 0.9 m まで掘削、一部 G L -0.7 m まで地山確認。
272	H20.3288	左京七条一坊三坪	柏木町 290-94	個人	個人住宅新築	宅地	H21.2.4	G L -0.25 m まで掘削、盛土内。
273	H20.3395	奈良山部 16 号室 (奈良県遺跡地区 5A-6)	中山町 1269-4 の一部	俄ソニック	分譲住宅新築	宅地	H21.2.5	G L -0.35 m まで掘削、盛土内。
274	H20.3378	元興寺旧境内 奈良町遺跡	花園町 22 番地	個人	個人住宅新築	宅地	H21.2.5	G L -0.2 m まで掘削、盛土内。
275	H20.3379	西大寺旧境内 (西大寺寺遺跡)	西大寺野神二丁目地内	奈良市長	下水道工事	道路	H21.2.6	G L -2.7 m まで掘削、G L -0.15 m まで地山確認。
276	H20.3294	左京四三条坊十二坪 奈良町遺跡	小太郎町 4-1 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H21.2.6	G L -0.23 m まで掘削、盛土内。
277	H20.3382	二条桑園路・右京二条二坊十一坪	西大寺町見町一丁目 10-21	大阪ガス株	ガス管修設	道路	H21.2.9	G L -1.1 m まで掘削、盛土内。
278	H20.3298	左京二条坊十二坪 奈良町遺跡	油阪地方町 6-1	個人	店舗付住宅新築	宅地	H21.2.9	G L -0.8 m まで掘削、近現代の複乱。
279	H20.3268	五条一坊大路	五条町 297 番地 11	個人	個人住宅新築	宅地	H21.2.12	G L -0.6 m まで掘削、盛土内。
280	H19.3471	左京四三条坊二坪	三条大路 1097 番	俄ゼファー	ホテル新築	宅地	H21.2.12	G L -2.2 m まで掘削、旧水田上面。
281	H20.3185	右京北辺四坊八坪	西大寺赤田町一丁目 4-8	大阪ガス株	ガス管敷設	道路	H21.2.13	G L -1.65 ~ 1.7 m まで掘削、水成堆積層内。
282	H20.3300	左京四三条坊八坪	三条桑町 149-6	個人	個人住宅付ビル新築	宅地	H21.2.17	G L -1.4 m まで掘削、盛土内。
283	H20.3495	左京四・五坊四条大路	大森町～三条本町	奈良市長	下水道工事	道路	H21.2.18	矢板が打たれ、土層確認できず。
284	H20.3363	東四坊八条大路	東九条町 308-1	個人	個人住宅新築	宅地	H21.2.20	G L -0.4 m まで掘削、盛土内。
285	H20.3301	左京五条一坊九坪 集落跡 (奈良県遺跡地区 5C-67)	柏木町地内	奈良市長	護岸工事	ため池	H21.2.23	G L -1.0 m まで掘削、一部 G L -0.8 m まで地山確認。
286	H20.3370	左京二条七坊一坪 奈良町遺跡 広上宅跡	西笹鉾町 16 番 14	個人	個人住宅新築	宅地	H21.2.23	G L -0.3 m まで掘削、盛土内。
287	H20.3380	右京二条坊十三坪 法世寺跡	菅原町 634-1	大阪ガス	ガス管修設	道路	H21.2.24	G L -1.1 m まで掘削、G L -1.1 m まで地山確認。
288	H20.3315	右京二条坊十三坪・三条坊十六坪・二条大路	菅原町	奈良市長	下水道工事	道路	H21.2.24	G L -1.2 m まで掘削、旧水田土内。
							H21.3.4	G L -3.0 m まで掘削、G L -1.4 m まで地山確認。
							H21.3.5	G L -2.3 m まで掘削、G L -1.2 m まで地山確認。
							H21.3.9	G L -2.3 m まで掘削、G L -1.2 m まで地山確認。
							H21.3.10	G L -1.7 m まで掘削、G L -1.2 m まで地山確認。
H21.3.11	G L -1.7 m まで掘削、G L -1.5 m まで地山確認。							

番号	届出・通知 受理番号	遺 跡	届出地	届出・通知者	事業内容	現況	立会日	立会結果
289	H20.3383	東四坊九条大路	北之庄町 677-1	南本電気株	駐車場 青空資材置き 場	水田	H21.2.26	GL -0.3mまで掘削、水田土・床土内、
290	H20.3387	左京七条二坊六坪	八条町 792-1、794-5	個人	個人住宅新築	宅地	H21.2.26	GL -0.4mまで掘削、盛土内、
291	H20.3278	左京五条二坊十三坪	大安寺西一丁目 334-2～341-12	大阪ガス(株)	ガス管敷設	道路	H21.3.9 H21.3.12	GL -0.8mまで掘削、盛土内、 GL -0.7mまで掘削、耕作土内、
292	H20.3292	窪之庄城跡	窪之庄町 505 番 1	龍エヌ・ ティ・ティ・ ドコモ	携帯電話基地 局新設	畑地	H21.3.12	GL -1.4mまで掘削、GL -1.1m で地山確認。
293	H20.3401	左京三条三坊六坪 奈良町遺跡	井上町 3-5、5-9	個人	個人住宅新築	宅地	H21.2.26	GL -0.5mまで掘削、盛土内、
294	H20.3283	左京四条一坊八坪	四条大路三丁目 928 番 5	個人	個人住宅新築	宅地	H21.3.2	GL -0.8mまで掘削、掘削床が地山 である可能性あり。
295	H20.3365	東四坊五条条間路	大森町地内	奈良市長	下水道工事	道路	H21.3.3	GL -1.45m～0.6mまで掘削、盛土 内、
296	H20.3420	左京一条四坊三坪 遺物散布地(奈良 県遺跡地図 5B-61)	法蓮町 469-1	個人	個人住宅新築	宅地	H21.3.3	GL -0.2～0.5mまで掘削、盛土内、
297	H20.3393	松林苑	歌姫町地内	奈良市長	河川工事	河川	H21.3.3	GL -1.8mまで掘削、表土直下で地 山確認。
298	H20.3404	左京四条一坊十六 坪・四条条間北小 300	四条大路二丁目 824 番 1の一部	一建設株	分譲住宅新築	宅地	H21.3.4	GL -0.4mまで掘削、盛土内、
301	H20.3376	右京六条四坊八坪	大安寺四丁目 14-21	個人	個人住宅新築	宅地	H21.3.9	GL -0.4mまで掘削、淡茶褐色砂質 土層、GL -0.4mで江戸時代の遺構 面・遺構確認。
302	H20.3399	右京六条三坊七坪	六条一丁目 644 番 1	個人	個人住宅新築	雑種地	H21.3.16	GL -1.1mまで掘削、GL -1.1m で地山確認。
303	H20.3397	右京五条三坊七坪 五条条間路	五条二丁目 601 番 3	個人	個人住宅新築	宅地	H21.3.16	GL -0.2mまで掘削、盛土内、
304	H20.3419	左京三条六坊四坪 奈良町遺跡	下三条町 42 番 1、 2	個人	店舗付個人住 宅新築	宅地	H21.3.16	GL -0.7mまで掘削、盛土内、
305	H20.3358	右京五条四坊一坪	平松四丁目 462-3、 462-24	個人	賃貸・共同住 宅新築	宅地	H21.3.18	GL -0.5mまで掘削、盛土内、
306	H20.3340	左京六条四坊一坪	大安寺四丁目 1031 番 1	個人	個人住宅新築	宅地	H21.3.18	GL -0.1～0.5mまで掘削、GL - 0.5mで淡茶褐色粘質土層の時期不 明の遺構面確認。
307	H20.3313	一条東四坊坊間小 路	法蓮町 1951 番 1	個人	個人住宅新築	宅地	H21.3.19	GL -0.6mまで掘削、GL -0.2m で地山確認。
308	H20.3463	古市城跡	古市町 1830-3 他	丸忠住宅産 株	個人住宅新築	宅地	H21.3.26	GL -1.6mまで掘削、GL -0.5～ 0.8mで地山確認。
309	H20.3277	右京二坊二条条間 路	西大寺国見町一丁 目～二丁目	奈良市長	河川改修	河川	H21.3.26	河川底から 0.6m まで掘削、旧河川 堆積土内、
310	H20.3443	右京二条四坊十四 坪 法世寺跡	疋田町一丁目 20 番	個人	個人住宅新築	宅地	H21.3.26	GL -0.4mまで掘削、盛土内、
311	H20.3454	右京七条三坊七坪	七条一丁目 426-7 他	飛騨岡屋住 宅流通	分譲住宅新築	宅地	H21.3.27	GL -0.1mまで掘削、盛土内、
312	H20.3273	右京三条大路・西 三坊大路	宝来二丁目 793-1	個人	共同住宅新築	畑地	H21.3.27	GL -0.6mまで掘削、GL -0.5m で地山確認、15・16 世紀頃の瓦質土 器の羽釜の下半部が出土。
313	H20.3442	左京二条七坊十四 坪	押上町 34-1の一部	個人	賃貸住宅新築	宅地	H21.3.30	GL -0.3～0.8mまで掘削、盛土内、
314	H20.3433	二条東四坊大路	法蓮町 328-29	ファースト 住建株	分譲住宅新築	宅地	H21.3.30	GL -0.4mまで掘削、盛土内、
315	H20.3247	左京六条三坊十五 坪	大安寺三丁目 82-2	個人	共同住宅新築	宅地	H21.3.31	GL -0.5mまで掘削、盛土内、
316	H20.3418	右京二条四坊一坪	西大寺芝町二丁目 2031 番 1	個人	個人住宅新築	宅地	H21.3.31	GL -0.2mまで掘削、盛土内、

(2) 平成 20 年度文化財保護法第 125 条 1 の現状変更許可申請に伴う工事立会

番号	届出・通知 受理番号	遺 跡	届出地	申請者	事業内容	現況	日付	立会結果
1	H19.1070	史跡東大寺旧境内 名勝奈良公園	水門町 98 番地先～ 100 番地先	奈良市長	護岸・川底修復	河川	H21.2.5	GL -0.45mまで掘削、灰色砂礫層内

第 2 章 自然科学分析報告

奈良市教育委員会では、発掘調査の成果をより総合性の高い確実なものとするために、遺跡や遺物の肉眼観察では把握できない事象について、自然科学分析を活用している。

これまでに行ってきた主な自然科学分析は、下記の通りである。

1. 環境の指標性が高く、生活資源となっている植物を主とした生物遺体の同定。
2. 年代の手がかりとなる遺物が含まれない地層や遺構の年代を比定するために行う、試料の含有放射線量から年代値を求める年代測定（例：放射性炭素年代測定、TL年代測定）や、年代の指標性の高い広域火山灰（例：A T火山灰、A H火山灰）の同定。
3. 遺物に付着したり、土壌に含まれる有機物や化学物質、あるいは土器の胎土や地質に含まれる鉱物の成分を同定する理化学分析（例：蛍光X線分析）。

平成20年度は、下記の自然科学分析を報告する。

- ① 平城京跡第579次調査 弥生時代の柱材の放射性炭素年代測定（AMS）
縄文時代晩期の土坑埋土、奈良時代の溝埋土の花粉分析
縄文時代晩期の土坑から出土した種実の同定
弥生時代の柱穴から出土した柱材の樹種同定
- ② 平城京跡第608次調査 奈良時代の井戸枠内より出土した種実の同定
- ③ 帯解黄金塚古墳 墳丘周囲の石敷の石材同定

このうち①については、前年度に分析をしたが、発掘調査報告を本書に掲載するため、併せて報告する。

②の平城京跡第608次調査に関わる分析として、今年度報告する種実同定の他に、条坊側溝埋土の花粉分析、珪藻分析、条坊側溝を護岸する杭材の樹種同定があるが、対象となる発掘区のほとんどが平成21年度年報に掲載予定であるため、発掘成果の報告に併せて報告する。

今年度発掘成果が報告されているA発掘区S D I21の花粉分析結果については、分析結果が他の発掘区と一括になっているため、詳細は平成21年度年報で報告する予定である。

1. 平城京跡第 579 次調査における自然科学分析

I 放射性炭素年代測定

1 はじめに

放射性炭素年代測定は、呼吸作用や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 (^{14}C) の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。過去における大気中の ^{14}C 濃度は変動しており、年代値の算出に影響を及ぼしていることから、年輪年代学などの成果を利用した校正曲線により ^{14}C 年代から暦年代に校正する必要がある。

ここでは、H J 第 579 次調査において出土した柱材を対象として、加速器質量分析法による放射性炭素年代測定を行い、遺構の年代について検討した。測定にあたっては、米国の Beta Analytic Inc. の協力を得た。

2 試料と方法

測定試料は、P-10 より出土した柱材 1 点である (表 1)。放射性炭素年代測定の手順は以下のとおりである。

まず、試料に二次的に混入した有機物を取り除くために、以下の前処理を行った。

- 1) 蒸留水中で細かく粉砕後、超音波および煮沸により洗浄
- 2) 塩酸 (HCl) により炭酸塩を除去後、水酸化ナトリウム (NaOH) により二次的に混入した有機物を除去
- 3) 再び塩酸 (HCl) で洗浄後、アルカリによって中和
- 4) 定温乾燥機内で 80°C で乾燥

前処理後、試料中の炭素を燃焼して二酸化炭素に変え、これを真空ライン内で液体窒素、ドライアイス、メタノール、n-ペンタンを用いて精製し、高純度の二酸化炭素を回収した。こうして得られた二酸化炭素を鉄触媒によ

る水素還元法でグラファイト粉末とし、アルミニウム製のターゲットホルダーに入れてプレス機で圧入しグラファイトターゲットを作製した。これらのターゲットをタンデム加速器質量分析計のイオン源にセットして測定を行った。測定試料と方法を表 1 にまとめた。

3 結果

年代測定の結果を表 2 に示す。

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在 (AD 1950 年) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は国際的慣例により Libby の 5568 年を使用した (実際の半減期は 5730 年)。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を -25 (‰) に標準化することによって得られる年代である。

4) 暦年代 (Calendar Age)

^{14}C 年代測定値を実際の年代値 (暦年代) に近づけるには、過去の宇宙線強度の変動などによる大気中 ^{14}C 濃度の変動および ^{14}C の半減期の違いを校正する必要がある。暦年校正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値およびサンゴの U/Th (ウラン/トリウム) 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された校正曲線を使用した。

表 1 測定試料及び処理

試料名	地点	種類	前処理・調整	測定法
№1	P-10	木材 (カシ)	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS

※ AMS (Accelerator Mass Spectrometry) は加速器質量分析法

表 2 測定結果

試料名	測定№ (Beta-)	^{14}C 年代 ¹⁾ (年 BP)	$\delta^{13}\text{C}$ ‰ ²⁾ (‰)	補正 ^{14}C 年代 ³⁾ (年 BP)	暦年代 (西暦) ⁴⁾
№1	239811	2200±40	-27.6	2160±40	交点: cal BC 200 1σ: cal BC 350 ~ 300, cal BC 210 ~ 170 2σ: cal BC 360 ~ 90

最新の較正曲線である IntCal04 では BC 24050 年までの換算が可能である (樹木年輪データは BC 10450 年まで)。

暦年代の交点とは、補正 ¹⁴C 年代値と較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1σ (68% 確率) と 2σ (95% 確率) は、補正 ¹⁴C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点や複数の 1σ・2σ 値が表記される場合もある。

4 所見

H J 第 579 次調査で出土した柱材について、加速器質量分析法 (AMS) による放射性炭素年代測定を行った。その結果、2160±40 年 BP (2σ の暦年代で BC 360 ~ 90 年) の年代値が得られた。

II 花粉分析

1 はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2 試料

分析試料は、縄文時代晩期の土坑 SK 07 から採取された試料 No.1 (明黄褐色粘土)、試料 No.2 (暗褐色粘土)、試料 No.3 (暗灰褐色砂質土)、試料 No.4 (淡灰色粘土)、試料 No.5 (暗灰褐色粘土) の 5 点、奈良時代の素掘り溝 SD 116 から採取された試料 No.1 (黄灰色砂質土)、試料 No.2 (灰色砂質土)、試料 No.3 (茶褐色砂質土) の 3 点、奈良時代の素掘り溝 SD 117 から採取された試料 No.1 (黄褐色粘土)、試料 No.2 (灰色砂質土 (1 ブロック少量含む))、試料 No.3 (暗褐色土 (1 ブロック多く含む)) の 3 点の計 11 点である。

3 方法

花粉の分離抽出は、中村 (1973) の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 0.5% リン酸三ナトリウム (12 水) 溶液を加え 15 分間湯煎
- 2) 水洗処理の後、0.5mm の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 3) 25% フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置
- 4) 水洗処理の後、水酢酸によって脱水し、アセトリシス処理 (無水酢酸 9 : 濃硫酸 1 のエルドマン氏液を加え 1 分間湯煎) を施す

5) 再び水酢酸を加えて水洗処理

6) 沈澱に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成

7) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 300 ~ 1000 倍で行った。花粉の同定は、鳥倉 (1973) および中村 (1980) をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン (-) で結んで示す。イネ属については、中村 (1974, 1977) を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。またこの処理を施すとクスノキ科の花粉は検出されない。(表 3・図 4)

4 結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉 26、樹木花粉と草本花粉を含むもの 3、草本花粉 12、シダ植物胞子 2 形態の計 41 である。これらの学名と和名および粒数を表 3 に示し、花粉数が 200 個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図 1 に示す。なお、200 個未満であっても 100 個以上の試料については傾向をみるため参考に図示し、主要な分類群は顕微鏡写真に示した。また、寄生虫卵についても同定した結果、1 分類群が検出された。以下に出現した分類群を記載する。

[樹木花粉]

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複雑維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属-アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、サンショウ属、キハダ属、カエデ属、トチノキ、ムクロジ属、ブドウ属、エゴノキ属

[樹木花粉と草本花粉を含むもの]

クワ科-イラクサ科、マメ科、ウコギ科

[草本花粉]

イネ科、カヤツリグサ科、タデ属サナエタデ節、ソバ属、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、ノブドウ、セリ亜科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

[シダ植物胞子]

単条溝胞子、三条溝胞子

[寄生虫卵]

回虫卵

表3 H J 第 579 次調査 花粉分析結果

分類群	和名	土坑 S K 07					素掘溝 S D 116			素掘溝 S D 117			
		No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.1	No.2	No.3	No.1	No.2	No.3	
Arboreal pollen	樹木花粉												
<i>Podocarpus</i>	マキ属				1	1							
<i>Abies</i>	モミ属	2			11				3				
<i>Tsuga</i>	ツガ属	2	1	2	4				5	1			
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	ツガ属複雑管束亜属	2	1	1	2				2				
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	9			8				8				
<i>Sciadophytis verticillata</i>	コウヤマキ				1	1			1				
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イチヌガヤ科-ヒノキ科	4	4	4	4				6	2			
<i>Pterocarya rhoifolia</i>	サワグルミ				1				1				
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	2			2	2							
<i>Betula</i>	カバノキ属								6	1			
<i>Corylus</i>	ハシバミ属	1	1	1									
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ	3			5	2			3	1			
<i>Castanea crenata</i>	クリ	1			4	2							
<i>Castanopsis</i>	シイ属	14	1	25	1				6	1			
<i>Fagus</i>	ブナ属	2											
<i>Quercus</i> subgen. <i>Leptidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	17	11	45	44				30	1			
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	206	20	440	80			1	37	1			
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ	2											
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ	20	1	30	5								
<i>Zanthoxylum</i>	サンショウ属				1								
<i>Phellodendron</i>	キハダ属				1								
<i>Acer</i>	カエデ属	4			3								
<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ	9			15	4							
<i>Sapindus</i>	ムクロジ属	9	1	3									
<i>Vitis</i>	ブドウ属	1											
<i>Syrax</i>	エゴノキ属	1							1				
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉												
Moraceae-Urticaceae	タワウソ科-イラクサ科	3				1							
Leguminosae	マメ科	1											
Araliaceae	ウコギ科	1											
Nonarboreal pollen	草本花粉												
Gramineae	イネ科	9	1	16	13				70	19			
Cyperaceae	カヤツリグサ科				2				6	2			
<i>Polygonum</i>	タデ属				1	3							
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節								2				
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヘユ科	1		1					6	2			
Caryophyllaceae	ナデシコ科								1				
Cruciferae	アブラナ科				1				1			1	
<i>Ampelopsis brevipedunculata</i>	ノブドウ	1											
Apioidae	セリ亜科	2	1	6	21				2				
Lactucoideae	タンポポ科亜科								1	2			
Asteroideae	キク亜科								3				
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	5	1	4	6				25	7			
Fern spore	シダ植物胞子												
Monolate type spore	単葉溝胞子		17	38	12	111			20	4			
Trilate type spore	三葉溝胞子		3	6	2	17			4	2			
Arboreal pollen	樹木花粉	0	311	38	605	151		1	108	8	0	0	0
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	5	0	0	1		0	0	0	0	0	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	0	18	3	31	43		0	117	32	0	0	1
Total pollen	花粉総数	0	334	41	636	195		1	225	40	0	0	1
Pollen frequencies of 1cm ³	試料 1cm ³ 中の花粉密度	0.0	2.8	3.7	1.7	3.4		1.2	1.2	2.8	0.0	0.0	0.6
			$\times 10^3$	$\times 10^2$	$\times 10^3$	$\times 10^3$		$\times 10$	$\times 10^2$	$\times 10^2$			$\times 10$
Unknown pollen	未同定花粉	0	24	12	27	23		1	20	6	0	0	0
Fern spore	シダ植物胞子	0	20	44	14	128		0	24	6	0	0	0
Helminth eggs	寄生虫卵												
<i>Ascaris(lumbricoides)</i>	回虫卵								1				
Total	計	0	0	0	0	0		1	0	0	0	0	0
Helminth eggs frequencies of 1cm ³	試料 1cm ³ 中の寄生虫卵密度	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0		0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
								$\times 10$					
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)		(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal fragments	微細炭化物	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)		(+)	(+)	(++)	(+)	(-)	(+)

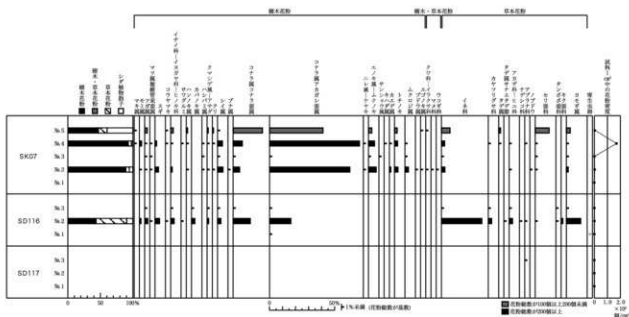


図1 HJ第579次調査 花粉ダイアグラム

(2) 花粉群集の特徴

1) 土坑SK07 縄文時代晩期(試料No.1～試料No.5)

下位より花粉構成と花粉組成の変化の特徴を記載する。(図1)

試料No.1では花粉密度が極めて低く、検出されなかった。

試料No.2では樹木花粉の占める割合が極めて高い。コナラ属アカガシ亜属が卓越し、エノキ属-ムクノキ、コナラ属コナラ亜属、シイ属、スギ、トチノキ、ムクロジ属などが伴われる。草本花粉では、イネ科、ヨモギ属などがわずかに出現する。

試料No.3では花粉密度が低く、ほとんど検出されなくなる。

試料No.4では花粉密度が極めて高くなり、構成、組成ともに試料No.2と類似した傾向を示す。樹木花粉のコナラ属アカガシ亜属が卓越し、コナラ属コナラ亜属、エノキ属-ムクノキ、シイ属などが伴われる。草本花粉では、イネ科が主に出現する。

試料No.5では花粉密度が再び低くなり、樹木花粉の占める割合が半減し、シダ植物胞子の占める割合が約40%になる。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属が比較的多い。草本花粉では、セリ亜科、イネ科、ヨモギ属、タデ属が低率に出現する。

2) 素掘溝SD116 奈良時代(試料No.1～試料No.3)

下位より花粉構成と花粉組成変化の特徴を記載する。

試料No.1では花粉密度が低く、樹木花粉のコナラ属アカガシ亜属、回虫卵がわずかに出現する。

試料No.2では花粉密度がわずかに高くなり、樹木花粉

より草本花粉の占める割合がほぼ同じで、草本花粉では、イネ科を主に、ヨモギ属、カヤツリグサ科、アカザ科-ヒユ科などが伴われる。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属がやや多く、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、カバノキ属、シイ属、ツガ属、モミ属、クマシデ属-アサダなどが低率に出現する。

試料No.3では、花粉構成と花粉組成は下位と類似するが、花粉密度が低い。

3) 素掘溝SD117 奈良時代(試料No.1～試料No.3)

いずれの試料も花粉密度が極めて低く、ほとんど検出されなかった。

5 花粉分析から推定される植生と環境

1) 土坑SK07 縄文時代晩期(試料No.1～試料No.5)

試料No.1、試料No.3では花粉密度が極めて低く、堆積速度が速かった可能性が考えられるが、No.2とNo.4では、コナラ属アカガシ亜属が卓越することから、土坑SK07周辺にはカシ林が分布し、エノキ属-ムクノキ、コナラ属コナラ亜属、シイ属、スギ、トチノキ、ムクロジ属などが森林の構成要素であった。林縁ないし土坑の周囲にイネ科、ヨモギ属などが生育していたと思われる。

No.5では、樹木が多く、コナラ属アカガシ亜属のカシ林が多いが、コナラ属コナラ亜属がやや多くなり、二次林性のコナラヤクヌギが増加した。草本もやや増加し、シダ植物、セリ亜科、イネ科、ヨモギ属が生育していた。

2) 素掘溝SD116 奈良時代(試料No.1～試料No.3)

いずれの試料も花粉密度が低く、花粉などの有機質遺体が分解されるような乾燥あるいは乾燥を繰り返すような堆積環境が考えられ、素掘溝SD207は常時滞水する

ような溝ではなかったと考えられる。周辺には、イネ科やヨモギ属のような日当たりの良い乾燥した環境を好む草本が生育し、他にアカザ科-ヒユ科なども生育していた。またわずかではあるが同虫卵が検出され、近接して生活域が分布していたか、人糞施肥などによる汚染が考えられる。周辺および地域的に、コナラ属アカガシ亜属の照葉樹、コナラ属コナラ亜属の二次林性の落葉広葉樹を主にスギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ツガ属などの針葉樹が森林として生育していた。

3) 素掘溝 S D 117 奈良時代 (試料Na 1~試料Na 3)

いずれの試料も花粉密度が極めて低く、花粉などの有機質遺体が分解されるような乾燥あるいは乾湿を繰り返すような堆積環境であったか、堆積速度が速かった可能性が考えられる。

III 種実同定

1 はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

2 試料

試料は、H J 第 579 次調査より検出された土坑 S K 07 底 (縄文時代晩期) 出土の 2 点、土坑 S K 04 底面出土の 1 点の計 3 点である。すべて水洗選別済みであった。(図 2)

3 方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

4 結果

(1) 分類群

[樹木]

コナラ属 *Quercus* 堅果片 プナ科

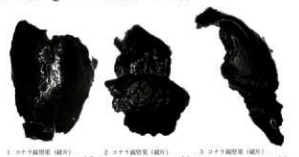


図2 H J 第 579 次調査の種実

茶褐色で楕円形を呈し、表面は平滑である。この分類群は殻斗欠落し破片のため、属レベルの同定までである。

(2) 種実群集の特徴

- 1) 土坑 S K 07 底 (縄文時代晩期)
検出されなかった。
- 2) 土坑 S K 07 底出土 (縄文時代晩期)
コナラ属堅果片 5 が検出された。
- 3) 土坑 S K 04 底面
コナラ属堅果片 2 が検出された。

IV 樹種同定

1 はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2 試料

試料は、H J 第 579 次調査において検出された弥生時代の柱穴 P 10 より出土した柱材 1 点である。

3 方法

カミソリを用いて試料の新鮮な横断面 (木口と同義)、放射断面 (柾目と同義)、接線断面 (板目と同義) の基本三断面の切片を複製し、生物顕微鏡によって 40~1000 倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4 結果

柱材 (弥生時代の柱穴、P 10) は コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* であった。以下に同定の根拠となった特徴を記し、各断面の顕微鏡写真を示す。(図 3)

・コナラ属アカガシ亜属

Quercus subgen. *Cyclobalanopsis* プナ科

横断面：中型から大型の道管が、1~数列幅で年輪層に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は

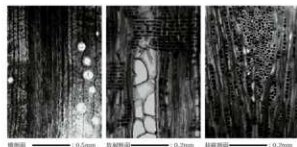


図3 H J 第 579 次調査の木材樹種

単独で複合しない。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカンなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30 m、径1.5 m以上に達する。材は堅硬で強靱、弾力性が強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

V まとめ

(1) 縄文時代晩期・弥生時代前期

土坑S K 07の花粉分析結果から、周辺にはカシ林が分布し、コナラ属コナラ亜属、シイ属、スギなども構成要素であり、エノキ属-ムクノキ、トチノキ、ムクロジ属は谷や河川沿いに生育していた。また、柱材（弥生時代の柱穴、P 10）はコナラ属アカガシ亜属であった。土坑S K 07や土坑S K 04からは、破片で少量であるがコナラ属堅果片が検出され、近隣でのアカガシ亜属などのコナラ属の生育、あるいはこれら土坑が貯蔵穴である可能性が考えられる。

最上部(Na 5)では、二次林性のコナラ属コナラ亜属(コナラやクスギなど)が増加し、シダ植物、セリ亜科、イネ科、ヨモギ属の草本もやや増加する。

(2) 奈良時代

素掘溝S D 116、素掘溝S D 117は、花粉密度が低く、常時滞水するような溝ではなく、ある時期もしくは一時的に流れがあるないしは滞水する溝であったと考えられる。素掘溝S D 116の分析結果からみて、周辺にはイネ科やヨモギ属を主にアカザ科-ヒユ科の草本が生育し、日当たりの良い乾燥した環境であったと推定される。また、わずかに回虫卵が検出され、近接して生活域が分布していた。周辺および地域的にはコナラ属アカガシ亜属の照葉樹とコナラ属コナラ亜属の二次林性の落葉広葉樹を主にスギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ツガ属などの針葉樹の森林が分布していた。

参考文献

Paula J Reimer et al., (2004) IntCal04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon 46, 1029-1058.
尾岩大真 (2005) INTCAL98 から IntCal04 へ、学術創成研究費弥生農耕の起源と東アジアNa3-炭素年代測定による高精度編年体系の構築、p.14-15。
中村俊夫 (1999) 放射性炭素法、考古学のための年代測定学入門 古今書院、p.1-36。

金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原、新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法、角川書店、p.248-262。
島倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態、大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集、60p。
中村純 (1973) 花粉分析、古今書院、p.82-110。
中村純 (1974) イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として、第四紀研究、13、p.187-193。
中村純 (1977) 稲作とイネ花粉、考古学と自然科学、第10号、p.21-30。
中村純 (1980) 日本産花粉の標鑑、大阪自然科学博物館収蔵目録第13集、91p。
笠原安夫 (1985) 日本雑草図説、費賢堂、494p。
笠原安夫 (1988) 作物および田畑雑草種類、弥生文化の研究第2巻 生業、雄山閣 出版、p.131-139。
佐伯浩・原田浩 (1985) 針葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.20-48。
佐伯浩・原田浩 (1985) 広葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.49-100。
島地謙・伊東隆夫 (1988) 日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣、p.296

(株式会社 古環境研究所)

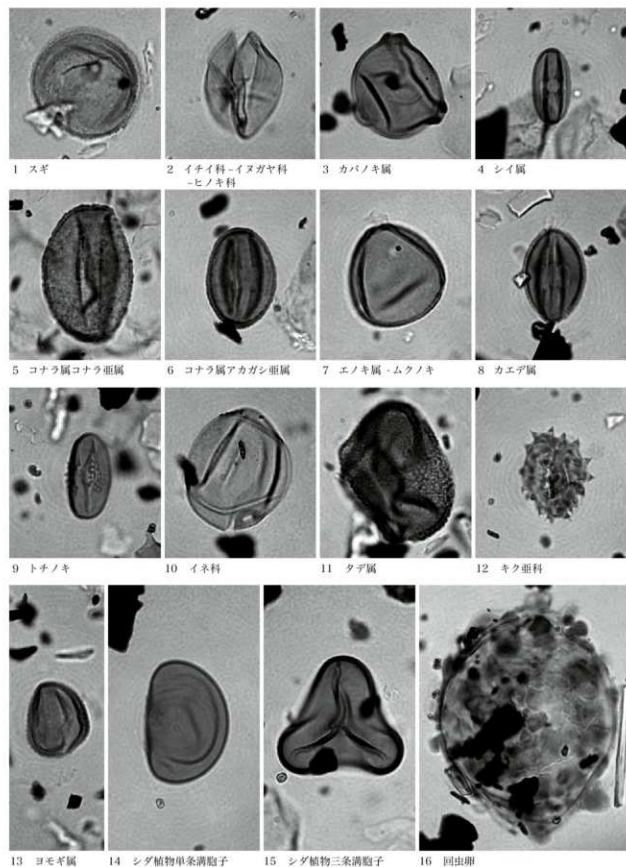


図4 HJ第579次調査の花粉・胞子・寄生虫顕微鏡写真

2. 平城京跡第 608 次調査における自然科学分析

I 種実同定

1 はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組織を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また、出土下単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

2 試料

試料はC発掘区のSE 503 枠内より出土した試料1点である。

3 方法

試料に以下の物理処理を施して、抽出および同定を行った。

- 1) 試料25cm³に水を加え放置し、泥化を行う。
- 2) 攪拌した後、沈んだ砂礫を除去しつつ、0.25mmの篩で水洗選別を行う。

3) 残渣を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実の同定係数を行う。

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行う。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

4 結果

(1) 分類群

草本5分類群が同定される。学名、和名および粒数を表1に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に同定の根拠となる形態的特徴を記載する。(表1・図1)

[草本]

エノコログサ属 *Setaria* Beauv. 穎 (破片) イネ科

穎は茶褐色で楕円形を呈す。表面には横方向の微細な隆起がある。

スゲ属 *Carex* 果実 カヤツリグサ科

茶褐色で倒卵形、扁平である。果皮は柔らかい。

ヒユ属 *Amaranthus* 種子 (破片) ヒユ科

表1 HJ第608次調査における種実同定結果

学名	分類群	部位	SE 503 枠内
Herb	草本		
<i>Setaria</i> Beauv.	エノコログサ属	穎 (破片)	1
<i>Carex</i>	スゲ属	果実	2
<i>Amaranthus</i>	ヒユ属	種子 (破片)	2
<i>Oxalis</i>	カタバミ属	種子	1
<i>Solanum nigrum</i> L.	イヌホウズキ	種子	1
Total	合計		7

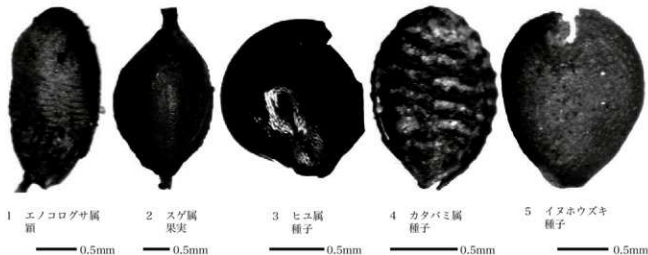


図1 HJ第608次調査 種実顕微鏡写真

黒色で光沢がある。円形を呈し、一カ所が切れ込みヘソがある。断面は両凸レンズ形である。

カタバミ属 *Oxalis* 種子 カタバミ科

茶褐色で楕円形を呈し、上端がとがる。両面には横方向に6~8本の隆起が定る。

イヌホウズキ *Solanum nigrum* L. 種子 ナス科

黄褐色で扁平楕円形を呈し、一端にくぼんだヘソがある。表面には網目模様がある。

5. 考察

同定の結果、平城京跡第608次調査のC発掘区のSE503枠内出土の種実はずべて草本であり、エノコログサ属、スゲ属、ヒユ属、カタバミ属、イヌホウズキが検出

された。エノコログサ属は水生植物、水田雑草、畑作雑草、人里植物と多様に育成し、スゲ属は水生3植物ないし水田雑草を含む。ヒユ属、カタバミ属、イヌホウズキは乾燥した畑作雑草ないし路傍などの人里植物である。以上のことから、遺構周辺に人里植物や農耕雑草が生育し、集落や農耕地が分布していたと考えられる。

参考文献

- 笠原安夫 (1985) 日本雑草図説, 眞實堂, 404p.
笠原安夫 (1985) 作物及び田畑雑草種類, 弥生文化の研究第2巻生業, 雄山閣出版, p.131-139

(株式会社 古環境研究所)

3. 帯解黄金塚古墳の石材の石種

I はじめに

奈良市田中町にある帯解黄金塚古墳の調査により墳丘の周囲の石敷を検出した。観察地点は黄金塚古墳の第2次調査のA~E発掘区である。その石材の石種を裸眼で観察した。観察結果について以下に述べる。

II 石種の特徴と石材の採石地

葺石と敷石に使用されている石材の石種は、柘榴石アブライト、ベグマタイト、中粒黒雲母花崗岩、斑状黒雲母花崗岩、片麻状細粒黒雲母花崗岩、中粒閃緑岩、斑輝岩、片麻状珪質岩、流紋岩、流紋岩質溶結凝灰岩、石英、チャートである。流紋岩質溶結凝灰岩は板状節理が顕著な割り石であるが、他の石種の石材は川原石様である。石種の特徴と推定される採石地について述べる。

柘榴石アブライト 色は淡赤色で、粒形が垂円~円である。石英・長石・黒雲母・柘榴石が噛み合っている。石英は無色透明で、粒径が1~1.5mm, 量が僅かである。長石は灰白色で、粒径が2~6mm, 量が非常に多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が1~1.5mm, 量がごく僅かである。柘榴石は赤茶色、粒状で、粒径が1~4mm, 量がかである。

このような岩相を示す石は中畑から高峰にかけての付近に分布する黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。菩提仙川の川原石にもみられることから、この川の石を採石されたと推定される。

ベグマタイト 色は灰白色で、粒形が垂角~垂円である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明で、粒径が3~4mm, 量がかである。長石は灰白色で、粒径が2~15mm, 量が非常に多い。黒雲母は黒色、板状で、

粒径が1~1.5mm, 量がごくごく僅かである。

このような岩相を示す石は北穂尾から興隆寺にかけての付近に分布する黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。菩提仙川の川原石にもみられることから、この川の石を採石されたと推定される。

中粒黒雲母花崗岩 色は灰白色で、粒形が垂円~円である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明で、粒径が2~3mm, 量がかである。長石は灰白色で、粒径が2~4mm, 量が非常に多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5~1mm, 量がごく僅かである。

このような岩相を示す石は中畑から天理市岩室にかけての付近に分布する黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。菩提仙川の川原石にもみられることから、この川の石を採石されたと推定される。

斑状黒雲母花崗岩 色は灰色で、粒形が垂円~円である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は灰色透明で、斑晶と基質をなすものがある。斑晶の石英は、粒径が8~30mm, 量がかである。基質の石英は、粒径が2~4mm, 量がかである。長石は茶灰色で、斑晶と基質をなすものがある。斑晶の長石は、粒径が4~6mm, 量がかである。基質の長石は、粒径が1~3mm, 量がかである。黒雲母は黒色、板状で、粒径が1~2mm, 量がごく僅かである。

このような岩相を示す石は高樋から正暦寺北方にかけての流域に分布する黒雲母花崗岩の岩相の一部にみられる。菩提仙川の川原石にもみられることから、この川の石を採石されたと推定される。

片麻状細粒黒雲母花崗岩 色は暗茶灰色で、粒形が垂

表1 黄金塚古墳の基石・敷石の石種と粒径

石種	C 発掘区 (cm)					合計	A 発掘区 (cm)					合計	B 発掘区 (cm)					合計				
	5~9	10~14	15~19	20~24	25~29		5~9	10~14	15~19	20~24	25~29		30~34	35~39	5~9	10~14	15~19		20~24	25~29	30~34	35~39
柘榴石アブライト	1	1				2	1	3	1			5			5						5	
ベグマタイト		5	4			9									2	1	1				4	
中粒黒雲母花崗岩	3	3	3	1	2	12	9	24	12	3		48	6	23	36	13	4	2	1		85	
斑状黒雲母花崗岩		2			1	3	4	8	12	5	1	30	1	8	14	1	2				26	
片麻状細粒黒雲母花崗岩							2	4	6	3	1	16	4	10	17	3	2			1	37	
中粒閃緑岩		1				1	1					1			1						1	
斑欄岩	4	12	12	4	2	34	4	21	49	14		1	89	12	29	55	20	1	1		118	
片麻状珪質岩	4	8	2	2		16	2	7	20	4		33	8	22	12	5	1				48	
流紋岩																			1		1	
流紋岩質溶結凝灰岩		1				1																
石英		1				1	1	1				2			1						1	
チャート	7		1			8	3	1			1	5	1	2	3	1					7	
合計	19	34	22	7	5	87	16	53	114	39	5	1	1	229	32	94	146	45	11	3	2	333

石種	D 発掘区 (cm)										合計	E 発掘区 (cm)							合計			
	5~9	10~14	15~19	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	45~49	50~54		55~59	5~9	10~14	15~19	20~24	25~29	30~34		35~39	40~44	
柘榴石アブライト		1									1											
ベグマタイト																						
中粒黒雲母花崗岩				1	1						2	1		4								5
斑状黒雲母花崗岩				1	3						4		1	2	1							4
片麻状細粒黒雲母花崗岩					1	1	1				3		2	2								4
中粒閃緑岩																						
斑欄岩	1			1							1	3	1	3	5	2	1	1	1	1		14
片麻状珪質岩					1						1	1	2	2	2							7
流紋岩		1									1											
流紋岩質溶結凝灰岩	1				2						3											
石英																						
チャート	3										3	1		1								2
合計	3	4		3	8	1	1				1	21	2	4	9	15	3	1	1	1	1	36

石種	調査した石材 (cm)										合計
	5~9	10~14	15~19	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	45~49	50~54	
柘榴石アブライト	1	3	8	1							13
ベグマタイト		5	6	1	1						13
中粒黒雲母花崗岩	9	36	63	31	10	2	1				152
斑状黒雲母花崗岩	5	18	27	9	7	1					67
片麻状細粒黒雲母花崗岩	6	14	29	8	4	1	2				64
中粒閃緑岩	2	1									3
斑欄岩	20	64	119	44	5	2	2	1		1	258
片麻状珪質岩	15	39	36	13	2						105
流紋岩		1		1							2
流紋岩質溶結凝灰岩		2			2						4
石英	1	3									4
チャート	15	3	5	1	1						25
合計	72	190	294	109	32	6	5	1		1	710

角～亜円である。細い縞状をなす。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は灰色透明で、粒径が0.5mm、量が中である。長石は灰白色で、粒径が0.5mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5～1mm、量が僅かである。

このような岩相を示す石は高樋から高円山にかけての付近に分布する片麻状黒雲母花崗岩の岩相の一部にみられる。菩提仙川の川原石にみられることから、この川の石を採石されたと推定される。

中粒閃緑岩 色は灰色で、粒形が亜円である。長石と角閃石が噛み合っている。長石は灰白色、粒径が2～4mm、量が非常に多い。角閃石は黒色、粒状で、粒径が2～4mm、量が中である。

このような岩相を示す石は奈良市の北椿尾から五ヶ谷にかけての付近にレンズ状をなして分布する閃緑岩の岩相の一部に似ている。また、当古墳の南側にある菩提仙

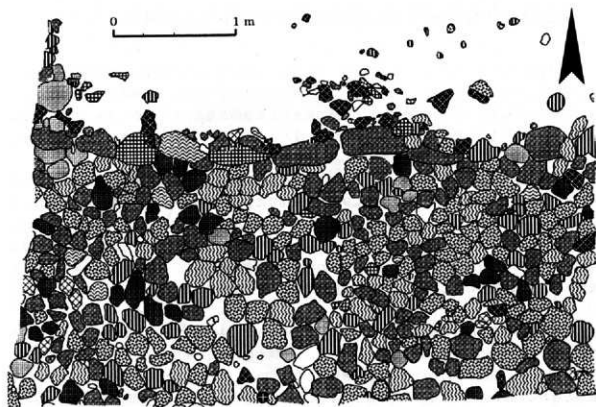
川の川原には同様の礫がみられる。

斑瀾岩 色は暗灰緑色で、粒形が亜角～円である。長石・角閃石・輝石が噛み合っている。長石は灰白色で、粒径が1～4mm、量が中である。角閃石は黒色で、粒径が0.5～2mm、量が多い。輝石は暗緑色、粒径が1～2mm、量が中である。また、角閃石と輝石が集合して5～10mmの球状の塊をなす場合が多い。

このような岩相を示す石は椿尾から中畑にかけての付近に分布する斑瀾岩の岩相の一部に似ている。菩提仙川の川原石にもみられることから、この川の石を採石されたと推定される。

片麻状珪質岩 色は暗灰色、暗茶灰色などを呈し、ガラス質で、片麻状を示す。片麻状構造が顕著な場合、やや粒状の場合、ガラス質の場合などがある。変質したチャートと識別されている場合がある。

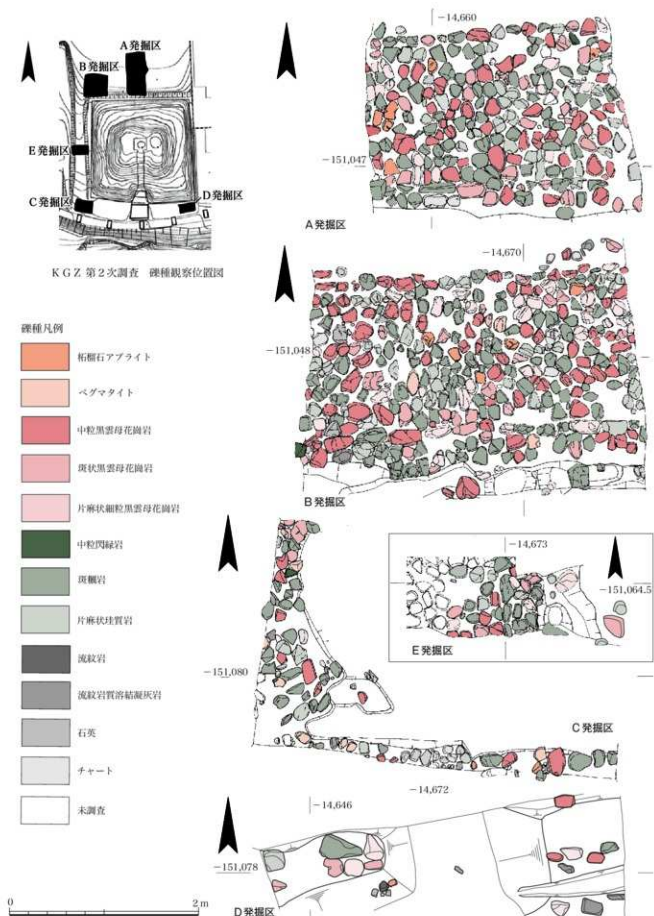
このような岩相を示す石は高樋から正暦寺北方にかけ



凡例

- | | | |
|--|--|--|
| | | |
| | | |
| | | |
| | | |

図1 黄金塚陵墓参考地 石列・石敷石種図 (1/30『書陵部紀要 第57号』を一部加筆)



での付近に分布する片麻状黒雲母花崗岩の岩相の一部にみられる。菩提仙川の川原石にもみられることから、この川の石を採石されたと推定される。

流紋岩 色は茶色で、粒形が円である。暗灰色でレンズ状をなす部分が楕円に入る。石基はガラス質、やや粒状である。

このような岩相を示す石は奈良県には分布しない。しかし、奈良付近の大坂層群の礫層の礫には稀にみられる。円礫であることから、当古墳の基盤をなす第四紀層や河川の礫に稀にみられる。菩提仙川から採石されたと推定される。

流紋岩質溶結凝灰岩 色は赤茶色で、板状節理が顕著である。割り石である。顕著な溶結を示す。構成粒は石英、長石、黒雲母である。石英は無色透明、粒径が2～4mm、量が中である。複六角錐あるいはその一部が認められるものがある。長石は灰白色透明、短柱状で、粒径が2～4mm、量が中である。黒雲母は黒色、板状で、六角形をなすものが多く、粒径が1～2mm、量が僅かである。基質はガラス質である。

このような岩相を示す石は宇陀市付近に広く分布する室生火山岩の岩相の一部に似ている。採石地としては室生ダム北方付近が推定される。

石英 色は灰白色で、粒形が垂角である。ベグマタイトに伴う石英のようである。

このような岩相を示す石は椿尾から中畑にかけての付近にレンズ状に分布するベグマタイトの岩相の一部に似ている。菩提仙川の川原石にもみられることから、この川の石を採石されたと推定される。

チャート 色は青灰色、灰色、赤茶色と様々である。粒形が楕円～円である。

このような石は当古墳の付近の礫層の礫や菩提仙川の川原石にみられる。

以上のように、流紋岩質溶結凝灰岩以外の礫石や敷石の石材は、この古墳の近くを流れている菩提仙川の川原で採石することができる。流紋岩質溶結凝灰岩は室生ダムの北方付近が採石地と推定される。

Ⅲ 石材の使用傾向

観察された石材は前述のように流紋岩質溶結凝灰岩のような割り石と斑巖岩などのような川原石様のものとがある。調査個数710個における石材の長径、石種構成について述べる。また、南方部中央の調査結果と石材の使用傾向についての比較を行う。(表1・図2)

石材の長径は、5～9cmが約10%、10～14cmが約27%、15～19cmが約41%、20～24cmが約15%、25

～29cmが約5%、30cm以上のものが13個である。長径が10～20cmのものが約7割を占め、10～24cmのものでは約8割5分を占めるようになる。石材の長径が15～19cmのものを中心として意図的に採石されていると言える。

石種構成は、斑巖岩が約36%、中粒黒雲母花崗岩が約21%、片麻状珪質岩が約14%、斑状黒雲母花崗岩が約9%、片麻状細粒黒雲母花崗岩が約9%、チャートが約4%、柘榴石アブライトが約2%、ベグマタイトが約2%、中粒閃緑岩・流紋岩・流紋岩質溶結凝灰岩・石英が僅か13個である。現在、石材の採石地と推定される菩提仙川の川原石に3割を越すような斑巖岩がみられない。しかし、この菩提仙川から運ばれたと推定される斑巖岩が、飛鳥京跡の調査で出土している溝や建物の周囲に敷かれている石材、苑池遺構の池の石材、蘇我入鹿の館跡と新聞紙上で騒がれた調査地の石垣の石材、石船石遺跡の上層の敷石などに使われていることからすれば、古墳の造営当時には菩提仙川に斑巖岩が多く産していたのかも知れない。

宮内庁調査をした当古墳の入口付近にあたる部分の石敷の石材(図1 奥田 2005)と比較する。宮内庁の調査では流紋岩質溶結凝灰岩の割り石と斑巖岩等の川原石が出土している。また、石室の石材には榛原石が使用されているとされている。この榛原石は今回出土している流紋岩質溶結凝灰岩に相当する石材である。今回の調査ではA・B発掘区やE発掘区では流紋岩質溶結凝灰岩が使用されておらず、C・D発掘区で確認される。

石材の長径は、調査個数が401個において、4～9cmが約4%、粒径は10～19cmが約67%、20～29cmが約29%、30～39cmが約1%である。また、石種構成は、斑巖岩が約38%、アブライトが約28%、片麻状細粒黒雲母花崗岩が約16%、チャートが約10%、細粒黒雲母花崗岩が約3%、中粒黒雲母花崗岩が約3%、片麻状アブライト・流紋岩質溶結凝灰岩・石英が僅かである。

石材の粒径からみれば、10～19cmの粒形を示すものは約67%で、ほぼ同じ率を示すが、20～29cmのものが約29%と正面中央では多く使用されている。石種構成では暗緑色を示す斑巖岩が約38%で、ほぼ同じ率を示すが、白色を示すアブライトが約28%と多く、今回の調査結果と石種構成が異なる。(奥田 尚)

参考文献

- 奥田 尚 (2005) 黄金塚陵墓参考地の石材の石種とその採石地。書陵部紀要 第57号, pp. 68～71。宮内庁書陵部。



KGZ第2次調査 A発掘区 石敷 (南から)



KGZ第2次調査 B発掘区 石敷 (南から)



KGZ第2次調査 C発掘区 石敷 (南から)



KGZ第2次調査 E発掘区 石敷 (北から)

第 3 章 平成 20 年度保存活用事業報告

平成 20 (2008) 年度埋蔵文化財保存活用事業報告

1. 展示

A 常設展示

- 対 象：一般
 会 期：平成 20 年 4 月 1 日 (火)～6 月 24 日 (火)
 (58 日間)
 場 所：埋蔵文化財調査センター展示室
 趣 旨：奈良市の歴史を埋蔵文化財の展示を通じて
 知ってもらう。
 内 容：旧石器時代～江戸時代の各時代の埋蔵文化
 財を遺跡ごとに展示。

観覧者数：203 名

B 第 26 回秋季特別展・世界遺産登録 10 周年記念特別展「摩楽地實-奈良市発掘資料選-」の開催

- 対 象：一般
 会 期：平成 20 年 10 月 27 日 (月)～平成 21 年
 3 月 31 日 (火) (105 日間)
 場 所：埋蔵文化財調査センター展示室・ロビー
 趣 旨：奈良市教育委員会が行った 30 年間の調査
 で出土した数多くの考古遺物の中から代表
 的な資料を選んで展示、奈良市の考古遺物
 の特質を概観できるようにした。

観覧者数：1,282 名

- そ の 他：・案内を「しみんだより」10 月号・奈良市
 役所のホームページに掲載。
 ・宣伝用のポスター・チラシの作成・配布。
 ・展示解説用パンフレットの作成。
 ・事前に報道機関に資料を配布。
 ・埋蔵文化財講演会を実施。
 11 月 29 日 (土) 13:00～16:30
 参加者 46 名
 会 場：埋蔵文化財調査センター講座室
 巽淳一郎「平城京の焼物-施釉陶器を中心
 にして」
 森下浩行「古墳時代の遺物」
 原田憲二郎「奈良市内出土瓦あれこれ」

C 発掘調査速報展示 (2 回) の開催

- 対 象：一般
 場 所：埋蔵文化財調査センター展示室前ロビー
 趣 旨：ゼニヤクボ遺跡の調査成果初公開 (夏季)・
 平成 20 年度 (春季) に行った発掘調査と
 その成果を展示。

①夏季速報展示

- 会 期：平成 20 年 7 月 7 日 (月)～8 月 29 日 (金)
 (39 日間)
 内 容：新たに奈良市の遺跡となった旧都祁村のゼ
 ニヤクボ遺跡の発掘調査成果を展示。
 主な展示遺物-縄文時代土器・石器、弥生
 時代土器、古墳時代土器

観覧者数：436 名

- そ の 他：・案内を「しみんだより」7 月号・奈良市
 役所のホームページに掲載。
 ・宣伝用ポスター・チラシの作成・配布。
 ・展示リーフレットの作成。
 ・事前に報道機関に資料を配布。

②春季速報展示

- 会 期：平成 21 年 3 月 2 日 (月)～3 月 31 日 (火)
 (22 日間)
 内 容：平城京跡 (左京五条四坊九・十坪) の発掘
 調査速報展示。主な展示遺物-奈良時代の
 埋納遺構の土器、播磨産の軒瓦、宝珠瓦

観覧者数：315 名

- そ の 他：・案内を「しみんだより」3 月号・奈良市
 役所のホームページに掲載。
 ・宣伝用ポスター・チラシの作成・配布。
 ・展示リーフレットの作成。
 ・事前に報道機関に資料を配布。

- D 年間観覧者数 2,370 名 (247 日間)。累計 15,654
 名。月平均 197 名。月、男女、居住地、
 年齢別は表 1 のとおり。

表 1

月 別	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月						
	48	115	51	183	269	308	309	403	119	120	174	271						
居住地別	奈良市内				奈良県内		近畿圏内		近畿圏外									
	143	51	38	13	男 女 別													
					男		女											
					1,638		732											
年齢別	～9 歳		10～19 歳		20～29 歳		30～39 歳		40～49 歳		50～59 歳		60～69 歳		70 歳～		学生	
	2	24	7	11	13	37	87	55	46									

2. 発掘調査現地見学会の開催 施設見学の受け入れ

A 発掘調査現地見学会の開催

帯解黄金塚古墳の調査（奈良市田中町）
 対象：地元住民及び一般
 期日：平成21年2月27日（金）、28日（土）
 会場：調査地現地
 参加者数：700名
 その他：・奈良市役所のホームページに掲載。

B 埋蔵文化財調査センター施設見学

- (1)
 対象：大安寺西小学校6年生 100名
 期日：平成20年5月9日（金）
- (2)
 対象：愛知県岡崎市立福岡小学校6年生 36名
 期日：平成20年10月30日（木）
- (3)
 対象：大安寺西小学校生徒3年生 14名
 期日：平成20年10月31日（金）
- (4)
 対象：京西中学特別支援学級 8名
 期日：平成21年1月8日（木）
- (5)
 対象：奈良日本語センター留学生 6名
 期日：平成21年1月23日（金）
- (6)
 対象：奈良市総合福祉センター 20名
 期日：平成21年3月6日



帯解黄金塚古墳 発掘調査現地見学会

3. 講演会・教室の開催

A 「埋蔵文化財発掘調査報告会」の開催

対象：一般
 期日：平成21年3月14日（土）
 内容：平成20年度に埋蔵文化財調査センターが行った主な発掘調査の報告を行う。
 ・大木 要「平城京跡（左京五条四坊十坪）の発掘調査」
 ・中島和彦「平城京跡（左京二条七坊十五坪）の発掘調査」
 会場：埋蔵文化財調査センター講座室
 趣旨：平成20年度に実施した調査の内容を職員が図や写真などを使用して説明し、どのような成果があったかを知ってもらう。
 参加者数：47名
 その他：・募集案内を「しみんだより」2月号・奈良市役所のホームページに掲載。
 ・事前に報道機関に資料を配布。



埋蔵文化財発掘調査報告会

B 「夏休み親子考古学体験」の開催

対象：小学4年生以上の児童とその保護者
 期日：平成20年8月19日（火）
 内容：埋蔵文化財調査センターの施設見学会、土器の分類・観察と瓦の拓本を体験する。
 会場：埋蔵文化財調査センター講座室
 趣旨：土器の観察や瓦の拓本を遺跡から出土した実物を使って体験してもらい、考古学に親しんでもらう。
 参加者数：16名
 その他：・募集案内を「しみんだより」8月号・奈良市役所のホームページに掲載



夏休み親子考古学体験



4. 市民考古サポーター養成講座 Stage 1

対 象：一般

期 日：平成20年7月9日（水）～平成21年3月
11日（水） 毎月1～2回、全13回（表2）

内 容：埋蔵文化財調査センターがおこなう発掘調査、出土遺物の整理、展示会などの活動支援ボランティアの養成講座。職員が講師をつとめる講座・実習のプログラムにより、将来の活動に必要な基本的知識・技術を身につける。講座終了後、希望者を「市民考古サポーター」として登録し、奈良市の埋蔵文化財保護を支援していただくとともに楽しみながら学ぶ場を提供する。

募集人員：25名

その 他：・案内を「しみんだより」2月号と奈良市役所のホームページに掲載。

- ・事前に報道機関に資料を配布。
- ・募集用のチラシを作成・配布。



市民考古サポーター養成講座

表2

	日時	講座名
第1回	7月9日	開講式・オリエンテーション 考古学とは何か
第2回	7月16日	石器のはなし・縄文人の暮らし
第3回	8月13日	弥生の社会・古墳のはなし
第4回	9月3日	佐紀古墳群を訪ねる（実習）
第5回	9月10日	奈良の都平城京
第6回	10月8日	奈良時代の土器・古代の瓦
第7回	10月15日	平城宮跡を見る（実習）
第8回	11月12日	発掘作業の流れ
第9回	11月26日	発掘現場をみる（実習）
第10回	12月10日	舞台裏をみる（出土品整理作業）
第11回	1月14日	拓本のとり方（実習）
第12回	2月10日	奈良町と中近世の土器・陶磁
第13回	3月11日	土器の分類整理（実習） 閉講式

5. 体験学習・実習の受け入れ

A 博物館実習の受け入れ

対 象：追手門学院大学学生 2名
期 日：平成20年10月20日（月）～24日（金）
の5日間

内 容：第26回秋季特別展の展示設営

B 高校体験学習の受け入れ

(1)
対 象：一条高校人文科学科1年生 40名
期 日：平成20年9月16日（火）
場 所：埋蔵文化財調査センター

内 容：出土遺物の整理実習（洗浄・注記・拓本）
 (2)
 対 象：一条高校人文科学科2年生 40名
 期 日：平成20年8月25日（月）～29日（金）
 場 所：平城京跡発掘調査現場（奈良市大森町）
 内 容：発掘調査の体験実習



博物館実習



高校体験学習・出土遺物の整理



高校体験学習・発掘現場実習

C 中学校職場体験の受け入れ

(1)
 対 象：青少年指導課（奈良市不登校児童生徒交流事業）3年生 男子2名・女子1名
 期 日：平成20年7月14日（月）～16日（水）
 場 所：埋蔵文化財調査センター・平城京跡発掘調査現場
 内 容：遺物洗浄・注記・発掘調査体験・拓本

(2)
 対 象：伏見中学校2年生 男子4名・女子1名
 期 日：平成20年7月28日（月）～30日（水）
 場 所：埋蔵文化財調査センター・平城京跡発掘調査現場
 内 容：遺物洗浄・資料整理・注記・発掘調査体験
 (3)
 対 象：春日中学校2年生 男子3名
 期 日：平成20年9月9日（火）～11日（木）
 場 所：埋蔵文化財調査センター
 内 容：遺物洗浄・注記・資料整理
 (4)
 対 象：都跡中学校2年生 男子3名
 期 日：平成20年11月12日（水）～14日（金）
 場 所：埋蔵文化財調査センター
 内 容：遺物洗浄・資料整理・講座準備
 (5)
 対 象：三笠中学校2年生 男子3名
 期 日：平成20年11月19日（水）～21日（金）
 場 所：埋蔵文化財調査センター
 内 容：遺物洗浄・注記・資料整理・古文書整理
 (6)
 対 象：京西中学校2年生 男子2名・女子1名
 期 日：平成21年1月20日（火）
 場 所：埋蔵文化財調査センター
 内 容：遺物洗浄・注記
 (7)
 対 象：青少年指導課（奈良市不登校児童生徒交流事業）3年生 女子1名
 期 日：平成21年1月26日（月）～28日（水）
 場 所：埋蔵文化財調査センター
 内 容：遺物洗浄・注記・資料整理



中学校職場体験

6. 文化財学習用キット（ドキ土器キット）の貸出

対象：奈良市内の小中学校

趣旨：市内の発掘調査で出土した石器・土器・瓦などの実物資料を教員用の解説書を付けて小中学校へ貸し出し、社会科学習、郷土を知る学習の補助教材として利用してもらう。また、埋蔵文化財調査センターを見学する小中学生・自主活動グループに「触れることのできる文化財」として使用した。

資料の内容

- ①縄文土器と弥生土器
- ②縄文時代の石鐮と弥生時代の石鐮・石包丁
- ③古墳時代の埴輪と須恵器
- ④-1土器A・④-2土器B 奈良時代の土器
- ⑤奈良時代の瓦 軒丸瓦・軒平瓦
- ⑥奈良時代の甕と墨書土器・和同開珎

(1)

場所：佐保小学校
期日：平成20年4月11日(金)～18日(金)
資料：①・②

(2)

場所：右京小学校
期日：平成20年4月21日(月)～25日(金)
資料：③

(3)

場所：大宮小学校
期日：平成20年4月21日(月)～25日(金)
資料：①

(4)

場所：平城西小学校
期日：平成20年5月12日(月)～19日(月)
資料：⑤

7. 職員の講師など派遣

A 佐保小学校6年生授業

期日：平成20年5月2日(金)
場所：佐保小学校
派遣人数：1名
内容：土器について

B 一条高校人文科学科「総合文化研究」授業

期日：①平成20年7月9日(水)
②平成20年9月9日(火)
場所：一条高校(奈良市法華寺町)
派遣人数：①②各1名

内容：①発掘調査について ②考古学概論

C 平成20年度奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会「発掘調査報告会」

期日：平成21年3月7日(土)
場所：橿原市千塚資料館 講義室
派遣人数：1名

内容：奈良山52号窯の調査

D 奈良市生涯学習財団平城東公民館主催講座「平城山の遺跡と考古学“瓦窯編”」

期日：①平成20年12月17日(水)
②平成21年2月18日(水)
場所：平城東公民館
派遣人数：①②各1名
内容：①発掘調査と考古学
②平城山の瓦窯跡について



ドキ土器キットによる学習

8. 埋蔵文化財調査センター保管遺物・写真等の貸出ほか

- 埋蔵文化財調査センターで保存・管理している遺物・写真等の貸出・提供・掲載許可を行った。また、学術研究に関わって、資料の閲覧を受け入れた。
- A 遺物などの貸出 11件 (表3の通り)
 B 写真等の貸出・提供・掲載許可 19件 (表4の通り)
 C 学術研究に関わる資料閲覧 12件 (表5の通り)

表3

	貸出機関	使用目的	貸出期間	貸出内容
1	東京国立博物館	平成館考古展示室に常設展示	H 20.4.1 ~ H 21.3.31	平城京跡出土木簡(模造品) 10点(礎進上木簡1点、月借礎進上木簡1点、豹皮分銭付札1点、淡皮御田侍奴画指木簡1点、北宮封緘木簡1点、衛府進塩付札1点、祿布付札1点、槐花進上木簡1点、造酒司符1点、瓦進上木簡1点)、分銅(模造品) 1点(平城京跡第167次調査出土)
2	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	春季特別展「はにわ人と動物たち」に展示	H 20.4.3 ~ H 20.6.27	甲冑形埴輪1点(平城京跡第346次調査出土)、人物埴輪2点・馬形埴輪1点(平城京跡第437次調査出土)、家形埴輪1点(杉山古墳出土)、人物埴輪1点(大安寺旧境内第107次調査出土)、人物埴輪3点・馬形埴輪6点・穀形埴輪1点(平城京跡第200次調査出土)
3	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	速報展「大和を掘る 26-2007年度発掘調査速報展」に展示	H 20.7.8 ~ H 20.9.19	唐三彩三足埴1点(平城京跡第578次調査出土)、甕文土器4点(平城京跡第568次調査出土1点、平城京跡第557次調査出土3点)、鬼瓦1点(大安寺旧境内第105次調査出土)、西塔所用軒丸瓦・軒平瓦各1点(大安寺旧境内第100次調査出土)、風鐸片4点(大安寺旧境内第100・105次調査出土)、風鐸1点、舌1点(大安寺旧境内第102次調査出土)、風鐸1点、風招1点、舌1点(大安寺旧境内第100次調査出土)、水煙2点(大安寺旧境内第100次・102次調査出土)、風鐸・水煙出土状況パネル1点、東塔西階段パネル1点
4	大津市歴史博物館	企画展「石山寺と湖南の仏像-近江と南都を結ぶ仏の道-」に展示	H 20.7.10 ~ H 20.9.19	體像断片2点、半球状土製品9点(大安寺旧境内第92次調査出土)
5	大分県立博物館	平成20年度特別展「大相撲展-相撲の歴史と名横綱双葉山伝説-」に展示	H 20.9.9 ~ H 20.11.11	墨書土器4点(平城京跡第28次調査出土)
6	かみつけの里博物館	第17回特別展「力士の考古学」に展示	H 20.9.1 ~ H 20.12.6	施輪平瓦6点、覆弁蓮華紋軒丸瓦1点、土師器2点、須恵器2点、墨書土器1点(平城京跡第28次調査出土)、墨書土器7点(平城京跡第73次調査出土)
7	独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 飛鳥資料館	平成20年度秋季特別展「まぼろしの唐代精華-黄治唐三彩窯の考古新発見」に展示	H 20.9.30 ~ H 20.11.11	唐三彩三足埴1点(平城京跡第578次調査出土)

奈良市管内

	貸出機関	使用目的	貸出期間	貸出内容
8	なら奈良館	常設展示	H 20.4.1 ~ H 21.3.31	土師器9点(東市跡第4次・6次調査出土、平城京跡第52次・314次調査出土)、須恵器14点(東市跡第4次調査出土、平城京跡第52次・157次調査出土)、木製品2点(平城京跡第174次調査出土土物1点、第257-3次調査出土へら1点)、パネル1点(貴族の食卓風景)
9	奈良市水道局	常設展示	H 20.4.1 ~ H 21.3.31	軒丸瓦2点、軒平瓦1点(平城京跡第28次調査出土)

	貸出機関	使用目的	貸出期間	貸出内容
10	辰市人権文化センター	常設展示	H 20.4.1～ H 21.3.31	埴1点(平城京跡第14次調査出土)
11	高雄公民館	常設展示	H 20.4.1～ H 21.3.31	弥生土器2点(古遺跡出土)、古墳時代の須恵器2点、土師器2点(古遺跡出土、平城京跡第162次調査出土)、奈良時代の土師器1点・須恵器5点(平城京跡第52次・第92次・第133次・第157次・第222次調査出土)、瓦器1点(奈良町遺跡、元興寺旧境内第4次・第13次調査出土)、江戸時代の土師器・陶磁器(奈良町遺跡、元興寺旧境内第15次調査出土、菅原東遺跡出土)、パネル12点

表4

	申請日	申請機関	目的	内容	その他
1	H 20.4.18	株式会社 洋泉社	「図解 日本人なら知っておきたい古事記」に掲載	宝来山古墳航空写真2点	貸出・掲載許可
2	H 20.4.28	奈良新聞社	連載記事「地下に眠るやまとの遺跡」に掲載	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成6年度「南紀寺遺跡第4次調査 図版86-11掲載写真1点、ペンション塚古墳第2埋葬施設出土甲冑写真1点	掲載許可
3	H 20.5.2	奈良大学大学院文学研究科個人	韓式土器研究会「韓式土器研究Ⅱ」に掲載	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成4年度「南紀寺遺跡の調査 第3次」報告・未報告資料 『奈良市埋蔵文化財調査年報』平成17年度「古市板谷遺跡・古市城跡の調査 第4・5次」報告資料	掲載許可
4	H 20.5.16	大津市歴史博物館	企画展「石山寺と湖南の仏像-近江と南都を結ぶ仏の道」展示図録に掲載	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成12年度口絵7掲載 大安寺旧境内第92次調査出土塑像写真1点	貸出・掲載許可
5	H 20.5.24	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	速報展「大和を囲む26」-2007年度調査速報展展示図録に掲載	大安寺旧境内西塔基礎全景1点	貸出・掲載許可
6	H 20.5.29	大分県立博物館	平成20年度特別展「大相撲展-相撲の歴史と名横綱 双葉山伝説」展示図録に掲載	平城京跡第28次調査出土「相撲所」ほか墨書土器写真4点	貸出・掲載許可
7	H 20.7.4	株式会社 新人物往来社	五味文彦・小野正敏編「開港と災害-中世都市研究14」に掲載	奈良市埋蔵文化財調査センター速報展示資料№36掲載 西大寺旧境内第23次調査 輸入青磁を研磨した中世墓1点	貸出・掲載許可
8	H 20.7.16	かみつけの里博物館	第17回特別展「力士の考古学」展示図録に掲載	『平城京左京二条二坊十二坪 奈良市水道局庁舎建設地発掘調査概要報告』昭和59年度巻首図版1掲載 発掘区と平城京遠景1点	貸出・掲載許可
9	H 20.7.28	独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 飛鳥資料館	平成20年度秋季特別展「まぼろしの唐代精華-黄治唐三彩堂の考古新発見-」展示図録に掲載	平城京跡第578次調査出土 唐三彩三足炉写真1点	貸出・掲載許可
10	H 20.8.19	株式会社 学習研究社	恵美嘉樹「図説 最新日本古代史」に掲載	佐紀古墳群(西群)航空写真1点	貸出・掲載許可
11	H 20.9.10 H 20.9.11	株式会社 至文堂	日本の美術 第512号「出土銭貨」に掲載	平城京跡第378-2次調査出土 無文銀銭写真1点 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成10年度巻首図版掲載 平城京跡第405次調査出土井戸SE14出土 鋳造関連遺物写真1点、井戸SE14出土鋳造し銭及び鋳型写真1点 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成元年度図版18-40掲載 建物S B 42柱六出土銅銭1点	貸出・掲載許可

	申請日	申請機関	目的	内容	その他
12	H 20.9.17	株式会社 新人物往来社	「月刊歴史読本」2008年12月号に掲載	ヒシヤグ古墳航空写真1点	貸出・掲載許可
13	H 20.10.17	株式会社 ジャパン通信情報センター	「文化財発掘出土情報」に掲載	「黄金塚古墳 第1次調査」現地説明会資料	掲載許可
14	H 20.11.2	大阪府立近つ飛鳥博物館	平成20年度冬季特別展図録に掲載	菅原東遺跡 門筒埴輪細部写真1点	掲載許可
15	H 21.1.20	株式会社 コミュニカ	奈良県文化観光局ならの魅力創造課「国宝・古墳ウォーキングパンフレット」に掲載	佐紀石塚山古墳航空写真1点、佐紀陵山古墳航空写真1点、ヒシヤグ古墳航空写真1点、市庭古墳航空写真1点、五社神古墳航空写真1点、ウツナベ古墳航空写真1点、コナベ古墳航空写真1点	貸出・掲載許可
16	H 21.3.6	群馬県立歴史博物館	第86回企画展・開館30周年記念展「国宝武人ハニワ、群馬へ帰る！」展示図録に掲載	杉山古墳出土 家形埴輪	貸出・掲載許可
17	H 21.3.9	奈良市観光企画課	「楽しみながらものしり博士」「そうなんだ！奈良」（「奈良ものしり博士認定システム」）に使用	楠ノ川イモタ遺跡2次調査出土陶文土器写真1点、平城京跡第608次調査出土 須恵器壺・奈良三彩火舎写真1点	貸出・掲載許可
18	H 21.3.2	光村図書出版株式会社	平成23年度小学校用社会科教科書 社会6年に掲載	「なら平城京展'98」図録掲載 猿投（尾張国）産の須恵器	掲載許可（平成17年度小学校用社会科教科書に掲載したものの転載）
19	H 21.3.2	鳥根県立古代出雲歴史博物館	平成21年度特別展「どすこい！ - 出雲と相撲 -」の展示図録に掲載	平城京跡第28次調査出土「相撲所」ほか墨書土器2点	貸出・掲載許可

表5

	閲覧日	申請者	目的	閲覧資料名
1	H 20.4.15	元興寺文化財研究所職員	個人研究	平城京跡第67次・332次・424次調査出土土器
2	H 20.4.30	奈良大学大学院学生	個人研究	南紀寺遺跡第3次調査出土土器
3	H 20.7.3	大阪府文化財センター職員	個人研究	平城京跡第28次・73次調査出土軒瓦・「相撲」関連墨書土器
4	H 20.7.15	かみつけの里博物館職員	特別展資料調査	平城京跡第28次・73次調査出土軒瓦・三彩施釉瓦・墨書土器・土器
5	H 20.7.25	京都大学大学院学生	個人研究	ベンシヨ塚古墳出土馬具
6	H 20.8.12	奈良大学大学院学生	個人研究	南紀寺遺跡第3次調査出土土器
7	H 20.9.22	奈良大学大学院学生	個人研究	平城京跡第285次調査出土土器
8	H 20.10.17	高槻市教育委員会職員	個人研究	平城京跡第11次・89次、大安寺旧境内第57次、薬師寺旧境内第6次、ヲシヨジ1号墳調査出土土器
9	H 20.10.28	奈良大学大学院学生	個人研究	楠ノ川イモタ遺跡、楠ノ川キトラ遺跡、水間遺跡第7次・9次、別所下ノ前遺跡、別所辻堂遺跡、別所大谷口遺跡、高塚遺跡調査出土土器
10	H 20.12.22	大手前大学大学院学生	個人研究	平城京跡第424次、元興寺旧境内第48次、正暦寺旧境内第1次・2次調査出土土器
11	H 21.1.30	橿原考古学研究所職員	個人研究	東紀寺遺跡第6次調査出土製塩土器
12	H 21.2.2	京都大学大学院学生	個人研究	横井宮跡群調査出土瓦

第 4 章 紀 要

「大安寺式」軒瓦の成立

原田 憲二郎

I はじめに

平城京大安寺から出土する軒瓦には、「大安寺式」と呼ばれる軒瓦がある。今迄に公刊された報告や論文¹⁾に依拠すると、奈良時代の「大安寺式」軒瓦とは以下のように定義できる。

- ①大安寺建立のために製作された軒瓦の一群。
- ②軒丸瓦は、藤原宮期から続く平城宮・京の蓮華紋の流れの中では異質な単弁蓮華紋を飾る。型式差を越えて瓦当裏面の内面接合線を蒲鉾形に成形する²⁾。

③軒平瓦は、唐草の各単位が独立せず、蔓が連続してのびて、数箇所で支葉が派生する均整唐草紋を飾る。型式差を越えて段頸を有する。

この定義から奈良時代の「大安寺式」軒丸瓦には 6091 A³⁾、6137 A、6138 C a・E が、「大安寺式」軒平瓦には 6712 A・C、6716 C・D・F、6717 A 等を挙げることができる。(図1)

これらのうち、大安寺での出土量(表1)などから軒丸瓦 6138 C a - 軒平瓦 6712 A や軒丸瓦 6137 A - 軒平

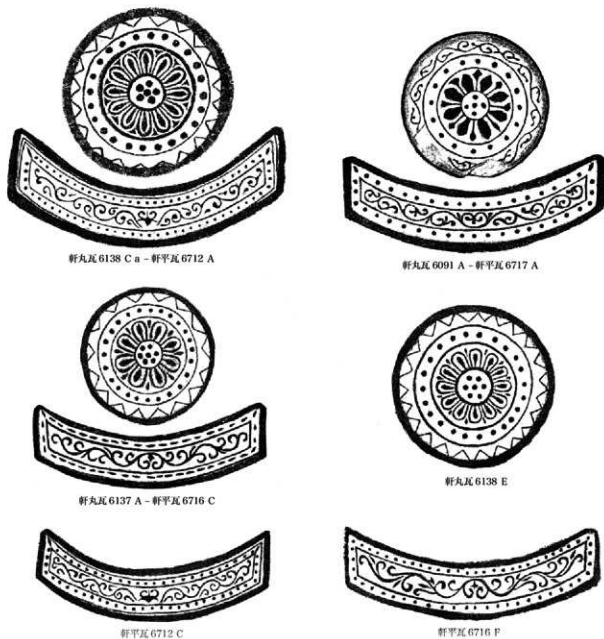


図1 奈良時代の「大安寺式」軒瓦 (1/4)

表1 大安寺出土瓦主要軒瓦分類表

軒丸瓦			軒平瓦		
分類	型式・種	点数	分類	型式・種	点数
大宮大寺式	6231 A	30	大宮大寺式	6661 A	11
平城宮系	6304 D	184	平城宮系	6661 B	113
大安寺式	6091 A	14	平城宮系	6664 A	165
	6137 A	127	大安寺式	6712 A	592
	6138 C a	143		6712 B	242
	6138 C b	99		6712 C	10
	6138 C	35		6716 C	118
6138 E	81	6716 D		29	
平城京系・その他	6138 J	48	6717 A	124	平城京系・その他
その他	6235 I	11	重弧紋	32	
	6308 I	14	6682 B	15	
合計		786	6690 A	41	
			6699 A	11	合計
				1503	

凡例

1. 奈良市教育委員会が平成16年までに実施した調査で出土し、型式・種が確認できた奈良時代の軒瓦についてのみ統計した。ただし、一部整理途中の分や、型式が特定できないものは含んでいない。
2. 型式・種が確認できた軒瓦でも、点数が10点未満の場合は除外した。
3. 「分類」覧の区別は本文注1-Cの文脈に拠った。

瓦6716 Cの組み合わせが考えられている。また数量的には不均衡であるが、共通の刻印を有することなどから、軒丸瓦6091 A - 軒平瓦6717 Aも組み合わせるとみてよい⁴⁾。

小稿では、②・③で挙げた「大安寺式」軒瓦に特徴的な瓦当紋様の意匠が、どのようにして成立したのか検討し、ひいては「大安寺式」軒瓦のなかで、最も古いものはどれか、特定してみたい。

II 「大安寺式」軒瓦の成立に関する従来の研究

従来「大安寺式」軒丸瓦の瓦当紋様については、唐の長安城から出土する軒丸瓦に類似するものがあることから、「道慈が唐で見慣れた意匠が反映したのではないか」⁵⁾、「6138 Cは平城宮・京の軒丸瓦のなかでは最も時期の古い単弁蓮華紋であり、しかも唐代の軒丸瓦に類似する。道慈の唐風好みか軒瓦にも反映されたのかもしれない。」⁶⁾といった意見があった。

道慈は養老2(718)年に唐から帰朝し、天平元(729)年頃から、大安寺造営に参画したことが知られる僧である⁷⁾。「続日本紀」天平16(744)年10月2日の道慈卒時の記事には、道慈が造った大安寺を見て、感歎しない工匠は無かったと記されていることから、大安寺造営に関して重要な役割を果たしていたことが察せられる。このような道慈に関する史料や、東西両塔を金堂院の南に置くという大安寺独特な伽藍配置、大安寺境内から出土する唐三彩陶枕は道慈が唐より講来したのではないかとされた指摘⁸⁾から、「大安寺式」軒瓦の紋様デザイン決定にも、道慈が関わったと想定されてきた。そして「大安

寺式」軒平瓦にみられる段頸が、「平城宮・京出土軒瓦編年」では第III期(天平17(745)年～天平勝宝年間(749～757))には残らないとの見通しから、第II期(養老5(721)年～天平17年)の製作と考え、道慈が主導した天平年間に製作されたと考えられた⁹⁾。

こうした考えに対して、中井公氏は「唐の長安城から出土する軒丸瓦の中に、大安寺の6138 Cと何となく紋様の雰囲気か似通ったものがあることが、時折指摘されてきた。「大安寺式」は道慈が唐風の意匠を採用したものである、などといった憶測さえある。道慈との関わりが想定できるから、「大安寺式」が天平年間のものとみなし得るとする考え方と、「大安寺式」が天平年間の瓦だということになると、道慈の関わりが想定できるという考え方が、背後でもたれ合っている。」¹⁰⁾と指摘した。そして「大安寺式」軒瓦のなかでも特に出土量の多い組み合わせである軒丸瓦6138 C a - 軒平瓦6712 Aは僧房で主体的に使用されたものであり、僧房は「大安寺伽藍録并流記資財帳」(以下「資財帳」とする)が助録された天平19(747)年の時点では檢皮葺きであったので、瓦が葺かれるようになったのは、これ以降であると考え、具体的な生産時期の推定にあたっては、東大寺大仏殿周囲から出土した同范瓦を手懸かりとして、道慈没後の天平19年から天平勝宝年間が主体的生産の期間とした。

ただし「平城宮・京出土軒瓦編年」では、基本的にIII期には段頸が残らないとしており、この「大安寺式」軒瓦の年代観は、「平城宮・京出土軒瓦編年」¹¹⁾とは齟齬をきたしている。この理由については、平城宮・京造営瓦屋と大安寺造営瓦屋との組織内の事情の差異によるものとした。つまり大安寺造営瓦屋が堅持した保守的な性格によるもので、大安寺瓦屋の特質の一端を示す事例であるとの見解である。

筆者もこの意見に同意するが、「大安寺式」軒瓦は道慈の唐風好みの反映と解することができないのであれば、どのようにして軒丸瓦6138 C a - 軒平瓦6712 Aで代表される、「大安寺式」の意匠が、出現したのであろうか。

この問題について中井氏は「確かに「大安寺式」に表される単弁蓮華紋の意匠は、藤原宮期から続く平城宮・京の蓮華紋瓦の紋様の流れの中では異質で、手本をどこかに求めなければならないのかも知れない。しかし唐代の軒瓦の詳しい年代観がはっきりと示されていない現在、道慈をこの問題に介在させることは禁欲的であるべきと考えられる。」¹²⁾と述べるに留まる。

筆者は大安寺瓦屋の特質の一端として、瓦製作技法の保守的な性格を挙げられていることに注目する。「大安寺

式」軒瓦の紋様意匠についても、この保守的な性格からみて、前代に製作されていた軒瓦を模倣して生まれたのではないかと考えた。次章で私見を述べてみたい。

Ⅲ 「大安寺式」軒丸瓦の成立

まず軒丸瓦について検討する。「大安寺式」軒瓦の意匠が前代の軒瓦を模倣して生まれたと考えるならば、大安寺出土品の中に手本となるものを見出さねばなるまい。

「大安寺式」軒瓦に先行するのは、軒丸瓦 6304 D・軒平瓦 6664 A の組み合わせ（図2）で、「平城宮系」¹⁵¹ と呼ばれる大安寺創建瓦である。これらは『資財帳』にある「棚倉瓦屋」に比定される京都府綴喜郡井手町の石橋



図2 軒丸瓦 6304 D・軒平瓦 6664 A (1/4)

瓦窯で生産されたことが明らかにされている¹⁴⁾。

軒丸瓦 6304 D は複弁 8 弁蓮華紋で、単弁蓮華紋の「大安寺式」軒丸瓦とはまったく印象が異なる。

しかし、資料調査の過程で、軒丸瓦 6304 D を彫り直し、単弁風になった資料があることが判った。ここでは、まず軒丸瓦 6304 D の范匱進行と彫り直し、製作技法の変化について報告する。

軒丸瓦 6304 D は范匱の彫り直しにより、大きく以下の2つに大別できる¹⁵⁾。(図3)

I 類 范匱を彫り直す前のもの（図3-1～3・写真1）。図3-1は弁区の複弁と、その外側を巡り連続する間弁との区分が明瞭である。中房は突出し、中房圏線はその全周を巡るのが明瞭に確認できるものと、断続的に残るもの又は中房圏線が無いものがある。ただし、無いものが圧倒的に多い¹⁶⁾。その後、瓦当匱全面の摩耗が進行し、蓮弁と間弁の区別が不明瞭になるもの（図3-2）が現れる。さらに摩耗が進むと、蓮弁・間弁だけでなく、中房蓮子が不明瞭なもの（図3-3）も現れる。

II 類 范匱を彫り直した後のもの（図3-4・5、写真2）。明瞭に確認できる彫り直し箇所は中房圏線、蓮弁の輪郭と子葉で、特にI類ではほとんど確認されない中房圏線が明瞭である。間弁も彫り直しているが、蓮弁のまわりを巡る部分は彫り直しておらず、摩耗したままで、それぞれ独立した間弁にみえる。また部分的に水滴状に

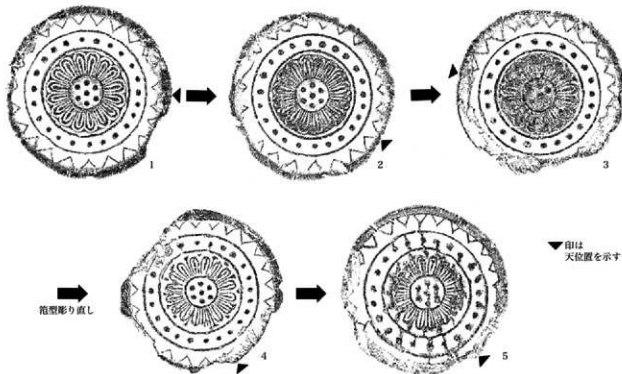


図3 軒丸瓦 6304 D の范匱進行と范匱彫り直し (1/4)



写真1 軒丸瓦 6304 D I 類 (左) と紋様細部 (右)



写真2 軒丸瓦 6304 D II 類 (左) と紋様細部 (右)

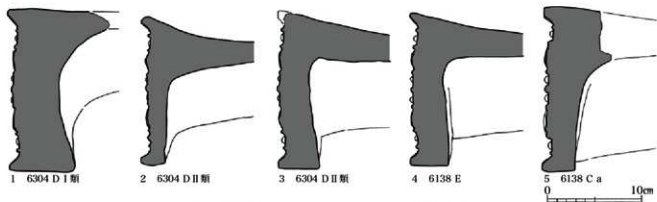


図4 軒丸瓦 6304 D・6138 E・6138 C a の断面 (1/4)

表2 6304 Dの段階・瓦当厚別の点数内訳

	瓦当厚			
	厚手	中	薄手	不明
	(5~7cm)	(4~4.5cm)	(2~3cm)	
I類 (彫り直し前)	80	0	0	7
II類 (彫り直し後)	0	2	38	12
不明	7	0	7	25

表3 軒丸瓦 6304 D II類・6138 E・6138 C a の計測値表

	直径	内区		外区	
		中房 蓮子数	弁区径	内縁 珠文数	外縁 鋸歯紋数
6304 D II類	160	1+6	88	23	23
6138 E	160	1+6	88	23	23
6138 C a	168	1+5	98	24	20

凡例

1. 本表は奈良市教育委員会が平成16年までに実施した調査で出土した6304 Dのうち、実見した178点を対象とした。

凡例

1. 「直径」・「弁区径」の単位はmm。
2. 6304 D II類の計測値は図4-2の資料を計測した。
3. 6138 E・6138 C aの計測値は註2の文献に拠った。

残っている箇所がある。彫り直し後も范型の傷みが進み、外区殊紋に範傷が確認できるもの(図3-5)もある。

軒丸瓦6304 D I類・II類は、製作技法にも特徴があり区別できる。すでに軒丸瓦6304 Dは、瓦当の厚みの違いから、5~7cm程の厚い資料(図4-1)と瓦当厚2~3cmほどの薄い資料(図4-2)の2種類に大別できるという知見が出されていた¹⁷⁾が、さらに瓦当厚4~4.5cmに分類できる資料(図4-3)もあるとわかった。

これら范型の進行段階と、瓦当厚の違いを表にし、それぞれの点数を集計したものが表2である。この表から彫り直し前であるI類は瓦当厚が厚く、彫り直し後のII類は瓦当厚が薄手のものが多いことがわかる。しかも新たに確認した瓦当厚4~4.5cmに分類したものはII類でも、さらに范の傷みが進行しているもの(図3-5)に限られていることから、瓦当厚の違いは、先後関係をあらわすとみてよい。他に丸瓦の接合位置についてI類は高く、II類は低い点、いまひとつII類のみ、脱范後に外縁頂部を削り平坦面をつくっている点が技法上の違いとして挙げることもできる(図4-2・3)。

さて、ここで注目されるのは范型彫り直し後の軒丸瓦6304 D II類(図3-4・写真2)が一寸見、単弁16弁蓮華紋にみえることである。また、軒丸瓦6304 D II類

にみえる水滴状間弁という特徴は、「大安寺式」軒丸瓦の代表と見られてきた軒丸瓦6138 C aよりも、むしろ軒丸瓦6138 Eに似ることに気付く。

紋様を詳細に検討するため、軒丸瓦6304 D II類・6138 C a・6138 Eの計測値を比べてみた(表3)。

表で比較した要素に関しては、軒丸瓦6304 D II類と軒丸瓦6138 Eは同様であるが、軒丸瓦6138 C aはこの両者と異なるとわかる。また外縁の形態についても、三者とも傾斜縁ではあるが、軒丸瓦6304 D II類・6138 Eは、内面がわずかに匙面をなす傾斜縁であることにに対し、軒丸瓦6138 C aは内面が直線的な傾斜縁という違いもある。

以上の検討から軒丸瓦6304 D II類を手本に、製作されたものは最初の「大安寺式」軒丸瓦6138 Eであったと考える。軒丸瓦6138 C aは軒丸瓦6138 Eの後に製作されたとみるのが妥当であろう。軒丸瓦6138 C a・Eの瓦当紋様の比較から、中房蓮子数・外縁鋸歯数が減少し、弁の長さが長くなるといった事象が、軒丸瓦6138型式の後出要素として挙げることができよう。

ところで、范型を一定期間使用した後、長期にわたり保管し、その後再び使用された「范型の長期保管例」の報告がある¹⁸⁾。この観点から軒丸瓦6304 D I類は軒丸



写真3 軒丸瓦6304 D II類(左)・6231 A(中)・6304 D I類(右)の瓦当裏面周縁に沿って半開するユビナダ



写真4 軒丸瓦6304 D II類(左)・6231 A(中)・6304 D I類(右)の「歯車接合」

瓦6138 C a・Eより先行するが、軒丸瓦6304 D II類については軒丸瓦6138 C a・Eよりも、ずっと後の製作時期と考えられないかとの指摘もできよう。

そこで、まず軒丸瓦6304 D II段階の瓦当裏面に注目する。軒丸瓦6304 D II類の一部には、瓦当裏面の周縁に沿って、半周するユビナデが巡る資料(写真3)がある。この技法は大安寺出土軒丸瓦では、藤原京大官大寺から運ばれた「大官大寺式」軒丸瓦6231 A・B・Cと軒丸瓦6304 D I類にみられるが、軒丸瓦6138 C a・Eには見つからない。さらに丸瓦の接合技法をみてみよう。軒丸瓦6304 D II類の中には、わずか1点であるが、丸瓦の先端を歯車状に切り欠き、瓦当部に差し込む接合

技法(「歯車接合」)をおこなうものがある¹⁰⁾(写真4)。この技法も大安寺出土軒丸瓦では、軒丸瓦6231 型式や、軒丸瓦6304 D I類にみられるが、軒丸瓦6138 C a・Eには見つからない。

いまひとつ、瓦当厚も検討する。軒丸瓦6304 D II類でも、筈の傷みが進行しているものに限り瓦当厚4～4.5cmのものがあることは前述した。この厚さは軒丸瓦6138 Eの瓦当厚と同程度であることから、軒丸瓦6304 D II類の生産終了頃に軒丸瓦6138 Eが生産されたと考える。

以上の観察から、軒丸瓦6304 D II類はI類と、さほど時期を隔てず製作されたもので、軒丸瓦6304 D II類



図5 軒丸瓦6304 Dから6138 Caに至る流れ (1/8)

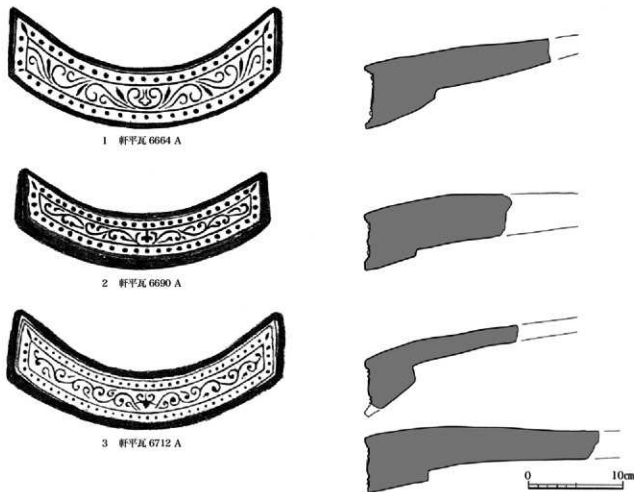


図6 大安寺軒平瓦6664 A・6690 A・6712 A (1/4)

の製作終了頃に軒丸瓦 6138 E の生産が始まったとみてよい。ここまでの私見をまとめると図5のようになる。

IV 「大安寺式」軒平瓦の成立

次に「大安寺式」軒平瓦について検討を加えたい。

大安寺創建時の軒平瓦は、軒丸瓦 6304 D と組み合わせる軒平瓦 6664 A であるが、「大安寺式」軒平瓦を代表する軒平瓦 6712 A とは紋様構成がまったく異なる。軒平瓦 6664 A と軒平瓦 6712 A の紋様構成の変遷過程を繋ぐような軒平瓦を探すべきであろう。それは軒平瓦 6690 A (図6-2) とみる。4 回反転均整唐草紋で、右第1・第2単位間と左第2・第3単位間以外では、唐草の主葉は連続する。中心飾りの垂飾りは十字形。頸の形状は段頸である。瓦部凹面に横骨痕跡を残す桶巻作りである。

軒平瓦 6690 A については第IV-1 期と、軒平瓦 6712 A よりもさらに新しいとする見方がある²⁰⁾。したがって軒平瓦 6690 A が軒平瓦 6712 A の手本であったと考える為に、軒平瓦 6690 A の製作時期が軒平瓦 6664 A に次ぎ、軒平瓦 6712 A に先行する理由を示さねばなるまい。

まず、この件についてはすでに製作技法の検討による見解がある。これは大安寺出土軒平瓦 6664 A・6690 A・6712 A の平瓦部の厚さと頸の長さを比較・検討したもので、①軒平瓦 6664 A・6690 A の平瓦部は平瓦 2 枚分程度と厚いのに対し軒平瓦 6712 A は薄く仕上げていること。②頸の長さについては、軒平瓦 6664 A は 5.5～8.0cm、軒平瓦 6690 A が 5.5～6.0cm と長めであるのに対し、軒平瓦 6712 A は 5.5cm 前後と短めのものが多いことが挙げられる。「平城宮・京出土軒瓦編年」では頸の長さは長いものから、短いものへと変化するとの考えが示されていることから、軒平瓦 6664 A → 軒平瓦 6690 A → 軒平瓦 6712 A の順に製作されたという見解²¹⁾である。

筆者もこの見解に同意する。加えて紋様構成の上からも、軒平瓦 6664 A・6690 A は中心飾りに垂飾りがあるのに対し、軒平瓦 6712 A には無いこと、軒平瓦 6664 A・6690 A の両者は下外区珠紋数が 21、脇区珠紋数が 3 と、同じであるのに対し、軒平瓦 6712 A は下外区珠紋数 30、脇区珠紋数 4 で、小さな珠紋を密に巡らしていることなどの違いから、軒平瓦 6664 A → 軒平瓦 6690 A → 軒平瓦 6712 A の順は妥当であり、軒平瓦 6664 A を模倣したのが軒平瓦 6690 A であったと考える。

では、軒平瓦 6690 A が「大安寺式」軒平瓦 6712 A の手本か、内区の唐草紋を比較してみよう。軒平瓦 6690 A は 4 回反転、軒平瓦 6712 A は 5 回反転と、反転数が異なり、また中心飾りの形状はまったく違う。ところが、



軒平瓦 6690 A の紋様 (正位)



軒平瓦 6712 A の紋様 (左右反転)

図7 軒平瓦 6690 A と 6712 A の紋様比較 (1/4)

両者は基本的に各単位主葉と支葉との巻き込みが逆方向で、対向する点が同じである。

さらには軒平瓦 6690 A の左右第 2 単位を除くと、軒平瓦 6690 A・6712 A とともに唐草 1 単位が主葉 1・支葉 1 で構成されることがわかる。

さらに唐草細部に注目してみよう。軒平瓦 6690 A・6712 A の唐草は、基本的に各単位主葉と支葉が逆方向であるが、主葉・支葉が同じ方向に巻き込み箇所がある。軒平瓦 6690 A の場合、右第 1 単位であるが、軒平瓦 6712 A の場合は左第 1 単位である。作範時の彫り間違いだらう。いまひとつ、軒平瓦 6690 A の左第 3 単位支葉は先端が球状になっているが、軒平瓦 6712 A の場合同様の箇所が右第 3 単位で確認できる。

そこで軒平瓦 6690 A の拓本と軒平瓦 6712 A の左右反転させた拓本とを比較してみた (図7)。図7から上記した彫り間違いとみられる支葉箇所等が一致することがわかる。

こうみてくると軒平瓦 6712 A の唐草は、左右反転しているが、軒平瓦 6690 A の誤った紋様構成まで忠実に写し取っているとみてよい。従って、「大安寺式」軒平瓦 6712 A は、軒平瓦 6690 A を手本として、製作された紋様であったと考える。

ところで、軒平瓦 6690 A は従来「大安寺式」ではなく、「平城宮系」あるいは、「平城京系」と呼ばれる一群に属していた²²⁾。しかし大安寺以外で軒平瓦 6690 A が出土した場所では 2 箇所しかなく、しかも 1 点ずつ出土しているだけ²³⁾ である。このことから大安寺建立のために製作された軒平瓦とみてよい。

紋様構成をみると軒平瓦 6690 A は 2 箇所唐草主葉

が途切れる箇所があるものの、基本的には葺が連続してのびており、段顎資料しか確認されていないことから、「大安寺式」軒平瓦と評価するのが適切だろう。したがって軒平瓦6690 Aこそ、最初の「大安寺式」軒平瓦と評価できる。

V 最初の「大安寺式」軒瓦の組み合わせ

ここまで軒丸瓦6304 Dを手本に軒丸瓦6138 Eが、軒平瓦6664 Aを手本に軒平瓦6690 Aが成立したと述べてきた。では大安寺創建瓦の軒丸瓦6304 D - 軒平瓦6664

Aの組み合わせを継ぐものとして、最初の「大安寺式」軒瓦の組み合わせ、軒丸瓦6138 E - 軒平瓦6690 Aが成立したか考えてみたい。

出土点数の比較では、平成16年度までに奈良市教育委員会の調査により大安寺で出土した軒丸瓦6138 Eは81点であるのに対し、軒平瓦6690 Aが41点と半数であり、数量的には不均衡である。

しかし、数量的には不均衡ながら、組み合わせを指摘できた事例には、同じく大安寺式の軒丸瓦6091 A - 軒



写真5 記号のある軒平瓦6690 Aとその記号



写真6 記号のある軒丸瓦6138 Eとその記号

平瓦6717 Aのケースがある。組み合わせの論拠は軒丸瓦・軒平瓦双方に同じ刻印が押捺されていたこと²⁴⁾である。

さて、軒平瓦6690 Aについては、顎面にヘラ記号「×」をつけるものがあると報告されていた²⁵⁾(写真5)。ヘラ記号がある軒平瓦6690 Aは41点中6点あり、すべて顎面右端にある。

軒平瓦6690 Aのヘラ記号「×」と同じ記号が、軒丸瓦6138 Eに無いものかと、資料観察を進めると、2点出土していたことが判った(写真6)。2点ともに記号「×」をつけた箇所は瓦当裏面である。これまで出土した軒丸瓦6138 E 81点中のわずか2点であるが、大安寺出土軒瓦のうち、ヘラ記号「×」は、紹介したように軒丸瓦では6138 Eのみ、軒平瓦では6690 Aのみの各1種にしか見つかっていないものであることから、軒丸瓦6138 E - 軒平瓦6690 Aの組み合わせで益かれるべく、同時期に生産されたとみてよからう。

軒丸瓦6138 Eと軒平瓦6690 Aの数量的に不均衡な点については、どのように考えれば良いであろうか。軒丸瓦6091 A - 軒平瓦6717 Aの場合には、軒丸瓦6091 Aの范型が、他の造瓦所へ持っていかれ、京内用に生産された為、大安寺旧境内での出土数量の不均衡となったと考えている²⁶⁾。軒平瓦6690 Aもこのケースと同じく、范型が他の造瓦所へ持っていかれたとも考えられるが、大安寺以外での出土はほとんど確認されていない為、むしろ早々に范型が壊れてしまったことにより、出土数量的な不均衡が生じた可能性が高いと考える。

なお、軒丸瓦6138 Eについては製作技法の共通性から、軒丸瓦6138 C aと同じく軒平瓦6712 Aと組み合わせ可能性も指摘されていた²⁷⁾。軒丸瓦6138 Eは、軒平瓦6690 Aの范型が大安寺造瓦所から無くなった後も、その生産は続けられ、軒平瓦6712 Aと組み合わせられることになったという見方も可能であろう。

ところで、従来軒丸瓦6138 C a - 軒平瓦6712 Aと軒丸瓦6137 A - 軒平瓦6716 C (図1)は出土量の多さから大安寺における軒瓦大小の組み合わせであると考えられてきた。筆者も異論は無い。ただし、軒丸瓦6138 C aが弁間に三角形の間弁を置くことに対し、軒丸瓦6137 Aは弁間に水滴状間弁を配する。これは軒丸瓦6138 Eと同じである。さらに軒丸瓦6137 Aは中房運子数が1 + 6であることも軒丸瓦6138 Eと同じである。これらのことから、軒丸瓦6138 Eと6137 Aこそ、大安寺における軒丸瓦大小のセットとしてデザインされた可能性が考えられる。

ただし、それぞれ組み合わせる軒平瓦6690 Aと軒平瓦



図8 軒丸瓦6138 E - 軒平瓦6690 A (1/4)

6716 Cの紋様に注目すると、一瞥しただけで、紋様意匠に時期差が見受けられる。しかも平瓦部に注目すると、軒平瓦6690 Aは桶巻き作りと判断できるが、軒平瓦6716 Cには、桶巻き作りと断定できる資料は見つかっておらず、このことも生産時期が離れているとみる証拠となる。

以上のことから、軒丸瓦6137 Aのデザイン完成は軒丸瓦6138 Eと同じ頃であったとみられるが、軒平瓦6716 Cのデザインと生産、あるいは軒丸瓦6137 A - 軒平瓦6716 Cの組み合わせ自体の生産も、軒丸瓦6138 E - 軒平瓦6690 Aより、かなり遅れていたのだろう。軒丸瓦6137 A - 軒平瓦6716 Cが、軒丸瓦6138 C a - 軒平瓦6712 Aと同様に、僧房地区での出土量が多いことを勘案すると、軒丸瓦6137 A - 軒平瓦6716 Cの生産は、軒丸瓦6138 E - 軒平瓦6690 Aの次世代の軒丸瓦6138 C a - 軒平瓦6712 Aと同じ頃まで遅れたのが実情であったと考えるのが妥当であろう。

VI おわりに

以上、最初の「大安寺式」軒瓦の組み合わせは軒丸瓦6138 E - 軒平瓦6690 A (図8)であり、この「大安寺式」軒瓦に特徴的な瓦当紋様の意匠は、大安寺創建瓦である軒丸瓦6304 D - 軒平瓦6664 Aを模倣して成立したと論じた。

奈良時代を通じて大安寺の軒平瓦が段頸を採用していることは、大安寺造営瓦屋が堅持した製作技法に関しても、前代の紋様を手本にするという保守的な性格をあらわす証左と評価することが可能なのではないだろうか。

今後は軒丸瓦6138 E - 軒平瓦6690 Aとして成立した

「大安寺式」軒瓦の紋様構成が、どのように変化していったのか²⁰をさらに深く検討していきたい。この場合、大安寺出土品だけでなく、「大安寺式」軒瓦とよく似た紋様の法華寺出土軒瓦も含めた検討が必要と考える。

なお本稿で論述した内容は、「大安寺式」軒瓦の紋様構成は道慈が唐で見慣れた意匠を反映したものではないという、やや夢のない話となっている。ただし、軒瓦 6138 E - 軒瓦 6690 A の生産年代については雲竜 2 (716) 年の大安寺創建用軒瓦である軒瓦 6304 D - 軒瓦 6664 A の後で、天平勝宝年間 (749 ~ 757) 以降に僧房所用として製作された軒瓦 6138 C a - 軒瓦 6712 A より前と理解できる程度で、詳細な生産年代については明らかにできなかった。この問題については稿を改めて検討を行いたいが、現段階では、「大安寺式」軒瓦の初現、軒瓦 6138 E - 軒瓦 6690 A の生産が道慈健在時であった可能性は否定できない。しかし、「大安寺式」軒瓦の紋様は、道慈が唐で見慣れた意匠であったとは言えないことは論じてきたとおりである。

本稿を執筆するにあたっては、中井公氏の御教示・御鞭撻を得た。お礼を申し上げます。

- 1) 「大安寺式」の定義については、以下の4つの文献に拠る。
- A. 山本忠尚「大安寺の原瓦」「大安寺史・史料」大安寺 1984
- B. 毛利光俊彦・花谷浩「平城宮・京出土軒瓦編年の再検討」『平城宮発掘調査報告XIII』奈良国立文化財研究所 1991
- C. 中井公「『大安寺式』軒瓦の年代」『堅田直先生古稀記念論文集』堅田直先生古稀記念論文集刊行会 真陽社 1997
- D. 中井公「軒瓦からみた大安寺西塔の創建をめぐって」『考古学論苑 - 小笠原好彦先生退任記念論集 -』2007
- 2) 注1 D の文献では、「大安寺式」軒瓦としての定義に瓦当裏面接合線が龍脚形であることを挙げており、軒瓦 6138 C b は製作技法の違いから、同階で紋様は同じでも、「大安寺式」軒瓦とするには適切でないとする。
- 3) 本稿で使用した型式番号は奈良国立文化財研究所・奈良市教育委員会『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』1996に拠る。
- 4) 原田憲二郎「類印「フ」が押捺された「大安寺式軒瓦」」『瓦衣千年 - 森郁夫先生退任記念論文集 -』森郁夫先生退任記念論文集 1999
- 5) 森郁夫「純・瓦と古代寺院」六興出版 1991
- 6) 注1 B の文献。
- 7) 『続日本紀』天平16年10月2日条と「扶桑略記」天平元年己巳条。
- 8) 森郁夫「わか国古代における造営技術論」『学歴』11号京都国立博物館 1984
- 9) 注1 B の文献と同じ。
- 10) 注1 C の文献と同じ。
- 11) 注1 B の文献と同じ。
- 12) 注1 C の文献と同じ。
- 13) 注1 A と注1 C の文献では、「平城宮系」として大安寺で出土する平城宮所用瓦の同階瓦もしくは同型式と同様であると定義されている。
- 14) 内田真雄「京都府井手町文化財調査報告書 第4集 石橋瓦葺跡発掘調査概報 - 平成14年度 -」井手町教育委員会 2003

- 15) 本稿作成中、軒瓦 6304 D の階高進行からの新旧関係と製作技法の変化について詳細に分析した論文が出た (中井公「『棚倉瓦屋』で焼かれた瓦をめぐって」『南山城の古代寺院』同志社大学歴史資料館 2010)。本稿の軒瓦 6304 D の1類・2類の分類の根拠は同じであるが、これの哪り直しに拠ることを、本文中に示した。
- 16) 全周する中層縁線を確認できるものは、観察した178点中2点だけである。階の痛み具合をみると、必ずしも階の幅みの少ない段階のものに、全周する中層縁線を確認できるわけではない。このことから、当初あったものが、早い段階で摩滅したのではなく、幅縁線1mm程度と細いため、階の目詰まりが原因で表現できなかったものが多かったのではないかと推察する。
- 17) 宮崎正治「第2節 瓦・塼類」「史跡大安寺旧境内1」奈良市教育委員会 1997その後、瓦当厚の違い・丸瓦接合位置が、先後関係をあらわす要素となることが注15の文献で明らかにされている。
- 18) 山崎信二「中世瓦の年代細分と古代瓦・近世瓦との相違」『シンポジウム 中世瓦の研究』帝塚山大学考古学研究所 2002
- 19) 軒瓦 6304 D 2類に、「南車伏接合」の資料があることは、中井公氏から御教示を受けた。のち注15の文献図9-3で報告されている。
- 20) 注1 B の文献で、第IV-1期の軒瓦とされている。
- 21) 宮崎正治「第4節 杉山瓦葺出土の軒瓦」「史跡大安寺旧境内1」奈良市教育委員会 1997
- 22) 6690 A は注1 A の文献では「平城宮系」に、注1 C の文献では、平城京の遺跡あるいは他の京内寺院所用瓦と同階である「平城京系その他」に分類されていた。従って表1では「平城京系その他」としたが、「大安寺式」とすべきなのは以下の本文のとおりである。
- 23) 左京四条五坊五坪で1点、左京六条三坊十三坪で1点出土している。左京六条三坊十三坪は大安寺の西隣であり、他の出土軒瓦の大部分が大安寺で出土する軒瓦と同じであることから、大安寺のものともみることができ。左京四条五坊五坪例に関しては大安寺旧境内と離れており、なぜここで出土するかは不明である。この南東、左京五条六坊十四坪は大安寺井園があったことが、考定されているが、この関連であろうか。「平城京左京六条三坊十三坪の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和58年度 奈良市教育委員会 1984および「平城京左京四条五坊五坪の調査 第373次調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 (第1分冊)』平成9年度 1998、大安寺井園については角田文雄「佐伯今毛人」吉川弘文館 1963。
- 24) 注4の文献と同じ。
- 25) 注21の文献と同じ。
- 26) 注4の文献と同じ。
- 27) 注1 C の文献と同じ。
- 28) 6712 型式・6714 型式・6716 型式については、すでに紋様構成の細部を検討し、各々の先後関係を考定した知見がある。(山路直克「常陸国分寺と下野国分寺創建の暦年代」『律令制国家と古代社会』吉村武彦編 2005) 中心飾りの形状からみた6712型式の先後関係については、筆者も同意する。ただし6712 E について、主に平城京大安寺で出土すると文中にあるのは、事実認識である。6712 E は「大安寺式」軒瓦の特徴をもつが、現在までのところ、大安寺では出土していない。その出土地は、大安寺からかなり北方の、左京二条四坊十六坪であり、同地と大安寺との関係性は現段階では不明である。

印刷・製本仕様データ

表紙：アートポストカード220kg・マットpp加工
見返し：白色上質紙110kg
巻頭図版：特アート紙135kg
本文：白色マットコート紙90kg
本文フォント：ヒラギノ明朝体
製本：左開き・糸かがり綴じ

© 2011 by the Nara Municipal Board of Education

No part of this publication may be copied or reproduced in any form without written permission from the copyright owner. Printed in Japan.

奈良市埋蔵文化財調査年報 平成20(2008)年度

ISSN 1882-9775

印刷 平成23(2011)年3月17日

発行 平成23(2011)年3月28日

編集 奈良市埋蔵文化財調査センター
630-8135 奈良市大安寺西二丁目281番地
TEL 0742-33-1821
FAX 0742-33-1822
URL <http://www.city.nara.nara.jp/>
E-mail maizoubunka@city.nara.lg.jp

発行 奈良市教育委員会
630-8580 奈良市二条大路南一丁目1-1
TEL 0742-34-1111(代)

印刷 関西美術印刷株式会社
630-8325 奈良市西木辻町153-1

**ANNUAL RESERCH REPORT
OF
ARCHAEOLOGY IN NARA CITY AREA
2008**

CONTENTS

- I PRELIMINARY REPORTS OF ARCHAEOLOGICAL
EXCAVATIONS IN NARA CITY AREA IN 2008.**

- II REPORTS OF ARCHAEOLOGICAL SCIENCE .**

- III REPORTS OF CONSERVATION AND MANAGEMENT
FOR ARCHAEOLOGICAL SITES AND MATERIALS
IN 2008.**

- IV BULLETIN OF THE ARCHAEOLOGICAL
RESEARCHCENTER OF NARA CITY.**

**NARA MUNICIPAL BOARD OF EDUCATION,
2011**

ANNUAL RESEARCH REPORT
OF
ARCHEOLOGY IN NARA CITY AREA
2008

NARA MUNICIPAL BOARD OF EDUCATION , 2011